2020年 3月期
関西大学審査学位論文

古代エジプトのマアトの研究

「二柱のマアト」の変遷から

関西大学大学院 文学研究科 総合人文学専攻
16D2005
肥後 時尚

目次

はじめに …… v

序章　古代エジプトのマアトの概念 …… 1

第１節　マアトの概念 …… 1
第２節　王権との関係 …… 5
第３節　道徳的・倫理的側面 …… 9
第４節　マアト女神 …… 14
第５節　「二柱のマアト」*Mꜣʿty* …… 16

第１章　古代エジプトの葬祭文学 …… 21

第１節　テキストの変遷 …… 23
第２節　宗教的・神学的内容の難しさ …… 26

第２章　古王国時代における「二柱のマアト」 …… 29

第１節　「ピラミッド・テキスト」における二柱のマアト …… 30
第１項　「ピラミッド・テキスト」 …… 30
第２項　「ピラミッド・テキスト」におけるマアトの記述 …… 31
第３項　「ピラミッド・テキスト」第 260 番 …… 33
第４項　船として記述された「ピラミッド・テキスト」上の *mꜣʿti* …… 41
第２節　「パレルモ・ストーン」における二柱のマアト …… 50

第３章　中王国時代における「二柱のマアト」 …… 63

第１節　古代エジプトの「コフィン・テキスト」 …… 64
第２節　下界の神ソカルとの関係 …… 69
第３節　独立した神格としての「二柱のマアト」 …… 79
第４節　太陽神との関係 …… 81
第５節　その他の *mꜣʿty* の事例 …… 84

第４章　「二柱のマアトの変遷」 …… 105

第１節　古王国時代における再解釈 …… 105

第２節　中王国時代における再解釈 …… 109

第５章　「二柱のマアト」の習合 …… 113

終章 …… 129

附録 …… 137

（１）本論文の事例一覧 …… 137

（２）古代エジプト史年表 …… 138

（３）「コフィン・テキスト」上の *mꜣʿt* の関連記述一覧 …… 139

史料・参考文献 …… 147

初出論文一覧 …… 160

はじめに

マアト（*mꜣʿt*）は、古代エジプトの特殊な抽象概念である。この概念は、「宇宙の秩序」という意味を中心として「正義」、「公正」、「真実」といった多くの意味を包摂し、古代エジプトの三千年の歴史のなかで絶えず社会の秩序を維持する役割を担っていた。王権史や文化史に関わる多様な史資料に現れるマアトは、「王の神的属性」や「道徳基準」、「正義の女神」のような複数の側面を併せもち、古代エジプトの歴史のなかでも特異な概念として認識されている。エジプト学研究の碩学であるアスマンが「エジプト文化の全てがマアトによって基礎づけられている」[i]と洞見したように、マアトは古代エジプト文化の根幹をなす概念であった。

この概念の持つ重要性と特殊性から、マアトはエジプト学研究の黎明期である 19 世紀から注目を集めた。1950 年代までには王権との関係に注目した研究が行われ、概念の基礎的な理解が確立した。近年では、特定の史資料を対象とした研究が進められ、マアトの示す多面的な側面の理解が深められつつある。しかしながら、複数の側面を併せ持つマアトの概念の全体像の理解を目指す研究は依然として最終的な結論に至っておらず、各側面のなかでも十分に理解されていない点も多く残されている。

本研究では、これまでに蓄積されてきたマアト研究を更に前進させるため、「二柱のマアト」と呼ばれるマアト女神の特殊な形態に注目する。エジプト史の初期において抽象概念として成立したマアトは、遅くとも古王国時代までに神格化され、頭にダチョウの羽根をつけた女神の姿で描写される。一方で、一部の史資料のなかでは、マアトは単数ではなく「二柱のマアト」（*Mꜣʿty*）と呼ばれる双数形で記述された二柱の女神の姿で登場する。本来一つである神格や抽象概念が二つの姿で現れる事例は、おびただしい数の神が存在する古代エジプト宗教においても極めて特殊である。その一方で、「二柱のマアト」はエジプト新王国時代以降の葬祭文学である「死者の書」のなかで死者の裁判における中心的役割を担うなど、その重要性には疑いがない。しかし、「死者の書」に先立つ史料には、「二柱のマアト」は一部の史料にしか確認されておらず、エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の研究は十分になされていない。そのため、本来一つの概念であるマアト女神が二柱の女神として現れた理由は未だ解明されていない。

---

[i] Assmann 1984, 10.

このような研究背景を踏まえ、本論文では古代エジプトの古王国時代と中王国時代の史料に残された「二柱のマアト」の記述を主な研究対象とする。そして、各記述の内容を分析し、異なる時代の史料の「二柱のマアト」の内容を比較・検討することで、時代の変化に伴う「二柱のマアト」の意味の変遷を考察する。

序章では、マアトの概念が持つ主な側面の特徴を先行研究の成果を踏まえつつ整理する。そして、マアトの女神としての側面のなかでも特殊な形態に位置づけられる「二柱のマアト」の研究史を整理し、研究の課題を明確化する。第 1 章では、より厳密な史料分析に基づく「二柱のマアト」の理解をおこなうため、「二柱のマアト」の記述を数多く含む「葬祭文学」と呼ばれる史料群の持つ特徴とその史料的価値を整理する。第 2 章、第 3 章では、それぞれ古王国時代と中王国時代の史料上の「二柱のマアト」の全ての記述を分析し、エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の特徴を明らかにする。この分析により明らかにした「二柱のマアト」の内容を基に、第 4 章では「二柱のマアト」の意味と各事例に記された限定符の変化に目を向け、古王国時代から中王国時代にいたるまでに「二柱のマアト」の意味がどのように変遷したのかを明らかにする。第 5 章では、中王国時代の史料に記述されたマアトと他の神や神的存在との習合関係に注目し、別の切り口からエジプト中王国時代に確認される「二柱のマアト」の内容を考察する。

以上の考察を通して、本論文は古代エジプトの歴史の前半期における「二柱のマアト」の内容とその変遷を明らかにし、古代エジプトの文化史研究において欠かすことのできないマアトの概念の研究に寄与することを目的とする。

序章

古代エジプトのマアト

本章では、古代エジプトのマアトの概念の内容を先行研究の成果を踏まえながら概観する。マアトの持つ意味はあまりに広範に及び、膨大な種類の史資料に記述されることから、この概念の複雑な内容を体系的に理解することは容易ではない。本章では、マアトの概念の一般的理解を示した後、概念の併せ持つ多様な側面を「王権との関係」、「道徳的・倫理的側面」、「マアト女神」の 3 つに分け、各側面の特徴を概観していく。

第 1 節　マアトの概念

「マアト」（*mꜣꜥt*）は、古代エジプト社会の秩序を維持する概念である。この概念は、「宇宙の秩序」という意味を中心として「正義」、「公正」、「真実」といった多くの意味を併せ持ち、古代エジプトの三千年の歴史のなかで絶えず社会の秩序を維持する役割を担っていた。このような抽象的意味を数多く包含することから、マアトはエジプトの多種多様な史資料に記述され、複数の側面を示している。アスマンが広義におけるエジプトの宗教を「マアトの実現」と定義するように[1]、マアトは古代エジプト文化の根底をなす概念であった。

明確な起源は明らかではないが、マアトの概念は遅くとも初期王朝時代（前 3000 年頃～前 2686 年[2]）には存在していた。第 2 王朝（前 2890 年～前 2686 年）の王、カセケムイの妻であるニマアトヘプ（*Nỉ mꜣꜥt Ḥp*）の名前にその存在が確認される。その後もマアトの語は継続的に王名に用いられ、例えば古王国時代（前 2686 年～前 2160 年）のスネフェル（*Nb mꜣꜥt*）、中王国時代（前 2055～前 1650 年）のアメンエムハト 3 世（*N*(*y*) *mꜣꜥt Rꜥ*）、そして新王国時代（前 1550 年～前 1069 年頃）のハトシェプスト（*Mꜣꜥt kꜣ Rꜥ*）、アメンヘテプ 3 世（*Nb mꜣꜥt Rꜥ*）の名に挙げられる[3]。様々な時代の王名にマアトの語が用いられたことは、エジプトの長い歴史のなかでこの概念が絶えず重要な役割を果たしていたことを示している。

---

[1] Assmann 1984, 10.
[2] 古代エジプト史の各時代及び王朝の時代区分および年代に関して、本論文では Shaw 2000 にしたがう（本論文附録「古代エジプト史年表」を参照）。
[3] Leprohon 2013, 35, 59, 98, 102.

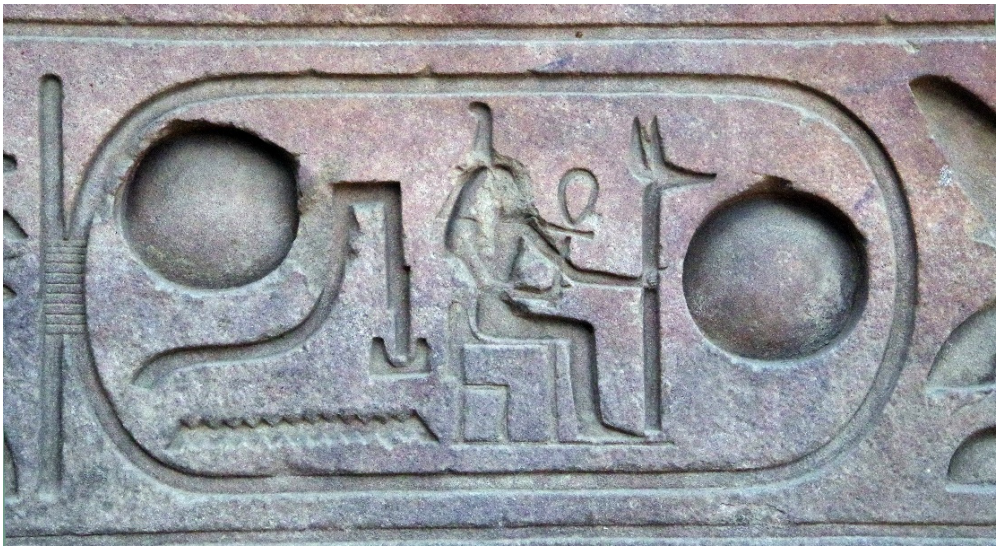


図 0-1　王名の一部として刻まれたマアト（中央）の文字（ルクソール神殿：筆者撮影）

マアトの語は通常、*mꜣ* の音を示す表音文字𓄿（U1[4]）と *mꜣʿ* の音を示す文字𓌳（Aa12）、そしてʿ のアルファベット𓏲（D36）と女性名詞語尾-*t* の文字𓏏（X1）で示される。語の末尾に使用される限定符（determinatives）は、通常抽象概念を示すパピルスの巻物の記号𓏛（Y1）や頭に羽根を載せた女神の記号𓁷（C10）のいずれか、あるいはその両方が使用される。その他にも𓁷の記号のみや、ダチョウの羽根𓄡（H6）と女性単数名詞語尾の-*t* [5]でマアトの語を記述する事例も見受けられるが、いずれの場合においても、*mꜣʿt* の音節やマアトを示す表意文字を用いることで、他の語と区別される場合が多い。また、王名等では、マアト女神の記号のみで表記されることも多い（図 0-1）。古期エジプト語から後期エジプト語にかけて *mꜣʿt* は語の示す通りの記号で記されたが、エジプト史の後半以降に利用されたデモティックでは女性名詞語尾の-*t* が記述されなくなる場合が多くなり[6]、コプト語においてはⲘⲈ(サイード方言)や、ⲘⲒ(ボハイラ方言)と記述されるようになる[7]。

マアトの語源は、「正しくある」や、「導く」を意味する動詞 *mꜣʿ* [8]であると考えられるが、ウェステンドルフはこの動詞が抽象名詞化する際に「正された」や「導かれた」というように、受動分詞化された点を強調する[9]。ウェステンドルフによれば、この語の受動的な性格

---

[4] 本稿で示す象形文字の表記番号は、通例にしたがいガーディナーの文法書に記されたサインリスト番号を用いる（Gardiner 1957）。
[5] H6 のみでは *šw* の文字との混同されるため、通例は *t* と共記される。
[6] Erichen 1954, 149; *CDD*, M (10:1), 29.
[7] *Wb* 2, 18. ファイユーム方言では ⲘⲈⲈⲒ、アクミーム方言では ⲘⲒⲈ と記される。
[8] *Wb* 2, 12-15; Hannig 2003, 500-501.
[9] Westendorf 1966, 203.

は、「行う」や、「置く」、「もたらす」といった動作の目的語として示されるマアトの概念の特徴の基礎となっている[10]。その一方で、クアークはマアトを「正しいこと」（what is right）として理解されるべきであると主張する[11]。この解釈は *mꜣꜥ* を形容詞[12]とし、それが抽象名詞化されたものとして考えることができる。

マアトの持つ意味や役割が王権や宗教、道徳観や神話と密接に結びつくことから、*mꜣꜥt* の語は、エジプトのあらゆる種類の文献史料に現れる。王権やエジプト王朝史の史料においては、王の称号や儀式の場面に記述される。また、文化史や宗教史の研究史料として欠かせない葬祭文学では、しばしばその他の神々と並んで描写される。特に古代エジプトの「死者の書」[13]と呼ばれる葬祭文学では、死者の裁判の場面には必ずマアト女神やマアトの持つシンボルが図像と文字で示される。マアトのシンボルは、死者の心臓を載せた天秤の対の皿に載せられ、死者の生前の行いや正当性を示す心臓が、マアトのシンボルの重みと釣り合えば、死者は死後の世界における復活と安寧を約束される。

マアトの持つ多様な特徴とその重要な役割から、マアトが古代エジプト文化や宗教を理解するうえで欠かせない概念であることは、エジプト学研究者間の共通認識となっている。実際に、マアトに関する一般的な説明や言及はエジプト宗教分野の研究書に留まらず、歴史の概説書やエジプト語の文法書など、古代エジプトや古代オリエントに関する数多くの書物のなかでなされている[14]。

もちろん、エジプト学研究の分野においても、マアトは研究者らの関心を絶えず集める研究対象であった。19 世紀末のヴィーデマンによる研究[15]から現在にいたるまで、この概念の理解を目指す研究が現在にいたるまで世界中で継続されている。ここで注目すべきは、マア

---

[10] Westendorf 1966, 203.

[11] Quirke 2015, 151. クアークはマアトを「正しいこと」と解釈する立場からこの概念をエジプト人の固有の概念ではなく、人類に共通する普遍的な概念として理解すべきであると主張する。この視点はカレンガやバウマンによる比較研究にも共通して見受けられる(Karenga 2004; Baumann 2015.)。

[12] *mꜣꜥ* は動詞と形容詞の双方の意味で史料に記される(*Wb* 2, 12-15; Faulkner 1962, 101; Hannig 2003, 500-501)。

[13] 現在では、史料に記された題目にちなんで「日のもとに出てくるための書」*Book of Coming Forth by Day* (*rw nw prt m hrw*)と呼ばれることも多い。また、この史料がテキストの集成を示す用語であるにも関わらず「死者の書」という名称が現代人に「本」という媒体に記録された史料であるという誤解を生じさせるなど、「死者の書」という呼称に関しては、しばしば疑問が提示されている（Quirke 2013, viii; Scalf 2017, 21.）。本論文では、国内の研究分野において用いられることの多い「死者の書」の名称を用いる。

[14] 例えば、Wilson 1951, 48-49; Teeter 2001; Allen 2014, 147-149; Quirke 2015, 150-151 など。日本語の文献では屋形 1998, 424-425; 畑森 1998, 212; 屋形 2004, 749 などが挙げられる。

[15] Wiedemann 1887.

ト研究における先行研究の視点であろう。先行研究の多くは、取り扱う史資料やマアトの持つ側面を限定したうえでマアトの内容理解を目指す考察を行っている。例えば、フランクフォートやウィルソンは王の持つ属性や王の果たすべき義務としてのマアトの側面に、アルテンミュラーは神々の習合に、リヒトハイムは自叙伝、ティーターは新王国時代の図像資料にというように、それぞれの研究者が、自ら取り扱う史資料や注目するマアトの側面を限定して研究を進めていることがわかる[16]。この背景には、マアトの研究の範囲の限界に関する問題があるといえよう。マアトはあらゆる時代の史資料のいたるところで現れており、マアトの持つ側面も多岐にわたる。そのため、膨大な量のマアトの史資料を安易に取り扱うのではなく、研究の範囲を限定し、テキストや図像の丹念な考察に基づく研究が継続されてきた。実際に、リヒトハイムは自身のマアト研究の前書きのなかで、テキストの表面的な理解に基づく研究に注意を喚起し、自身の研究目的の一つがマアト研究における詳細な文献研究の蓄積であると述べている[17]。

数ある先行研究のなかでも、アスマンの研究[18]はマアトの概念の包括的な理解を目指す例外的な研究であるといえるであろう。アスマンは、「枢軸時代」（Achsenzeit）[19]と呼ばれる歴史観に基づき、膨大な量の関連史料の解釈を通してエジプトの全時代におけるマアトの意義とその本質の理解を試みた。この研究は、これまでのマアトの限定的な理解を乗り越える研究であるといえる。しかしその一方で、アスマンが考察において前提とする諸理論や史料の解釈への疑問や批判も提示されており[20]、アスマンの著書は最も包括的なマアト研究に位置づけられながらも、依然として同分野の研究の蓄積が望まれる状況にある。

---

16 Frankfort 1948(1961); Wilson 1954; Altenmüller 1975; Lichtheim 1992; Teeter 1996.
17 Lichtheim 1992, 7.
18 Assmann 1990.
19 カール・ヤスパースが唱えた紀元前 500 年頃の世界史的・文明的変革期。
20 自身の理解不足もあり、筆者は現時点でアスマンの研究を評価することはかなわないが、この著書に関する批評ではいくつかの問題が指摘されている。例えば、エングルンドは、アスマンが主張する「個人の敬虔」（personal piety）の誕生によりマアトの意義が失われたという主張に疑問を示し、「個人の敬虔」が生まれた後もマアトは依然としてエジプト人の善い振る舞いの模範であり続けたと指摘している（Englund 1992, 132）。また、クアークは同書で取り扱う多くのテキストの解釈において史料の持つ文脈の理解が不十分であると指摘し、またアスマンが提示するマアトの「垂直的・水平的結束」（vertikle und horizontale Solidarität）の理論にも疑問を提示している（Quirke 1994, 222-231）。一方で、ティーターは新王国時代のマアトの図像研究のなかで、第 19 王朝から第 20 王朝にかけてのアスマンのマアトの王権史的な位置づけに各所で反論を示している（Teeter 1996, 82-90）。なかでも、ラメセス王朝時代に、マアトの役割が失われたことで神と王の関係が変化したとするアスマンの主張を否定し、当時は逆に王と神の関係におけるマアトの重要性が大きく増した時代であったと指摘している（Teeter 1996, 90）。

近年では、マアトはエジプト学者にとどまらず、聖書学や文化人類学の研究者の関心も寄せている。例えば、バウマンはマアトの概念と旧約聖書に見られる *ubuntu* との比較に基づく試論を提示し[21]、アフリカン・アメリカ研究の大家であるカレンガは、アフリカにおける道徳観・倫理観の源泉としてマアトの概念の考察をおこなった[22]。特にカレンガの研究は、リヒトハイムによる「倫理的・道徳的側面」の研究の対象を新王国時代の「死者の書」にまで拡げ、古代エジプト人の抱く倫理観としてのマアトの理解を促進し、文化人類学の分野に留まらず、エジプト学の研究にも大きく寄与している。

日本においてもエジプト学史の早い段階からマアトは注目された。1960 年代には加藤がはじめてこの概念の梗概を整理し、その特徴を紹介している[23]。その後も屋形や吉成の研究により、国内におけるマアト研究は蓄積を重ねつつある現状にある[24]。

以下に続く節では、先行研究の成果により理解が深められたマアトの主要な側面である「王権との関係」、「道徳的・倫理的側面」、「女神の側面」を順に概観していく。

第２節　王権との関係

数多くの側面を併せ持つマアトの概念のなかで最も中心的なものは「宇宙の秩序」の側面であり、それは王権とのかかわりのなかで論じられる。本来の意味を「宇宙の秩序」とするマアトの概念は、古代エジプトにおける世界創造において形成される。エジプトで広く受け入れられたヘリオポリスの神学[25]によれば、世界ははじめ、ヌン（*nwn*[26]）と呼ばれる「太古の水」のみが存在する「混沌」の状態にあった。そこから原初の丘（*bnbn*）が発生し、太古の神であるアトゥム（*Ꜣtm*）またはラー[27]が自己発生する。アトゥムはまず、大気の神シュー

---

[21] Baumann 2015.
[22] Karenga 2004.
[23] 加藤 1966.
[24] 屋形 1976; 吉成 2003. 屋形の研究は、マアトの概念の持つ中心的な意味が当時の歴史的・文化的背景の影響を受け変化すると仮定し、その変化の内容を辿る仮説を提示している。研究ノートという形式上、その変様を示す論拠に乏しい点は否めないが、古代エジプト史全体を通してのマアトの本質の理解を目指す研究視点は、当時の欧米の研究に先立つものであり、先進的な研究として評価されるべきであると筆者は考える。
[25] ヘリオポリスを中心に信仰された神学。エジプトにおける神話の大部分を形成する。その他の神学にヘルモポリス神学やメンフィス神学が信仰されており、個々の神学により創造神や世界の形成過程が異なる。
[26] *nnw, nw, niw, nww* とも読まれる。
[27] アトゥムとラーは「ピラミッド・テキスト」や「コフィン・テキスト」等の葬祭文学においてしばしば習合し、ラー・アトゥムとして現れる（Allen, 1988, 11）。

（*Šw*）と湿気の女神テフヌート（*Tfnt*）を生み出し、これら二柱の神々により大地の神ゲブ（*Gb*）と天の女神ヌート（*Nwt*）が生み出される。その後、シューとテフヌートは重なりあっていたゲブ（大地）とヌート（天）を引き離し、人間が住まう世界が形成された。この世界が形成された当初の状態が「混沌」の対極にあたる「宇宙の秩序ある状態」、マアトである。この「宇宙の秩序」は、古代エジプトの理想とされる世界の調和のとれた状態であり、その状態のなかに「正義」や「真実」、といったより具体的なマアトの意味が包含される。アスマンは、マアトを「充満」の意味と理解し、この状態をエジプト語の「混沌」（*isft*）の現象、つまり病気や貧窮、不正などの世界の欠乏状態の対極にあると解釈する[28]。

神話におけるこの「宇宙の秩序」（マアト）を人間社会で再現し、維持することは、エジプトを統治する王の重大な職務として課されることとなる。言い換えれば、王は現実世界においてマアトを実現するために国を統治する義務を背負っていた。したがって、マアトと古代エジプトの王権観はエジプト史を通して常に密接なかかわりを持ち、それゆえマアトの内容は、古代エジプトの王権研究の視点から研究されることとなる。フランクフォートは、古代エジプトの王権を「社会」のなかでなく、宇宙的秩序のなかで形成されたと捉え、王権の起源が世界の原初の時に遡るとし[29]、世界の創造神が行った「マアトを置く」という行為を王が繰り返していたと説明する[30]。実際に「ピラミッド・テキスト」では、故王による創造神の行為の反復を示す記述が確認される[31]。

また、マアトの原初の時代における「宇宙の秩序」としての側面は、同時に王に備わる神的な属性としても認識された。廷臣から王に向けられた発言になかで、マアトはフウ（*ḥw*）やシア（*siꜣ*）といった王の持つ神的属性と並んで次のように語られる：

> *ḥw m r.k siꜣ m ib.k st ns.k kꜣr mꜣʿt*[32]
>
> フゥ（権威ある発言）はあなたの口にあり、シア（認識）はあなたの心にある。
>
> あなたの発言はマアトの社である。

---

[28] アスマン 1997, 3-4.
[29] Frankfort 1961(1948), 49-61.
[30] Frankfort 1961(1948), 54-55.
[31] *Pyr.* 1775a-b: *pt m ḥtpw tꜣ m ꜣwt-ib sḏm.n.sn dd N mꜣʿt m st isft*「ペピがマアトをイセフェトの場に置くことを聞いた時、天は平安の中にあり、大地は喜びの中にある」.
[32] Gardiner 1916, 50.

ウィルソンはマアトと王権の関係の研究をさらに進め、古代エジプトの法的行為の視点からマアトの概念を以下のように説明する。

> エジプトには、唯一の事態に対処するための特殊法則として、ヘプ（*ḥp*）という言葉があったが、それ以外は一般に、法律を指す語はなかった。法的行為いっさいに適用される包括的な言葉、法的行為の基調となる精神、それがマアトであった。（中略）マアトの理念は、紛れもなく宗教秩序に帰属するものであった[33]

ウィルソンやフランクフォートの研究は、王権観と結びつくマアトの側面の理解を促進させ、マアト研究の基礎を形成したといえよう。彼らの研究はその後のティーターやホルヌンク、アスマンといった研究者によって引き継がれ、特定の時代におけるマアトの役割の研究や、「マアトの提示」（Presentation of Maat）と呼ばれる特有の図像表現の研究が進められることとなる。「マアトの提示」は、王権とマアトの関係性を考察するうえで欠かせない図像表現（図 0-2）である。神殿や王墓のレリーフのなかで、王は神々への供物として、マアトを献呈する。ここでマアトは通常、頭にダチョウの羽根を載せた女神の小像として描写され、王の手によって捧げられる。この図像表現は、神々の糧であるマアト[34]を供物として王が差し出すことで、王が自らの統治する世界の秩序ある状態を維持し、神々を満足させることを視覚的に示している。ホルヌンクは、神殿や墓のレリーフに描写された「マアトの提示」に注目し、この図像が人間の世界と神々との関係において重要な役割を果たしたとし、以下のように説明する：

> 人間が抑制された態度で、目に見える形で神々にマアトを提示することで、人間は神々に次のような記号を与えている、すなわちそれは、人間世界やそれが糧とする、脆く危

---

[33] Wilson 1954, 6-7: “Egypt had a word a specific regulation or the law to cover a single situation, *hap*, but she had no word for law in general. The all-embracing term which applied to legal procedure and the spirit in which legal procedure was undertaken was *ma’at* (….) The concept of *ma’at* definitely belonged to the religious order”; ウィルソン 1973, 142.

[34] 神々が「マアトを糧として生きる」(*ꜥnḫ m mꜣꜥt*)」と描写されるように、マアトは「マアトの提示」が図像化される以前（遅くとも古王国時代には）神々の食糧とし史料のなかに記述される。*Pyr.* 1483a-1483c: *n P is pw wꜥ m fdn ipw nṯrw Ỉmsti Ḥpy Dwꜣ mwt.f Ḳbḥ nw.f ꜥnḫiw m mꜣꜥt twꜣiw ḥr ḏꜥmw.sn mnhziw tꜣ šmꜣw*「～なぜならペピはこれらの神々の 4 柱、イムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、ケベフセヌウエフ、マアトを糧として生きる者たち、自身のジャムの笏に寄りかかる者たち、上エジプトを見張る者たちのうちの一柱であるからだ」.

険にさらされた全ての関係と結合が、創造の時に存在したように、秩序の中にあるというものである。[35]

「マアトの提示」に関する考察は、ティーターの研究によってさらに深化された[36]。彼女は、第 18 王朝から第 20 王朝にかけてこのレリーフが製作された歴史的背景を図像と儀礼を示すテキストの悉皆的な分析をしている。彼女によれば、既に文字表現としての存在が想定される「マアトの提示」がトトメス 3 世の治世において初めて図像化された理由は、おそらくハトシェプストの死後にトトメス 3 世が自身の王権の正当性を強調するためであった[37]。新王国時代以降にも、「マアトの提示」の図像の利用は継続されたが、第三中間期以降には、この図像表現の本来持つ意味合いは損なわれたとティーターは解釈する[38]。特に第 25 王朝のような非エジプト人による支配時代においては、為政者がエジプトの王権の正当性を持つ示す目的で意図的に用いられた[39]。

図 0-2　ラメセス 9 世による「マアトの提示」（ラメセス 9 世墓：筆者撮影）

[35] Hornung 2005, 228: “Indem der Mensch, mit verhaltener Gebärde, den Göttern sichtbar die Maat vorweist, gibt er ihnen ein Zeichen, daß die Menschenwelt, daß alle die gefährdeten, zerbrechlichen Beziehungen und Bindungen, von denen sie lebt, in Ordnung sind, so wie sie bei der Schöpfung waren.”

[36] Teeter 1996.

[37] Teeter 1996, 83. トトメス 3 世の治世後期には、先代の（女）王であるハトシェプストの事績を否定する破壊活動が行われたが、ティーターはマアトの提示がこの事績の否定と併せて、トトメス 3 世の事績を対照的に強調するための試みであったと推測する。

[38] Teeter 1996, 17.

[39] Teeter 1996, 17.

マアトの持つ根源的な「宇宙の秩序」の側面は、現実の社会の秩序を維持する王の属性や、王の義務として受け入れられ、それゆえにエジプトのおよそ全時代を通して、マアトの概念は王権観と密接な関係にあった。新王国時代になるとこの観念が、「マアトの提示」の図像に反映されたことで、神々にマアトを捧げることで国土を統治する王の正当性のイメージが支配者層・被支配者層を問わず浸透した[40]。

また、エジプトの王名に注目すると、エジプトの初期王朝時代から終末期のプトレマイオス朝時代にいたるまでの様々な王の名前に、*mꜣʿt* の語が用いられたことは、国土の統治者である王にとってこの概念がいかに重要であったかを示している[41]。

第３節　道徳的・倫理的側面

マアトがエジプトを統治する王にとって重要な役割を果たす一方で、この概念は、当時のエジプト社会における「正義」や「公正」の意味を併せ持ち、当時の道徳観や倫理観を示す概念としてエジプト社会全体に浸透していた。このことは、各時代に記された自叙伝や教訓文学、葬祭文学など幅広い種類の資料によって確認される。この関係を最も明瞭に示す資料は、「死者の書」の第 125 章の「心臓の計量」の場面（図 0-3）である。死後の世界において、死者は下界の神オシリスの面前にたどり着く。ここで死者の心臓は、天秤の一方の皿の上に乗せられる。反対側の皿には、マアト女神の小像やマアトの羽根で示されたマアトが乗せられ、死者の心臓とマアトの重さが釣り合った場合のみ死者は死後の世界での復活と安寧を保証される。死者の生前における行為が正しく、不正を行っていない場合にのみ、心臓はマアトのシンボルと釣り合うと信じられた。この第 125 章は、「死者の書」の中核となる章であり、そのなかでも最も重要視されたのがこの「心臓の計量」の場面である[42]。来世における死後の復活と安寧を切望した古代エジプト人が、この裁判を無事に終えるためにマアト、つまり生前における個人の正しい振る舞いを強く意識していたことは明らかである。

---

[40] ティーターは第 18 王朝から第 20 王朝にかけて「マアト提示」の図像が、王権の正当性を示すだけでなく、神殿を訪れる大衆に王の権威を示すために神殿のレリーフに刻まれたことを強調している（Teeter 1997, 90）。

[41] 本節の冒頭で述べたアメンホテプ 3 世（*Nb mꜣʿt Rʿ*）以降も、第 19 王朝のラメセス二世（*Wsr mꜣʿt Rʿ*）、第 22 王朝のオソルコン 2 世（*Wsr mꜣʿt Rʿ*）、第 25 王朝のピィ（*Wsr mꜣʿt Rʿ*）、第 26 王朝のイアフメス（アマシス）3 世（*Smn mꜣʿt*）、第 30 王朝のジェドホル（タコス）（*Ḥʿm mꜣʿt sšm tꜣwy*）などの王名に見られる（Leprohon 2013, 127, 147, 161, 166, 172）。

[42] Karenga 2004, 138; Quirke 2013, 269-270.

図 0-3 「死者の書」第 125 章の心臓の計量の場面（大英博物館所蔵 アニのパピルス：EA10470, 3 ）
死者の心臓（右）とマアトのシンボル（左）が天秤で計量される。©Trustees of the British Museum

この場面における「正義」の側面を示すマアトが具体的にどのような内容であったかは、「死者の書」呪文第 125 章の所謂「罪の否定告白」（Negative Confession）[43]の場面からもうかがうことができる（図 0-4）。この場面は「心臓の計量」の前に、死者が裁判員である 42 柱の神々に対して自身が不正を行っていないことを宣言する場面である。その内容は多岐にわたり、例えば告白の冒頭部分では、以下のような内容が記述される：

i wḫ mntt m ʾIwnw n ir.i isft i ḥpt sḏt pr m Ḫry-ꜣhˁ n ˁwꜣ.i i fndy pr m Ḫmnw n ir.i ˁwn-ib

i ˁm šwr pr m ḳrrt n ṯˁw.i i nḥꜣ-ḥr pr m r-sṯꜣw n smꜣ.i rmṯ[44]

「おお、イウヌウより来たる足幅の広い者よ、私は邪悪を行わなかった。」

「おお、ケルアハより来たる炎を抱きしめる者よ、私は略奪しなかった。」

「おお、ケメヌウより来たるくちばしの（ある）者よ、私は強欲ではなかった。」

「おお、洞窟より来たる影の飲みこむ者よ、私は盗みをしなかった。」

「おお、ロセタウより来たる顔の恐ろしい者よ、私は人々を殺さなかった。」

---

[43] カレンガは近年「無罪の宣言」(Declarations of Innocence)をこの場面のより適切な呼称として提案している（Karenga 2004, 138）。

[44] 大英博物館所蔵ヌウのパピルス（EA10477, 23: 図 0-4）。続く 37 回の告白については、Quirke 2013, 271-273 を参照。

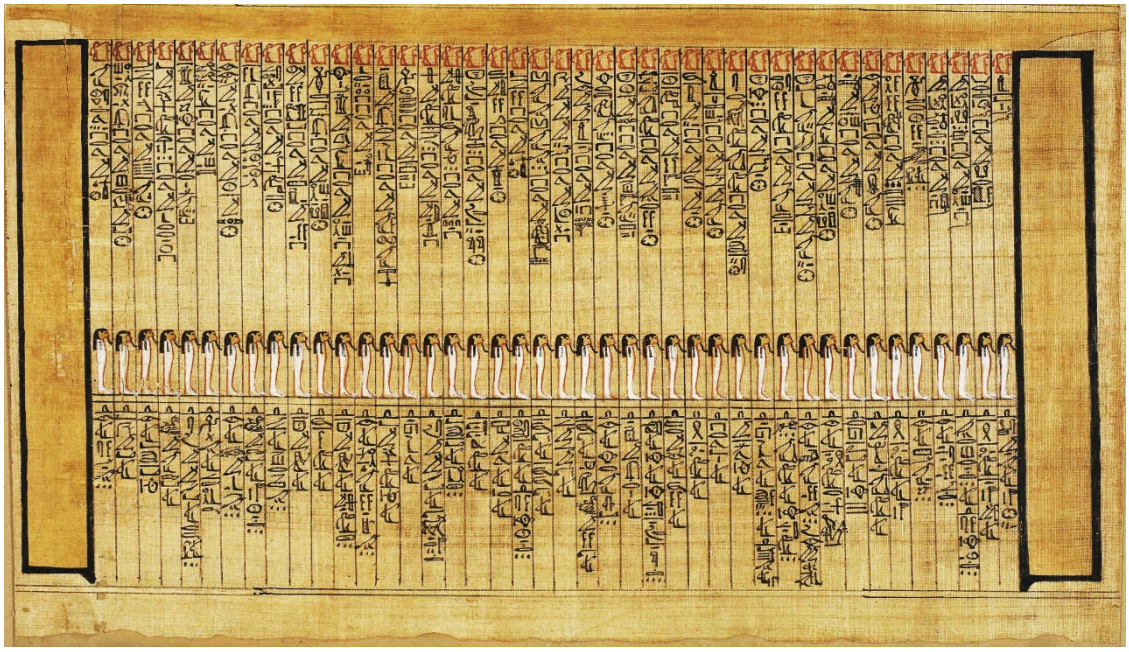


図 0-4 「死者の書」第 125 章の否定告白の場面（大英博物館所蔵　フウのパピルス：EA10477, 23 ）
©Trustees of the British Museum

これらの記述に示される自身の潔白の宣言は、続く「心臓の計量」の結果にもつながるものであり、この内容が死者の心臓の重さと比較されるマアトの具体的な内容を示すものといえる。言い換えれば、この宣言の内容は古代エジプト人の持つべき倫理観や道徳観として示されるマアトの具体的な内容そのものである。「死者の書」は古代エジプト史の後半にあたる新王国時代以降に利用された[45]葬祭文学であり、マアトの持つ道徳的・倫理的側面は、新王国時代より前の時代には、心臓の計量や否定告白に示されるような明瞭な図像には示されなかった。しかしながら、マアトの倫理的・道徳的側面は、自叙伝（Autobiography）と呼ばれる個人の生前の行いを記した碑文史料のなかで古王国時代から確認することができる。リヒトハイムはこの史料群に着目し、古王国時代の史料に遡り、模範的な道徳精神としてのマアトの内容を探究している[46]。彼女は第 5 王朝の私人墓に刻まれた碑文の内容から、個人の善い行いとして刻まれた最初期のマアトの記述を抽出した。これらの碑文の内容は、その所有者が困窮した人々を助け、人々に悪い発言をせず、マアトを発言していた（*ḏd mꜣʿt*）ことを示している[47]。リヒトハイムは、この点に関して個人がマアトを発言もしくは行う理

[45] 第二中間期の第 17 王朝に最初期の「死者の書」が確認されるが、積極的に利用されるようになるのは第 18 王朝のトトメス 3 世の治世からとされる（Hornung 1999, 13）。
[46] Lichtheim 1992.
[47] Lichtheim 1992, 9-12.

由が、神がそう望んでいたことによるという点を強調し、そこからマアトが本来、神々が糧とする秩序の原理に由来すると結論づけている[48]。この考察は、先述したマアトの持つ本質的な「宇宙の秩序」の側面と関連し、この秩序を維持するための「マアトを行う」という観念が、国を統治する王による社会の「秩序の維持」という意味だけでなく、「善い行い」という個々人が行う「正義」として社会に浸透していたことを示唆している。

人々が守るべきマアトの倫理的・道徳的側面は、その成立を中王国時代頃とする文学作品にも見受けられる。例えば、第 10 王朝のネブカウラーの時代を背景とする「雄弁な農夫の物語」[49]では、物語の主人公である農夫が、以下のような文言で為政者が民衆に行うべき「正義」としてあるべきマアトを表現している。

mi wꜣḥ mi ḏd(*w*) *tꜣw pw n fnd ir mꜣʿt ir ḫsft r ḫsf n.f* [50]

「マアトを行うことは、鼻の息である」と言われるように、永遠をお望みください。

処罰を与えられるべき者に処罰をお与えください。

当時の金言のなかで述べられる「マアトの実行」(*ir mꜣʿt*)は、鼻による呼吸と同様に社会の中にあるべき事柄であることを示している。また、マアトを行うことで、その者に死後の永遠が保証されることが述べれられる[51]。また、4 度目の農夫の訴えには、為政者が学ぶべき「正義」としてマアトが次のように描写される。

nn ist ib.i dns sḫr ḫt wꜣḥ-ib.k rḫ.k mꜣʿt[52]

思慮深い者に心の軽い者はいません。

親切でおありください、マアトをお知りになるために。

---

[48] Lichtheim 1992, 18-19.

[49] この物語では、役人によって自身の財産を不当に略奪された農夫によって、その役人の上役である家領頭への不当の訴えが 9 度にわたって行われる。様々な技巧を凝らしてなされたこの農夫の主張の内容が作品のテーマであり、屋形やカレンガはこれを「社会(的)正義の実現」あると述べる(屋形 1976, 437-439; Karenga 2004, 70-71)。この物語のなかで、*mꜣʿt* の語は計 21 箇所確認される。物語の詳細については、Lichtheim 1973, 169-184; Parkinson 1977, 54-88; 屋形 1978a 等を参照)。

[50] B1 (Papyrus Berlin 3023), 176.

[51] Parkinson 1997, 80, n. 44.

[52] B1, 240-241.

この「雄弁な農夫の物語」のマアトの描写において重要な点は、これらのマアトの内容が農夫(*sḫty*)[53]という比較的身分の低い者の口から発せられている点であると筆者は考える。物語文学という史料の性格上、この史料の内容の全てを事実として解釈することはできない。しかし、数多くの場面で発せられる農夫によるマアトの表現は、この概念が支配者層にのみ知られていた概念ではなく、正当に行われるべき「正義」の概念として身分の低い者にも認識されていたことを示唆している。古代エジプト人が認識したマアトの道徳的・倫理的側面の特徴は、農夫の次の発言からも確認される。

stwt m ir mnt iw si3t sšrr.f m3ʿt mḥ nfr n hḳs n wbn m3ʿt[54]

苦しみを取り除く者が苦しみを引き起こしています。

嘘をつく者は、マアトを減らすのです。

盗みのないように、マアトが溢れることのないように善く、満たしてください。

ここでマアトは、「減らす」(*sšrr*) や「溢れる」(*wbn*)、「満たす」(*mḥ*)といった言葉によって数量を持つ概念のように描写される。また、マアトが溢れることがあってはならないという発言は、マアトがある種の中庸的な概念として理解されることを示している。筆者は、このマアトの特徴が死者の心臓とマアトとの釣り合いを求められる「死者の書」の心臓の計量の描写と合致すると考える。心臓の計量は、死後の世界で死者が生前の善行を証明する場面であるが、この生前の行いとして理解されるマアトが、死後の世界においても有効であるという観念もまた、この史料のなかではっきりと語られる。

ir m3ʿt n nb m3ʿt nty wn m3ʿt nt m3ʿt.f ʿr šfdw gsti Ḏḥwty ḥr.t(i) irt iyt nfr nfrt nfr(w) r .f

iw swt m3ʿt r nḥḥ h33.s m m-ʿ ir s(y) r ḫrt-nṯr iw ḳrs. t(w).f sm3 t3 im.f n sin.tw rn.f tp t3[55]

マアトのマアトが存在するマアトの主のためにマアトを行ってください。

トトの葦ペン、パピルス、パレットである者よ。悪事をなすことにお気をつけください。

---

[53] 「農夫」であると記載された主人公のクーエンアンプが、実際に当時のエジプト人の大部分を占めた「農夫」であったかについては議論の余地が残る（屋形 1978a, 437）。しかし、少なくとも彼が書記や行政官のような古代エジプト社会の支配者層に属していなかったことは明らかである。

[54] B1, 280-283.

[55] B1, 334-341.

善い者の善いことは、彼[56]よりも善いのです、
なぜならマアトは永遠であり、それはマアトを行う者とともに墓に行くからです。
彼はその名前を地上で消されることなく埋葬され、墓に入れられます。

家令頭に対する 8 度目の訴えのなかで、農夫はマアトの実行を嘆願し、マアトとその行為者について語る。ここでマアトの概念はマアトの行為者自身より重要であると同時に、マアトがある種の「永続性」を持つものとして、死後も人間に付随することが述べられる。つまり、道徳的・倫理的な行為として理解されたマアトの概念は、「死者の書」のなかで明確に図像化される新王国時代より前の時代においても、古代エジプト人にとって彼らの死後に関わる重大な関心事であったといえる[57]。

第４節　マアト女神

最後に、マアトの女神としての側面を概観したい。マアト女神（*Mꜣʿt*）は正義や真実を司る古代エジプトの女神である。この女神は宇宙の秩序や正義、真実、公正を意味する抽象概念であるマアト（*mꜣʿt*）の神格化であり、頭にダチョウの羽根を載せた女神の図像𓁢で描写される（図 0-5）。神格化された時期については明らかではないが、エジプト古王国時代の史料上に既に女神の限定符が確認されることから、遅くとも古王国時代には神格化されていたことがわかる[58]。古王国時代以降もマアト女神は、様々な種類の膨大な史資料に文字や

---

[56] 善い者: *nfr*(*w*)を指す。

[57] マアトの永続性やマアトと死後の世界の関係は、「雄弁な農夫の物語」だけでなく、「プタハホテプの教訓」や「メリカラー王への教訓」といった古王国時代から中王国時代にかけての教訓文学のなかでも言及されている：*wr mꜣʿt wꜣḥ spd n ḫnn .t*(*w*).*s ḏr rk Wsir*「マアトは偉大で永遠であり、有効であり、それはオシリスの時代から阻害されることがない」(P. Prisse <Bibliothèque Nationale Nos. 183-94>, 88-89; Žába 1956, 23); *wn pḥwy mꜣʿt wꜣḥ.s*(*y*) 「終わりの来るとき、マアトは永遠である」(P. Prisse, 97; Žába 1956, 24); *siḳr ḥwt.k nt imnt smnḫ st.k nt ḫr*(*t*)-*nṯr m ʿḳꜣ m irt mꜣʿt rhnt ib.sn pw ḥr s šsp*(*w*) *bit nt ʿḳꜣ ib r iwꜣ n ir isft* 「正直であること、マアトを行うことで、汝の西方の神殿を豊かにし、墓地の座を優れたものにさせよ。それこそが、彼らの心が信頼するものなのである。正直な者の性格は悪事を行う者の供物用の雄牛よりも受け入れられる」(Papyrus Leningrad 1116A, 126-127; Volten 1945, 67-68)。

[58] 例えば、*Urk.* I, 57; *Urk.* I 198. いずれの事例も *mꜣʿt* は抽象概念として記述されるものの、語の末尾にマアト女神の限定符が付記されている。

図像で描写され、正義や真実を司る女神としてエジプトの文化に影響を与え続けてきた。特に、先述の「死者の書」では、しばしば天秤に載せられたマアトとは別に、死者を守護する女神として描写される[59]。

図 0-5　フィレンツェ考古学博物館所蔵
マアト女神のレリーフ
(MANF Inv. n. 2469 © Museo Archeologico Nazionale Firenze)

マアト女神は、明確に女神として登場する一方で、ホルスやラー、オシリスに代表される種々の古代エジプトの神々とは異なる特徴を備えている。まず、古王国時代に既に神格化されながらも、マアト女神を崇拝する神殿や、崇拝の描写を示す史資料が極端に少ない。現在確認される神殿の唯一の考古資料は、新王国時代に建造されたカルナック神殿内の小神殿のみである[60]。文献史料によると、神殿はメンフィスとディール・エル・メディーナにも造営されたが、これらの存在を証明する考古学的証拠は確認されていない[61]。「マアト女神の神官」(*ḥm-nṯr Mꜣʿt*)や「全ての(崇拝の)場所におけるマアトの神官」(*ḥm nṯr Mꜣʿt m swt.s nbwt*) といった称号が古王国時代の史料に確認されることからも、マアトが何らかの形で崇拝されていたことがうかがえるが、その詳細は不明である[62]。加えて、新王国時代以降の図像に見られる神々へ供物を捧げる場面においても、マアトが供物を受け取る神々として描写されることは稀である[63]。古い起源を持つ女神でありながら、この女神にまつわる神話も極めて少ない。太陽神である「ラーの娘」(*sꜣt Rʿ*)としてマアトが時折、太陽神の船上や船の前に現れることもあるが、この特徴も新王国時代まで描写されない[64]。また、エジプトの宗教のなかで頻繁に見受けられる習合に関しても、マアト女神は他の神々と異なる様相を示している。アルテンミュラーによれば、マアト女神は他の神々と習合されることがあっても、その際にマアト女神が他の神々を取り込む形で習合するのではなく、他の

[59] 例えば、P. Louvre N 3084 (Barguet 1967, 159); p. Berlin P. 3003 (von Falck 2006, Photo Taf. 9); P. BM EA 9995 (Herbin 2008, Pl. 24)。
[60] Helck 1980, 1114.
[61] Teeter 2001, 320.
[62] Jones 2001, 516-517.
[63] Teeter 2001, 320.
[64] *LGG* 6, 106-107.

神々に取り込まれる形で習合している[65]。

これまでに確認される史資料からは、女神としてのマアトはその輪郭を示しつつも、その実態や神話における役割が明瞭に示されていないことがうかがわれる。これは、この女神が本来「宇宙の秩序」の概念に由来するものであり、また、王や民衆によって「行われる」あるいは「もたらされる」といった動作の対象となるような受け身な性格を帯びる概念であったことに依拠するのかもしれない。

第５節　「二柱のマアト」 *Mꜣʿty*

マアトの女神の側面のなかでもとりわけマアトに固有の特徴は、特定の史資料のなかでマアトが一柱の女神ではなく、二柱の女神として登場することである。この時、マアトは通常、単数形女性名詞 *Mꜣʿt* ではなくエジプト語の双数形女性語尾[66] *-ty* を伴い *Mꜣʿty* として描写される。例えば、エジプト新王国時代の「アムドゥアトの書」 には、太陽神の船を先導する二柱のマアト女神が描写される（図 0-6）。新王国時代以降に利用された「死者の書」では、下界の神であるオシリスによる死者の裁判に携わる二柱の女神の姿で登場する。本来一柱で描かれる女神が二柱の姿となって現れる事例は、神々の姿が多様に変化する古代エジプトの宗教においても稀である。しかし、「死者の書」における最も重要な場面である死者の裁判の場面において、裁判の間が「二柱のマアト」の広間（*wsḫt nt Mꜣʿty*）と称されることから、この女神が死者の裁判において重要な役割を担うことは明らかである。

図 0-6　太陽神の船の前に立つ「二柱のマアト」女神
「アムドゥアトの書」第 1 時、Hornung 1963a Erste Stunde の図像からトレース

[65] Altenmüller 1975, 67.
[66] Gardiner 1957, 58-59; Borghouts 2010, 71-71.　なお、後述するように第 2 章の古王国時代のテキストでは、古期エジプト語が使用されるため女性形双数語尾は*-ti* と記される（*AäG* 125-126）。

加えて、この「二柱のマアト」は多様な図像表現を伴い新王国時代以降の史資料に登場する特徴を持つ。例えば、通常は二柱の同一の女神として描写される「二柱のマアト」が、しばしば一柱のマアト女神と一柱の男神の一組として描写される（図 0-7a）。また、マアト女神と、頭が女性ではなく、巨大な一枚のマアトの羽根となった女神との組み合わせ（図 0-7b）や、頭に一枚の羽根を載せたマアト女神と二枚の羽根を載せたマアト女神（図 0-7c）の組み合わせなど特徴的な図像で描写される。さらに、プトレマイオス時代のレリーフでは、「二柱のマアト」の名前を持つ神が、二柱ではなく、頭に二枚の羽根を持つ一柱の男神として刻まれている（図 0-7d）。

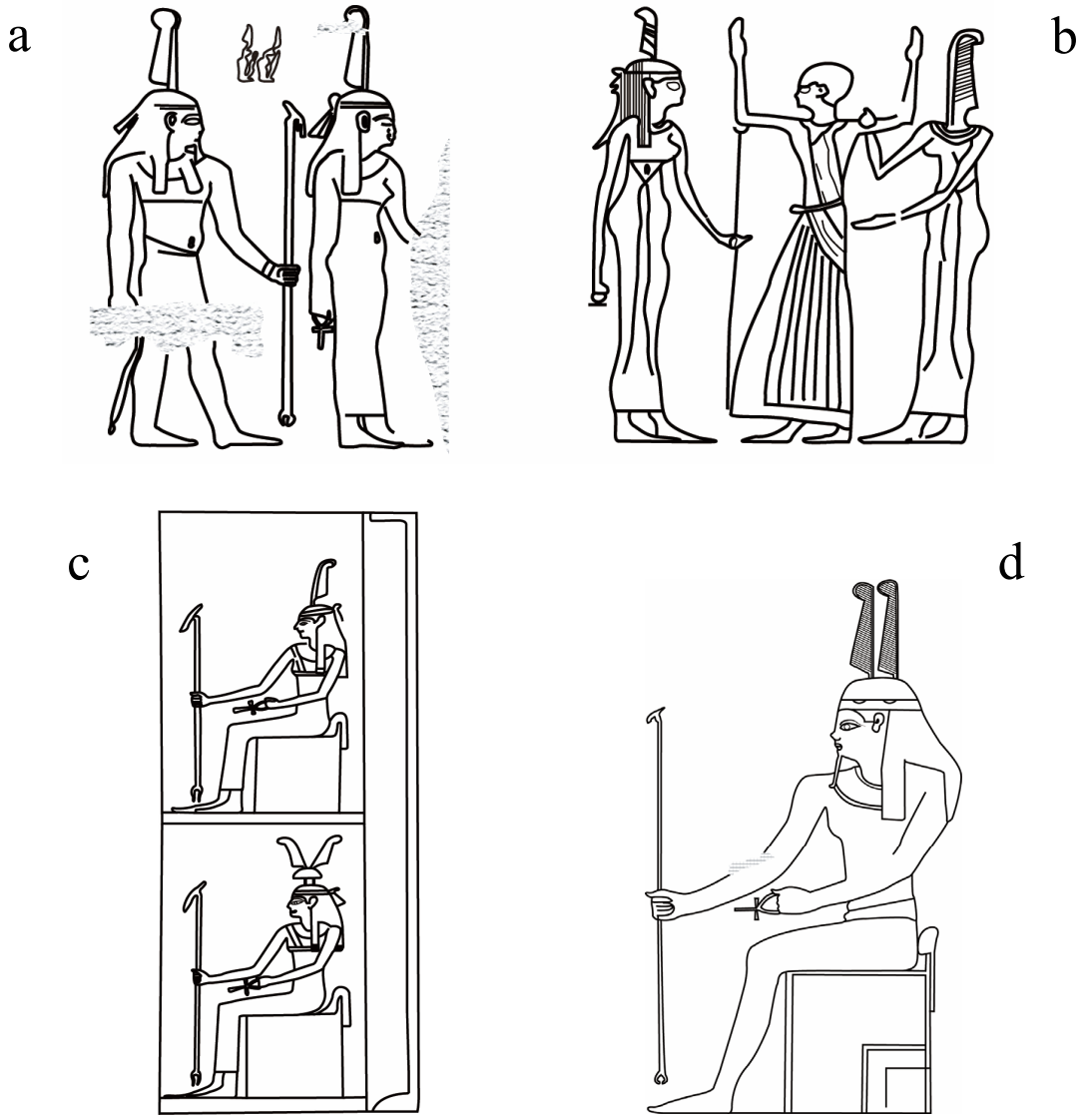


図 0-7　多様な姿で描写された「二柱のマアト」
a (左上):コム・オンボ神殿, Corteggiani 2007, 305　b (右上): p.Louvre 3079, Seeber 1976. Abb. 23
c (左下) : p.Bibl Nat. 765, Seeber 1976. Fig. 54　d (右下): エドフ神殿, 筆者撮影、からトレース。

このような重要性と特殊性から、「二柱のマアト」（*Mꜣꜥty*）は様々な研究者の関心を集めてきた。最初期の研究では、ブレステッドが 20 世紀初頭に死者の裁判の間の名称に利用された *mꜣꜥty* の語の意味について言及している[67]。彼は、*mꜣꜥty* の語尾は文法的には双数を示すが、実際は双数の意味ではなく、単なる語の強調を示す熟語であると推測した[68]。しかし、*mꜣꜥty* を女神や概念の双数を意味するのではなく、単語の意味を強調する目的で表現とするブレステッドの考察に反して、ブリーカーはこの語を明確な二柱の女神として認めている[69]。彼は、一部の図像において二柱のうち一方のマアト女神が緑色で描かれている点を指摘し、二柱のマアト女神がそれぞれ現世と死後の世界のマアト女神であると結論づけた[70]。ブリーカーの「二柱のマアト」の解釈は広く受け入れられたが、その後ヨヨッテはこの解釈に疑問を示し、レトポリスの神学から「二柱のマアト」が太陽と月、つまり太陽神の日中と夜の姿の隠喩であると考察した[71]。シーバーは、「死者の書」に記された「二柱のマアト」の豊富な図像資料を提示し、新王国時代の二柱のマアトを図像学の観点から分析している[72]。彼女は二種類のマアトがそれぞれ日中と夜間の太陽の船の運航を案内する役目をもつと主張し、この二柱のマアトの発生がマアト女神の倍加（もしくは増加）ではなく、マアトの本来的な意味である「秩序」の概念の「分割」（Aufteilung）に由来すると推測した[73]。グリースハマーとアルテンミュラーは、「コフィン・テキスト」[74] 上の「二柱のマアト」の記述に言及した[75]。特にアルテンミュラーは、シンクレティズムの視点から「二柱のマアト」がシューやテフヌートといった他の神々と同一視された可能性を指摘している[76]。近年の研究では、スミスも「二柱のマアト」の内容に触れ、死者の書に登場する以前の「二柱のマアト」がオシリスよりも太陽神と密接な関係にあったと説明を加えている[77]。

---

[67] Breasted 1912, 297-301.
[68] Breasted 1912, 299, n. 2. 加えて、彼はこの強調の語尾の用法と類似した例としてエジプト語の「朝」と「早朝」（おそらく *dwꜣw* と *dwꜣy*）を例示している。
[69] Bleeker 1929, 59-62.
[70] Bleeker 1929, 61.
[71] Yoyotte, 1961, 61ff. しかしながら、ヨヨッテの述べるレトポリスの神話の内容については、出典が明記されておらず、その詳細は不明である。
[72] Seeber 1976, 139-146.
[73] Seeber 1976, 141.
[74] 「コフィン・テキスト」については第 3 章を参照。
[75] Grieshammer 1970, 89-90; Altenmüller 1975, 71-72.
[76] Altenmüller 1975, 71-72. アルテンミュラーが考察する「二柱のマアト」とその他の神格の習合関係の形成に関しては、いくつかの史料の解釈の問題に見受けられ、依然として議論の余地が残される。この点については第 2 章および第 5 章で詳しく検討していく。
[77] Smith 2017, 260.

このように、「二柱のマアト」に関する議論は、これまで多くの研究者によって継続されてきた。しかしその一方で、マアト女神が二柱の姿で現れることとなる正確な理由を巡る解釈は研究者による一致をみておらず、未だ最終的な結論にいたっていない。近年出版されたエジプト語の文法書において示されたバスマンの見解は、この状況を示す好例であるといえるだろう。彼は「死者の書」の説明のなかで以下のように読者に問いかけ、その回答を示している。

「mꜣʿtj、つまり二重の正義は何を意味しているでしょうか?」[78]
「おそらく、絶対的な正義です」[79]

この解釈は、100 年以上に提示されたブレステッドの解釈を改めて支持するものであることがわかる。文法書で記された内容であるため、この解釈の根拠をうかがうことはできないが、この「二柱マアト」の意味に関する見解がエジプト学者の間でも一致をみてみないことは明らかである。

「二柱のマアト」の理解を巡る議論がいまだ最終的な結論にいたっていない理由の一つには、研究対象とされる史資料の隔たりが挙げられる。これまでの先行研究の多くは「二柱のマアト」が図像で明確に示される「死者の書」をはじめとするエジプト新王国時代以降の史資料の分析に依拠し、エジプト古王国や中王国時代の「二柱のマアト」の事例が十分に検討されていない[80]。加えて、研究対象を限定した先行研究の目的上、新王国時代以降の「二柱のマアト」の議論や解釈が着実に蓄積される一方で、各時代の史料に描写された「二柱のマアト」の内容を比較・考察し、この特殊な女神の実体を通時的に理解する試みは現在にいたるまでなされていない。言い換えれば、今後の「二柱のマアト」の研究では、(1) 古代エジプト史の前半期（古王国時代～中王国時代）[81]における「二柱のマアト」の記述の詳細な分析と（２）各時代における「二柱のマアト」の内容の比較・考察が求められる。

---

[78] Bussmann 2017, 132: “What might mꜣʿtj double justice mean?”
[79] Bussmann 2017, 256: “Perhaps absolute justice”.
[80] グリースハマーやスミスは古王国時代の「ピラミッド・テキスト」や中王国時代の「コフィン・テキスト」上の「二柱のマアト」に言及しているが、その内容に関する議論はおこなわず、その輪郭の提示に留めている（Grieshammer 1970, 89-90; Smith 2017, 260）。
[81] 古代エジプト史における「前半期」、「後半期」といった時代区分は明確にはなされないが、研究の成熟が認められる新王国時代以降の「二柱のマアト」の研究と対比するため、本論文では初期王朝時代から中王国時代までを便宜上「前半期」と称する。

このような課題を踏まえ、本論文では古代エジプトのマアト研究の一つとして、古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の内容理解を第一の目的に定める。筆者は、本研究において、「二柱のマアト」を意味するエジプト語 *mꜣʿti* と *mꜣʿty* の記述を悉皆的に検討し、古王国時代および、中王国時代の史料からこの語に関連する記述を 27 例（事例 1-27）確認した。これらの事例の多くは、古代エジプトの葬祭文学と呼ばれる特殊な文献史料のなかに記述される。第 1 章においてこの葬祭文学の特徴と、エジプト文化史研究における葬祭文学の史料的価値を吟味した後、第 2 章、第 3 章において史料上の 27 例の記述内容を検討する。

第 2 章、第 3 章における「二柱のマアト」の考察結果を基盤とし、第 4 章では古王国時代から中王国時代にかけて生じた「二柱のマアト」の意味の変遷を辿り、その実態を明らかにする。第 5 章では、中王国時代の史料に確認されるマアトとその他の神々との習合関係に注目し、新たな史料（事例 i-iv）を提示しながら、より多角的な視点に基づく「二柱のマアト」の考察を行う。

第１章

古代エジプトの葬祭文学

古王国時代、中王国時代の「二柱のマアト」の事例の分析を進めるに先立って、本章では、古代エジプトの葬祭文学（Funerary Literature）[82]についてふれておきたい。葬祭文学は古代エジプト文化史研究に欠かせない最も重要な史料群であると同時に、その取り扱いには十分な注意が必要であり、本研究で考察する「二柱のマアト」（*mꜣʿti/mꜣʿty*）の事例の多くがこの史料群に記述されるためである。

古代エジプト史の研究に利用される史資料の多くは、考古資料と文献史料に大別される。双方ともにエジプトの歴史や宗教、文化の研究に欠かすことのできない史資料であるが、考古資料に残されることが少ない抽象概念であるマアトの概念の理解に際して、文献史料を活用する研究はとりわけ重要となる。

葬祭文学は、この古代エジプトの文献史料の一つジャンル[83]に相当する史料群である。これは、長いエジプトの歴史のおよそ全ての時代に存在した史料群であり、古代エジプト人の思想や葬祭文化を探求するうえで極めて重要な情報源である。象形文字や神官文字で、そして時には図像を伴い墓の壁面や棺の内部、パピルス、スカラベといった様々な遺物に描かれた。その内容は、死者のための供物用の呪文や復活の呪文、死後の世界を描写した呪文、魔除けの呪文など多種多様な呪文で構成され、死者の来世における復活と安寧を目的として利用された[84]。死者の葬送時に利用され、また死者とともに埋葬されることから、これまでの考古学的調査によって膨大な量の葬祭文学が出土し、古代エジプトの文献史料のなかでもひときわ豊富な量と種類を誇る史料群となっている[85]。最初に登場する葬祭文学は、第 5

---

[82] 「宗教文書」（Religious Texts: Piankoff 1968, 吹田 1995; Karenga 2004）、や「葬儀文書」（Mortuary Texts: Allen 1950; Hays 2012;）、「葬祭文書」（Funerary Texts: Willems 2017）など、その呼称は研究者によって異なり、これらの呼称に関する議論も幾度かなされている（Bickel and Díaz-Iglesias, 2017, XIII）。ビッケルとディアス・イグレシアスによる「死後のあらゆる段階のために用意された、より広い意味を示す用語として（「葬祭文学」が）最も妥当と思われる」（Bickel and Díaz-Iglesias 2017, XIV）という提案にしたがい、本論文では「葬祭文学」と呼称する。

[83] その他の文献史料のジャンルには、王の布告や王名表を含む歴史文書や自叙伝、教訓文学、物語文学、行政文書などが挙げられる。

[84] レスコは葬祭文学を「死後の世界へのガイドブック」と表現している（Lesko 2001, 570）。

[85] 例えば、「ピラミッド・テキスト」はピラミッドの埋葬室の内部に、「コフィン・テキスト」

王朝以降のピラミッドに刻まれた「ピラミッド・テキスト」である。この史料は、主として古王国時代の王族のために用意された呪文集である。第 2 章第 1 節では、この「ピラミッド・テキスト」に刻まれた *mꜣʿti* の記述を分析する。

古王国時代の「ピラミッド・テキスト」の後の時代に登場する葬祭文学が、第 3 章で注目する「コフィン・テキスト」である。この葬祭文学は、主として第一中間期の終末期から中王国時代にかけて制作された支配者層の木棺の内側に記述される。「ピラミッド・テキスト」と同様に、1000 種を超える膨大の種類の呪文がこれまでに確認され、エジプト中王国時代の葬祭文化を考察するうえで最も重要な史料に位置づけられる。

序章でも紹介した最も著名な葬祭文学である「死者の書」は、主として新王国時代以降に利用された。この史料は、「ピラミッド・テキスト」や「コフィン・テキスト」と異なり、多くの呪文に図 0-3 や図 0-4 で示されるような挿絵が組み込まれている[86]。「死者の書」は新王国時第 18 王朝からギリシア・ローマ時代の前半までの約 1400 年間[87]にわたって利用された。この極めて長い期間の間に、「死者の書」の内容には多様な変化が生じており、膨大な数の史料が出土していることに加えて、個々のパピルスによって呪文の構成やテキスト・挿絵の内容に差異が多いことでも知られる。新王国時代には、「死者の書」の他にも「アムドゥアトの書」や、「洞窟の書」、「門の書」など様々な葬祭文書が利用された。

形式や内容に変化を伴いながら死者の復活と安寧を目的としてエジプト古王国時代からギリシア・ローマ時代にかけての二千年以上にわたって絶えず利用されてきた点や、豊富な種類のテキストを含む点、数多くの出土遺物に見受けられることから、葬祭文学はエジプト学の黎明期から現在にいたるまで、古代エジプト文化史、とりわけ葬祭文化や宗教を探求する上で最も重要な史料群に位置づけられてきた。しかしながら、エジプト史研究のなかで葬祭文学を文献史料として扱う際には、死後の世界に関する記述を主とする史料の性格上、注意を要する場合が多い。そのなかでも以下の二つの点は、歴史史料としての葬祭文学をめぐる最も重大な点として提示する必要がある。

は、墓に埋葬される木棺の内側に記され、また、パピルスに記された「死者の書」などは副葬品として埋葬室や棺に入れられる。

[86] 例外として「コフィン・テキスト」の「二つの道の書」（第 3 章第 5 節を参照）のような図像を伴う史料も存在する。

[87] Quirke 2013, vii.

第１節　テキストの変遷

先述したように、古代エジプトの葬祭文学は、最初期の「ピラミッド・テキスト」から王朝末期まで利用された「死者の書」までその内容に変化を伴いながら利用された。同時代に併存して利用された葬祭文学は新王国時代まで登場せず、それゆえ各種の葬祭文学は個々のテキストが利用された時代の思想的背景を示す史料として重要な意義を持つ。加えて、個々の葬祭文学、例えば「ピラミッド・テキスト」、「コフィン・テキスト」、「死者の書」には、共通して見受けられる呪文や、類似した内容の呪文が存在する。このことから、各時代の葬祭文学と前後する時代の葬祭文学の内容には一定の相関関係があることがわかる。その一方で、古王国時代においては王族に限られていたテキストの利用者層は、時代を追うごとに拡大し、新王国時代以降には書記のような比較的身分の低い支配者層にまで拡がる。この点に注目し、これまでの研究では、時代毎のテキストの内容やテキストの利用者との関係の考察や、これらの変化の背景にあるとされる政治史や王権史の変遷の探求が精力的になされてきた。確かに、葬祭文学におけるテキストの変遷から、その背景にある古代エジプトの宗教の変化を考察することは可能である。しかしながら、筆者はテキストの内容やその利用者層の変化が、政治史や王権史といったエジプト史全体の変化に依拠すると安易に断定することは難しいと考える。葬祭文学のテキストの変遷と歴史の変遷は、必ずしも直結しておらず、近年このような認識はエジプト学の研究分野で見直されつつある。その最大の契機となったのが、「来世の民主化」（Democratization of the Afterlife）を巡る議論であろう。

「来世の民主化」の議論は、本論文で検討する「ピラミッド・テキスト」から「コフィン・テキスト」への葬祭文学の変容をもとに提示された古王国時代から中王国時代にかけてのエジプト史の認識である。古王国時代に王族のみに特権的に利用された「ピラミッド・テキスト」は、中王国時代において「コフィン・テキスト」として形を変えて地方の有力者に利用されることとなる。このテキストの変遷の理由を、当時秘儀とされたテキストの内容が古王国時代崩壊後の混乱期に王族以外に利用されたためとし、これにより王にのみ許された来世での復活が「民主化」されたとする考え方が「来世の民主化」である。この一連の筋書きは、一見すると当時の歴史、特に政治的背景の影響を受けてエジプトの文化が変容した好例であり、宗教と常に密接な関係にあった古代エジプト史を理解するにあたって、極めて有益な歴史観であるように思われる。

しかしながら、この「来世の民主化」という政治史の変化に伴い文化が変容するとする認識は、21 世紀になってスミスやヘイズ、ウィレムズらによる批判を受けて完全に否定された[88]。否定の有力な根拠には、「来世の民主化」の枠組みのなかで、第一中間期にその始まりを見る「コフィン・テキスト」が実際にはすでに古王国時代に確認されることが挙げれられる。フランスの発掘調査隊によってダクラ・オアシス[89]の墓地バラトで発見された第 6 王朝のメドゥネフェルの墓内の棺に碑文の断片が確認され、その内容が「コフィン・テキスト」であることが確認された[90]。

加えて、「来世の民主化」の枠組みの前提となる第一中間期における社会的混乱や無秩序を証明する所謂「イプウェルの訓戒」[91]の史料年代が揺らいだこともこの議論に影響を与えた。この史料の内容は、イプウェルと呼ばれる賢人によるエジプトの混乱期における異常な社会状況の訴えである。従来の研究ではこの史料が第一中間期の混乱を描いているとされ、この時代の研究における重要史料と位置づけられていた[92]。しかしながら、ヴァン・シーターズらの史料研究により「イプウェルの訓戒」が実際に描写しているのは、第一中間期ではなく、第二中間期の情勢であることが極めて高いことが明らかにされた[93]。これにより、第一中間期の考察対象としての「イプウェルの訓戒」の史料的価値は大きく揺らぎ、現在では第一中間期の有効な史料とは認められなくなくなっている[94]。

この他の観点からも、「来世の民主化」は否定され、もはや信頼に足る宗教史の変化の仮説ではなくなっている[95]。それにもかかわらず、「来世の民主化」の考え方は、現代にいたる

---

[88] Smith 2009; Hays 2011, Willems 2014.いずれの研究者も「来世の民主化」を完全に否定する立場にあるが、その根拠は特にウィレムズの研究で詳細に論じられている（Willems 2014, 124-135）。国内においては、山崎がヘイズの見解（Hays 2011）を支持し、「来世の民主化」への否定的な見解を述べている（山崎 2014, 121）。

[89] ルクソールの約 350km 西側に位置するオアシス地域（Baines and Malek 2000, 31）。

[90] Valloggia 1986, 75-78, Pl. 62, 63.

[91] 「エジプトの賢人の訓戒」（The Admonitions of the Egyptian Sage: Gardiner 1909); 「イプウェルと万物の主の対話」(The Dialogue of Ipuwer and the Lord of All: Enmarch 2005: 2008)とも呼ばれる。史料の詳細や研究史、テキストの内容については近年のエンマークによる研究によくまとめられている(Enmarch 2005; 2008)。

[92] 史料の内容は 20 世紀初頭にガーディナーによってはじめて公刊されたが、ガーディナー自身はこの時点において、史料の制作年代には今後の議論が必要であると述べている（Gardiner 1909, 18）。

[93] Van Seters, 1964; 2013. Haring 2010, 140, n. 66.

[94] 屋形は、「イプウェルの訓戒」の内容が起草された時代が第 13 王朝以後であることを認めながらも、より古い原本の存在を主張し、この史料を第一中間期の史料と位置付けている（屋形 1978b）。

[95] Dorman 2017, 31.

まで一部の研究者によって根強く支持されてきた[96]。その理由には、この歴史の認識が古代エジプトの古王国時代から中王国時代の歴史的変化を説明するにあたり、理にかなっているためであると考えられる。

この「来世の民主化」をめぐる一連の議論は、古代エジプト文化史の研究にあたって、時代に伴う文化の変容をその背景にあるその他の歴史的な変化と関連づけることには十分な注意が必要であるという教訓を研究者に示しているといえよう。スミスは、「来世の民主化」をめぐる議論とその内容の検証を通して次のような結論を導き出している：

> それ（来世の民主化）は、宗教的な変化が必ずしも政治的変化と結びつくわけではないという事実を強調した。それぞれの連続する政治的な段階が、それとともに新しく特徴的な宗教的精神（religious ethos）をもたらすエジプト史の概要的な見解を示す研究者もいる。（しかし）これは、あまりに短絡的である。ショー（Shaw 2000: v-vi）[97]が指摘したように、文化的・社会的な様式と傾向は、エジプト学者が政治史を研究する際に常習的に利用する王朝や王国時代、中間期といった枠組みの中で常にこぎれいに一致するわけでなない。それらは時に、そのような枠組みを超越する、あるいは矛盾さえすることがある[98]。

このような葬祭文学の変遷を巡る問題から、葬祭文学を文献史料とする際には十分な注意が必要であると筆者は考えている。葬祭文学の変遷から推察される古代エジプト人の思想の変化は、エジプト史のその他の諸要因と必ずしも因果関係にあるとは限らない。したがって、葬祭文学の変化に見られるエジプト人の思想の変化から当時の社会的背景を考察する際には、その論証を文献史料の検証に留まらず、関連する考古資料を十分な吟味したうえで、多角的かつ厳密に行われなければならない。

---

[96] Willems 2014, 124-125.

[97] Shaw 2000, v-vi. 特に以下の文章を指す：”The pace of the change in such aspects of Egyptian culture as monumental architecture, funerary beliefs, and ethnicity was not necessarily tied the rate of political change”（Shaw 2000, vi）。

[98] Smith 2009, 10: “it has highlighted the fact that religious change is not necessarily linked to political change. Some writers present a schematic view of Egyptian history in which each successive political phase brings with it a new and distinctive religious ethos. This is overly simplistic. As Shaw (2000: v-vi) points out, cultural and social patterns and trends do not always fit neatly within the framework of dynasties, kingdoms and intermediate periods that Egyptologists are accustomed to use in studying political history. Sometimes they transcend, or even conflict with, that framework”.

以上の点を踏まえ、本論文は「ピラミッド・テキスト」を含む古王国時代の史料から「コフィン・テキスト」が利用された *mꜣʿti/mꜣʿty* の内容の変化を考察の対象とし、その変化の背景にある政治的な変化との関連にまでは考察の対象を拡げない。古王国時代から中王国時代にかけての歴史を包括するような、より大きなスケールの研究は、筆者が古代エジプト史の各側面を十分に理解したうえで取り組む最終的な研究の課題としたい。

第２節　宗教的・神学的内容の難しさ

葬祭文学を研究史料とする際に生じるもう一つの最大の問題は、テキストの内容が極めて難解であるためにその内容が理解できないことが多々ある点である。史料の性格上、葬祭文学の内容は古代エジプト人の思想や彼らの思い描く神々、死後の世界の描写する語句を多分に含む。これらの語句は、考古資料上で確認されない抽象的な概念であり、また類例の少なさゆえに断片的な情報しか得られないことから、意味を特定できない語句を多く残している。そして、語句の不明瞭さは、前後の文脈による一連のテキストの理解を困難にさせ、テキストの解釈を極めて不安定なものとする。本論文の第２章および第３章で詳述するテキストの読解をめぐる議論からは、同一の文章であっても、その解釈が研究者によっていかに異なるかが見て取れる。さらに、史料によっては、意図的にテキストが不可解（enigmatic）あるいは暗号的（cryptographic）と呼ぶべき特異な文字で記される場合もある[99]。長年にわたり古代エジプトの葬祭文化研究を牽引するウィレムズは、近年の研究のなかで葬祭文学を次のように形容している：

> 多くの場合、残されているものは、適切に翻訳された場合でさえ曖昧さの残るようなテキストである。見慣れない語や宗教的なモチーフの不自然な組み合わせ、テキストの改変や史料の破損によって、我々の宗教文書の翻訳はしばしば単なる戯言となる。[100]

---

[99] Darnell and Darnell 2018, 50-55. この種のテキストは新王国時代以降の史料に多く見受けられる。

[100] Willems 2017, 601: “What remains is in many cases a kind of texts that, even when they are adequately translated, remain hazy. Due to the use of uncommon words, unusual combinations of religious motifs, textual corruption and damage to manuscripts, our translations of religious texts are often plain gibberish.”

このような史料の性格上、葬祭文学は文化史研究における最も重要な史料に位置づけられる一方で、これまで数多くの研究者が各種のテキスト自体の理解を目指す史料研究を進めてきた。これらの研究によって蓄積された多様な史料の解釈の可能性は、現代においても史料の理解を深める上で重要な参考資料となっている。しかしながら、テキストの読解のみでは入手できる情報に限界があることもあり、葬祭文学の内容には、依然として十分な理解がなされていない点も多く残されている。

近年では、先行研究の基礎的な蓄積を受けつつ各種の葬祭文学の研究に新たな進展が見受けられる。特に 2010 年にバーゼルで開催された国際会議 Ancient Egyptian Funerary Literature: Tackling the Complexity of Texts がこの研究分野の進展に大きな寄与したことは間違いないであろう[101]。個々の史料に関していえば、例えば古王国時代の「ピラミッド・テキスト」の研究では、アレンやヘイズが中心となってテキストの言語的特徴や呪文の内容に基づく分類やそれらの相関関係に注目した史料理解が深められつつある[102]。また、ゼーテの校訂本の情報を補足する新たな原文資料も出版される他、テキストの内容と故王の死に際して実際に行われた葬送儀礼や、その他の史資料との関連を探求する試みもなされている[103]。「コフィン・テキスト」の研究分野においても同様に研究は着実に進展しており、ウィレムズの提示するような木棺資料への考古学・文献学の複合的な研究視点が受け入れられつつある[104]。その一方で、より厳密な史料分析を通して、特定の呪文の内容理解に焦点を置いた文献学研究もさらに蓄積されている[105]。「死者の書」の研究分野においては、未公刊のパピルスに記された「死者の書」の公刊や、特定の呪文の研究が精力的になされている[106]。また、ボン大学の Totenbuch-Projekt[107]による「死者の書」のデータベースも「死者の書」研究分野で活用され、その進展に寄与している。葬祭文学は、その内容理解を最大の課題としながらも、現在もなおエジプト学者による基礎的な史料研究が着実に蓄積されている。これらの研究成果が今後のさらなるエジプト文化史の理解に寄与していくと筆者は考える。

---

[101] 筆者自身はこの学会に参加していないが、発表の内容を集成した研究書の内容から、葬祭文学研究に対する多角的な研究視点やその具体的な手法が様々な研究者によって提示されていることがうかがえる（Bickel and Díaz-Iglesias 2017）。
[102] Allen 1984; 2005; 2017; Hays 2012.
[103] Allen 2008; 2013; Hays 2006; Backes 2017; Billing 2018.
[104] Willems, 1988; 2014; 2017; Sherbiny 2017.
[105] Priskin 2019.
[106] Studien zum Altägyptischen Totenbuch (SAT)や Totenbuchtexte (TbT)といった「死者の書」の叢書は、近年の「死者の書」研究の進展を推し進めている。
[107] Totenbuch-Projekt (http://totenbuch.awk.nrw.de/) を参照。

本論文の研究対象である「二柱のマアト」の多くが葬祭文学という特殊かつ難解な史料に記述される限り、「二柱のマアト」の理解に際して、筆者はその前提となる各種のテキストを可能な限り精確な理解する必要があると考える。したがって、本論文では史料上の *mꜣʿti/mꜣʿty* の事例の分析に加えて、近年の研究成果を踏まえ、葬祭文学のテキスト自体の読解にも注力している。筆者が過去に出版した論文の内容も、本論文の執筆にあたって再考し、細心の注意をもって蓋然性の高い解釈・翻訳を提示した。しかし、それでもなお、テキストの内容には筆者の理解の及ばない点を数多く残している。これらの不明瞭な点もまた、今後の研究で改めて詳細に論じなければならないと考えている。

第２章

古王国時代における「二柱のマアト」

本章では、古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の内容を明らかにするため、古王国時代の文献史料からマアトと「二柱のマアト」に関する記述の検証をおこなう。

第１節では、古王国時代のマアトの記述を最も多く含むことで知られる「ピラミッド・テキスト」に焦点を当てる。先行研究では、この史料上の記述が現在確認されている最古の「二柱のマアト」の記述であり、本研究の出発点として欠かせない史料となる。

第２節では、新たな「二柱のマアト」の事例をもつ史料として、「パレルモ・ストーン」の記述に注目する。「パレルモ・ストーン」は、古代エジプトの初期王朝時代から古王国時代の王の事績を示した最古の年代記であり、エジプト史研究において極めて重要な史料である。この史料上にも、明確な「二柱のマアト」の記述や、近年の研究成果により「二柱のマアト」を意味することが明らかとなった文字が確認され、「二柱のマアト」の起源を考察するうえ重要な史料である。

上述の史料をはじめとする古王国時代の史料は、古期エジプト語（Old Egyptian）と呼ばれる言語で記述される[108]。古期エジプト語は、エジプト史において最も長く利用された中期エジプト語（Middle Egyptian）の前身にあたるが、史料数が限定されることから、文法や文字の綴り字法に不明瞭な点が多く残る。加えて、いずれの史料の内容にも、解釈の困難な点を多分に含まれることから、研究者によって解釈に相違の生じる箇所が多い。したがって、テキストの解釈を進めるにあたって、本章では先行研究の成果を吟味・整理し、文脈的・文法的な意味でより蓋然性の高い解釈を提示していく。なお、「二柱のマアト」を意味する語 *mꜣʿty* は、古期エジプト語においては *mꜣʿti* と表記される[109]点を踏まえ、本論においても古期エジプト語の史料に記された「二柱のマアト」の意味を示す語を *mꜣʿti* と表記する。

---

[108] 古代エジプトでは、時代の変化に伴い、古期エジプト語、中期エジプト語（Middle Egyptian）、後期（または新）エジプト語（Late Egyptian）、デモティック、コプティックの５種類の言語が使用された。古期エジプト語と中期エジプトは「前期エジプト語」（Eariler Egyptian）に、他の三言語は「後期エジプト語」（Later Egyptian）に分類される。各言語の特徴と利用された時代については、Junge 2001, 264-265; Borghouts 2010, 33-36; Allen 2014, 1-2; 吹田 2009, 1-2 を参照。

[109] *AäG* 1, 125-126.

第１節　「ピラミッド・テキスト」における「二柱のマアト」

第１項　「ピラミッド・テキスト」

最初期の「二柱のマアト」にふれる最も明確な記述は、「ピラミッド・テキスト」と呼ばれる史料に確認される[110]。「ピラミッド・テキスト」は、古王国第 5 王朝末期に成立した世界最古の葬祭文学である。その内容は、死せる王や王家の人物のための葬祭用の呪文であり、供物用の呪文、復活の呪文、魔除けの呪文などが含まれる。これまでに確認された呪文は 806 種に及び、長大なテキストを形成する。第 5 王朝のウニスのピラミッドに刻まれたテキストを最古のものとし、その後続く第 6 王朝のテティ、ペピ 1 世とその妻アンクエスエンペピ、メルエンラー、ペピ 2 世とその妻ネイト、イプート 2 世、ウジェベトニ、そして第 8 王朝のカカラー・イビの墓内にも確認される[111]。

「ピラミッド・テキスト」は、20 世紀初頭にゼーテが翻刻・編纂した *Die altägyptischen Pyramidentexte:*（*Pyr.*）[112]の公刊後、人類史における最古の葬祭文学として研究者の関心を大きく集め、その内容の理解を目指す研究が精力的になされた[113]。また、「コフィン・テキスト」や「アムドゥアト」、「死者の書」といった後の時代につづくの葬祭文学に先んずる葬祭文学であり、古代エジプト人の宗教研究に欠かせない史料となっている。しかしながら、呪文の内容に宗教的・神学的内容が多分に含まれることから、テキストの内容を厳密に理解することは難しく、各研究者により解釈が大きく異なる箇所や依然として不明瞭な点、最終的な結論に至っていない問題点を数多く残している。

一方で、近年では、アレンやヘイズを中心とし、「ピラミッド・テキスト」を呪文の種類・配列やテキストの言語学的特徴、呪文に対応する儀礼研究の視点から内容理解を目指す研究が精力的に蓄積され、「ピラミッド・テキスト」研究は再び大きく前進する時期を迎えている[114]。一次史料の点においても、アレンがこれまでに確認された「ピラミッド・テキスト」

---

[110] Grieshammer 1970, 90; Altenmüller 1975, 72; Seeber 1976, 140.
[111] Allen 2001, 95.
[112] Sethe *Pyr.* ゼーテは翻刻史料（*Pyr.*）の他に全 6 巻からなる全呪文の翻訳と解釈も出版しており、その後の研究に多大な影響を与えている（Sethe *Komm.*）。
[113] 代表的な研究には、Mercer 1954; Piankof 1968; Faulkner 1969a 1969b; Allen 2005; Carrier 2009 等が挙げられる。
[114] 例えば Hays 2006; Hays 2012; Allen 2017; Biling 2018 など。Allen は特に「ピラミッド・テキスト」の言語的学側面に着目した研究を継続し、古期エジプト語の文法研究においても多大な成果を残している（Allen 1984; 2017）。

の転字とそれらに対応するピラミッド内部の碑文の写真を再集成し、ゼーテの校訂史料の情報を補い、実史料に基づく精確な判読を可能とする史料を公開した[115]。

第２項　「ピラミッド・テキスト」におけるマアトの記述

筆者は、「ピラミッド・テキスト」の中から *mꜣʿt* に関する記述を 20 例確認した。そのうち、呪文第 249 番（*Pyr.* 265c）、第 260 番（*Pyr.* 319b, 323c）、第 440 番（*Pyr*. 815c）、第 519 番（*Pyr.* 1219a）、第 539 番（*Pyr.* 1306c）、第 566 番（*Pyr.* 1429c）第 573 番（*Pyr.* 1483c）、第 577 番（*Pyr.* 1520a）、第 585 番（*Pyr.* 1580）、第 625 番（*Pyr.* 1768b）、第 627 番（*Pyr.* 1774b, 1775b）、呪文第 758 番（*Pyr.* 2290b: 2 例）[116]の 15 例が単数形 *mꜣʿt* として記され、呪文第 260 番（*Pyr.* 317a, 317b）、呪文第 539 番（*Pyr*. 1315a）、呪文第 627 番（*Pyr.* 1785b）の 4 例が双数形 *mꜣʿti* で記述されている[117]。また、*mꜣʿti* の語はゼーテの「ピラミッド・テキスト」上に記載されていない第 8 王朝のカカラー・イビの埋葬室南面に残るテキストにも一点確認された[118]。アレンが指摘するように、カカラー・イビのテキストは、その他のものより時代の遡る王のテキストの持つ伝統とは異なる様相を示している[119]。しかし、*mꜣʿti* の記述を持つテキストがペピ一世やネイトの墓に刻まれた呪文第 627 番のバリエーションであると考えられることから、呪文第この事例も後期の「ピラミッド・テキスト」として本研究の対象とする[120]。

なお、単数形の *mꜣʿt* の記述については、双数形のマアトの内容を考察する本論文の目的から逸脱するため、各事例の出典となるテキストと部分訳、文脈からうかがえる特徴を表 2-1 に記載するに留めることとする。

---

115 Allen 2013.

116 ネイトの「ピラミッド・テキスト」にのみ確認される呪文である（Faulkner 1969b）。

117 *LGG* に示されるように、「ピラミッド・テキスト」の呪文第 673 番（*Pyr.* 1998a）にも *mꜣʿt* の記述が確認される（*LGG* 3, 224）。しかし、ここでの *mꜣʿt* は文脈上いずれも「導く」を意味する他動詞 *mꜣʿ* の能動分詞が名詞化されたものであると考えられる。したがって、本論文では、抽象概念や女神としての *mꜣʿt* あるいは *Mꜣʿt* の事例としては扱わない。

118 Jéquier 1935, Pl. XII, 631.

119 Allen 2005, 3. アレンをはじめとする多くの研究者は、この理由によりカカラー・イビのテキストの翻訳を行っていない。

120 実際にフォークナーは呪文第 627 番の翻訳に際して、欠落部分の多くをイビのテキストを用いて補足している（Faulkner 1969a, 260-261）。

表 2-1　「ピラミッド・テキスト」上の *mꜣʿt* に関連する事例
色のついた事例を本論文において検証する

	呪文番号	*Pyr.*	テキスト	記述内容(抜粋)	部分訳
1	249	265c	W	*ii.n W m iw nsrsr* *di.n.W mꜣʿt im.f m st isft*	Wは炎の島からやって来た。 Wはそこからマアトをイセフェトの場所に置いた。
2	260	317a	W	*iw wḏʿ.n W tfn ḥnʿ tfnt* *iw sḏm.n mꜣʿti*	W、「孤児」は、「孤児」 に対して訴訟を起こした。 *mꜣʿti* は聞いた。
3	260	317b	W	*iw Šw m mtrw* *iw wḏ.n mꜣʿti*	シューが証人である。*mꜣʿti* は命じた、
4	260	319b	W	*pr W ir(i) mꜣʿt int.f s(i) i(w).s ḫr.f*	W、マアトの守護者はそれ(マアト)をもたらすために出てゆく。その時それ(マアト)は彼とともにある。
5	260	323c	W	*pr W m hrw pn* *init.f mꜣʿt is ḫr.f*	Wはマアトをもたらすためにこの日に出てゆく、 その時それは彼とともにある。
6	440	815a	P/M/N	*Ḥr m ʿnḫt.f nt mꜣʿt*	自身のマアトの笏にいるホルスよ！
7	519	1219a	P/M/N	*di.k ḥmsi P pn n mꜣʿt*	汝がこのPをマアトに座らせんことを！
8	539	1306c	P	*ns n P m mꜣʿi ir mꜣʿt prii.f rf šwii.f rf ir pt*	このPの舌はマアトの船へ導くものである、 彼が前に出て、天へ昇るために
9	539	1315a	P	*ṯbwti M pn m mꜣʿti* *prii.f rf šwii.f rf ir pt*	このMの両足底 は、「*mꜣʿti* の船」である、 彼が前に出て、天へ昇るために。
10	566	1429c	P/(N)	*ḏʿi sw Ḏḥwty m-tp ʿnḏ.k Zkr is ḫnti mꜣʿt*	彼を汝の羽根の上へと運べ、トートよ、 マアトの船の前にいるソカルとして！
11	573	1483c	P/M/N	*ʿnḫiw m mꜣʿt*	マアトを食べて生きる者たち
12	577	1520a	P	*ḳꜣ nb mꜣʿt r tpi rnpt*	マアトの主は年の最初の日に高く上がった。
13	585	1580	P	*…mꜣʿt*	…マアト
14	625	1768b	N	*…N mꜣʿt*	Nはマアトを(?)…
15	627	1774b	(P)/N	*…mꜣʿt m-bꜣh Rʿ hrw pw n tpi rnpt*	…マアトを(？)この年の最初の日にラーの前に…
16	627	1775b	(P)/N	*pt m ḥtpw tꜣ m ꜣwt ib sḏm.n.sn dd N mꜣʿt m st isft*	Pがマアトをイセフェトの場に置くことを聞いた時、 天は平安の中にあり、大地は喜びの中にある。
17	627	1785b	(P)/N	*…sšm N Rʿ n mꜣʿti.f*	…Nはラーを彼の「*mꜣʿti* の船」へと導く。
18	627 var.(?)	L.631	I	*zbb Rʿ n mꜣʿti.f*	ラーを彼の「*mꜣʿti* の船」へ送る者
19, 20	758	2290b	Nt	*sḥwi n.k ir mꜣʿt n mꜣʿt ḏd(wt) n Nt*	Ntに言われしマアトのために(？)マアトに関する者(？)を集めよ！

第３項　「ピラミッド・テキスト」第 260 番

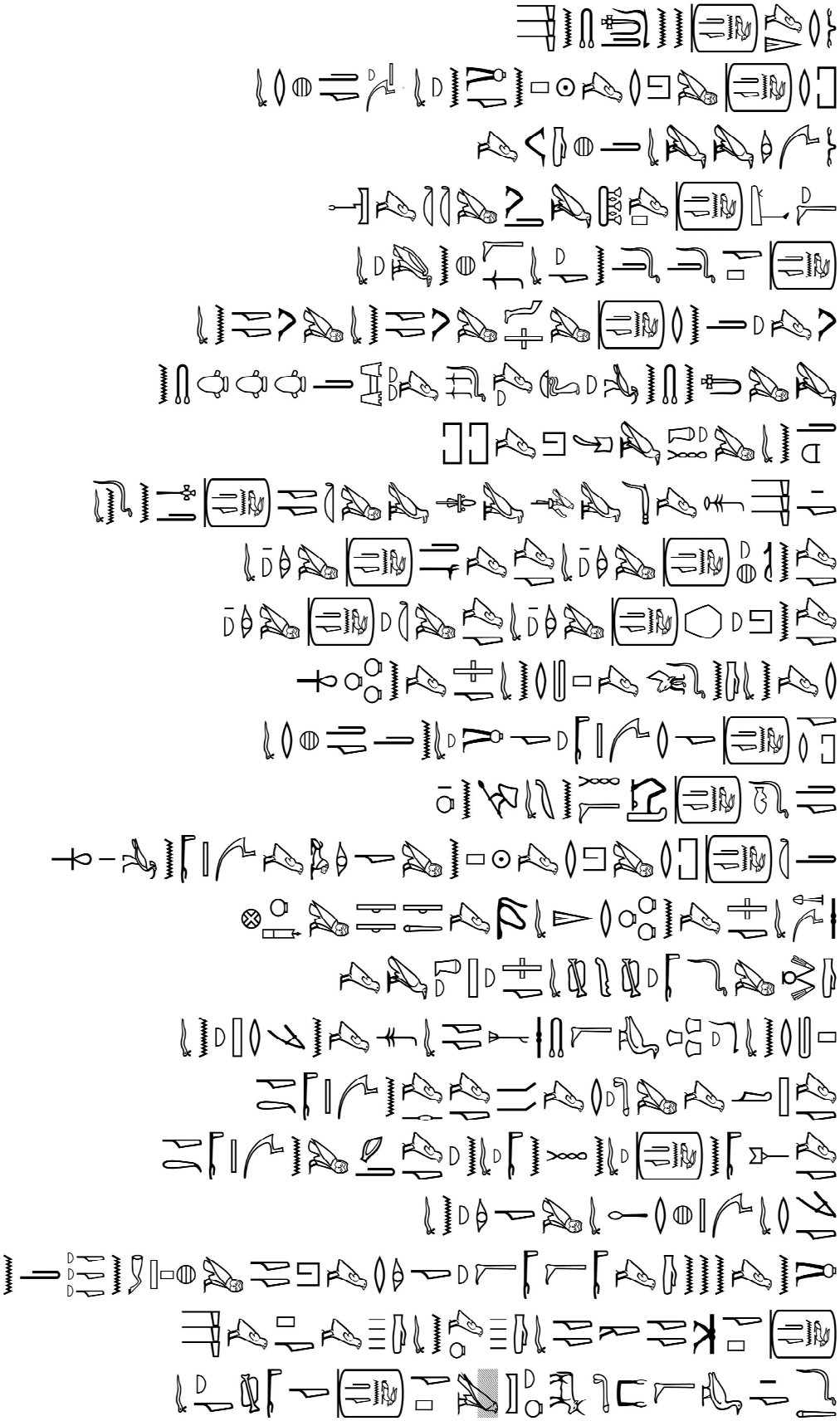
「ピラミッド・テキスト」呪文第 260 番は、同呪文内に *mꜣʿt* に関する記述を 4 例含む呪文であり、古代エジプトの「ピラミッド・テキスト」の呪文の中でも一層マアトとの強い関連を示している。特に *Pyr.* 317a, 317b はマアトを双数形 *mꜣʿti* で示しており、先行研究の多くがこの 2 例を「二柱のマアト」の初出としている[121]。呪文第 260 番は、古王国時代のマアトと「二柱のマアト」の研究に欠かせない呪文であり、呪文の内容理解を前提とした事例の検証が必要となる。本項では、呪文第 260 番の翻字と翻訳を示し、各節の内容理解を通して *Pyr.* 317a, 317b に記された「二柱のマアト」の内容を考察する。

ピラミッド・テキスト第 260 番は、ウニス王のピラミッドにのみに刻まれた呪文である。呪文全体の内容は前半部分（*Pyr.* 316 から *Pyr.* 320）と後半部分（*Pyr.* 321 から *Pyr.* 323）に分かれており、その内容に相違がみられる。前半の内容は、王がホルスとして王位の正当性を認められ復活するための呪文、後半の内容は、王がオシリスの化身として復活するための呪文である。

解釈にあたっては、ゼーテの校訂史料（*Pyr.* 316- *Pyr.* 323）と併せてアレンの新史料[122]を使用し、正確な文字の判読を行った。テキストの解釈および翻訳に際してはゼーテ[123]、フォークナー[124]、アレン[125]、カリエ[126]の資料を中心的な参考資料とし、テキストの文脈を踏まえ、意味・文法的により蓋然性の高い解釈を提示した。

---

[121] Bleeker 1929, 60; Hornung 1963b, 17; Grieshammer 1970, 90; Seeber 1976, 140.
[122] Allen 2013, PT 260.
[123] *Komm*. 1, 391-409.
[124] Faulkner 1969a, 69-70.
[125] Allen 2005, 46-47.
[126] Carrier 2009, 126-131.



[事例 1, 2]　Utterance 260 *Pyr.* 316-323

316

[a]　*ḏd-mdw i Gb kꜣ Nwt Ḥr pi W*[127]　*iwʿw it.f*

[b]　*W pi zbii*[128]　*iii fdnw n fdw ipw nṯrw*

[c]　*inw mw d*(*i*)(*w*)*w ʿbʿbt irrw hy m ḫpš n itw.sn*

[d]　*i.mr.f mꜣʿ-ḫrw.f m irt.n.f*

317

[a]　*iw wḏʿ n W tfn ḥnʿ tfnt iw sḏm.n mꜣʿti*

[b]　*iw Šw m mtrw iw wḏ.n mꜣʿti*

[c]　*pḫr n.f nswt Gb ṯzii.f sw n mrt.n.f*

318

[a]　*dmḏ ʿt.f imit štꜣw*

[b]　*zmꜣ.f imw nw rd*(*i*)*.f pfwi mdww m Ꜣwnw*

[c]　*sk W pr*(*w*) *m hrw pn m irw mꜣʿ n ꜣḫ ʿnḫ*

319

[a]　*i.sḏ W ʿḥꜣ bḥn.f ḫnnw*

[b]　*pri W ir*(*i*) *mꜣʿt int.f s*(*i*) *i*(*w*)*.s*[129]　*ḫr.f*

[c]　*rw n.f dnḏw pḫr n.f imw nw ʿnḫ*

320

[a]　*iw nht W m irt.f iw mkt W m irt* [*.f*][130]

[b]　*iw nḫt W m irt.f iw wsr W m irt.f*

321

[a]　*i. nṯrw rs*(*i*)*w mḥtiw imntiw iꜣbtiw mki W snḏ n.f*

[b]　*ḥms*(*i*)*.n.f m ḥtꜣ hwi*

[c]　*ꜣm n.ṯn ꜣḫt tw ḏnnwtt mḏd.s ibw.ṯn*

127　ウニス（Wnis）の略。

128　*zbii*、*iii*、*d*(*i*)(*w*)*w* を名詞化された完了能動分詞と解釈した。完了能動分詞の動詞形に関しては *AäG* 1, 303-305 を参照。

129　「ピラミッド・テキスト」では、しばしば不変化詞 *iw* と接尾代名詞の組み合わせでは *w* が省略される。*AäG* 2, 446-447.

130　同文中の *iw nht W m irt.f* に対応するものと判断し、接尾代名詞 *.f* を補足した。

322

[a] *iwt*(*i*).*sn r W imi-rd mi n.f mi n.f*

[b] *W pi ḏsḏs n it.f nḫb n mwt.f*

323

[a] *bwt W pw šꜣs m kkw*

[b] *n mꜣꜣ.f*[131] *sḫdw*

[c] *pr*(*i*) *W m hrw pn init.f mꜣʿt is ḫr.f*

[d] *n rd*(*i*)*w W n ns.ṯn nṯrw*

言葉を話すこと。おお、ゲブ、ヌートの雄牛よ！

ウニスはホルス、すなわち彼の父の後継者である。

ウニスは行った者であり、来た者であり、これらの４柱神の４番目の者である。

水を運び続ける者であり、浄化を与えた者であり、彼らの父の大腿部によって歓喜する者である。

彼は、彼が行うことによって正当化されることを望む。

ウニス、「孤児」は、「孤児」[132]に対して訴訟を起こした。*mꜣʿti* は聞いた。

シューが証人である。*mꜣʿti* は命じた、

ゲブの座が彼に戻らんことを、彼が自身を彼が望むことへ引き上げるために。

秘密の中にある彼の手足がつなぎ合わされんことを。

彼が、太古の水の中にいる者を一つにまとめんことを。

彼がヘリオポリスの事柄に終わりを置かんことを。

（なぜなら）彼は生きているアクの真の姿でこの日に外に出いったからである。

ウニスは争いを破壊し、邪魔者を切り離す。

---

[131] エーデルは *n mꜣꜣ.f* を状況文（Zustandssatz）であることを示す際に *mꜣꜣ.f* の形になると説明するが、アレンは、「コフィン・テキスト」の表現からエーデルの解釈を否定し、未来形（prospective form）であると説明している（*AäG* 2, 563; Allen, 1984, 230-231）。

[132] *tfn* の単数女性形で示される。湿気の女神であるテフヌートと同じ綴りであるため、同一の女神であるとする研究者もいるが、文脈上、明確な神としての名称を示さない *tfn* に対応するため、女性の孤児であると判断した。

ウニス、(すなわち) マアトの守護者[133]はそれ［マアト］[134]をもたらすために外に出る 。
（その時）それ［マアト］は、彼とともにある。
怒る者は彼のために立ち去り、太古の水の中にいる者は、彼に生命を譲渡するであろう。
ウニスの防衛［ネヘト］は彼の眼である。ウニスの魔法の保護［メケト］は（彼の）眼である。ウニスの力［ネケト］は彼の眼である。ウニスの力［ウセル］は彼の眼である。
おお、南の、北の、西の、東の神々よ！ウニスを守り、彼を恐れよ！
彼は２つの中庭の日除けに座った。
この有用なウラエウス、（すなわち）蛇が汝たちを焼き、それは汝たちの心を打ちつけるであろう。
ウニスのもとへ邪魔者として来んとする者たちよ。
彼のもとへ来い！彼のもとへ来い！
ウニスは彼の父の化身であり、彼の母のロータスの花である。
このウニスは暗闇の中を移動することを嫌悪する。
ウニスは逆さまの人間を見ないであろう。
ウニスはマアトをもたらすためにこの日に外に出る、
（その時）マアトは彼とともにある。
ウニスは汝らの炎に置かれないであろう、おお、神々よ！

この呪文は、ゲブへの呼びかけから始まる。ゲブは一般に大地の神として表現されるが、ここでは、王権と強い結びつきを持つ神として現れる。神話の中で、エジプトの最初の支配者となったのはゲブであり、その後、王座がオシリス、ホルスへと順に継承された[135]。。この前半の呪文は、死せる王であるウニスが持つ王権の正当性を主張し、復活を望むことが主な内容となっている。古代エジプトにおいて、王はホルスと同一視されていた。「彼の父」（*it. f*）はオシリスを指す。オシリスやホルスと王権の関係は、古代エジプトにおいて最も浸透していたヘリオポリスの神話として広く知られるものであった。

---

[133] *ir* に関してフォークナーは「守護者」と翻訳しているが、これはニスバ形容詞と考えることができ、「マアトについて属する者」が字義通りの訳となる。一方で、アレンは前置詞 *r* の完全形 *ir* と解釈している（Faulkner 1969a. 69; Allen 2005, 46）。
[134] 三人称単数女性形の従属代名詞 *si*、三人称単数女性形の接尾代名詞 *.s* が指す名詞は、*mꜣʿt* のみである。
[135] Allen 1988, 11。「コフィン・テキスト」呪文第 148 章では、ゲブが遺産として遺したエジプトを支配するのは、その孫であるホルスであるとイシスが述べる（*CT* 2, 212d-213b）。

mꜣʿti の記述を含む *Pyr.* 317a から *Pyr.* 317b は故王であるウニスをめぐる神々の裁判を描写するものであるが、この箇所には、不明瞭な単語や多義的に文法解釈できる箇所が複雑に入り組んでおり、研究者によっても翻訳や解釈の内容が異なる[136]。解釈の相違の主な論点は、次の二点に起因する。

Pyr. 317a *tfn* と *tfnt* の解釈

両語の意味が不明瞭であるため、文脈による判断と内容の理解が難しい。*tfn* を故王とする解釈がある一方で、別の存在とする解釈も提示されている。さらに動詞 *wḏʿ* が自動詞と他動詞の双方の意味で解釈され、他動詞として解釈した際には、呼応する目的語が欠落した不自然な文章であることから、受動文とする解釈も見受けられる。不明瞭な *tfn* に対して、*tfnt* については、*Tfnt* 女神であるとする解釈もあるが、*LGG* では、この文章に現れる *tfnt* は通常の *ṯfn*t とは異なる神として列記される[137]。

Pyr. 317b の解釈

が大気の神シューと「空である」という動詞の意味を併せ持ち、「証人」を意味する *mtrw* は と の両方の形で表記されるため、が前置詞 *m* か *mtrw* の一部かの判断ができない。そのためをシュー、を前置詞とし「シューが証人である」という副詞文とする解釈や、を動詞、を *mtrw* の一部とし、「証人はいない」とする解釈などが混在する状況にある。

以上の論点から、翻訳も同様に *ṯfn* が動詞 *wḏʿ* の動作主となるのか、動作の対象となるかの解釈が分岐し、結果として文章の構造自体も研究者によって異なることとなる[138]。

いずれの解釈においても、文章の内容の正確な把握は困難であるが、本稿ではゼーテやフォークナーの解釈を参考として拙訳を示した。筆者は *wḏʿ* を自動詞であると判断したが、

---

[136] *Komm.* 1, 391: “NN hat als kleines Waisenkind mit der Schwester gerechtet. Die beiden Wahrheiten haben verhört, es fehlte an einen Zeugen. Die beiden Wahrheiten haben befohlen,”; Piankoff 1988, 36: “Unas, a small orphan (tefen), went to law with the sister (Tefnet). The Two Truth judged, while Shu was a witness,” Faulkner 1969a, 69: “I the orphan have had judgement with the orphaness, the Two Truths have judged, though a witness was lacking.”; Allen 2005, 46: “For judgement between orphan and orphaness has been made for Unis. The Dual Maat heard (the case), Shu was a witness,”

[137] *LGG* によれば、本節の *ṯfn* 及び *tfnt* は、この史料の他には見受けられない（*LGG* 7, 405）。

[138] 不変化詞 *iw* に連なる *sḏm.n.f* 形、あるいは受動態 *sḏm.f*。

他動詞として解釈した場合においても、*Pyr.* 317b の「*mꜣʿti* は聞いた」も同様に目的語が記述されていない点から、意図的に目的語を示さなかった可能性も考えられる。

アルテンミュラーは、この記述を「二柱のマアト」の最初期の事例とし、「二柱のマアト」がシューとテフヌートと同一視されるとする解釈を示している[139]。しかし、前後の文脈からはこのような関係を確認することは難しい。先述した通り、テキストは故王と「孤児」(*tfn*)を同一視し、訴訟の相手として女性の「孤児」(*tfnt*)を示している。ここで、アルテンミュラーは、*tfn* と *tfnt* が代替されたシューとテフヌートの名称であると解釈しているが、仮にそのように解釈した場合においても、この *tfn* と *tfnt* はそれぞれ法廷で争う立場にあり、第三者として登場する「二柱のマアト」とは明らかに別の神格として示される。したがって、文脈上 *tfn* と *tfnt* には *mꜣʿti* との明確な相関関係は見受けられず、これらの語が偶然に *mꜣʿti* の語の近い場所で記述された可能性は排除できない。

さらに、ここでの *mꜣʿti* が具体的な二柱の女神が描写であるかという点に関しても、見解の相違が見受けられる。*Pyr.* 317b に着目すると、ここでは明らかに *mꜣʿti* は他動詞である *sḏm* や *wḏ* の主語として、「聞く」や「裁く」という動作の主体となっている。マアトは，正義や真実の概念、もしくはそれらを示す象徴として頻繁に用いられるが、このような行為を伴う独立した神格として描写されることは少ない。しかしながら、*Pyr.* 317a、 *Pyr.* 317b の *mꜣʿti* がいずれも動作の主語として登場する一方で、女神を示す限定符は付記されていない。おそらくこの点から、アレンは *mꜣʿti* を「死者の裁判に参加する神格の集合名詞」と新たに解釈を提示し[140]、グリースハマーやスミスも「２つの真実」との解釈を示し明言を避けている[141]。筆者も同様に、ここでの *mꜣʿti* から「二柱のマアト」の最初期の存在を断定することは困難ではあるものの、*mꜣʿti* が死者の裁判の場面において裁判の内容を聞き、裁定を下す神格として存在したと解釈する。

続く *Pyr.* 318a, b は、仮定法の *sḏm.f* 形として「命令する」（*wḏ*）の目的語節であると解釈した。いずれも、神話上の出来事と重ね合わせた表現である。「つなぎ合わされる」という表現は、セトによって分断されたオシリスの肉体がつなぎ合わせられ、復活することを指し、

---

[139] Altenmüller 1975, 71-72; “(Aufgrund dieser Gleischsetzung) warden die Paare “tfn” und “tfn.t”(Substitut für Schu und Tefnut) und die beiden Maats in Pyr. 317a parallel nebeneinander gennant.”

[140] Allen 2005, 435. アレンは双数形である理由が裁判員のいずれもが被告と原告両者のいずれかに属する点に起因すると考察している。

[141] Grieshammer 1970, 90; Smith 2017, 260.

「ヘリオポリスの事柄」は、おそらくホルスとセトの王位をめぐる争いを終わらせ、ホルスを正当な王権の後継者としたことを指すものと考えられる。これらの *mꜣʿti* による命令がなされる理由として、*Pyr.* 318c では、ウニスが生きた *ꜣḫ* として外に出たこと、すなわち故王の復活が示されている。

Pyr. 319 では、ウニスが単数形の *mꜣʿt* に関連して記述される。*Pyr.* 319b の「マアトの守護者」*iri mꜣʿt* は、王固有の形容辞の一つであると考えられるが、他の類例は確認されておらず、その詳細については不明である[142]。続く一文は、故王が死後の世界にいる際にも、復活する際にもマアトが王に付随することを示しており、マアトの現世と死後の世界の境界を移動する概念である性質[143]が読み取れる。

Pyr. 320 はウニスの眼が様々な力を備えていることが表現されている。これは、明らかに神話上の「ホルスの眼」[144]と重ねたものである。呪文の冒頭で述べられているように、王はホルスと同一視されていたため、ホルスと同等の力を持つと考えられていた。

前半部の内容がゲブに王座を認めることを求める呪文である一方で、呼びかけから始まる *Pyr.* 321 は、東西南北の神々に向けた呪文である。東西南北の神々は、*Pyr*. 321c にも如実に示されるように、ゲブのような王権の正当性を示す相手ではなく、故王に敵対するものとして現れている。ウラエウスは、王権の守護者の役割を持つ神聖な蛇であり、その蛇が神々を焼くと表現されている。

Pyr. 322 では、神々に対しての呼びかけと命令の後、再び故王であるウニスの説明がなされている。「彼の父」はオシリスを指し、ウニスがオシリスの化身（*ḏsḏs*）とされているように、ここではウニスがオシリスと同一視されている。オシリスは、復活、再生の神でもあり、ここでオシリスと故王を同一視させることで、*Pyr.* 323 の続く復活の言葉へと続く。

呪文の最後の部分でふたたび王の復活を意味する呪文がみられる。「ウニスはマアトをもたらすためにこの日に外に出る」という表現から、故王の復活がここでなされることがう

---

142 *iri mꜣʿt* をアレンがこの語を形容辞ではなく、前置詞として解釈する理由はこの点にあると考えられる（Allen 2005, 46）。少なくとも古王国時代の称号等では確認されていない（Jones 2000, 311-337）。

143 マアトの性質を示す同様の文章が中王国時代の「雄弁な農夫の物語」にも記述されている（序章第 3 節を参照）。

144 「ホルスの眼」は、しばしば神話に登場する神性な目であり、しばしば *wḏꜣt* として史料に記述される。神話のなかでホルスの目はセトによって奪われ、その後トートによって治癒された。このことから、ホルスの目は「治癒の目」としても信仰される（Quirke 2013, 595）。「ピラミッド・テキスト」では、神聖な目として記述される他、供物としても描写される（Meltzer 2001, 122）。

かがえる。「逆さまの人間」（*sḫdw*）は下界に居住する人間、「暗闇」は下界、マーサーによれば、ここでの表現は、神々に対して下界に留まることを警告するものである[145]。ここでみられるマアトも *Pyr.* 319b の事例と同様に、王が「もたらし」*int.f s*(*i*) 、「彼とともにある」*i*(*w*).*s ḫr.f* ことから、マアトの王の持つ神的属性としての側面が読み取れる。

「ピラミッド・テキスト」第 260 番の内容から、先行研究で論じられてきた最初期の「二柱のマアト」の事例を二例確認した。この二例は、故王がゲブの前で自身の王権の正当性を主張する呪文の前半部分に記述される。*mꜣʿti* の記述をもつ *Pyr.* 316 から *Pyr.* 317 の記述は多義的に解釈できることから、内容理解をめぐる研究者の見解は一致していない。しかしながら、*Pyr.* 317a の *iw sḏm.n mꜣʿti*、*Pyr.* 317b の *iw wḏ.n mꜣʿti* がそれぞれ *mꜣʿti* を主語とする *sḏm.n.f* 形であることが明らかであることから、*mꜣʿti* が自身で「聞く」や「命じる」といった動作を行う独立した神格であることが読み取れる。ただし、いずれの事例にも女神や神格であることを示す限定符が付加されていない点や、アレンの示唆[146]を考慮すると、この *mꜣʿti* が後世の「二柱のマアト」の祖型であると断定することできない。加えて、*Pyr.* 317a から *Pyr.* 317b の内容からは、アルテンミュラーが提示するような「*mꜣʿti*= *tfn*・*tfnt*= *Šw*・*Tfnt*」の関係は見受けられなかった。この文脈において裁判を司る *mꜣʿti* は、被告であるとされる *tfn*・*tfnt* とは明らかに異なる神的存在として描写されており、両者が同一であることを示す論拠は確認されない。この呪文の内容から読み取れる *mꜣʿt* の記述は、この神的存在が「二柱のマアト」である可能性を持つ唯一の古王国時代の事例であることのみが確かである。

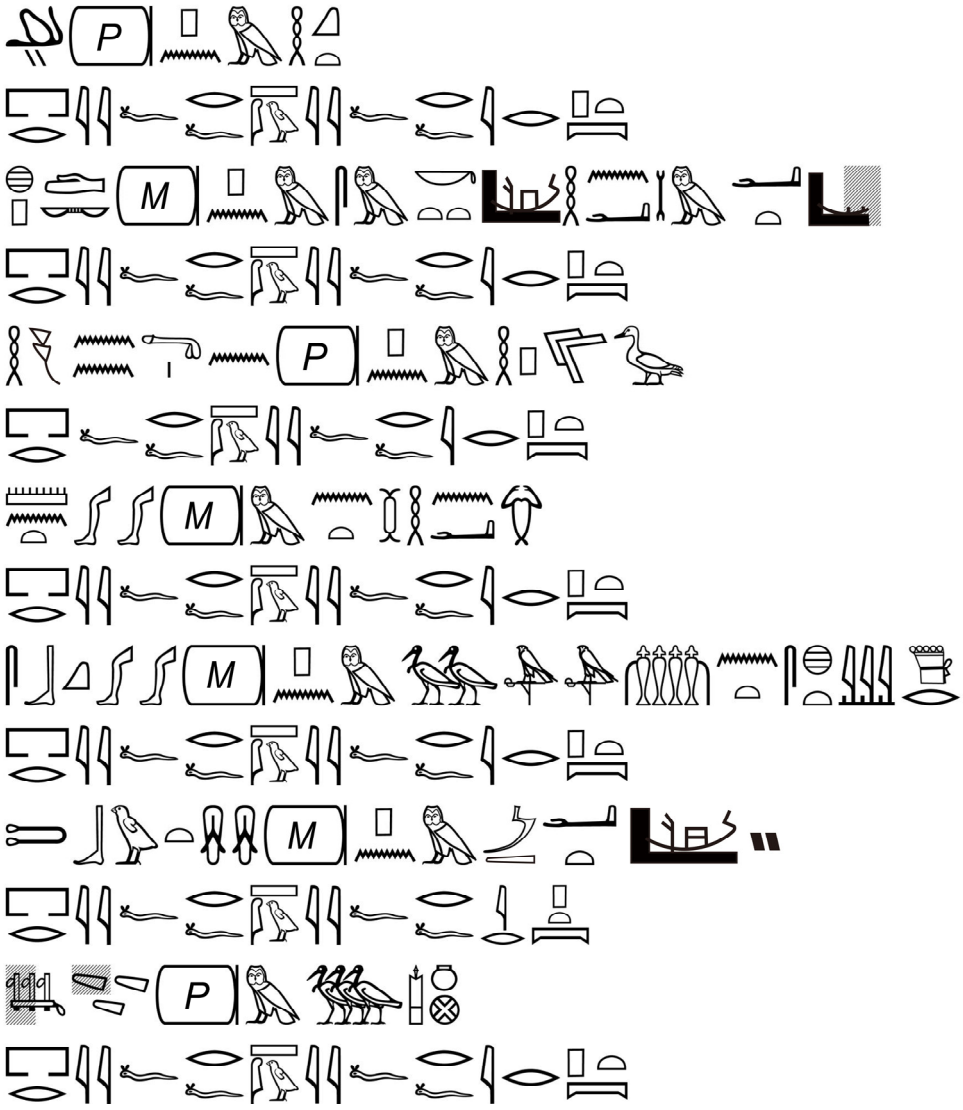
第４項　船として記述された「ピラミッド・テキスト」上の *mꜣʿti*

「ピラミッド・テキスト」のその他の *mꜣʿt* に関する記述のなかで、筆者は呪文第 260 番と同様に双数形で示された *mꜣʿt* の記述を呪文第 539 番、呪文第 627 番、そしてイビ王の「ピラミッド・テキスト」に発見した。しかし、これらの語は事例 1 や事例 2 にみたような *mꜣʿti* とはとは完全に異なる文脈で示され、いずれの事例も通常「二柱のマアト」の語に付記されるような女神の限定符とは異なる記号とともに記される。本項では、この三つの事例を史料の部分訳とともに検討していく。

---

145 Mercer 1952, 150.
146 Allen 2005, 435.

［事例 3］ *Pyr.* 1312c-1315d　Utterance 539



1312

[c] *pḥwi P*[147] *pn m Ḥkt*

[d] *prii.f rf šwii*[148]*.f rf ir pt*

1313

[a] *ḫpd M*[149] *pn m msktt ḥnˁ mˁnḏt*

---

147 ペピ一世（*Ppy*）の略。

148 「昇る」を意味する動詞であり、第三子音弱動詞に分類される（*Wb* 6, 431; Allen 1984, 573）。

149 メリラー（*Mri rˁ*: ペピ一世の即位名の一つ）の略。

[b]　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

[c]　*ḥnn n P pn m Ḥpy*

[d]　*pr*(*ii*)[150]*.f šwii.f rf. ir pr*

1314

[a]　*mnti M m Nit ḥnʿ Srḳt*

[b]　*prii.f rf šwii r.f ir pt*

[c]　*sbkwi M pn m bꜣwi ḫnt*(*iwi*) *sḫt ḏr*

[d]　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

1315

[a]　*ṯbti M pn m mꜣʿti*

[b]　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

[c]　*sꜣḥw P m bꜣw Ꜣwnw*

[d]　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

このＰの臀部はヘケトである、彼が前に出て、天へ昇るために。

このＰの臀部は夜の船(*msktt*)と日中の船(*mʿnḏt*)である、彼が前に出て、天へ昇るために。

このＰの陰茎はハピである[151]、彼が前に出て、天へ昇るために。

Ｍの両大腿部はネイトとセルケトである、彼が前に出て、天へ昇るために。

このＭの両下腿部は「果ての野」の前にいる二つのバー[152]である、彼が前に出て、天へ昇るために。

このＭの両足底[153]は、「*mꜣʿti* の船」である、彼が前に出て、天へ昇るために。

Ｐの足の指は、ヘリオポリスのバーたちである、彼が前に出て、天へ昇るために。

---

[150] *Pyr.* 1303a と *Pyr.* 1313d のみ動詞 *pr*(*i*)に *ii* が付記されていないが、いずれも文脈上は *sḏm.f* 形動詞文の仮定法として表記されるべきあり、*ii* を補足した。

[151] 𓅱𓅓𓅪をゼーテがハピ神と解釈するホルスの息子たちの一柱であるハピ神と解釈する一方で、フォークナーらは、陰茎との関係からホルスの息子たちの一柱であるハピではなく、雄牛の神であるアピス神を指すと指摘している(*Komm.* 5, 233; Faulkner 1969a, 209, n.10; Allen 2005, 170)。

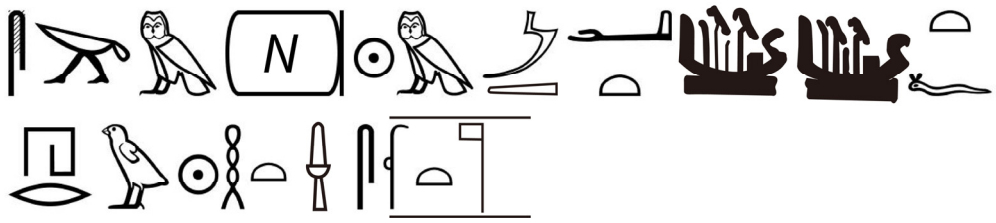
[152] 双数形で示された *sbkwi* に対応し、バーも双数形で示される。*sḫt ḏr* は、「イアルの野」（*sḫt iꜣr*）や「ヘテプの野」（*sḫt ḥtpw*）と同様に死後の世界の場所を指し示しているが、他の事例が少なく、詳細は不明である。

[153] 「サンダル」を意味する *ṯbt* とも解釈できるが、呪文は王の体の各部と種々の神性との同一視を示しているため、「足底」と解釈した。

Pyr. 1312- *Pyr.* 1315 を含む呪文第 539 番は、王が昇天するための呪文である。呪文は大別して故王の体の各部を神や神性と結びつける前半部分[154]と、故王がラーの息子として昇天する後半場面からなる[155]。マアトの記述は、*Pyr.* 1315a で故王の両足底（*ṯbti*）に対応し、船の決定詞と双数形を示す二本の斜線(𓏲)を伴い「マアト」もしくは「マアティ」[156]と呼ばれる二隻の船として表現される。故王の足底と同一視された *mꜣʿti* は、ここで王の死後の世界の移動の役割が想起される[157]。この語が船の決定詞を伴うことから、先述の「二柱のマアト」のような神格とは性格を異にすることがわかる。単数形のマアトは、太陽神の持つ船の名称としても用いられ[158]、この語も同様に、太陽神が航行するための船を指すと考えられる。「マアトの船」は同呪文内において既に言及されているが、この「二隻のマアトの船」を指すと考えられる *mꜣʿti* との関係を明示するものではない[159]。

また、断片的にではあるものの、別の *mꜣʿti* の船の記述が以下の「ピラミッド・テキスト」の呪文第 627 番から確認される。

［事例 4］ *Pyr.* 1785b-c



---

[154] 創造神であるアトゥムとの同一性を示す（Billing 2018, 465）。

[155] 呪文第 539 番から第 547 番までは、王墓の玄関部に置かれた像を神聖化するための儀式に関わる呪文とされる（Allen 2005, 205, n. 133）。

[156] 双数形語尾-*ti* が船の双数を示すことは明らかであるが、-*ti* の指す内容が双数であることに加えて、名称にも影響を及ぼし「二隻の *mꜣʿti* の船」と呼称されていた可能性も否定できない。この点に関しては他の事例と併せて第 4 章で検討する。

[157] ジャックも同様の解釈を示しているが、ビリングのように神性の特徴に対応する体の部位の特徴との類似性は重要とされていないと指摘する研究者もいる（Jacq 1986, 136.; Biling 2018, 466）。実際に同呪文において、故王の鼻とトート（*Pyr*. 1305c）、心臓とバステト（*Pyr*. 1310c）のように、明確な類似性を持たない組み合わせが多く散見される。しかしながら、その一方で、「コフィン・テキスト」の呪文第 334 章の *ṯbt Rʿ* と呼ばれる船（*CT* 6, 180u）のように、*ṯbt* と船の明確な関連を示す事例も確認される（Nyord 2009, 287）。

[158] *Wb* 2, 25.

[159] *Pyr*. 1306c- *Pyr.* 1306d: *ns n P m mꜣʿi ir mꜣʿt prii.f rf šwii.f rf ir pt*「この P の舌はマアトの船へ導くものである、彼が前に出て、天へ昇るために」.

1785

[b]　[160]…*sšm N Rˁ m mꜣˁti.f*

[c]　*hrw ḥts rnpt*

…N は、年を終える日[161]に彼(ラー)の「*mꜣˁti* の船」の中のラーを導く。

呪文 627 番の末尾のこの文章の *mꜣˁti* は、付記された限定符𓋴𓋴から、双数のマアトの船を意図していることは明らかである[162]。また、*mꜣˁti* に続く接尾代名詞の*.f* [163]は「二隻のマアトの船」が太陽神であるラーの所有物であることを示唆する。

船の決定詞を伴い描写される *mꜣˁti* の事例は少ないが、「マアトの船」は太陽神が天を航行するための船であることから、*mꜣˁti* の船、つまり「二隻のマアトの船」も同様に太陽神の航行に関係する船を指すと考えるのが妥当であろう。古代エジプト人は、太陽神が現世と下界の航行を周期的に繰り返すと信じ、太陽が昇り、沈むまでの動きを太陽神の昼の航行と捉え、日没から翌朝までは下界を航行していると認識していた。日中の太陽神の船は、*mˁnḏt* の船、夜間の船は *msktt* の船と呼ばれる。それゆえ *mꜣˁti* の船はそれぞれ *mˁnḏt* と *msktt* に相応すると考えることができる[164]。つまり、漠然とした太陽神の船であるマアトの船は、その性格から昼と夜の航行を個別に示す二隻に船と同一視され、それに伴い船の数も双数と変化したと考えられる。

最後に、イビのピラミッドに刻まれた「ピラミッド・テキスト」の一部に注目したい。*mꜣˁti* の記述を含むテキスト部分は、他の王のテキストからは確認されず、そのため先行研究においてその内容がほとんど検討されておらず、管見の及ぶ限りでは、カリエによる翻訳が示されるのみであった[165]。しかし、前接するテキストの一部が呪文第 627 番の記述と重なるた

---

[160] ペピとネフェルカーラーの 2 種のテキストのいずれも *Pyr.* 1785a の欠損が多く、前文との文脈が不明瞭である。

[161] 「(年を) 完結させる」を意味する動詞 *ḥts* に由来する (Hannig 2003, 912)。

[162] *Pyr.*上ではネフェルカーラーの文字しか確認できないが、アレンの新史料ではペピのテキストの断片も示されており、ここから少なくとも一隻の船の限定符が確認できる (Allen 2013, PT 627B)。

[163] *.f* の上部の *t* が示す内容は不明瞭である。女性単数形の指示代名詞の *ṯf* である可能性も考えられるが、*mꜣˁti* が双数形であることから、*mꜣˁt* の *t* の重複であると判断した。本来必要のない *t* を語に付記する事例は「ピラミッド・テキスト」の他の箇所にも散見される(*Pyr.* 1656b; *Pyr*. 1612a- *Pyr*. 1614a; *Pyr*. 1971, Anthes 1957, 85-86)。

[164] Altenmüller 1975, 71. この点については、第 5 章でも改めて考察する。

[165] Carrier 2010。カリエによる「ピラミッド・テキスト」研究の第 4 巻目であり、ペピ二世とイビのテキストの他、ネイト、ウジェベトニのテキストの内容も網羅し、後期の「ピラ

め、呪文第 627 番の異形ではないかと考えられる[166]。情報が断片的ではあるものの、呪文第 627 番の内容とカリエの研究を参照しつつ、本論文でもテキストの内容を読解したうえで *mꜣʿti* の内容を検討する。

［事例 5］ Jéquier, 1935 L.626 - L.632

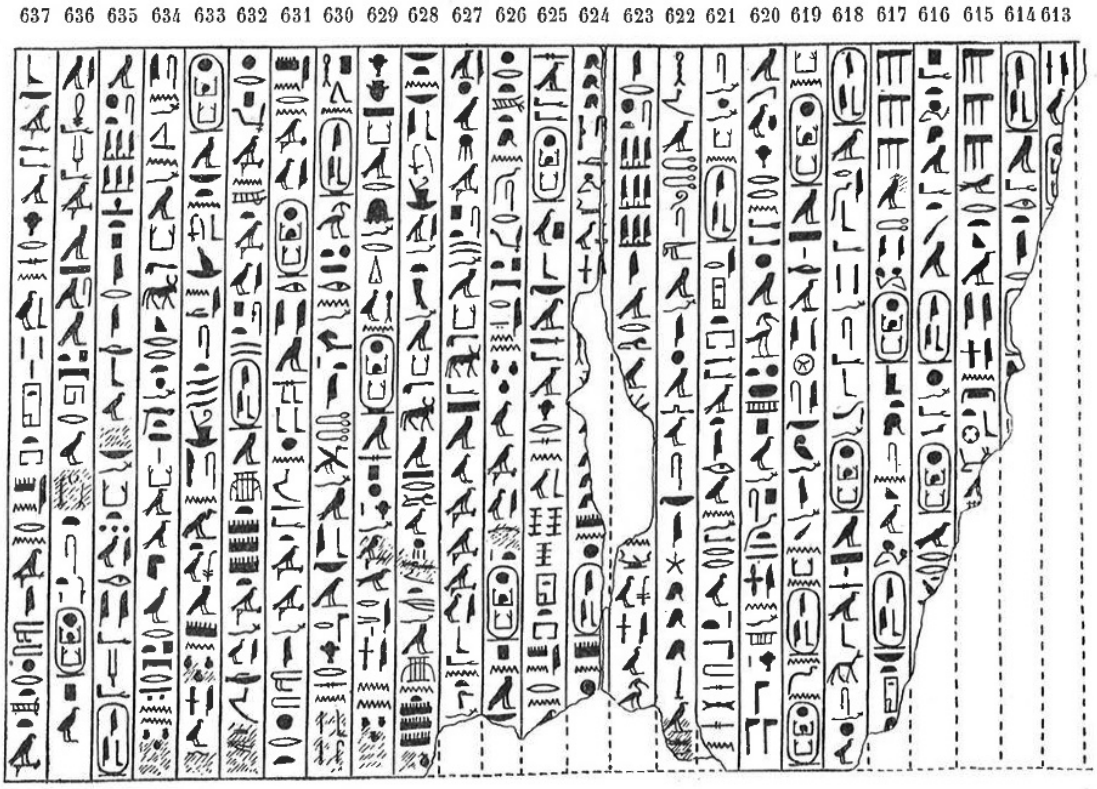


図 2-1 イビ王の「ピラミッド・テキスト」（Jéquier 1935, Pl .XII を一部改変）

[L.626][167] *iw irt.Ḳ*[168] *pn m* [*nb?*][169]

ミッド・テキスト」研究において欠かせない史料といえる。

[166] L.630-L.637 は埋葬室の南壁に刻まれたテキストの左端部分に刻まれており、前接する L.625-L.629 は *Pyr.* 1778-*Pyr.* 1780 と部分的に一致する（Jéquier, 1935, 17、Pl. XII）。

[167] L.626 上の *iw irt.f* から L.627 の *iꜣḫw* までをアレンはペピ一世、ペピ二世のテキスト上で欠落した Pyr. 1778c に相当する内容であると判断し、イビのテキストの翻訳を組み込んでいると考えられる（Allen 2005, 244-245）。

[168] カカラー（*Ḳꜣ kꜣ Rʿ*）の略。

[169] 欠損につき *nb* もしくは *k* の文字の一部を除いて判読できない。アレンは *nb* を補足し、カリエは *nbt* を補うことで、続く *iꜣḫw* と併せて「太陽の輝きの（女）主」と訳している (Allen 2005, 245; Carrier 2010, 2230-2231)。*nb iꜣḫw* と *nbt iꜣḫw* のその他の事例は、前者が中王国時代の史料を、後者が新王国時代の史料を初出としているため、この点においても特

[L.627]　*i3ḫw spti.f mk3 ꜥšmw*[170]　*iw bꜥnt.f* …[171]

[L.628]　*nbt nbi i3ft.f m k3 mšrw*[172]　*dm3t*[173]*.f ḫnti mnw*[*t*] [*.f*][174]

[L.629]　*ḥri ib k3.f*[175]　*rdi*(*w*) *ḥw*[176]　*n Ḳ m Zwnw ḥr.f wr*[177]　*ir*[178]*-gs imy nnw*

[L.630]　*pḥ. n Ỉ*[179]　*3ḫt iri.n.f ḥ3t itt.f*[180]　*m bik ntr*(*i*) *ḥr znb* (*ḥwt?*)[181]

[L.631]　*imn*(*w*) *rn.f*[182]　*iw Ḳ irii*[183]　*m zbb*[184]　*Rꜥ n m3ꜥti.f itt ḫrt*

[L.632]　*ḫrp*[185]　*n Ỉtm*

定は難しい（*LGG* 4, 572; *LGG* 5, 8）。

[170] または *ꜥḫmw*（*Wb* 1, 15-16; Hannig 2003, 289）。

[171] 縦に 1~2 文字程のスペースが欠落しているが、内容が合致する *Pyr.* 1779b（*iw bnt.f m nbt nbi*）では、接尾代名詞 *.f* と前置詞 *m* の間に文字は記されていない。

[172] *Pyr.* 1779c（*iw i3fwt.f m k3 m mšrw*）と類似。

[173] カリエは *dm3t.f m ḫnti mnw*[*t*] [*.f*]までを他のテキストで欠落する *Pyr.* 1780a であるとする（Carrier 2010, 2230-2231）。*dm3t* はオシリスの切断された遺体を指すと考えられるが、後の「コフィン・テキスト」には見受けられない（Hannig 2003, 1475; Hannig 2006a, 2872-2873, van der Plas and Borghouts 1998, 317-322）。

[174] 字義通りには「自身の大腿部の前にいる者」。*Pyr.* 804c 上ではホルスの形容辞として大腿部の決定詞とともに記述されるが、欠落部には *t* と *.f* の記号の記述のみであったと予想される。

[175] *ḫnti mnwt .f* と並ぶ形容辞であると考えられるが、詳細は不明である。字義通りには、「自身の祠の中央にいる者」。*ib*𓉐と *k3*𓊪の間に *š*𓋴のような記号が確認されるが、「池」*š* 読む場合、「自身の祠の池の中央にいる者」となり、より理解の難しい語となる。筆者はこの𓋴を *ḥri-ib* の決定詞であるとして仮訳を示す。アレンはこの部分を欠落した *Pyr.* 1780a に相当するとし、*ḥr-ib k3.f* を *ḫnti mnwt .f* の修飾するとして解釈している（Allen 2005, 245）。

[176] 受動文の *sdm*(*w*)*.f* として解釈した。*rdi* を用いた受動文 *sdm.f* は「ピラミッド・テキスト」に複数確認される（Allen 1984, 655）。

[177] ジャキエの図版上では *Zpnw*𓍿と記述されているが、類似する *Pyr.* 1780b の記述から *Zwnw* の異形と解釈した（Jéquier, 1935, Pl. XII）。

[178] 前置詞 *r* の完全形（*AäG* 2, 391-392）。

[179] イビ（*Ỉbi*）の略。

[180] 𓇋𓏏𓅱𓈖は読解の極めて困難な箇所である。𓇋は *sdm.n.f* もしくは能動完了分詞であると考えられるが、続く𓏏𓅱𓈖の意味が不明瞭である。カリエの翻訳によれば *ḥ3t itt* で「墓」を意味するが、墓に該当する語は *ḥ3t itt* では表されない（Carrier 2010, 2230-2231）。*itt* に三人称男性単数の接尾代名詞 *.f* が付記されるため *itt* は *sdm.f* 形の動詞、もしくは名詞であることが想定される。しかしながら、畳音する第三子音弱動詞の *iti* は𓈖の決定詞は付記されず、目的語も記されていない。カリエのように何らかの名詞であるとする解釈が妥当であるが、意味の特定が現時点では困難である。筆者は前接する *ḥ3t* と併せて「イチェチの前面」と仮訳した。

[181] *Pyr.* 1788a の類似表現から推定した。*Pyr.* 1788a では複数形 *znbw* で示されるが、欠損部の幅から単数形で記述されたと考えられる。

[182] 三人称単数男性の接尾代名詞 *.f* は通例的に表記されない（Hannig 2003, 1584）。

[183] 完了能動分詞として解釈した。

[184] 第三子音弱動詞 *zbi* の未完了能動分詞として解釈した。続く *itt* も同様。

[185] *itt ḫrt ḫrp n Ỉtm* に関しては類似する *Pyr.* 1778b の内容を参考に仮訳を提示したが、「管理する者」(*ḫrp*)の意味など不明瞭な箇所が残る。

この Ḳ の眼は、太陽の輝きの主（？）である。彼の両唇は聖なる像の雄牛である。彼の首元は炎の女主人である。彼のかぎ爪は夕方の雄牛である。彼の切り離された肢体はケンティメヌウトエフ、自身の祠の中央にいる者である。威令は Ḳ のために与えられた、太古の水の中にいる者のそばで、スウヌウヘルエフウとして。
Ｉは地平線へと到達した、彼がその名の隠された者の城壁（？）の上にいる神の隼としてイチェチの前面（？）を作った時に。Ḳ はラーを彼の「*mꜣʿti* の船」へ送る者、管理する者の所有物をアトゥムのために持ち去る者を演じた者である。

呪文第 627 番の異形として刻まれたこのテキストは、故王の昇天を物語るものであることが読みとれる。翻訳部分では、故王は神話上のホルスとオシリスとに重ね合わされ、その神聖さが語られる[186]。その後、故王の神聖な隼としての地平線への到達、すなわち故王の復活が述べられ、続いて *mꜣʿti* の記述を含む「ラーを彼の *mꜣʿti* の船へと送る者」（*zbb Rʿ n mꜣʿti.f*）が故王の形容辞として登場する。*mꜣʿti* の記述は従来の表音文字との組み合わせに神性の限定符として用いられる台座の上に乗るホルスの隼の記号（G7: 𓅱）[187]が 2 つ並んで付記されている。事例 4 に既に見受けられるように、同一の限定符を 2 つ並べて記載する双数形の表記法は、古期エジプト語では一般的である。二隻の船ではなく、より抽象的な意味を持つ限定符を持つことから、この事例における *mꜣʿti* が二隻の船を示していると断定することはできない。しかし、事例 4 と同様にこの語に付記された三人称単数男性の接尾代名詞 *f* は、この語が「二柱のマアト」のような独立した神格ではなく、太陽神の所有する何らかの神的な事物の名称であることを示している。また、このイビのテキストが呪文第 627 番の異形でありながら、事例 4 で示した呪文末尾の「二隻のマアトの船」（*Pyr.* 1785b）の文章を含まないことから、ここで示された *mꜣʿti* もまた、太陽神の船であると考えるのが妥当であろう。この故王の形容辞としての「ラーを彼の『二隻のマアトの船』へ送る者」と類似した死者への形容辞は、後の時代の葬祭文学である『コフィン・テキスト』にも見受けられる[188]。

---

[186] ホルスの体の部位として語られる「K の眼」（L.626: *irt* Ḳ）や「彼のかぎづめ」（L.628: *iꜣft.f*）に加えて「彼の切り離された肢体」（L.628: *dmꜣt.f*）は神話上のオシリスの遺体を暗示する。
[187] 本来は古王国時代にホルスの限定符として用いられていた記号であり、古王国時代以降には神々の古風な表記を示す限定符として使用される（Gardiner 1957, 468）。この記号は、イビのテキストでも神性の限定符として頻繁に記述されており、翻訳部分では[*nb?*] *iꜣḫw*、*kꜣ ʿšmw*、*imn*(*w*) *rn.f* 、*imn*(*w*) *rn.f*、*bik nṯr*(*i*)、*iṯṯ ḥrt ḥrp*、*Ꜣtm* に付記されている。
[188] *CT* 6, 312o では死者が「ラーを彼の『二隻のマアトの船』へ昇らせる者」（*sʿr Rʿ n mꜣʿty.f*）という形容辞で表現される。詳細については、第 3 章の事例 20 で議論する。

ここまで、「二柱のマアト」の最初期の記述の内容を検証するため「ピラミッド・テキスト」に注目し、*mꜣʿti* の記述を含む事例を 5 例確認し、各事例を含む呪文の全文訳および部分訳とその解釈を踏まえて、個々の事例の内容を検証した。事例 1、事例 2 で示した先行研究で最初期の「二柱のマアト」と認識されてきた呪文第 260 番上の 2 つの *mꜣʿti* の記述は、「聞く」や「命じる」といった動作の主語を担うことから、神格として描写されていると考えられる。しかしながら、前後の文脈の解釈が多義的にとれることや、*mꜣʿti* に女神や神格であることを示す限定符が記されていないことから、これらの事例が二柱の姿をとるマアト女神の最初期の事例であると断定することはできない。その一方で、同じ *mꜣʿti* と記述された事例が呪文第 260 番の他に 2 例確認された。事例 3、事例 4 として検証したこれらの二例では、*mꜣʿti* の語が 1 隻もしくは 2 隻の船の限定符を伴い、何らかの神聖な船として利用されていることを明示している。特に事例 4 では、2 隻の船とともに *mꜣʿt* の語が記述され、それに太陽神を指す代名詞が付記されていることから、*mꜣʿti* が太陽神の船として「ピラミッド・テキスト」上で描写されていることがわかる。最後に読解を試みたイビ王の「ピラミッド・テキスト」（事例 5）においても、その内容に不明瞭な点が残るものの、太陽神の船と考察される *mꜣʿti* の事例を確認した。この事例では、*mꜣʿt* の語に神格や神性を示す台上の隼の限定符が 2 つ並んで付記されるが、「二隻のマアトの船」が太陽神の持つ神性な船であることを考慮すれば、この限定符が使用されている点にも齟齬は生じない。この *mꜣʿti* の船としての側面は、「ピラミッド・テキスト」の他に、所謂「パレルモ・ストーン」上の碑文にも確認される。次節では、この「パレルモ・ストーン」上の *mꜣʿti* の記述の内容とテキストの解釈をめぐる議論を踏まえ、古王国時代の *mꜣʿti* の内容の検討を進めていく。

第２節　「パレルモ・ストーン」における「二柱のマアト」

本節では、古代エジプトの「パレルモ・ストーン」に記述された *mꜣʿti* の事例に注目し、この語の指す意味を考察する。この史料には、一例の明白な *mꜣʿti* に加えて、*mꜣʿti* の起源に関わると考えられる特殊な記述が 4 例見受けられた。「パレルモ・ストーン」上の *mꜣʿti* の考察に先立って、古代エジプト史の研究において最も重要な歴史史料の一つである「パレルモ・ストーン」の特徴について触れておきたい。この碑文史料は、本論文で中心的に取り扱う古代エジプトの葬祭文学とは性格を異にするためである。

「パレルモ・ストーン」[189]とは、パレルモ考古学博物館に所蔵されるエジプト初期王朝時代の第 1 王朝から古王国時代第 5 王朝初期までの王の事績を記した玄武岩製の石碑資料である（図 2-2）。高さ 45 ㎝、横幅 25 ㎝、厚さ 5.1~6.5cm の盾の形に似た石板でありその両面に各王の治世下における祭祀や徴税、彫像・建築物の作成、戦争といった様々な種類の出来事が刻まれている。発見の詳細な経緯については定かではないが、1859 年頃にイタリア人のフェルディアノ・ガウディアーノ（もしくはその父親）によって入手された。そして、その後にパレルモ考古学博物館に寄贈され、情報が公開されることで、古代エジプトの史料として注目を集めることとなった[190]。その後、同種のテキストの内容を示す石碑の断片に「パレルモ・ストーン」の年代記の内容と合致が見受けられることが確認された。現在では「カイロ・フラグメント」（Cairo Fragment）と呼ばれるカイロ博物館所蔵の 5 点の断片[191]とロンドンのピートリー博物館所蔵の一点の断片（London Fragment）[192]の計 6 点の史料が「パレルモ・ストーン」と同一の内容を示す史料であることが確認されている[193]。この年代記は、古代エジプト史において不明瞭な点の多く残る初期王朝時代の歴史をうかがうための希少な史料であり、マネトーンの「アイギュプティアカ」（*Αἰγυπτιακά*）や所謂「トリノ王名表」（Turin King List）と並んで古代エジプトの年代史研究の最も重要な史料の一つに位置づけられている。

---

189 1028, Palermo Museo archeologico.

190 ウィルキンソンによれば、博物館へ寄贈されたのは 1877 年であるが、ショーは史料の存在が 1866 年には知られていると述べている（Wilkinson 2001, 20; Shaw 2000, 4.）

191 CF1, JE 44859; CF2, JE 39735, CF3, JE 39734; CF4, JE 39734; CF5, JE 44860.

192 UC 15508.

193 これらの史料を総称して「王家の年代記」と称する研究者も多いが、本論文では「パレルモ・ストーン」に刻まれた年代記を中心に取り扱うため、「パレルモ・ストーン」と呼称する。

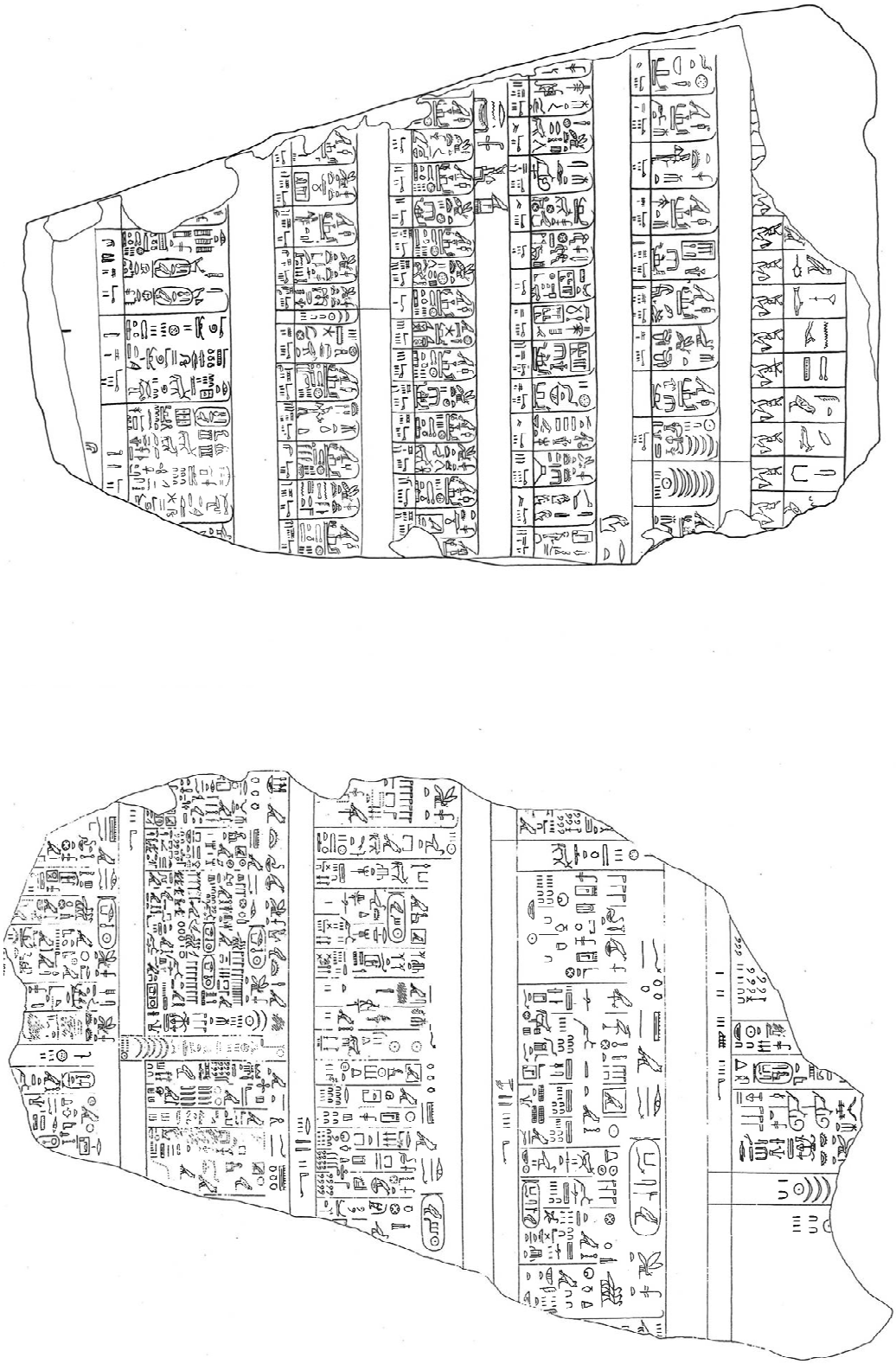


図 2-2　「パレルモ・ストーン」の表面（図左）と裏面（右）
Wilkinson 2001, Fig. 1, Fig. 3 を一部改変

「パレルモ・ストーン」は両面ともに各王の事績を上段から順に列挙する碑文の形をとり、史料の表面に初期の王の事績、裏面に後期の王の事績が記されている。表面の最上段のみその他の段の形式と異なり、先王朝時代の下エジプトの支配者の名前と思われる記述を列挙している[194]。表面の上から数えて二段目に第 1 王朝のアハ（*ꜥḥ3*）もしくはジェル（*Ḏr*）の事績、三段目にデン（*Dn*）、四段目に第 2 王朝のニネチェル（*N(y)-nṯr*）、五段目にカセケムイ（*Ḫꜥ sḫmwy*）もしくはネチェリケト（*Nṯri-ḥt*）、六段目にスネフェル（*Snfr w(i)*）の治世における出来事がそれぞれ刻まれている。裏面の最上段には、第 4 王朝のメンカウラー（*Mn k3w Rꜥ*）とシェプエセスカフ（*Špss k3.f*）の祭祀、二段目に第 5 王朝のウセルカフ(*Wsr k3.f*)、三段目にサフラー（*Sꜥḥ w(i) Rꜥ*）、四段目にサフラーの出来事の続きとネフェルイルカーラー（*Nfr ir k3 Rꜥ*）、そして最下段（五段目）にも同様にネフェルイルカーラーの治世下の出来事がそれぞれ刻まれている。

しかしながら、「パレルモ・ストーン」の情報が断片的であることや、祭祀の名称が神話的に表現され、かつ限られた枠内に略記されること等から、依然として不明瞭な点を多く残している。とりわけ初期の王の治世下の祭祀の内容には不明瞭な点が多く、19 世紀における発見後から、現在にいたるまで「パレルモ・ストーン」の解釈をめぐる議論は後を絶たない[195]。加えて、「パレルモ・ストーン」を含む年代記の制作年代についても、議論が分かれている。ウセルカフやネフェルイルカーラーといった実在した第 5 王朝の王の事績までが記載されていることから、制作時期を第 5 王朝の前半と考えることができるが、それより後の時代に制作されたという見解も提示されている。また、一度に全ての出来事がまとめて記載されたのか、あるいは各時代に付記されたのかという点も明らかではない[196]。しかしながら、ウィルキンソンは、「パレルモ・ストーン」を少なくともオリジナルの史料は初期王朝時代の正確な王名を記したものであるとし、この史料上の最後に記された第 5 王朝に近い時期に史料が制作されたと考えるのが妥当であるとしている[197]。

---

194 これらの記述については、Wilkinson 2001, 85 を参照。

195 「パレルモ・ストーン」の研究史については、ウィルキンソンが 1 世紀を超える膨大な研究史を整理している（Wilkinson 2001, 28-81）。

196 第 4 王朝に表面の碑文が彫られた後、第 5 王朝のネフェルイルカーラーの治世化で裏面が完成されたという見解や、所謂「シャバカ・ストーン」との類似性から、第 25 王朝に複写された石碑であるとする解釈が提示されている（Wilkinson 2001, 23-24）。

197 Wilkinson 2001, 24.

「パレルモ・ストーン」に記された出来事の多くが極めて神話的な仄めかしを含む語で説明される点や、先述の制作年代の点などを鑑みると、この史料を安易に初期王朝時代の歴史の正確な情報を提供する信頼できる歴史資料として取り扱うことはできない。その一方で、この史料の内容は、オリジナルの碑文を作成したエジプト古王国時代の支配者層が抱く歴史観を反映したものであり、この点において「パレルモ・ストーン」は古代エジプトの年代史ではなく、文化史の研究史料として依然として重要な史料であると考える。したがって、本論文においても、この「パレルモ・ストーン」に記されたテキストの内容をエジプト古王国時代の支配者層が記した過去（古王国時代以前）を示す史料として考察を進めたい。

まず、「パレルモ・ストーン」の裏面に記された一点の *mꜣʿti* の記述に注目する。この記述は、「パレルモ・ストーン」の裏面 5 段目（図 2-3）のネフェルイルカーラー治世下の事績の中央部分に記される。

[事例 6]　*PS* v. V. 2[198]

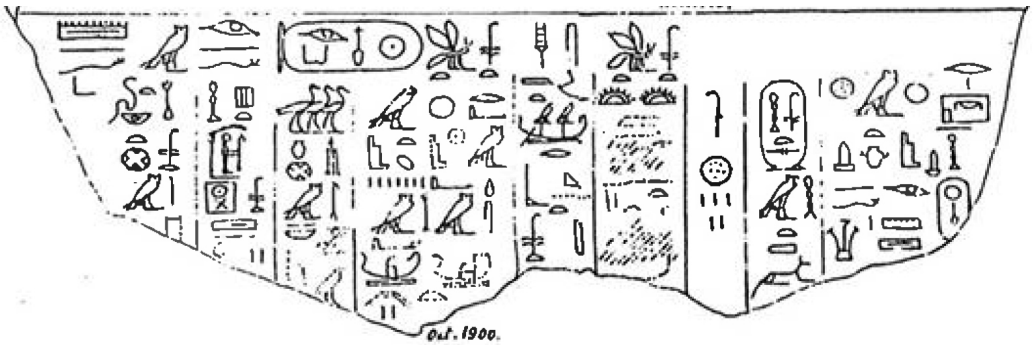


図 2-3　「パレルモ・ストーン」　裏面５段目
Wilkinson 2001, Fig. 3 を一部改変

ḫʿ(*t*) *nswt ḫʿ*(*t*) *bit*…

sʿḥ mꜣʿti r ḳnbt rs[199]

nsw-bit Nfr-ir-kꜣ-Rʿ ir.n.f m mnw.f [*n*][200]

198　史料の表記は Wilkinson 2001 にしたがう。
199　*rsw* の右側の文字については不明である。
200　*n.f* と表記されるが、おそらく *n* は *mn* の一部であり *f* に続くべき与格の *n* は省略されている。

Rᶜ Ḥr(*?*)[201] *m st* (*ib*) *Rᶜ ḥmt*(*?*)[202]

mḥ 8 msktt mᶜnḏt…

上エジプト王の現れ。下エジプト王の現れ。

「二隻のマアトの船」の……南の角での建立。

上下エジプト王、ネフェルイルカーラー、彼は彼の遺産としてラー・ホルス（？）に「ラーの心臓の座」[203]で…8 キュビト[204]の *msktt* の船、*mᶜnḏt* の船……を与えた。

ネフェルイルカーラーの治世下の「上下エジプト王の現れ」[205]に続いて、ここでは *mꜣᶜt* の記述に二羽の隼を載せた船の決定詞が付加された文字が記されている。この決定詞が、一羽の隼ではなく二羽の隼が乗船する船の限定符を伴う点に加えて、前述の「ピラミッド・テキスト」の「二隻のマアトの船」の限定符と類似する点から、付記された船の数は一隻であるものの、この語が *mꜣᶜt* の双数形の *mꜣᶜti* として記述されている考えるべきであろう[206]。この事例から、遅くとも第 5 王朝には *mꜣᶜti* と呼ばれる船が存在し、それが王に関わる太陽神殿での祭祀に用いられていたことがわかる。実際に、アブ・グラーブにある第 5 王朝のニウセルラーの太陽神殿の南方で船の模型が発掘されたことから、この *mꜣᶜti* の船も太陽の船の名称として使用されている可能性がある[207]。また、続く 8 キュビトの *mᶜnḏt* の船と *msktt* の船の模型の奉納が *mꜣᶜti* の船の直後に記述される点も興味深い。*mᶜnḏt* の船、*msktt* の船はそれぞれ太陽神が日中と夜に航行を進める際に乗船する船として頻繁に葬祭文学に登場する。

さらに興味深いことに、「パレルモ・ストーン」の表面には、初期王朝時代の王の治世化の出来事に *mꜣᶜti* の存在を示唆する祭儀が 4 例確認される（図 2-4）。

---

201 𓅓𓂋𓄿と記述されるため、*Rᶜ-Ḥr*、「ラー・ホルス」と読まれるべきであるが、ラー・ホルスは、新王国時代以降の史資料に現れる神であるため、他の語を示す可能性が残る（*LGG* 4, 629）。ウィルキンソンはラーとホルスの習合であると認め、後の時代に現れるラー・ホルアクティの前身であると推察する（Wilkinson 2001, 179-180）。

202 ウィルキンソンは *ḥmt* 解釈をと解釈するが、「銅」を意味する *ḥmt* は通常𓎛𓏏𓏏と記述され、史料上の記述と大きく異なる(Wilkinson 2001, 179; *Wb* 3, 99, Hannig 2003, 837)。そのため、この解釈は文脈的には整合性が高い解釈ではあるものの、断定はできない。

203 ネフェルイルカーラーの太陽神殿の名称（Hannig 2003,1570）。

204 古代エジプトの長さの単位（腕尺）。1 キュビトあたり 52.4 cm。

205 王の戴冠に関連する祭事であるが、厳密に王の戴冠時になされるものではなく、王の治世のいずれかの時期にとり行われる（Wilkinson 1999, 210-212）。

206 クラゲットは”the Wall of the Sun-Bark”と訳すが、壁を示す記号は見受けられず、解釈の根拠も不明である（Clagett 1989, 95）。

207 Shaw and Nicholson 1995, 10; Wilkinson 2001, 179.

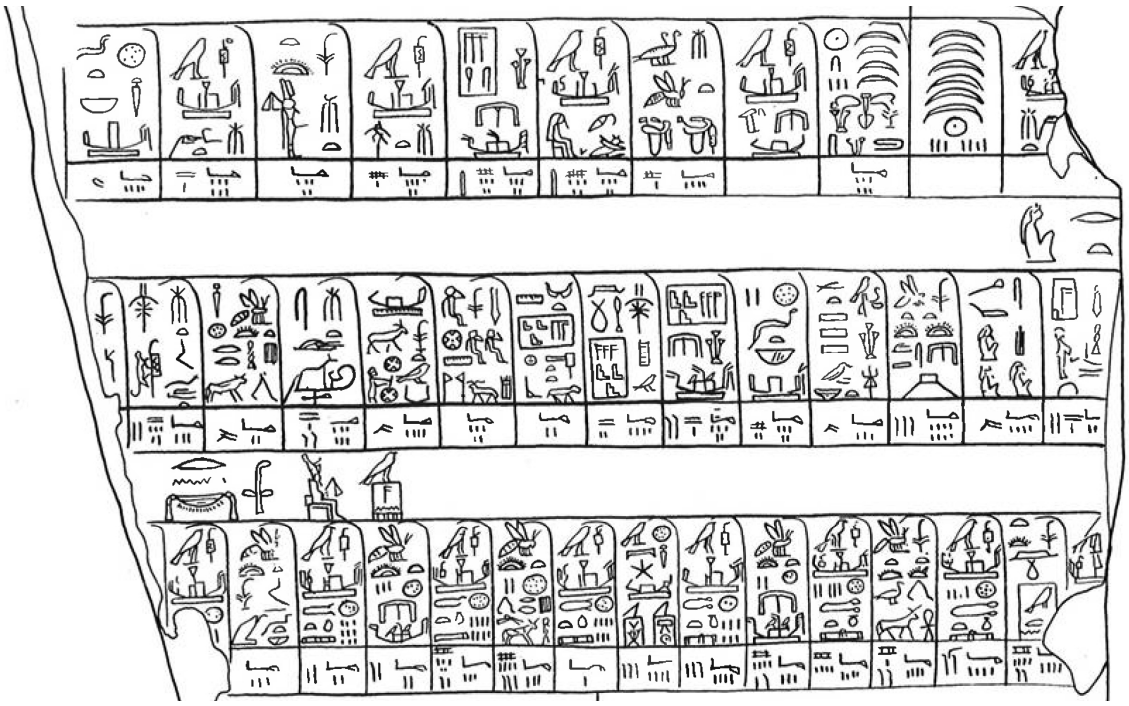


図 2-4　「パレルモ・ストーン」　表面２～４段目
Wilkinson 2001, Fig.1 を一部改変

[事例 7]　*PS* r. II. 7[208]

ḥ3[209] *smr-nṯrw ḥb m3ʿti*(*?*)

mḥ 5 šsp 5 ḏbʿ

「神々の仲間」の(建造の)計画(?)、*m3ʿti* の祭

5 キュビト、5 シェセプ、1 ジェバ[210]

---

[208] 第 1 王朝、ジェル王の治世第 5 年目の出来事。

[209] *ḥ3* は「～の周囲で」等を意味する前置詞として使用されるが、パレルモ・ストーンにおいては「～の（建造）の計画」という動詞的な意味に基づく解釈がなされる（*Wb* 3, 8）。しかし、ガバラとキッチンは、この意味での使用例が極端に少ない点や、パレルモ・ストーン上に同じ対象の「（建造）の計画」が重複して記載されるという文脈的矛盾から、*ḥ3* は動詞的な意味を持たず、「動き回る」を意味する *pḫr* が省略され、「～の周囲で」を意味する *ḥ3* のみ記述されていると判断している（Gaballa and Kitchen 1969, 15）。同様の点から、クラゲットも *h3* を前置詞とする解釈を支持し、“the Festival of Sokar [celebrated] behind the Castle [called] ‘Companion of the Gods’”と訳している（Clagett 1989, 69, 114）。ウィルキンソンは *h3* を「計画」と解釈する点に矛盾を認めながらも、新たな解釈にも文脈上の矛盾がある点を指摘し、従来の解釈を支持している（Wilkinson 2001, 112）。

[210] シェセプは 1/7 キュビト、ジェバは 1/28 キュビトに相当する。

[事例 8]　*PS* r. III. 6[211]

hꜣ swt-nṯrw ḥb mꜣʿti(*?*)

mḥ 5 sšp 1 ḏbʿwi

「神々の玉座」の(建造の)計画(?)、*mꜣʿti* の祭

5 キュビト、1 シェセプ、2 ジェバ

[事例 9]　*PS* r. IV. 6[212]

ḫʿ(*t*)*-biti zp 2 ḥb mꜣʿti*(*?*)

mḥ 3 šsp 4 ḏbʿwi

下エジプト王の現れ、*mꜣʿti* の祭の二度目

3 キュビト、4 シェセプ、2 ジェバ

[事例 10]　*PS* r. IV 12[213]

ḫʿ(*t*)*-biti zp 3 ḥb mꜣʿti*(*?*)

mḥ 2 ḏbʿwi

下エジプト王の現れ、*mꜣʿti*(*?*)の祭の三度目

2 キュビト、2 ジェバ

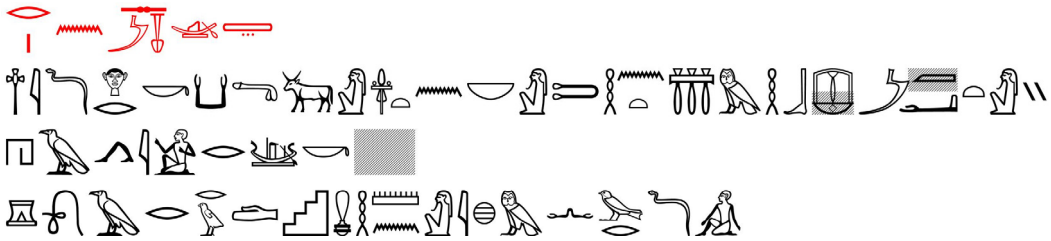
いずれの事例も王の祭事の表す *ḥꜣ* もしくは *ḫʿ*(*t*)の後に続いて、𓉐と船の記号の組み合わせ（事例 7 𓉐𓄿𓅱; 事例 8 𓉐𓄿𓅱 ; 事例 9 𓉐𓄿𓅱; 事例 10 𓉐𓄿𓅱）が記される。この二文字の組み合

[211] 第 1 王朝、デン王の治世下の出来事であるが前後の欠落により治世年の特定は難しい。前後する王の統治期間から最低でも 32 年間統治していたと考えられる（Wilkinson 2000, 103）。
[212] 第 2 王朝、ニネチェルの治世第 11 年目の出来事。
[213] 第 2 王朝、ニネチェルの治世第 17 年目の出来事。

わせは、慣習的に *ḥb Zkr* すなわち「ソカルの祭」と読まれてきた[214]。しかしアンテスは、船の限定符の観点から従来の解釈の非常に重大な問題点を指摘した。彼はまず、これらの出来事に使用された船の記号は、下界の神であるソカルの祭（*ḥb Zkr*）に必ず使用されるソカル固有の *ḥnw* の船𓋴ではなく、「ピラミッド・テキスト」上に刻まれた *mꜣʿti* の船や *mʿnḏt* の船、*msktt* の船、*sšm-Ḥr* の船といった別種の船の形状を示している[215]。その一方で、出来事が記された時期は、後の時代にソカルに関連する祭が実施された時期[216]と合致する。これらの点を踏まえ、アンテスは、この *ḥb* と船の記号の組み合わせを、*ḥb mꜣʿti* とし、「*mꜣʿti* の祭」と呼ばれるソカルに関する祭が初期王朝時代以降に存在したと結論付けている[217]。実際に、これらの船の記号は同史料裏面の *PS* v. V. 2（事例 6）に用いられた船の記号と一致または類似し、*Pyr.* 1312-1315（事例 3）や *Pyr.* 1785b-c（事例 4）の記号とも類似する。ガバラとハッサンは、新王国時代の史資料からこの解釈を支持し、アンテスが船の図像をもとに試論した船の甲板上の二羽の隼を王とソカルであるとする解釈を支持している[218]。さらに、セラーノも同様にこの祭の新たな名称を支持し、「パレルモ・ストーン」上に記された 4 回にわたる「*mꜣʿty* の船の祭」が初期王朝時代に実施されていたことを認めている[219]。

この解釈については、未だ確定的ではないと考えることも可能であるが、筆者は彼らが提示した史資料に加えて、新たに「コフィン・テキスト」[220]の記述から、アンテスの示した解釈が蓋然性の高いものであることを示したい。

[事例 11]　CT 6 280a-280c: Pap. Gard II



[214] Wilkinson 1999, 301.
[215] Anthes 1957, 78. また 82-83 上の一覧表はそれぞれの船が別個の特徴や形状を持つものとして史資料上で記載されていたかを明確に示している。
[216] 初期王朝時代から古王国時代にかけては、アケト期の第 3 月第 26 日に実施されたと考えられる（Serrano 2002, 93）。
[217] Anthes 1958, 78. ソカルの祭については、Bleeker 1967, 69-90; Gaballa and Kitchen 1969; Serrano 2002, 92-94 を参照。
[218] Gaballa and Kitchen 1969, 14-16.
[219] Serrano 2002, 93-94.
[220] 「コフィン・テキスト」の詳細については、第 3 章を参照。

[280]

a *rn n sm3-t3*

b *ind-ḥr.k k3 i3bt nb tḥnt*[221] *m ḥb m3ʿty*

c *ḥ3.i r wi3.k*

d *gw3 r rwd mi Ḥmn*[222] *iḫm wrd*

着岸するための呪文

ようこそ！ おお、東方の雄牛, *m3ʿty* の祭におけるファイアンスの主よ。私がヘメン、疲れを知らない者のように階段にきつく結びつけられた汝の船へと下らんことを！

「着岸するための呪文」である第 659 章は、死者がラーの船の一員になるための呪文であり，死者がその船へと向かう様子を描写したものである[223]。280b の内容はラーに向けての呼びかけであると考えられる。ここでの𓉐と𓇋𓏏𓄡𓄿の組み合わせから、*ḥb m3ʿty* と呼ばれる祭が中王国時代頃にも存在したことは明らかである。筆者は当初、この語句を字義的に「『二柱のマアト』の祭」と解釈したが[224]、この解釈にはマアトの崇拝に関する疑問を残していた。マアトは女神として神格化されるものの、その崇拝やマアト女神の祭の存在を示す史資料はほとんど残されていない。現在確認される唯一の情報は、カルナック神殿内に存在するマアト女神の小神殿のみであるが、この神殿が建設されたのは新王国時代以降である[225]。また、その神殿で崇拝されたのは、あくまで一柱のマアト女神であり、「二柱のマアト」の崇拝やこれらの神々の祭に関する記述はエジプト全史の史資料上で確認されていない。したがって、この呪文上に記された *ḥb m3ʿty* の記述を「二柱のマアト」に関する祭であったと考えることは難しい。

その一方で、アンテスが提唱した「パレルモ・ストーン」上の𓉐と船の記号の組み合わせを *ḥb m3ʿti*、すなわち「*m3ʿti* の祭」とする解釈が、この事例の内容に矛盾することなく当て

---

221 ラーの形容辞であると考えられるが、詳細は不明である（*LGG* 3, 786）。唯一確認される、パピルス・グリーンフィールドの「死者の書」上の *nb tḥnt* は、神々の名前のリストの中に列記されるのみである（Budge 1912, Pl. 79）。

222 隼の神であり、しばしばホルスと同一視される（*LGG* 5, 150）。

223 ウィレムズは、この呪文がモアラのアンクティフィの壁画に記された豊穣を願って行われるヘメンの儀式と同種のものであると指摘する（Willems 1990, 44-45）。

224 肥後 2018, 166.

225 Helck 1980, 1112.

はまる。つまりここでの *ḥb mꜣʿty* は、「二柱のマアト」やマアト女神に関する祭ではなく、「パレルモ・ストーン」上で記された *mꜣʿti* の船の祭を指しているのである。このように考えた場合、この「コフィン・テキスト」呪文第 659 章に記述された *ḥb mꜣʿty* の *mꜣʿty* がそれぞれの音を明確に示す記号𓄿𓏏𓄡𓅱で記述されていることから、初期王朝時代の𓉐と船の記号の組み合せの船の記号が *mꜣʿti* と読まれるべきであるとするアンテスの主張を強く支持するものであるといえる。

「パレルモ・ストーン」の事例から、古王国時代のネフェルイルカーラーの治世において、「*mꜣʿti* の船の建設」という出来事、そして表面に記された 4 例の事例から「*mꜣʿti* の祭」と呼ばれるソカルに関する祭の可能性を考察した。この祭の具体的な内容を描写した史料は確認されていないが、ソカルと *mꜣʿty* の明確な関係を示す史料は、古王国時代のセシェムネフェルの偽扉、中王国時代の「コフィン・テキスト」、そして新王国時代のメディネト・ハブ神殿のレリーフ上に確認される。本節では、最後に残る一点の古王国時代の *mꜣʿti* の記述をもつ史料であるセシェムネフェル/メテティの偽扉に刻まれた碑文の内容を検討する。なお、「コフィン・テキスト」とメディネト・ハブ神殿に記された *mꜣʿty* 事例の事例については、第 3 章で検討する。

セシェムネフェル/メテティ（*Sšm nfr/ Mtti*）[226]の偽扉は、エジプト考古学博物館に所蔵された石灰岩製の偽扉（False door）である。偽扉は、古代エジプトの建築物の一要素であり、主として古代エジプトの古王国時代に利用された。その言葉の通り、扉を模した形状をし、被葬者を供養するためのテキストや供物のテキスト、被葬者の図像が刻まれている。通常は私人墓の供物室の西側の壁に設置され、その側には供物を置くための供物台が置かれた。死者はこの扉を通って現世と死後の世界を行き来し、供物を受け取ることができたと考えられる。セシェムネフェル/メテティの偽扉は、カイロ博物館に所蔵されているが、その詳細についてはカイロ博物館の史資料カタログ[227]で簡単に触れられるのみである[228]。カタログ

---

[226] 偽扉上には、*Sšm nfr* と *Mtti* の名が記されている。それぞれが全く同じ称号を持つ点や偽扉中央のパネル部分に描かれた男性が一人のみであることから、この 2 つの名前が同一人物であることは明らかである。ジョーンズはこの偽扉の所有者を*Sšm nfr Mtti* と一つの名前と解釈している（Jones 2000, 173, 176.）。しかし偽扉のリンテルのテキストの内容には、「～セシェムネフェル、彼の善き名はメテティである」（*~sšm nfr rn.f nfr m mtti*）と記載されていることから、メテティはセシェムネフェルの別名であることがわかる。人物の名が「善き名」（*rn.f*）と呼ばれる別名で称される事例は、第 5 王朝期～第 6 王朝初期のイドゥートの碑文にも見受けられる（肥後他 2016 160）。

[227] Catalogue général des antiquités égyptiennes du Musée du Caire：CG.

[228] Borchardt 1964, 63-65, Pl. 17.

上では、この偽扉は第 6 王朝後期もしくはそれ以降と記されるが、その詳細や、遺物の出土状況などといった制作時期に関わる情報は明示されていない。加えて、この偽扉の所有者であるセシェムネフェル/メテティの持つ称号が、この史料にしか見受けられない稀有なものであることから、テキストに基づく年代特定を困難にしている[229]。しかし、偽扉の上部にコーニスを備える点や、両脇柱が均等の幅を持つ点、各脇柱底部に刻まれた所有者の図像が比較的小さい点は、第 6 王朝の一般的な偽扉の形式と一致する[230]。また、所有者の持つ称号が当時の最高位の高官の持つものと異なる点からも、この偽扉の制作時期を第 6 王朝とする解釈は妥当なものであると考える[231]。

mꜣʿti の記述は、脇柱中央側の右の二列にわたって見受けられた。偽扉の写真はカタログに掲載されているが、画質や光の問題から文字の判読が一部困難であった。そのため本論文では同史料の写真に加えて、筆者が 2016 年にエジプト考古学博物館で撮影した写真の一部をトレースした画像（図 2-5）をもとにテキストの内容を検討する。

[事例 12, 13]　CG 1403

[左列]　*imi-r ḥm*(*w*)-*nṯr Šsmtt*

imi-r ḥm(*w*)　*nṯr Zkr n mꜣti*

imꜣḫw ḫr nṯr ʿꜣ Mtti

[右列]　*imi-r ḥm*(*w*)-*nṯr Šsmtt*

imi-r ḥm(*w*) *nṯr Zkr n mꜣti*

imꜣḫw ḫr nṯr ʿꜣ Sšm nfr

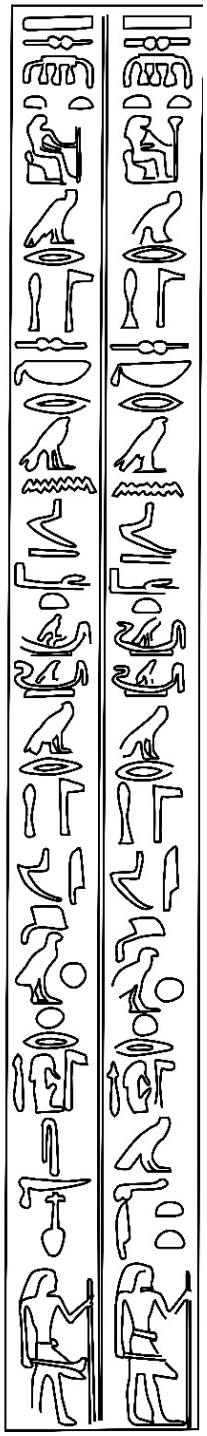


図 2-5　セシェムネフェル/メテティの偽扉（CG1403）の碑文（筆者作成）

229 Jones 2000, 173, 176.

230 Strudwick 1985, 35-36. ストラドウィックは脇柱が左右 4 列をなす事例については触れていないが、柱の列数が第 5 王朝以降に 1~2 列から 3 列に変化する点、横幅が第 6 王朝に均等となるという点は、この偽扉の特徴と合致する。

231 第 5 王朝以前の偽扉は、王族のような一部の最高位の高官にのみ制作されていた（Strudwick 1985, 52）。

セシュメテトの神官の監督官

mꜣʿti の船のソカル神官の監督官

大いなる神の側で尊崇されし者、メテティ。

セシュメテトの神官の監督官

mꜣʿti の船のソカル神官の監督官

大いなる神の側で尊崇されし者、セシェムネフェル。

碑文の所有者の称号として、「セシュメテトの神官の監督官」に続いて、一羽の隼を載せた二隻の船の決定詞を伴う *mꜣʿti* の記述が確認される。𓋴𓅱𓂋𓏏𓂻の記述から、*Zkr n mꜣʿti*（*mꜣʿti* の船のソカル）と順に読まれるべきであるが、ジョーンズはこの称号に関して、*imi-rꜣ ḥm*(*w*)-*nṯr n mꜣʿty Zkr*、すなわち「ソカルの『マアトの二隻の船』の神官の監督官」と独自の解釈を示している[232]。この解釈は *Zkr* の位置が敬意の逆転[233]によって、*mꜣʿti* の後から間接属格 *n* の前に移動するというものであるが、通常この逆転は直接属格にしか使用されず、*n* を挟んで語順が変化するとは考え難い。この点については、この事例のみでは意味が断定できず、その他の事例と併せて検討する必要があるが、下界の神であるソカルと「二隻のマアト」の何らかの関係性がはっきりと見受けられる。

本章では、古王国時代における「二柱のマアト」の意味を探求するため、「ピラミッド・テキスト」と「パレルモ・ストーン」に刻まれた *mꜣʿti* に注目し、この語の意味をその他の関連史料との検討と併せて考察した。

第 1 節では、「ピラミッド・テキスト」に *mꜣʿti* の記述を含む事例を 5 例確認し、各事例を含む呪文の全文訳および部分訳とその解釈を踏まえて、個々の事例の内容を検証した。先行研究で最初期の「二柱のマアト」と認識されてきた呪文第 260 番上の二つの *mꜣʿti* の記述（事例 1、事例 2）は、「聞く」や「命じる」といった動作の主語であることから、神格として描写されていると考えられる。しかしながら、前後の文脈の解釈が多義的にとれることや、*mꜣʿti* に女神や神格であることを示す限定符が記されていないことから、これらの事例が二柱の姿をとるマアト女神の最初期の事例であると断定することはできない。その一方で、同じ *mꜣʿti* と記述された事例が呪文第 260 番の他に二例（事例 3、事例 4）確認された。これら

[232] Jones 2000, 173.
[233] “Honorific Transposition” in Allen 2014, 52-53 Gardiner 1957, 51, 65-66.

の事例は、*mꜣʿti* の語が一隻もしくは二隻の船の限定符を伴い、何らかの神聖な船として利用されていることを明示する。特に事例 4 は、二隻の船とともに *mꜣʿt* の語が記述され、それに太陽神を指す代名詞が付記されていることから、*mꜣʿti* が二隻の太陽神の船として「ピラミッド・テキスト」上で描写されていることがわかる。また、類似した二隻の太陽神の船として描写された *mꜣʿti* の記述は、テキストの特殊性からこれまで目を向けられなかったイビ王の「ピラミッド・テキスト」においても確認された（事例 5）。

第 2 節では、「パレルモ・ストーン」の事例を中心に最初期の *mꜣʿti* の記述を考察した。「パレルモ・ストーン」の裏面、ネフェルイルカーラーの治世の事績欄に記された *mꜣʿti* の記述（事例 6）は、二羽の隼を載せた聖船の限定符を伴い、この語が王のもとで行われた儀礼のなかで作られる船を指すことを明らかにした。その一方で、初期王朝時代の王の治世化に催された祭の事例（事例 7-10）に注目すると、祭を意味する語 *ḥb* と船の記号で示される語句が、ソカルに関連した「*mꜣʿti* の船の祭」（*ḥb mꜣʿti*）と読まれるべきであることが強調された。後の時代の「コフィン・テキスト」に記された *mꜣʿti* の祭（*ḥb mꜣʿty*）は、先の時代におけるこの祭の存在を示唆するものである（事例 11）。さらに、ソカルと *mꜣʿty* の関係性は、古王国時代第 6 王朝時代のセシェムネフェル/メテティの偽扉にも刻まれている。この碑文の所有者であるセシェムネフェル/メテティが持つ「*mꜣʿti* の船のソカル神官の監督官」（*imi-r ḥm nṯr*(*w*) *Zkr n mꜣty*）の称号は、この時代においてソカルと *mꜣʿti* と呼ばれる二隻の船が相互に関連していると同時に、それらの崇拝に携わる神官が複数いたことを明示している。

本章で確認された「太陽神の船」と「ソカルとの関連を示す側面」は、従来認識されてきた二柱の女神としての「二柱のマアト」とは明らかに意味の異なる、*mꜣʿti* の新たな側面であるといえる。つまり、古王国時代の *mꜣʿti* には「独立した神格」と「太陽神の二隻の船」、「ソカルに関連する船」の三つの側面を持つことが明らかとなった。これらの側面は、いずれも第一中間期から中王国時代に利用された「コフィン・テキスト」にも引き続いて見受けられる。次章では、この「コフィン・テキスト」に記述された *mꜣʿty* の事例と上述の三つの側面の関係に注目しつつ、詳細な内容を検討していきたい。

第 3 章

中王国時代における「二柱のマアト」

本章では、中王国時代頃の史料の「二柱のマアト」の内容を考察する。エジプト古王国時代は、紀元前 22 世紀にメンフィスを中心とする第 8 王朝を最後として終焉を迎え、その後、古代エジプトは第一中間期と呼ばれる時代を迎える。第一中間期は、古王国時代終末期に各地で権力を誇った諸侯らが独立し、エジプトの支配勢力が各地に分裂した時代であった。第 8 王朝が途絶えた後、エジプト中部のファイユーム付近のヘラクレオポリス・マグナを中心とする勢力が第 9 王朝、第 10 王朝を打ち立てエジプトの支配の確立を試みたが、その力はエジプト全土には及ばなかった。後世の古代エジプト人は、第 9・第 10 王朝を正式な王朝であると認めていなかったことは明白であり、アビドスにあるセティ 1 世の王名表では、この二つの王朝の王名は、第 8 王朝と中王国時代の王名の間に記されていない[234]。その一方で、第 9・第 10 王朝の支配領域の南では、テーベを中心とする第 11 王朝が興り、その後約 100 年間にわたって北のヘラクレオポリスの勢力と抗争を繰り広げることとなる。その後、紀元前 2050 年頃に第 11 王朝のメンチュヘテプ 2 世がヘラクレオポリスの勢力を打倒した後、エジプト全土の支配を確立し、エジプトは中王国時代を迎えた。第 11 王朝から第 13 王朝までの約 400 年間続いた中王国時代は、エジプト文明の初期に形成され、古王国時代に体系化された文化的基盤が再考された時代に位置づけられる[235]。

このような時代のなかで利用された葬祭文学が、本章で取り扱う「コフィン・テキスト」と呼ばれる呪文の総称である。本章では、はじめに「コフィン・テキスト」の史料の特徴や成立背景の考察をふまえ、「二柱のマアト」の研究における同史料の研究意義を確認する。そして、第 2 章で明らかにした「二柱のマアト」の持つ三つの側面にしたがって「コフィン・テキスト」の *mꜣʿty* の事例を分類・分析し、各側面の内容理解を更に進めていく。

なお、中王国時代のその他の史料から *mꜣʿty* の記述は「ラメッセウム・パピルス」[236]に記された一か所の記述を除いて確認されていない[237]。*mꜣʿty* の語はこのパピルスに記されたセ

---

234 Seidlmayer 2003, 108.
235 Oppenheim 2015, 1.
236 P. Ram. VI.
237 Hannig 2006a, 1010.

ベクへの賛歌の中で記述されるが、断片的な文脈が残されるのみであり、その内容を検討することが困難である[238]。そのため、本論文では考察の対象としない。

第１節　古代エジプトの「コフィン・テキスト」

「コフィン・テキスト」は、主として第一中間期から中王国時代に制作された木棺資料上に記述された葬祭文学である（図 3-1）。先の時代の「ピラミッド・テキスト」および後の時代の「死者の書」と同様に、被葬者の死後の世界における復活と安寧を目的として利用された。「コフィン・テキスト」の呪文は、現在までに 1000 を超える種類が確認されており、神々への賛歌や死後の世界の描写、いわゆる「変身の呪文」[239]、魔物を追い払うための呪文、供物の呪文など、その内容も多岐にわたる。

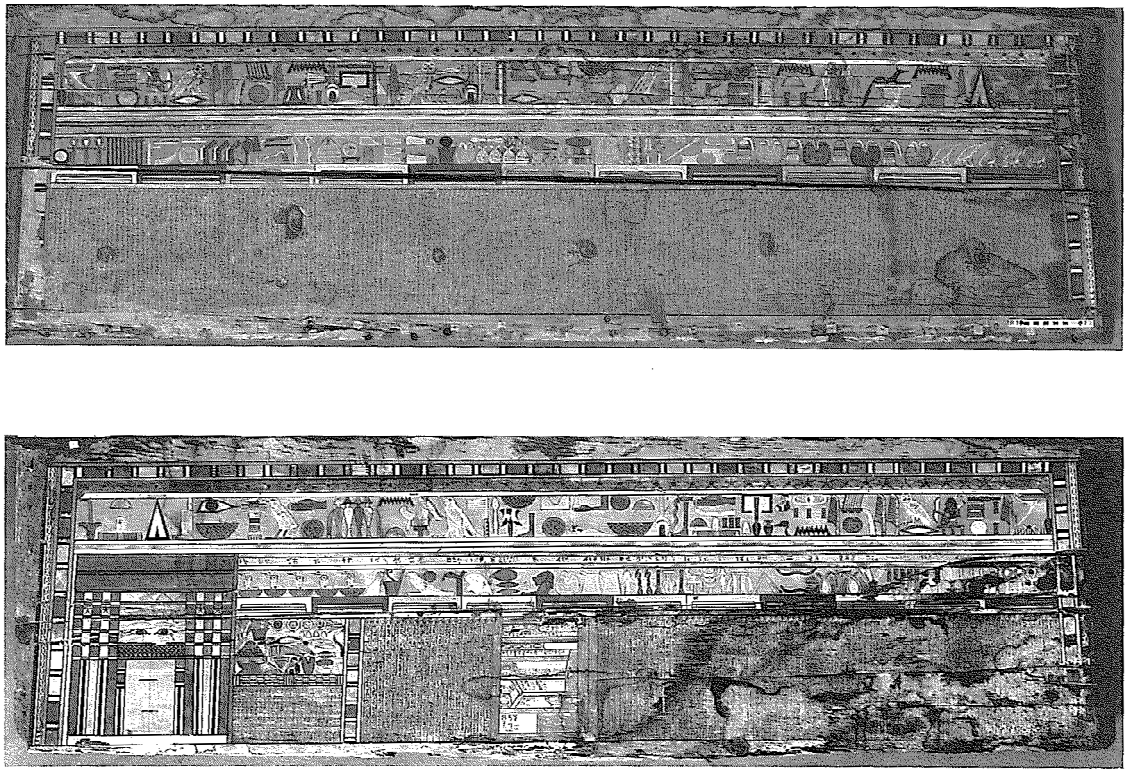


図 3-1　中王国時代の木棺資料に記述された「コフィン・テキスト」（Lapp 1996, Pl .7）

[238] Gardiner 1955, Pl. 19.
[239] 「変身の呪文」に関しては、吹田 1995 を参照。この研究は国内において初めて「コフィン・テキスト」の内容にふれた研究である。

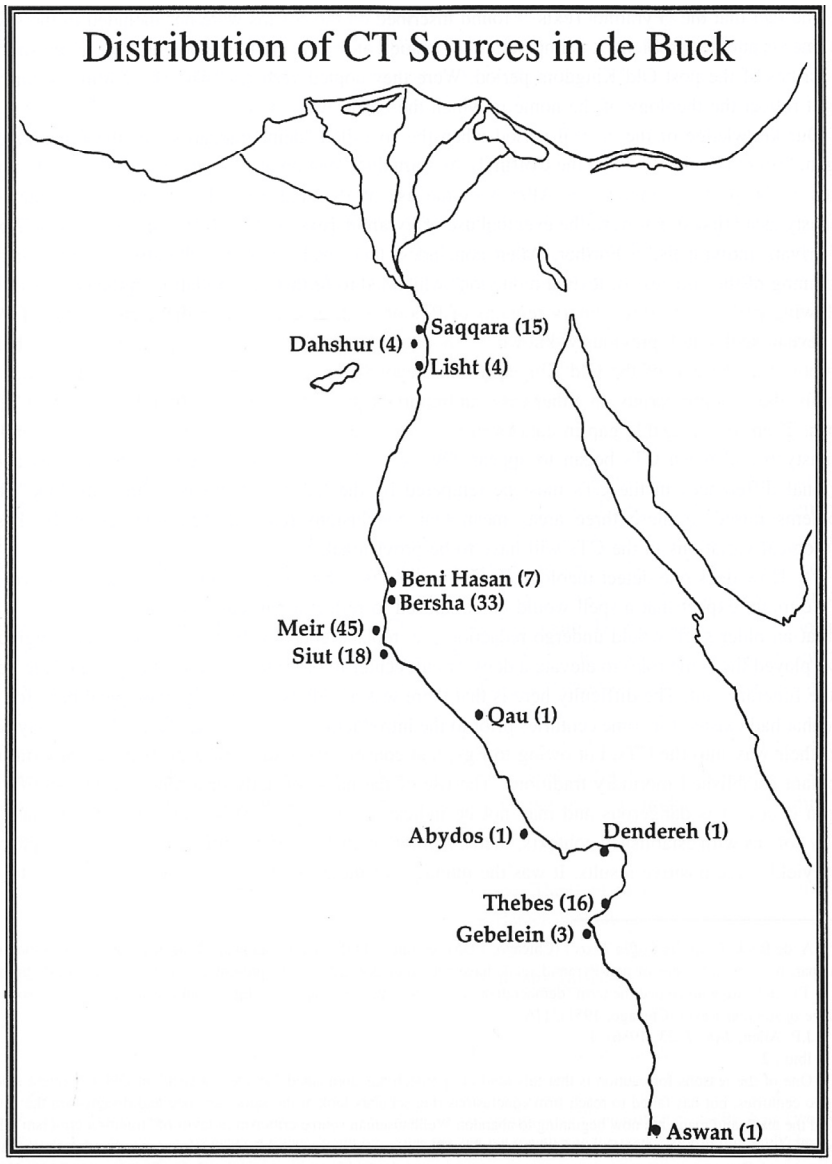


図 3-2　「コフィン・テキスト」が記された木棺資料の分布
（Hoffmeier 1996, Fig. 1）

呪文が記された木棺の多くは、アシュートやベルシャ、リシュト、メイルといった中部エジプトで多く発見されるが、北のサッカラや南ではアスワンやテーベ等からも出土しており、中部エジプトを中心としながらエジプト内の広範な範囲で利用されていたことがうかがえる[240]（図 3-2）。この「コフィン・テキスト」の最大の特徴の一つとして、テキストの内容が木棺資料の制作地によって大きく異なる点が挙げられる。例えば、中エジプトのベルシャで出土した一部の木棺の底部には「二道の書」（Book of Two Ways）と呼ばれる下界の様

[240] ホフマイヤーによれば、デ・バックの *CT* 上の呪文の 7 割は中部エジプトの木棺上に記されたものである（Hoffmeier 1996, 46-48）。

相の挿絵とともに記された呪文群が存在する。これらは他の地域で出土する木棺には決して描かれず、明らかにベルシャに固有の葬祭文化を反映している。

「コフィン・テキスト」が記述された木棺資料は、20 世紀初頭には既に数多く発見されていたが、木棺資料が世界中の博物館に散在することから、これらのテキストの内容の研究は容易ではなかった。しかし、シカゴ大学近東研究所による『「コフィン・テキスト」プロジェクト』[241]により、デ・バックが 100 点以上の木棺のテキストを編纂・校訂した「コフィン・テキスト：*CT*」[242]を出版したことで、「コフィン・テキスト」は、エジプト中王国時代の葬祭文化や神学の内容を探求するうえで最も重要な史料として研究者の関心を大きく寄せることとなる。この「デ・バック」の校訂資料は、現在にいたるまで「コフィン・テキスト」研究の基本書となっている。その後、1992 年にはデ・バックの生誕 100 周年を記念して開催された「コフィン・テキスト」をめぐる国際会議が開催され、文献学や考古学、宗教学、そして言語学といった多角的な視点に基づく「コフィン・テキスト」とそれが記された木棺資料に関する近年の研究成果が議論・公表された[243]。近年においても「コフィン・テキスト」の研究は精力的に継続されており、個々の呪文の内容の理解やその他の呪文との相互関係、実際におこなわれた葬送儀礼との関係を考察する研究が深化されつつある[244]。

しかし、呪文の内容に宗教的・神話的要素が多分に含まれていることから、その他の葬祭文学と同様に、テキストの内容には依然として理解の極めて困難な箇所が多く残り、不明瞭な点を数多く残している。ウィレムズの言葉を借りれば、「エジプト学者は、依然としてそ

---

[241] プロジェクトの発足と第 1 巻の出版までの経緯については *CT* 1, ix-x を参照。出版に際してデ・バックが利用した木棺資料の記録写真および研究ノートは現在、ライデン大学のオランダ近東研究所（Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten）に所蔵される。

[242] *CT* 1-7. *CT* 7 の公刊から 40 年後にアレンが *CT* の新巻となる *CT* 8 を出版しているが、これは中王国時代の木棺資料に記された「ピラミッド・テキスト」の呪文の集成であるため、デ・バックの「コフィン・テキスト」とは区別される。

[243] Willems 1996. この会議の開催以前にも「コフィン・テキスト」を巡る研究は精力的に継続されてきた。例えば、ザンデは特定の呪文の翻訳と解釈に注力し、それらの呪文の内容理解に大きく貢献している（Zandee 1972a; 1972b; 1973; 1974）。ゼーテの *Komm.*のような *CT* の呪文全ての詳細な解釈を含む資料は出版されていないが、豊富なコメントを含むフォークナーの翻訳（Faulkner 1973; 1977; 1978）や、翻字と併記したカリエの翻訳（Carrier 2003）など呪文の理解に必要な基礎研究が蓄積されつつある。

[244] 例えば、ウィレムズは、「コフィン・テキスト」のいくつかの呪文と当時の葬送儀礼との密接な関係性を指摘し、呪文の内容を文献学・考古学の双方の視点から理解する研究の必要性を提示している（Willems 2014, 182-229）。シェルビーニーはベルシャ出土の木棺資料に固有の「二道の書」の内容に焦点を当て、文献学の視点だけでなく、木棺の制作年代や呪文の配列、挿絵の分類を踏まえた綿密な研究を発表した。この研究は「二道の書」研究の際に必読の資料となっている（Sherbiny 2017）。プリスキンの研究は、「月の書」と呼ばれる「コフィン・テキスト」呪文第 154 章から第 160 章の更なる内容理解を目指し、より厳密な文献研究を行っている（Priskin 2019）。

れらの理解に達するための始まりにいる」[245]の段階にあり、今後の更なる研究の進展が望まれる。この状況はマアト研究の分野にも当てはまり、「コフィン・テキスト」のなかに 190 例におよぶ *mꜣʿt* に関する記述が確認されながらも、これらの事例に注目した研究はこれまで十分になされていない。したがって、「コフィン・テキスト」の翻訳と解釈を踏まえ、各呪文に現れる *mꜣʿt* に関連する記述を読み解くことは、中王国時代頃におけるマアトや二柱のマアトの特徴や意義をより具体的に理解する一助となりうる。

本研究において、筆者は *CT* の内容全てから、計 192 例の *mꜣʿt* に関連する記述を確認した（本論文附録 3 を参照）。そのうち呪文第 149 章（*CT* 2, 250b）、第 171 章（*CT* 3, 43a）、第 416 章（*CT* 5, 250a）、第 479 章（*CT* 6, 42a）、第 641 章（*CT*, 6 262g）、第 659 章（*CT* 6, 280b）、第 660 章（*CT* 6, 282e; 282f）、第 682 章（*CT* 6, 312o）、第 693 章（*CT* 6, 326p）、第 995 章（*CT* 7, 210o）、第 1033 章（*CT* 7, 268a）、第 1034 章（*CT* 7, 279c）に *mꜣʿty* の記述を確認した（表 3-1）。本章では、この 13 例の内容を前後の文脈の翻訳と解釈を踏まえて考察する。前章では、古王国時代の史料に記された *mꜣʿti* の記述が「独立した神格」と「太陽神の二隻の船」、「ソカルに関連する船」の三つの側面を併せ持つことを明らかにした。「コフィン・テキスト」の *mꜣʿty* の事例分析を進めるなかで、筆者は「コフィン・テキスト」の多くの事例も同様に、その内容が先述の三つの側面に関連することを確認した。その一方で、記述の内容がいずれの側面にも当てはまらないものや、分類のできない事例、*mꜣʿty* という記述をされながらも、文脈から本研究の分析対象である双数形で示されたマアトの記述「*mꜣʿty*」であると考えにくい事例も確認された。そこで本章では、まず先述の *mꜣʿty* の各側面に該当する事例の詳細を検討した後、未分類の事例の考察を進めていく。

[245] Willems 1996, v.

表 3-1　「コフィン・テキスト」上に記された *m3ᶜty* の記述

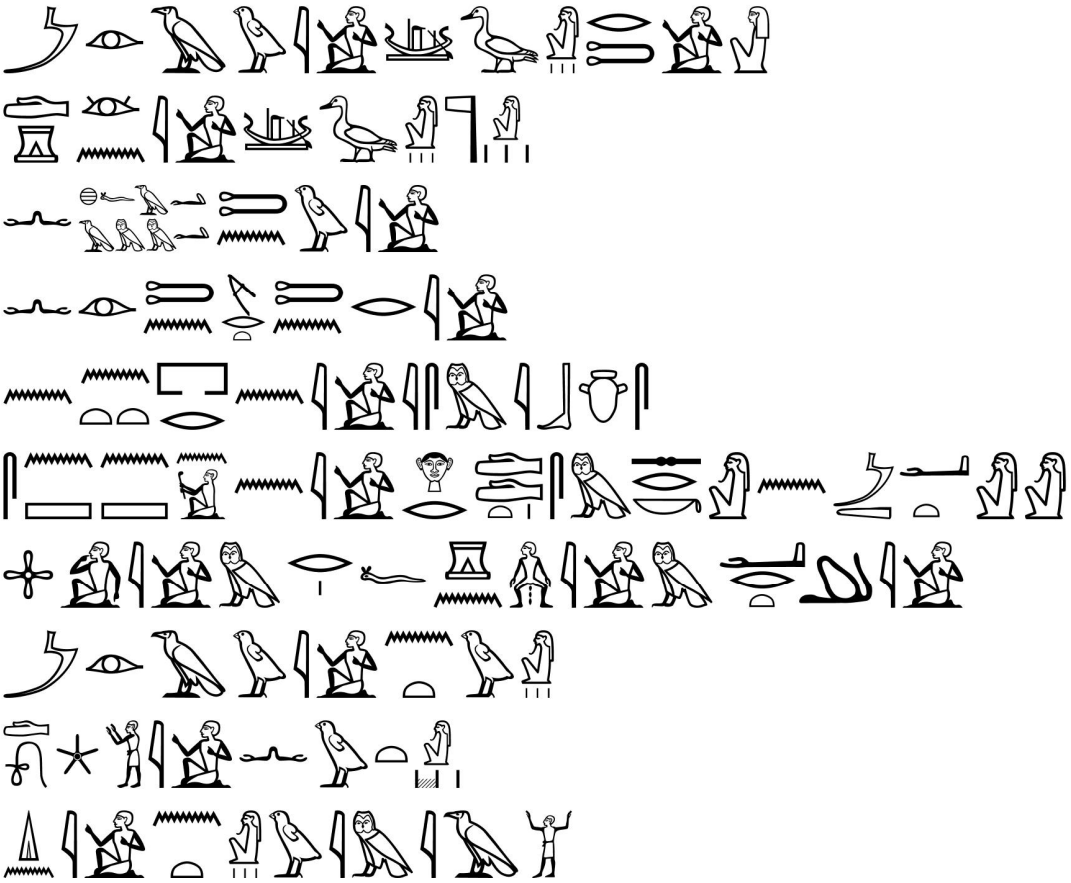
No.	呪文番号	事例番号	出典	史料	記述内容（Translieration）	部分訳	側面・特徴
1	149	19	CT 2 250b	S2P/ S1P/ S1Chass./S1Cb/ S2Ce/ S2Ca/ S2Cd/ B9C/ B2Bo/ Pap.Berl./ S2Cc	*iw wḥm r-gs m3ᶜty* *rdit sḫm.i m ḫft.i*	それは、私を私の敵に対して力強くする*m3ty*の側で繰り返された。	二柱のマアト女神
2	171	23	CT 3 43a	B2Bo/ B4Bo/ M5C/ M2Ny/ S2C/ Pap.Berl/ B1L/ S10C/ B9C/ B1Bo/ B2Be	*iỉ 3ḫt in 3ḫt* *iỉ wrt i[n] wrt* *in m3ᶜty in n.i sn*	「アク は来る」とアクは言う。「大いなる者はここに来る」と大いなる者は言う。彼らを私へともたらしたのは、「マアトに属する者」である	ニスバ形容詞
3	416	24	CT 5 250a	S2Cb/ S2Ca B2Bo/ B4Bo/ B7Bo/ M22C	*pr(i).n.i ḥr rwḏ šsp.n.i Ỉtnw-sw* *ᶜḥᶜ.n.i r pt m M3ᶜty* *gm(i).n.i ist Rᶜ-Ỉtm*	私は階段の上を進んでいった。私はイチェヌウ・スウを取った。私は天に向かって*m3ᶜty*とともに（？）立ち上がった。私はラー・アトゥムの船員を見つけた	不明瞭 女神(？)
4	479	14	CT 6 42a	Pap.Gard.2	*n ḫfᶜ.tn wi, n 3mm.ṯn wi* *n ir(i).ṯn mrt.ṯn r.i* *snšnš.n.i ḥr ddt.s m Skr n m3ᶜty*	汝らは汝らの望むことを、私に対して行わないだろう。なぜなら私はその望みから出たからだ。私は「*m3ᶜty*の船」のソカルとして、その支配から逃れたからだ。	ソカルの船
5	641	25	CT 6 262g	M2NY/ M5C/ D1C	*nḫbḫb ᶜ3wy nṯr ỉi nw Ḥry-ṯrwt* *ink Rᶜ ḫm m3ᶜty* *sw3(w) wrw ḥr w3t ḫpš*	神の２つのドアは開かれる。これらの者、ヘリィ・チェルウトが来るだろう、なぜなら私こそがラー、*m3ᶜty*の社、力強い腕の道で大いなる者たちを超える者である。	不明瞭
6	659	11	CT6 280b	Pap. Gard.2	*r n sm3-t3 inḏ-ḥr.k, k3 ᶜnḫt nb ṯḥnt m ḥb m3ᶜty*	着岸するための呪文。万歳！おお、西方の雄牛、「*m3ᶜty*の祭」のなかのファイアンスの主よ。	ソカルの船との関係 第２章第２節を参照
7	660	15	CT 6 282e	B1Bo	*nsw pw pr(i) fnd* *rdi.n m3ᶜty ᶜ.sn r N pn*	彼は王、鼻が前に出た者である。*m3ᶜty*は彼女らの腕をこのNに置いた	二柱のマアト女神
8	660	16	CT 6 282f	B1Bo	*ḥḳr.t(y) hrw n skrkr.f m Skr n m3ᶜty*	彼女らが空腹である状態で、このセケルケルの日に、*m3ᶜty*の船のソカルとして。	ソカルの船
9	682	20	CT 6, 312o	BiBo	*sᶜr Rᶜ n m3ᶜty.f*	ラーを彼の*m3ᶜty*の船へと登らせる者	太陽神の船
10	693	21	CT6 326p	B15C	*ḏ3i .k ḥrt pḥ.n Rᶜ m3ᶜty*	汝が天を横切るのは、 ラーが*m3ᶜty*の船へ達した後なのである	太陽神の船
11	995	22	CT7 210o	Pap. Gard.2	*iw r[ḫ n. f rn] ////////////ᶜt(?) imyt m3ᶜty*	なぜなら[彼は]//////////、*m3ᶜty*の船の中にいる者の[名を知っているからだ	船の名称 詳細不明
12	1033	26	CT 7 268a	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B1Bo/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P	*ṯsy.i m ḥ3t iᶜrwt* *ḏb3.f ḫt sbḫ m nb iᶜrwt m3ᶜty*	私はウラエウスの額へと上がるであろう、彼がウラエウスの主、「二柱のマアト」としてつぼの中身を分け与えんために	*nb m3ᶜt* の異形
13	1034	27	CT 7 279c	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B1Bo/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P	*dy sw3 N* *N wsr nb wsrw nb wsrtyw* *N sᶜḥ Rᶜ* *N nb m3ᶜty ir w3ḏt*	Nを通過させよ！（なぜなら）Nは力強い者であり、力強い者たちの主であり、Nはラーの高位の者であり、Nは「二柱のマアト」の主であり、ウアジェトを作りし者 であるからだ。	*nb m3ᶜt* の異形 B1上に特殊な限定符 （第５章参照）

※ No 12, 13に関して、ここではテキスト通りの翻訳を示すが、本論文では単数形の*m3ᶜt*の異形として取り扱う。詳細は事例26,27を参照

第２節　下界の神ソカルとの関係

まず、下界の神ソカルとの明確な関係を示す二つの「コフィン・テキスト」の事例に注目する。前章において検討した「パレルモ・ストーン」の「*mꜣʿti* の祭」の記述（事例 7-10）は、ソカルとの関連を示す事例であるものの、その直接的な関係を示すものではなかった。またソカルとの直接的な関係を示す事例として、セシェムネフェル/メテティの碑文（事例 12, 13）を確認したが、その内容が碑文の所有者の称号の一部であることから、具体的な内容を考察することが困難であった。「コフィン・テキスト」上で確認された二つの *mꜣʿty* の記述は、ソカルと *mꜣʿty* の関係に新たな情報に加えて、この語の新たな解釈を提示する事例として注目すべき事例であるといえる。

[事例 14]　Spell 479 *CT* 6, 41r~42e　[Pap. Gard. 2]



41 [Pap. Gard. 2]

[r] *m33 wi wḥʿw rmṯ*

[s] *dg n.i wḥʿw nṯrw*

[t] *n ḫfʿ.tn wi, n 3mm,ṯn wi*

[u] *n ir(i).ṯn mrt.ṯn r.i*

[v] *n-ntt pr(i).n.i is m ib.s*

42 [Pap. Gard. 2]

[a] *snšnš.n.i ḥr ddt.s m Skr n m3ʿty*

[b] *wnm.i r [.i*[246]*], fgn.i m ʿrt.i*

[c] *m3ʿ wi nt(y)w*

[d] *dw3 [w]i iwt(y)w*

[e] *di n.i nt(y)w im i3*

私を見よ！おお、人々を捕える者たちよ。私を見よ！おお、神々を捕える者たちよ。汝らは私を握らないであろう。汝らは私を掴まないであろう。汝らは汝らの望むことを、私に対して行わないだろう。なぜなら私はその(汝の望みの[247])望みから出たからだ。私は「*m3ʿty* の船のソカル」として、その支配から逃れたからだ。

私は[私の]口によって食べ、私の肛門によって排泄する。私を見よ！おお、存在する者たちよ。私を崇拝せよ！おお、存在しない者たちよ。あそこにいる存在する者たちが私に崇拝を与えん事を!

呪文第 479 章は、「網から逃れるための呪文」[248]の一種である。この種の呪文は、死後の世界を特徴的に描写した呪文となっている。死後の世界では、この呪文の「人を捕える者たち」（*wḥʿw rmṯ*）や「神々を捕える者たち」（*wḥʿw nṯrw*）のような神が存在し、地上から天へと張り巡らされた網によって鳥、もしくは魚となった死者を妨害する。死者はこの網にかか

[246] 続く *m ʿrt.i* と同様の表現と判断し、補足した。

[247] 「その」を意味する接尾代名詞 *.s* が三人称単数の女性名詞に付随するものであるため、意味が重複しているが、ここでは *mrt* を指すと解釈した。

[248] 正式な呪文の題目は「*i3dt* の網、*ibt-t3* の網(？)、*isswt* の網、*ḏsf* の網(？)の罠から逃れるための呪文。なぜなら私はそれを知っており、その名前を知っているからだ。」*r n prt [m] i3bt ibt-t3 isswt ḏsf n-ntt wi rḫ.k(w)(i) s(y) rḫ.k(w)(i) rn.s* である（*CT* 6, 37)。

らないために、網やその他の部分の正しい名称を覚えなければならず、この呪文はそのための魔除けの呪文であるといえる[249]。呪文中の「存在する者」（*nt*(*y*)*w*）、「存在しない者」（*iwt*(*y*)*w*）については、この語の具体的な内容を明らかにできないものの[250]、解釈部分冒頭の「人々を捕える者たち」（*wḥʿw rmṯ*）と「神々を捕える者たち」（*wḥʿw nṯrw*）を指し示している可能性がある。

解釈の部分では、死者は人間や神々を捕える「漁師」に対して呪文の所有者、すなわち死者が自身を妨げることはできないと明言している。この呪文では、その手段として *mꜣʿty* に対する言及、*Skr n mꜣʿty* が記述される。しかしながら、記述を含む *CT* 6, 42a の翻訳・解釈は研究者によって異なり、正確な理解の難しい箇所である[251]。筆者は以前の研究において、「二柱のマアト」があくまで女神としてソカルと関連するという立場から、「『二柱のマアト』のソカルの船」と仮訳を提示し、この解釈に従いソカルとの関連を指摘した[252]。しかし、第 2 章で明確に確認されたように、*mꜣʿty* の語がソカルに関連する船の側面を持つ点を踏まえて改めて記述の内容に注目すると、この事例においてもまた、*mꜣʿty* が神格ではなく、「*mꜣʿty* の船」として示されていると解釈されるべきであろう。したがって、この呪文のなかで死者が *mꜣʿty* の船、すなわち『「二隻のマアトの船」のソカル』という神として[253]、死後の世界の危険から逃れたことを宣言していると筆者は考える。

---

[249] Guglielmi 1982, 465. 呪文第 479 章を含む「網から逃れるための呪文」の詳細については、Bidoli 1976 を参照。

[250] しばしば *ntyw* と *iwtyw* は並べて表現することで、「万物」を意味するが、この呪文では、それぞれ独立した名詞として使用されているように見受けられる。

[251] *mꜣʿty* の語を含む 42a の *snšnš.n.i ḥr ddt.s m Skr n mꜣʿty* についての解釈・翻訳は以下のように研究者によって異なっている：Faulkner 1977, 123: “I have escaped from its clutch as Sokar of the Two Truths”; Barguet 1986, 314: “je me suis arraché de ses mains en Sokar et Celui des Deux Maât”; Carrier 2004, 1178-1179: “(et) que je suis arraché(?) de son emprise en tant que Sokar, ‘Celui des Deux Maât’!”

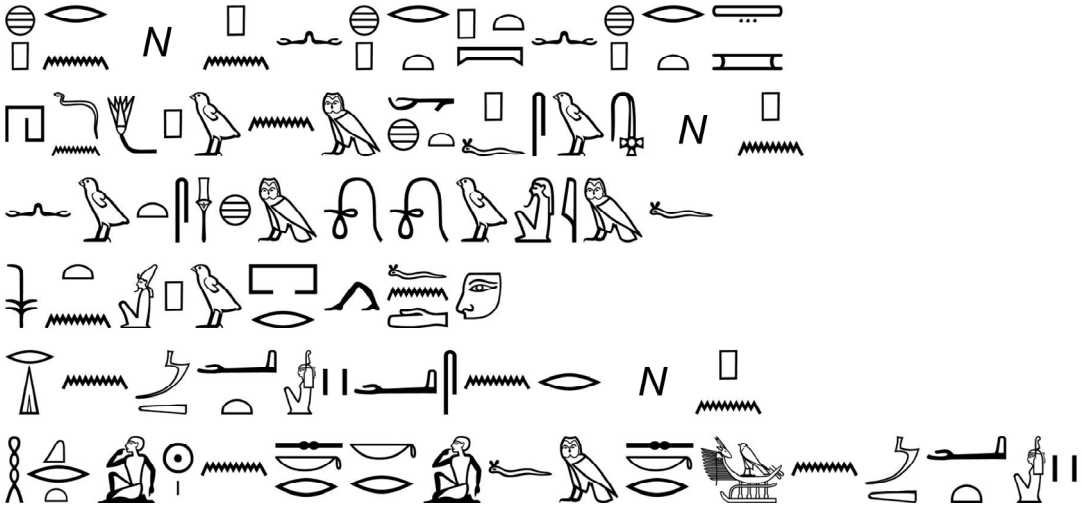
解釈を比較すると、主文、従属文の違いはあるものの、文章全体を過去時制 *sḏm.n.f* 形動詞文として解釈する点で一致する。しかしながら、フォークナーが「二つの真実のソカル」としている一方で、バルゲ、カリエは「二つのマアトに属する者」とし、さらにバルゲはソカルとの並列の表現として、カリエはマアトとの同格表現として解釈している。さらに、この呪文中の表現については、*LÄ* の“maat”の項目の中でヘレクによってまた異なる解釈も例示されており、彼がここでの *mꜣʿty* を「マアトの船」と解釈していることがうかがえる（Helck 1980, 1112）。

ここでの問題をいっそう複雑にしている原因は *mꜣʿty* が「二柱のマアト」、「マアトに属する者、マアトの船」と解釈できるだけでなく *Skr* も「ソカル神」と「ソカルの船」の２つの意味を持つ点にある。

[252] 肥後 2018, 160-163.

[253] *m Skr n mꜣʿty* の *m* に関して、前置詞 *m* の意味はより正確には「～として」であり、この点においてもこの解釈は文意に沿ったものであると考える。

[事例 15, 16]　Spell 660 CT6 282a~f　[B1Bo]



282 [B1Bo]

[a]　*ḫpr.n N pn n ḫprt pt n ḫprt tꜣ*

[b]　*ḥḏn pw n m-ḫt psw n N pn*

[c]　*iwt*(*y*) *sḫm wꜣwꜣ im.f*

[d]　*nsw pw pr fnd*

[e]　*rdi.n mꜣʿty ʿ.sn r N pn*

[f]　*ḥḳr.t*(*i*)[254]　*hrw n skrkr*[255]*.f m Skr n mꜣʿty*[256]

---

[254] *t* は *mꜣʿty* に係る状態形であるため、三人称双数女性形を指す-*ty* もしくは三人称複数女性形を指す-*ti* を指すと考えられる。*CT* 6, 282e において *mꜣʿty* は三人称複数で示されているため（*.sn*）ここでは-*t*(*i*)と表記する。

[255] *skrkr* は、意味の明らかになっていない名詞である。カリエ、バルゲはそれぞれ訳を当てはめているが、それらの解釈の根拠も不明である。フォークナーは、後述のソカルとは関係のない語であるとのみ指摘している。筆者はここでは、文字の通りに表記した。Faulkner 1977, 230; Barguet 1986, 408; Carrier 2004, 1502-1503.

[256] 事例 14 と同様の表現、*m Skr n mꜣʿty* がここでも見られる。282f の *ḥḳr.t*(*i*) *hrw n skrkr.f m Skr n mꜣʿty* についての各研究者による翻訳は、以下の通りとなる：Faulkner 1977, 230: "…in the Sokar-bark of the two Truth-goddess"; Barguet 1986: "les deux Maât ont tendu leurs bras vers N., étant affameés, le jour de le déplacer(?) en tant que Sokar des deux Maât"; Carrier 2004: "C'est vers ledit N que les Deux Maât ont tendu leurs deux bras, affameés le jour où il se rue dans la barque de Sokar des Deux Mâat!"
いずれの解釈も、*ḥkr .t*(*i*)を状態形とする点では一致が見られるものの、以下の点に関して解釈が異なる。*mꜣʿty* に関しては、フォークナーとカリエが「二柱のマアト(正義の女神)のソカルの船のなかで」とする一方でバルゲは「二柱のマアトのソカル」としていることが分かる。

この N[257]は天が存在へとなる前に、大地が存在へとなる前に存在となった。彼はこの N が調理した後の状態のヘジェン植物、ウアウア[258]がそれに対して力を持たない物(植物)である。

彼は王、鼻が前に出た者である[259]。「二柱のマアト」は彼女らの腕をこの N に置いた。彼女らが空腹である状態で[260]、このセケルケルの日に、「*mꜣʿty* の船のソカル」として。

呪文第 660 章は BiBo にのみ確認され、その内容に不明な点を数多く残す長大な呪文である。呪文の内容をまとめると、以下の通りとなる。

はじめに、棺の所有者は自身の起源が神々に先立つことを主張し、「二柱のマアト」から力を得る。その後の呪文では、「N は立って歩き、逆さまの状態で歩かない」(*šm N ʿḥʿ(w) n šm.n.f sḫd(w)*) と述べている[261])。この点から、この呪文が下界について言及していることがうかがえる。その後、死者は下界で神々との問答を経て自身の正当性を主張する。この呪文中にはマアトに関する語は 4 例確認され、前半の 2 箇所に *mꜣʿty* の表現が確認された。ここでは、その二つの *mꜣʿty* の表現に関連する部分を抜粋し、解釈・翻訳をおこなった。

解釈部分の前半部分で、棺の所有者は自身の創造が原初の時から始まり、自身が悪魔を寄せ付けないヘジェン植物であると述べている。その後、死者は自身が王であることを言及し、その文脈のなかで「二柱のマアト」は二柱の女神として死者に彼女らの手を置いている。ここで示される一つ目の *mꜣʿty* の記述に関して、筆者は「独立した神格」として描写された *mꜣʿty* の事例であると考え、次節で改めて検討する。

---

[257] N（Name）は呪文の所有者（死者）を指す。葬祭文書には、呪文の所有者を「私」と一人称で示す表記と、呪文の所有者の名前を記載した 2 つの表記方法が見られる。また、所有者を名前で示す場合は敬称として名前の前に「オシリス」（*Wsir*）の名前を置く場合も多い。

[258] 悪魔の名称である（*LGG* 2, 244）。

[259] 字義通りには、訳の通りの意味になる。これに関して、「調べる者」(Faulkner 1977, 230) や「不安な者」(Barguet 1986, 408)、「怒った者を外に出す者」(Carrier 2004, 1502-1503) と様々な解釈が研究者によってなされている。どの解釈も意訳であるため、適切なものを選ぶことは難しいが、強いて挙げるなら、フォークナーのとる「調べる者」が無理のない解釈であるといえる。

[260] 「彼女らが空腹である状態で」(*ḥkr.t(i)*)の具体的な意味は不明である。しかしながら、この文章は明らかに「二柱のマアト」を主語とした状態形として表現されており、ここでの *mꜣʿty* が神格として描写されていることを示している。

[261] *CT* 6 282k．𓉐𓅱𓏏 (*sḫd*)は「逆さまの状態である」を意味する動詞である。𓏏や𓅱といった文字に示されるように、下界に居住するものは逆さまの状態で下界に存在していた（Hannig 2006a, 2325-2326）。

続く事例 16 では、「二柱のマアト」とソカルの関係が事例 14 と同様に *m Skr n mꜣʿty* の表現により示される。この呪文の内容が下界に関係することや、ソカル自身が船を持つことで知られることから、一見するとフォークナーやカリエのとるような「二柱のマアト（正義の女神）のソカルの船のなかで」とする翻訳[262]が正しいように思われる。しかしながら、この事例も事例 14 と同様に *mꜣʿty* が船として描写された可能性を考慮すると、「二隻のマアトの船のソカル」とする解釈が妥当であると考えられる。

ここで、事例 14 と事例 16 で確認した「*mꜣʿty* の船のソカル」は何を意味しているのかという問題を検討してみたい。この語句は*Skr* と *mꜣʿty* を結びつける *n* によってその解釈を困難にしている。*n* は「～に」「～のために」といった意味を示す前置詞として利用される他、間接属格を形成し「～の」を意味する属格形容詞として利用される[263]。前者は、通常動詞の与格として利用されるため、翻訳に示した通り後者のように属格と捉え「～の」と解釈するのが妥当であると考えられるが、この解釈では下界の神ソカルが二隻のマアトに属するという関係となるため、意味は不明瞭なままであり、ソカルと *mꜣʿty* の船に何らかの相関関係があることのみが明らかである。*Skr n mꜣʿty* の記述は、第 2 章で検討したセシェムネフェル/メテティの偽扉の碑文中にも確認されたが（事例 12、13）、故人の持つ称号の一部として記述されており、情報が断片的であることから、その内容は不明瞭であった。

しかし、この*Skr n mꜣʿty* の新たな解釈の可能性を示す碑文がメディネト・ハブ神殿のレリーフに刻まれている（図 3-3）。これは、管見の及ぶ限りではソカルと *mꜣʿty* の関連を示す唯一の新王国時代の史資料であるが、古王国時代と中王国時代のソカルと *mꜣʿty* の関係の理解の一助となる記述を含む。このレリーフのなかで、ラメセス 3 世は崇拝の対象であるソカルの名称を様々な名称で呼び、その呼び名のなかに以下の碑文が刻まれている。

[事例 17]

n Skr m mꜣʿty

mꜣʿty の船の中のソカルのために

---

[262] Faulkner 1977, 230; Carrier 2004, 1502-1503.筆者も以前の研究において同様の解釈を示した（肥後 2018 161）。

[263] 正しくは *ny* であるが、基本的に表記されない（Borghouts 2010, 303）。

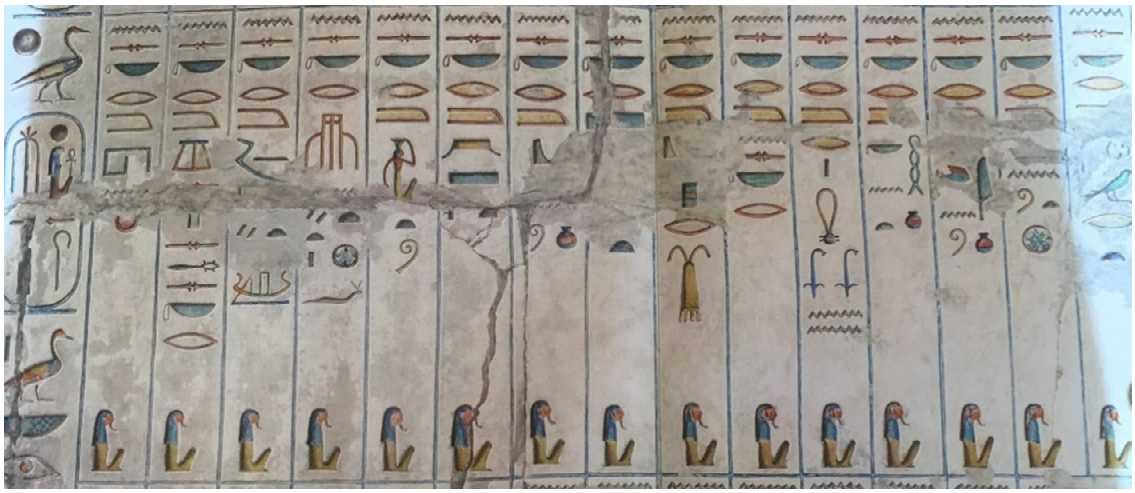


図 3-3　メディネト・ハブ神殿のレリーフに刻まれたソカルの崇拝の場面
事例 17 の碑文は左から数えて 3 列目のソカルの名称の欄に記される
（*Medinet Habu IV*, Pl. 202 を一部改変）

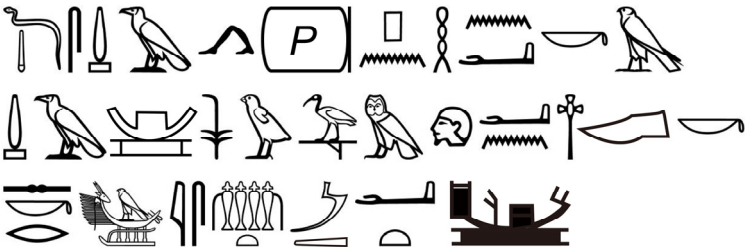
ここで注目すべきは、*Skr* と *mꜣʿty* が *n* ではなく前置詞 *m* によって結ばれているという点である。*m* が前置詞であることは明らかであり、この *m* は通常、同格の「～として」もしくは「～に」や「～の中の」といった場所を示す前置詞として用いられる。ここでは *mꜣʿty* は船の限定符を伴うことから、船がソカルと同格を示すものであるとは考え難いため、*m* が何らかの場所を指すと考えるべきであろう。実際に、同レリーフ上の他のソカルの呼び名にも前置詞 *m* によって「～（場所）のソカル」（*Skr m ~*）と記される例は散見される[264]。したがって、筆者はここで記述された*Skr m mꜣʿty* をソカルが「*mꜣʿty* の船」の中にいることを描写した呼び名であると解釈した。あくまで可能性にすぎないが、船の中にいるソカルは、マアティの船上に立つ隼のうちの一つかもしれない。前章のパレルモ・ストーンや「ピラミッド・テキスト」に記された *mꜣʿti* の限定符に見たように、初期の時代における *mꜣʿti* の船上には、二羽の隼が記されていた。アンテスは、この隼のうち船の前方に立つ一羽をソカルであるとする興味深い推論を提示した[265]。彼の推論を検討するため、その根拠となる以下の「ピラミッド・テキスト」の一節の内容を示したい。

---

[264] 例えば、最も右の列の二段目：「大いなる街におけるソカル」（*Skr m niwt wrt*）や右から数えて 8 列目の三段目：「天におけるソカル」（*Skr m pt*）、および左隣の「大地におけるソカル」（*Skr m tꜣ*）などが挙げられる。

[265] Anthes 1957, 89. さらにアンテスは、もう一方の隼がホルスと同一視された王であると考察しているが、ガバラとキッチンは王が隼であるとするこの推論の論拠の乏しさを指摘している（Gaballa and Kitchen 1969, 14）。

[事例 18]　*Pyr.* 1429a-1429c　Utterance 566



[1429]

[a]　*ḏd-mdw swḏ3 P pn ḥnˁ.k Ḥr*

[b]　*ḏˁi sw Ḏḥwty m-tp ˁnḏ.k*

[c]　*Zkr is ḫnti mɜˁt*

言葉を話すこと。この *P* を運べ、ホルスよ！

彼を汝の羽根の上へと運べ、トートよ、マアトの船の前にいるソカルとして！

この事例において、*mɜˁt* は、*mɜˁt* の表音文字と一隻の船の限定符によって記述される。したがって、字義通りには、翻訳に示した通り、「マアトの船」と読まれる。しかし、アンテスはこの事例の船の記号（ ）と、事例 3 や事例 4 で確認した「二隻のマアトの船」の限定符(、)や、パレルモ・ストーン上の *mɜˁti* の船の限定符(など)との類似性から、この *mɜˁt* の語は、双数形を示す記号が記述されていないものの、実際には *mɜˁti* として記されていると仮定した。この仮定にしたがって再び事例 18 に目を向けると、「*mɜˁti* の船の前にいるソカル」と読むことができる。この内容から、アンテスは事例 4 や事例 6-10 に見る限定符上の二羽の隼のうち、その前方に立つ隼がソカルであると考察した[266]。

この解釈は、事例 17 で確認したメディネト・ハブ神殿のレリーフ上の*Skr m mɜˁty* の *m* が指す内容に具体性を与えるものであり、また、本章の主な考察対象である「コフィン・テキスト」上の*Skr n mɜˁty* にもより明確な解釈の可能性を示すものである。つまり、事例 14、事例 16 に見た *Skr n mɜˁty* は、実際には事例 17 と同じく*Skr m mɜˁty* であり、すなわち『「*mɜˁty*

[266] Anthes 1957, 89.

の船」の中のソカル』を意味する可能性が考えられるのである。しかしながら、筆者はこの一連の解釈は、史料の解釈上の仮定を繰り返したものであるため、容易に受け入れることが難しいと考える。まず、事例 18 で見た *mꜣʿt* の記述は、船の特徴は他の事例に示される *mꜣʿti* の限定符と類似しているものの、*mꜣʿt* が双数形であることを示す記号を一切記していない点に疑問が残る。例えば、事例 3 はこの事例と同じくペピ一世のテキストに記されるが、船の限定符に続いて双数形の記号（𓏺𓏺）が刻まれている。改行や欠損によりこのような記号が省略もしくは判読不可となる可能性も考えられるが、*Pyr.* 1429c は続く *Pyr*. 1429d と同列内で連続しており、また前後に欠損も見受けられない[267]。そのため、ここで *mꜣʿt* は意図的に単数形として記述されていると考えるのが自然であろう。また、*Pyr.* 1306c に記述されるように、*mꜣʿti* の船とは別種の単数形で示され、*Pyr.* 1315a の *mꜣʿti* と同種の限定符を伴う「マアトの船」も確認されている[268]。そのため、本来単数形として解釈されるべき事例 18 の *mꜣʿt* をソカルとの関連のみから *mꜣʿti* であると解釈する点には、文字の表記法の観点からは難しい。このアンテスの解釈はソカルと *mꜣʿti* の具体的な関係を示す魅力的な解釈ではあるものの、筆者は仮定を重ねたこの解釈を全て受け入れることはできない。したがって、あくまで解釈の一つとして示すに留め、事例 14、事例 16 における「『*mꜣʿty* の船』のソカル」が意味する内容は、現時点では明らかにはできないと考えた。

最後に、ソカルとの直接的な関係ではないものの、古王国時代の「パレルモ・ストーン」からソカルとの関連を示唆すると考えられる呪文第 659 章の事例を提示する。この事例はすでに第 2 第 2 節で提示しているため、事例の翻訳と解釈を提示するのみに留める。

[事例 11]　Spell 659 *CT* 6, 280a~d　[Pap. Gard.2]

280 [Pap. Gard.2]

[a]　*r n smꜣ-tꜣ*

[b]　*inḏ-ḥr.k, kꜣ ʿnḫt nb ṯḥnt m ḥb mꜣʿty*

[c]　*hꜣ*(*i*)*.i r wiꜣ.k*

[d]　*gwꜣ r rdw mi Ḥmn iḫm*(*w*) *wrḏ*

---

[267] *Pyr.* 1429c-1429d; Allen 2013, PT566, 1429b-c-1429d.
[268] 第 2 章註 159 を参照。

着岸するための呪文。

万歳！おお、西方の雄牛、「*mꜣʿty* の祭」のなかのファイアンスの主よ。私は、ヘメン、疲れを知らない者のように階段にきつく結びつけられた汝の船へと下る。

第 2 章第 2 節で述べた通り、字義通りには「二柱のマアト」の祭と読まれるべきこの事例は、実際には *mꜣʿty* の祭と呼ばれるソカルに関連する祭を意味した可能性が高い。「コフィン・テキスト」上の *ḥb mꜣʿty* の記述はこの事例のみであり、この語句が太陽神への形容辞の一部として用いられているため、*ḥb mꜣʿty* の指す具体的な内容を文脈から考察することは難しい。*CT* 6, 280c に記述された「汝の船」（*wiꜣ.k*）は、おそらくここでソカルの関連を示す記述であると解釈した *ḥb mꜣʿty* ではなく、むしろ *mʿnḏt* や *msktt*、あるいはその他の太陽神の船としての *mꜣʿty* の船を指していると考えられる。

ここまで、中王国時代における *mꜣʿty* の内容を下界の神ソカルとの関係を持つ一側面に注目し、その内容を「コフィン・テキスト」上の記述を中心としながら考察した。事例 14 の事例は、死者が死後の危険から逃れた理由として、自身が*Skr n mꜣʿty*、つまり「*mꜣʿty* の船のソカル」であることを描写している。同様の*Skr n mꜣʿty* は、事例 16 の呪文第 660 章上において独立した神格である「二柱のマアト」（事例 15）とは別の役割を持つものとして記述される。この語句は、字義通りには「*mꜣʿty* の船のソカル」と訳されるが、「～の」を指す内容は、現時点においては明確に理解することは難しい。しかし、メディネト・ハブ神殿のレリーフ（事例 17）においてソカルの別名が「*mꜣʿty* の船の中のソカル」（*Skr m mꜣʿty*）と呼ばれるように、「コフィン・テキスト」やセシェムネフェル/メテティの称号における*Skr n mꜣʿty* もまた、「*mꜣʿty* の船の中のソカル」というように解釈されるという可能性は十分に考えられる。実際にアンテスの指摘する通り、ソカルに関係する最初期の *mꜣʿty* の船には、二羽の隼が立っており、そのうちの一羽が隼の姿を持つ神であったソカルであると解釈することも不可能ではないといえよう。事例数や文脈的に解釈できる情報が限定されることから、これ以上の議論の進展は難しいが、本節における事例の検討から *mꜣʿty* がおそらくソカルの位置する船の名称として描写されていることや、このソカルと *mꜣʿty* の語の組み合わせがソカルの一種の形容辞として利用されることが明らかとなった。加えて、これらの点は、第 2 章において検討したパレルモ・ストーン上の *ḥb* と船の記号の組み合わせを *ḥb mꜣʿti* と呼ばれるソカルの船の祭であるとする解釈に、より信憑性を与えるものである。

第３節　独立した神格としての「二柱のマアト」

「死者の書」における二柱の女神のような独立した神格として明確に分類される *mꜣʿty* の記述は「コフィン・テキスト」においては二例が確認されるのみであった。第５節の事例 24 に後述されるように、神格として解釈されうる事例は他にあるものの、本論文においてはこれらの事例は特定できない事例として取り扱う。独立した神格として「二柱のマアト」(*Mꜣʿty*) の一例は、既に検討した呪文第 660 章の事例 15 において確認しているため、呪文の内容や翻訳・解釈に関する言及は割愛し、事例の内容のみ考察する。

事例 15, 16　Spell 660　*CT* 6 282a~f [B1Bo]

282 [B1Bo]

[a]　*ḫpr.n N pn nn ḫprt pt, nn ḫprt tꜣ*

[b]　*hḏn pw n m-ḫ psw n N pn*

[c]　*iwt*(*y*) *sḫm wꜣwꜣ im.f*

[d]　*nsw pw pr*(*i*) *fnd*

[e]　*rdi.n mꜣʿty ʿ.sn r N pn*

[f]　*ḥḳr.t*(*y*) *hrw n skrkr.f m Skr n mꜣʿty*

この N は天が存在へとなる前に、大地が存在へとなる前に存在となった。彼はこの N が調理した後の状態のヘジェン植物、ウアウアがそれに対して力を持たない物(植物)である。

彼は王、鼻が前に出た者である。*mꜣʿty* は彼女らの腕をこの N に置いた。彼女らが空腹である状態で、このセケルケルの日に、*mꜣʿty* の船のソカルとして。

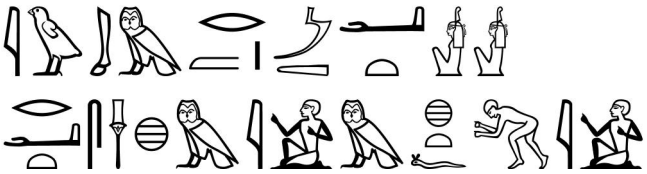
二例の *mꜣʿty* のうち、筆者は *CT* 6, 282e の *mꜣʿty* が独立した神格としての「二柱のマアト」の明確な描写であると考える。その理由には、第一に「ピラミッド・テキスト」に見た事例（事例 1, 2）と同様に、*mꜣʿty* が *sḏm.n.f* 形の文章の主語となり、「置く」（*rdi*）という動作を行っていることが挙げられる。*mꜣʿty* が船の意味で記述されている場合には、このような動作の主語としては描写されない。第二に、この *mꜣʿty* が置く目的語が、「彼女らの腕」（*ʿ.sn*）

であることが挙げられる。この表現は、明らかに *mꜣʿty* が腕を持つ複数の神であることを明示している。最後に、状態形で示された「彼女らが空腹である状態で」（*ḥkr.t(i)*）もまた、その理由は明らかではないものの、*mꜣʿty* が空腹である状態にある二柱の人格神として描写されていることを示している。この「腕を置く」（*rdi ʿ*）は宗教文書にしばしば見られる表現であり、主として神々が死者に力を与える意味で用いられる[269]。この表現から、事例 15 の「二柱のマアト」が棺の所有者に力を与えていることがはっきりと読み取れる。神格化された二柱のマアト女神が、死者に対して力を与える描写は稀であり、「二柱のマアト」が死後の世界の危険から身を護る力を与える、影響力を持った神であることが読み取れる。

事例 19　Spell 149 *CT* 2, 250b-c　[S1P]

[b]　*iw wḥm*[270]　*r-gs mꜣʿty*[271]

[c]　*rdit*[272]　*sḫm.i m ḫft.i*



---

[269] 古王国時代の「ピラミッド・テキスト」にも既に同様の表現が見られる。例えば、「ピラミッド・テキスト」呪文第 600 番では、カーを受け継ぐため、故王がアトゥム神にその腕を置く(力を与える)ことを求めている（*Pyr*. 1653a-b）。

[270] 主語が省略された *sḏm.f* 形（Gardiner 1957, 339-340）となっており、解釈が分かれている。バルゲとカリエが一人称単数の接尾代名詞 *.i* が省略されていると解釈する一方で、フォークナーは、非人称の受動文として解釈している（Barguet 1986, 427; Carrier 2004, 360-361; Faulkner 1973, 128）。「繰り返す」を意味する動詞 *wḥm* は他動詞であるため、バルゲやカリエのように「私は繰り返す」とした場合、目的語が欠如した不完全な文となる。したがってここではフォークナーの解釈にしたがい「それは繰り返される」と受動文として解釈した。ここで省略された「それ」は、おそらく *CT* 2, 249a の「私はあの敵のために訴えた」（*iw.n.i ḥr ḫft pf*）の内容全体を指している。

[271] *mꜣʿty* の表記について、S1P、S1Chass、S1C[b]、S2C[a] には *mꜣʿty* と双数形で、S2C[d]、S1C[a] では *mꜣʿt* と単数形で記されている。両方の解釈が考えられるが、S1P、S1C[b]、S2C[a] の の表記のように、女神の限定符が意図的に二つ書かれていることを踏まえると、正しい表記は *mꜣʿty* であると考えるべきであろう。カリエは *mꜣʿt* の表記を持つ S1C[a] を解釈の資料としながらも、ここでは双数形として解釈している（Carrier 2004, 360-361）。

[272] について も様々な解釈がなされている。フォークナーは、 を「二柱のマアト」を修飾する完了分詞とし「私に力を与えた(マアト)」(*rdit sḫm.i*)としている（Faulkner 1973, 128）。しかしながら、「私に」と与格として解釈する場合、接尾代名詞(*.i*)の前に前置詞 *n* を必要とするため、やや意訳であると考えられる。バルゲとカリエは について、*rdi.t*(*w*)であると判断し、「人」（*t*(*w*)）を主語とした関係形と解釈した上で、前者は「人が私に対して力を与えた(二柱のマアト)」、後者は「人が私に、力を持つことを許可した(二柱のマアト)」としている（Barguet 1986, 427; Carrier 2004, 360-361）。しかし、両者の解釈はいずれも関係形の中に目的語を含む。これらの解釈を踏まえ、筆者は *rdit* を使役の機能を果たす動詞 *rdi* の完了分詞、*sḫm.i* を *sḫm* を動詞とする名詞化された仮定法 *sḏm.f* 形として解釈し、本文のような訳を示した。字義通りには「私が力強くあらんとすることを置いた *mꜣʿty*」となり、この解釈にしたがえば、文法的な問題も生じない。

それは、私を私の敵に対して力強くする *mꜣty* の側で繰り返された。

呪文第 149 章は、変身の呪文の内容を含む、棺の所有者に力を与えるための呪文である[273]。「人の隼」（*bik rmṯ*）が具体的に指す内容は不明であり、人間の体を持つ隼あるいは隼の体を持つ人間、もしくは他の姿を指すのかはわからない[274]。しかしながら、いくつかのバリエーションでは「隼」（*bik*）のみが表記されているため、おそらくは人の要素を備えた、神聖な隼を指すのであろう[275]。「人の隼」へと変身した棺の所有者は、呪文の中で彼の敵に対して神聖な力を得て、その者の敵とその家族を征服している。この「人の隼」への変身は、「西方の者たちの長」すなわちオシリス[276]によって認められている。

CT 2, 250b、*CT* 2, 250c では、オシリスの前で発せられた死者の叫びが「二柱のマアト」の前で繰り返されている。ここでは「二柱のマアト」は、棺の所有者に対して「力」（*sḫm*）を与えている。呪文第 660 章の事例 15 と同様に、ここでの「二柱のマアト」は死者に力を与える独立した神として描写されていることがわかる。

第４節　太陽神との関係

前章では、「ピラミッド・テキスト」に記された *mꜣʿti* が独立した神格としての側面や、ソカルとの関連を示す側面と併せて、太陽神の所有する船としての側面を持つことを明らかにした。この側面を示す *mꜣʿty* の記述は、事例 4 や事例 5 において「彼（太陽神）の」を意味する接尾代名詞を伴い、太陽神が所有する船であることを明確に示していた。このような太陽神の船を指す *mꜣʿty* の記述は、「コフィン・テキスト」においても少なくとも二例確認された。本節では、これらの二つの事例の分析を進めていく。

---

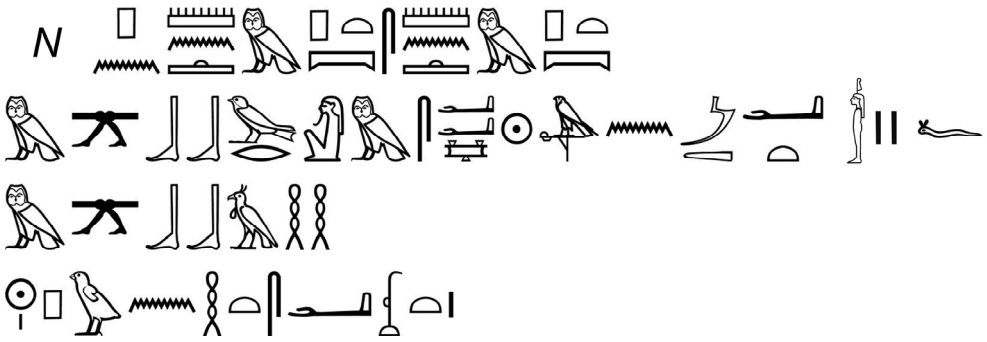
[273] 呪文の題目は「(人間の)隼になること、墓域で人をアク(*ꜣḫ*)にすること、その者の敵に対して、人に力を与えること、人がリネンのサンダルを履き、腰巻きを身に着けた状態で話すこと」（*ḫpr m bik* (*rmṯ*) *sꜣḫt s rdit sḫm s m ḫft*(*y*)*.f ḏd s ṯb*(*iw*) *m ḥḏty idmi sd*(*w*) *mnḏ*）である（*CT* 2, 226b-227b）。

[274] *LGG* には「人間の（持つ）隼」として、属格関係として説明されているが、呪文の中では一種の神のように表現されている（*LGG* 2, 769）。

[275] S1P、S1Chass、S2C$^{\underline{d}}$には「隼」（*bik*）のみ記される（*CT* 2, 226b）。

[276] 「西方の者たちの長」（*ḫnty imntt*）は、他の神々の形容辞としても用いられるが、多くの場合オシリスを指し、同様にこの呪文でもオシリスを表す語として用いられている（*LGG* 5, 783-786）。

事例 20　Spell 682 *CT* 6 312n~312q　[B1Bo]



312 [B1Bo]

[n]　*N pn mn m pt smn m pt*

[o]　*m sbb wr*[277]　*m sʿr Rʿ*[278]　*n mɜʿty.f*

[p]　*m sbb nḥḥ*

[q]　*hrw pw n ḥts rnpt*

このNは「大いなる者」に達する者として、

ラーを彼の *mɜʿty* の船へと登らせる者として、

年の終わりのこの日に[279]永遠に達する者として、天で永続し、天で安定した。

---

[277] 動詞𓉐𓅱𓇋𓏲*sb*(*i*)の解釈によって訳が異なっている。フォークナーは他動詞「送る」と捉え、*wr* を目的語とする分詞として訳し、一方でバルゲとカリエは自動詞「行く」と解釈し、*sbb wr* を主語とする名詞化された *sḏm.f* 形としている（Faulkner 1977, 248; Barguet 1986, 452; Carrier 2004, 1552-1553）。「大いなる者」（*wr*）はラーやオシリスをはじめとする様々な神々の別称として用いられる語であり、ここでは断定できないため、解釈の判断も困難な箇所となっている。筆者はここでの *wr* を前節（*CT* 6, 312m）の内容から、天にいる者、すなわち太陽神ラーであると解釈した。そしてこの *sbb* を他動詞「達する」の未完了分詞であるとし、「大いなる者(ラー)に達する者」と訳した。続く *sʿr* と *sbb* に対しても同様の解釈をとった。

[278] 𓇓𓅓に関して、カリエのみ𓇋（*Rʿ*）と𓅓（*Ḥr*）を別の神として捉えている。その解釈は不可能ではないが、𓅓は主として神の決定詞として使用される文字であり、加えてこのB1Boの他の呪文中での *Rʿ* は𓇓𓅓で示されている（Carrier 2004, 1552-1553; *CT* 6, 301; *CT* 6, 313: *CT* 6, 318）。したがって、𓅓は神の限定符として解釈されるべきであろう。

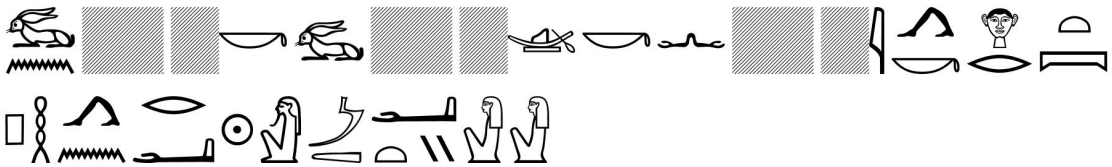
[279] 𓈖𓉔𓏏𓀀に関しては、この語のみで *nḥḥ* とするか、𓈖𓉔（*nḥḥ*）と𓏏𓀀（*hrw*）の二語とするか二通りの解釈が可能である。フォークナーは *nḥḥ* 一語とする一方で、バルゲとカリエは *nḥḥ hrw* の二語としている（Faulkner 1977, 248; Barguet, 1986, 452; Carrier 2004, 1552-1553）。文意・文法上どちらの解釈も可能であるが、筆者は𓏏𓀀に見られる表意文字を示す記号 ꜥ に着目し、*nḥḥ ḥrw* と解釈した。

呪文第 682 章は、死者が神々の世界で自身の正当性を示す、長大な内容の呪文となっている。しかしながら、テキストが B1Bo の一点しか発見されておらず[280]、また欠損が多いことや、棺の所有者を示す接尾代名詞の*.f* と*.s* の混在により、正確な解釈と内容の理解が困難な呪文となっている[281]。内容を簡潔にまとめれば、次の通りになる。

前半部分で呪文の所有者自身の出自の神的な説明がなされ、その後、イシスとネフティスによる問答がなされる。後半部分の内容は、おそらくは呪文の語り手である神官による発言であり、そこで死者が様々な力を備えており、正当性があることを主張している。その後死者の体はミイラとされ、死者が力を得て天に上がり、天に留まるというものである。

マアトの表現は呪文の末尾に見られ、双数形 *mꜣʿty* で示されている。動詞(*sʿr*)は通常、「登らせる」や「近づけさせる」を意味する使役動詞であり、ここで死者は、*Rʿ* を目的語、*mꜣʿty* を与格として「ラーを *mꜣʿty* へと昇らせる者」として表現されている。付記された限定符が船でないことから、この語の意味は不明瞭であったが、*mꜣʿty* がラーの昇る行き先であり、また三人称の接尾代名詞*.f* を伴うことから、「ピラミッド・テキスト」の事例（事例 4、事例 5）と同様に、ここでの *mꜣty* は太陽神の船を指していることが読み取れる。

事例 21　Spell 693 CT 6 326o~326p [B15C]



326 [B15C]

[o]　*wn⋯.k wn⋯.k nn*(*?*)*⋯ḏꜣi*[282]*.k ḥrt*

[p]　*pḥ.n Rʿ mꜣʿty*

---

[280] 呪文第 660 章から呪文第 674 章は全て BiBo のみに記述される（*CT* 6, 280-*CT* 6, 303）。

[281] Faulkner 1977, 249.

[282] 欠と語の最初の部分が欠落しているため、語の特定は難しい。表音文字(*i*)と決定詞と予想されるから、フォークナーは「横切る」(*nmi*)とし、カリエは、「(乗り物によって)走り抜ける」(*ḏꜣi*)としている。どちら他動詞として類似した意味を持つため、どちらの解釈も可能であるが、筆者はこの呪文がラーの船の航行に言及する内容であることを踏まえ *ḏꜣi* と推測した。Faulkner 1977, 258-259; Carrier 2004. 1584-1585.

//////////汝が天を横切るのは、ラーが *mꜣʿty* の船へ達した時なのである[283]。

呪文第 693 章は、B15C のみに現存する呪文であり、欠損部分も多いものの、簡潔な内容となっているため呪文の大意を推測することができる。呪文のなかで、神々は棺の所有者に対して「万歳！」と言い、祝福の言葉を発し、死者が力を持つことを望む。死者は祝福の言葉をラー・アトゥムやラー、トートをはじめとする神々から受けている。*mꜣʿty* の表現を含む箇所は、ラーによる二度目の祝福の後に見られる。

呪文第 682 章の事例と同様に、ここでの *mꜣʿty* もラーの到達する船の名称として示されていることが見てとれる。「汝」は死者を指すことから、ラーが *mꜣʿty* の船へと達した時に、死者が天を船で横切ることが可能となることが分かる。

以前の研究において、筆者はこの二つの *mꜣʿty* の事例を「太陽神の一種の到達点」であると推測した[284]。しかし、「ピラミッド・テキスト」で確認した船の限定符を伴う *mꜣʿti* の記述の発見により、ある種の「到達点」であるとする抽象的な理解から、太陽神が到達・乗船する船の名称であることが明らかになった。加えて、これらの事例は太陽神の船として描写された *mꜣʿti* もしくは *mꜣʿty* の船が、死者によってラーを登らせる行き先であること（事例 19）、そしてラーがこの船に到達した後に死者が天を横切ることができることを示している（事例 20）。特に後者の描写は、*mꜣʿty* と太陽神の関係だけでなく、太陽神の *mꜣʿty* 船による航行が死者の復活にも密接に関連していたことも示唆している。

第５節　その他の *mꜣʿty* の事例

「コフィン・テキスト」に記述された 13 例の *mꜣʿty* の記述のうち、本章第 3 節から第 4 節では、この語が持つ明確な側面を示す 6 例の事例を詳細に分析した。これらの事例にみる *mꜣʿty* の内容は、「ピラミッド・テキスト」や「パレルモ・ストーン」の事例の検討により導き出された側面と合致し、各側面の分類に基づく蓋然性の高い検討と分析が可能であった。

---

[283] *CT 6*, 326n、*CT* 6, 326o の翻訳に際して、フォークナーは *CT* 6, 326n を主文、*CT* 6, 326o を従属文とするとし、バルゲ、カリエはそれぞれを主文としている。筆者は *CT* 6, 326n の移動の動詞 *ḏꜣi*（もしくは *nmi*）に注目し、*CT* 6, 326 n を *sdm.f* 形の名詞化、*CT* 6, 326o を強調された副詞相当語句を指す強調構文であると解釈した（Faulkner 1977, 258-259; Barguet 1986, 154; Carrier 2004, 1584-1585）。

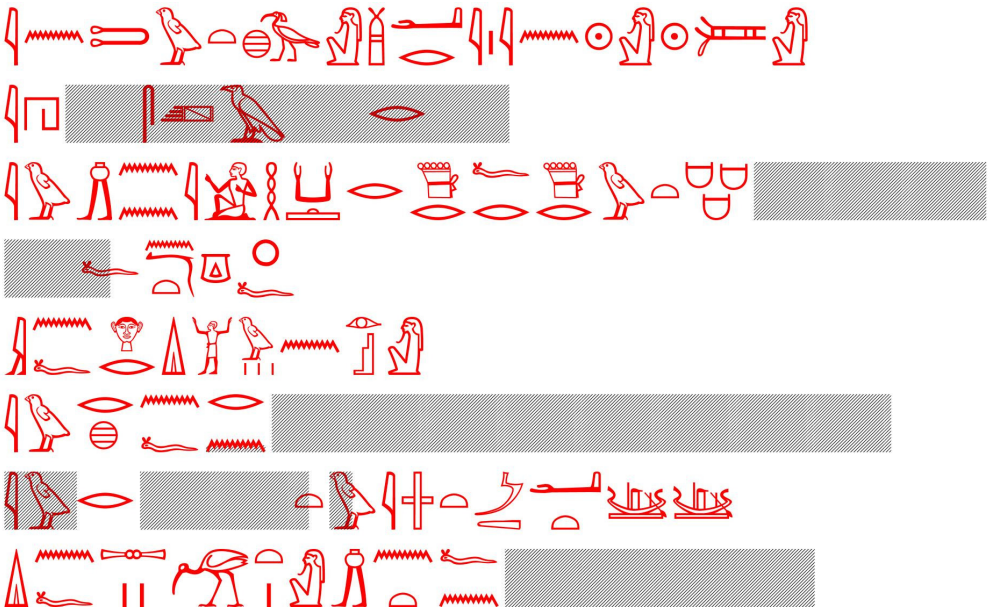
[284] 肥後 2018, 164-165.

その一方で、残る 7 例の *mꜣʿty* の記述は、*mꜣʿty* のその他の側面の可能性を示す事例や、文脈や記述法の不明瞭さから上述したの三つの側面の分類に該当しないと判断した事例であった[285]。また、*mꜣʿty* が意味する内容が理解できないことから、慎重な解釈を必要とする事例も残している。本論文では、これらの 7 例を(a) ラーもしくはソカルの船、(b)ニスバ形容詞、(c)不明瞭な事例、(d)単数形 *mꜣʿt* の異形の 4 種類に分類した。以下、これらの事例をその文脈とともに個別に考察し、可能な限りその内容を探求していく。

(a) ラーもしくはソカルの船の事例

「コフィン・テキスト」の *mꜣʿty* の全事例のうち、唯一船の限定符を語尾に伴う事例が呪文第 995 章に確認される。しかしながら、この記述は太陽神の船である可能性が高いものの、以下の翻訳に示すとおり、内容の不明瞭さから船の具体的内容を把握することが難しい。それゆえ、本節ではラーもしくはソカルのいずれかの船を示す事例として検討する。

[事例 22]　Spell 995 *CT* 7, 210i~211a　[Pap. Gard. 2]



[285] 7 例のうち事例 21 を除く全てをファン・デル・プラスとボルヒャウトは「二柱の正義の女神」(Two Goddesses of Justice)として分類するが、この後の検討で明らかであるように、いずれの事例も「二柱のマアト」であるとは言い難い（van der Plas and Borghouts 1998,122）。

210o [Pap. Gard.2]

[i][286] *in ṯwt ꜣḫ ꜥpr i in*[287] *Rꜥ-Ꜣtm*[288]

[j] *ih*[*r*[289] *wḥm sp-4 i in*][290] *siꜣ r//////*

[k] *iw in*(*w*) *n.i ḥkꜣw r ḏr.f r ḏrwt*[291] *pḥw*(*?*)[292]*////////////*[*sꜣt*][293]

[l] [*iw ḏbꜣ.n*][294] *.f nsr.f*

[m] *ii.n.f ḥr di ḥꜣw*(*?*) *n Wsir*

[n] *iw rḫ n. f rn ////////////////*

[o] *iw r*[*ḫ n. f rn*][295]*//////////////ꜥt*(*?*) *imyt mꜣꜥty*

211 [Pap. Gard.2]

[a] *di*(*w*)[296] *n.f ṯsw gmt int.f n* [*.i sꜣt*]*////////*

「汝は授けられたアク[297]であるか？」ラー・アトゥムは言う。「満足せよ。4 回繰り返し」シアは…[298]に対して言う。全ての魔術は娘の(？)/////////////////*ḏrwt* から私にもたらされた。彼は彼の玉座を占有した。彼はオシリスに賞賛を与える者のゆえにやってきた、なぜなら彼は//////の名前を知っているからだ。なぜなら[彼は]///////////、*mꜣꜥty* の船の中にいる者の[名を知っているからだ]。

---

286 翻訳部分の *CT* 7, 210i~211a までの文字は全て赤色のインクで記述される。赤で記された箇所は、通常呪文の冒頭や末尾、その題目を示す際に使用されるが、この呪文においては赤のインクで記された箇所が翻訳部分の他にも *CT* 7, 210c や *CT* 7, 210e などに散在する。

287 挿入句的用法（Parenthetic）として解釈した（Allen 2014, 302-303）。

288 バルゲはラーとアトゥムを別の神格として解釈している（Barguet 1986, 527）。

289 「満足している」(*hr*) の命令形。*i* は古期エジプト語に見られる接頭辞である（Allen 2014, 210）。

290 Pap. Gard. III より補足。

291 不明瞭な語。バルゲは訳を示していないが、フォークナーは続く文字𓅱が「北端」を意味する *phww* の限定符と一致することから、「一番端の部分」と訳している（Barguet 1986, 527; Faulkner 1978, 103, n. 5）。

292 モーレンは𓅱の語のみで「湿地」を意味する *phw* を意味する可能性を示唆する（van der Molen 2000, 137）。

293 Pap. Gard. III より補足。*CT* 7, 210k の文章の何らかの構成要素であるが、前部に欠落が多く、翻訳はできない。

294 Pap. Gard. III より補足。

295 Pap. Gard. III より補足。*ḫ*、*n*、*f* の文字は確認できないが、*CT* 7, 210n と並んで *iw* に始まる *sḏm .f* 形動詞文でありことや目的語であると想定される *rn* の記号が確認されることから、*CT* 7, 210n と同様に *iw rḫ.n.f rn* であると推測した。

296 受動文 *sḏm.f* として解釈した（van der Molen 2005, 1261）。

297 いわゆる霊の一種であるが、バー(*bꜣ*)や、カー(*kꜣ*)、アクをはじめとする古代エジプトの魂に関する諸概念の正確な理解や訳語の提示は難しい。これらの概念の理解については、吹田 1991 を参照。

298 フォークナーは「私に」(*n.i*) を挿入している（Faulkner 1978, 103）。

「トキの二つの結び目」は彼に与えられた、彼が//////////の(？)娘を私にもたらすために。

翻訳に示される通り、テキストに多くの欠落部分があることから、呪文の内容理解は極めて困難なものとなっている。呪文第 995 章には明確な題目は記されていないが、呪文の末尾の記述から「トキの二つの結び目」を知ることを示す目的で利用された呪文であることがうかがえる[299]。この呪文のように「コフィン・テキスト」の呪文の一部は、死後の世界における神的存在や死後の世界に待ち受ける危険の名前を「知る」ことで、来世の旅の安全を保障する役割を持つ。この事例のなかで、*mꜣʿty* の語には二隻の船の限定符が付記され、ニスバ形容詞 *imi* とともに示された何らかの神「*mꜣʿty* の船の中にいる者」への形容辞の一部として記される。呪文中にラー・アトゥムが登場する一方で、ソカルに関する記述が呪文中にない点から、この *mꜣʿty* を太陽神の船の側面であると推測が可能である[300]。しかし、呪文の欠損や呪文中に度々記される「彼」*f* が特定できない点から、前後の文脈にあまりにも不明瞭な点が多いため、本論文ではこの事例を *mꜣʿty* の「太陽神の船」と断定せず、太陽神、ソカル、もしくはその他の意味を持つ神聖な船であるという言及に留めたい。*mꜣʿty* の語尾に付記された限定符に注目すると、船の特徴はデ・バックの資料を確認する限りでは、「ピラミッド・テキスト」や「パレルモ・ストーン」に見られた二羽の隼を載せた船の形ではなく、*wiꜣ* など一般的な意味での「聖なる船」を示す際に利用される聖船の記号𓋴 (P3) と類似する。しかし、呪文 995 章が記された史料は Papyrus Gardiner II でのみであり、同史料上に記された文字は、碑文に記される神聖文字から神官文字に崩された書体となっている。そのため、オリジナルのテキストからパピルス上に筆写される際に船の記号が特殊な文字から一般的な聖船の記号へと略記された可能性も考えられる。

(b)　ニスバ形容詞

女性名詞である *mꜣʿt* の語は、双数形として示される場合に双数形女性名詞の語尾-*ty* を伴い *mꜣʿty* と記される。しかし、この用例とは別に、*mꜣʿt* はニスバ形容詞（nisbe-adjectives）[301]

---

[299] *CT* 7, 211j-k: *mk rḫ.n.i ṯswy gmt wḥm sp 4*「見よ、私はトキの二つの結び目を知っている。4 回繰り返し」.

[300] 実際にバルゲはここでの *mꜣʿty* を“deux barques solaires *mꜣʿt*”と訳している（Barguet 1986, 527）。

[301] Gardiner 1957, 61-63.

として記述される場合にも *mꜣʿty* と記述される。このニスバ形容詞は従来、前置詞を形容詞化するものであるが、名詞にも適応される場合があり、*mꜣʿt* の語もその一つに挙げられる。ニスバ形容詞として変化した場合、*mꜣʿty* は「マアトに属する～」や「マアトの」という形容詞になり、また語形変化を伴わず名詞化され「マアトに属する者」や 「マアトの者」の意味を持つ。このニスバ形容詞の名詞化としての *mꜣʿt* の表現は、古代エジプト人に好まれていたようであり、実在した人名にも利用されている[302]。双数形で示された *mꜣʿty* と同じ綴りで表記されることがあるため、これらの区別は文脈で判断する必要がある。「コフィン・テキスト」において、筆者は *mꜣʿty* と記述されたニスバに由来する表現を次の事例 23 に確認した[303]。双数形ではない *mꜣʿt* の記述は、本論文の研究対象外であるが、多くの先行研究では、この事例をニスバではなくマアトの双数形であると理解されている[304]。そのため、改めてその内容を改めて吟味し、以下の事例が双数形ではなくニスバとして表現された *mꜣʿt* の事例であると解釈する論拠を提示しておきたい。

[事例 23]　Spell 171 CT 3 41c~44b　[B2Bo]

41 [B2Bo]

[c]　*dmḏ iḫmty*

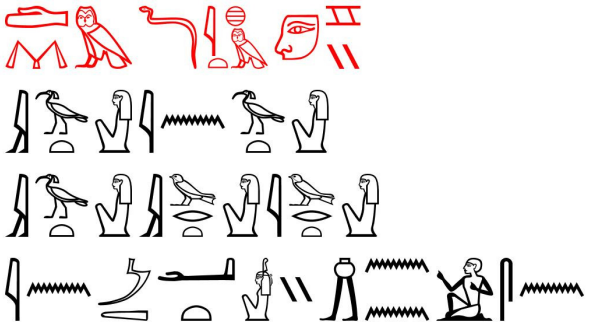
42 [B2Bo]

[a]　*ii ꜣḫt in ꜣḫt*

[b]　*ii wrt i*[*n*][305]　*wrt*

43 [B2Bo]

[a]　*in mꜣʿty in n.i sn*



---

[302] 例えば、メトロポリタン美術館に所蔵されるマアティ（*Mꜣʿty*）の石碑（The Metropolitan Museum of Art 14.2.7）は、第一中間期から中王国時代にかけてのニスバ形容詞として記述されたマアトの存在を示す好例である（Arnold and Arnold 2015, 43-45）。

[303] 複数形のニスバ形容詞の名詞化として記された事例も「コフィン・テキスト」上に数例見受けられる（e.g. *CT* 4, 218a; *CT* 4, 344d; *CT* 7, 489d）。複数形で示される場合は *mꜣʿtyw* と表記され、その多くの場合において *-tyw* の表音文字𓅱（G4）が記されるため、識別は容易である。

[304] Barguet 1986, 343: “les Deux Maât”; van der Plas and Borghouts 1998, 122: “Two Goddesses of Justice”; Carrier 2004, 424-425: “les Deux Maât”.

[305] M5C、M2NY、B1L、B9C、B1Bo、B2Be より補足。

[b]　*iḫmwt imntt sn i3btt*

44 [B2Bo]

[a]　*ṯs-pḫr*

[b]　*sm3-t3 im.i, iw.i ḫr m3ʿt*

二つの川岸をつなぎ合わせること。

「(女性の)アク[306]は(ここに)来る」と(女性の)アクは言う。「(女性の)大いなる者」はここに来る」と(女性の)大いなる者は言う。彼らを私へともたらしたのは、「マアトに属する者」である。おお、西の川岸よ。東の(川岸)に口づけせよ。逆も然り。私を地にもたらせ。なぜなら私はマアトとともにあるからだ。

呪文第 171 章は、「二つの川岸をつなぎ合わせること」の呪文の一つである。呪文第 168 章、第 169 章、第 170 章のいずれも類似した題目となっているが、フォークナーはそれぞれの呪文の意図する内容は大きく異なると指摘する[307]。「二つの川岸」（*iḫmty*）は、「川岸」（*iḫmt*）の双数形であり、この呪文に見られるように西の川岸、東の川岸を指す。この二つの川岸はおそらくそれぞれが死と生の世界を暗示しており、この呪文によって、死者は死後の世界と現実世界を行き来できるようになる。この短い呪文の中で、マアトに関わる表現が二箇所にわたって見受けられた。

先述した通り、*CT* 3, 43a の *m3ʿty* の解釈は *m3ʿt* の双数形か名詞化されたニスバ形容詞かで分かれており、フォークナーのみが前者の解釈を示している[308]。文法の視点から考えると、*CT* 3, 43a は *in* に始まる分詞陳述の文章であるため、*m3ʿty* に続く *in* はマアトに対応する名詞化された分詞であり「～をもたらした者」と訳される。マアトは単数形、双数形に関わらず女性名詞であるため、ここで対応する分詞 *in* には女性形語尾である*-t* が付加され、*in m3ʿty int*~とされなければならない。しかしながら、この*-t* は現存する 10 種のテキストのいずれにも表記されていない。つまり、*-t* が付加されていない理由は、誤記ではなく *m3ʿty* が男性名

306 「アク」（*3ḫt*）と「大いなる者」（*wrt*）はともに女性形で表記されているが、その理由は不明であるが、全てのバリエーションに表記されていることから、呪文の所有者の性別とは無関係であると考えられる。

307 Faulkner, 1973, 145, n. 1.

308 Faulkner 1973, 145: “Māʿety,” n. 2: “Masc., therefore a *nisba*-form and not a dual ‘The Two Truths’.”

詞であると考えるのが適切であろう。そのため、この事例における *mꜣʿty* はフォークナーが示す通り、「マアトに属する者」を意味するニスバ形容詞として解釈されるべきであろう。この事例において「マアトに属する者」は、死者を「アク」と「大いなる者」のもとへと連れて行ったことがうかがえる。「アク」と「大いなる者」の役割が明確に描写されていないため、「マアトに属する者」の役割も不明瞭なままであるが、現世と死後の世界をつなげる役割に何らかの形で携わっていたことがうかがえる。

なお、*CT* 3, 44b のマアトの表現は、「マアトを所有している」ことから、「正義」や「真実」といった抽象的な概念であることは明白である。ここでのマアトは、人々が川岸を渡るために必要な条件であり、同時に人が死後なお所有することのできる概念でもあったことを示している。

(c) 不明瞭な事例

続く事例 24、事例 25 は、*mꜣʿty* の記述を持つものの、前後の文脈が不明瞭であることからそれぞれの *mꜣʿty* の語の指す内容の特定が困難な事例である。

事例 24　Spell 416 *CT* 5, 249a~250f　[S2C[b]]

249 [S2C[b]]

[a]　*r n ḳrst*

[b]　*pr*(*i*).*n.i, hꜣ*(*i*).*n.i*

[c][309]　*ḥs*(*i*).*i ḥst.n.i*

[309] 解釈と翻訳が研究者によって異なる：Faulkner 1977, 66: “I have sung what I should sing, what I have made is a cord(？)”; Barguet 1986, 159: “j’ai tressé ce que j’ai tressé, ce que j’ai fabriqué es tune cord”; Carrier 2004, 1028-1029: “Je n’ai chanté ce que j’ai chanté que parce qu’on a fabriqué une corde pour moi!”. 各翻訳の内容から文構造と動詞𓍿(*ḥs*(*i*))の解釈における相違が見受けられる。フォークナーは、*CT* 5, 249c の *ḥst.n.i* を完了関係形の名詞化とし、前接する *ḥs*(*i*).*i* の目的語としている。続く *CT* 5, 249d の *irt.n.i* も関係形の名詞化とした名詞文としている。動詞𓍿(*ḥsi*)に関しては、「歌う」と解釈している。カリエは *ḥs*(*i*).*i* を *sḏm.n.f* 形の名詞化とした強調構文としていると考えられる。強調構文としての解釈は、文法上は可能であるが、強調される副詞相当語句にあたる *CT* 5, 249d「人が私のために紐を作ったからだ」*ir*(*i*).*t*(*w*) *n.i ihmst* との関係には疑問が残る。𓍿に関しては、フォークナーと同じく「歌う」としている。バルゲはフォークナーと同様の文法解釈をとる一方で、𓍿*ḥs*(*i*)を「紡ぐ」を意味する語と解釈する訳を示している。
文法については、*CT* 5, 249c と *CT* 5, 249d は明確な前後関係が見受けられないため、それぞれ異なる文章であると判断し訳のとおりとした。動詞𓍿については、「紡ぐ」と「歌う」のいずれの動詞も全く同じ表記がなされるため、双方の解釈が可能である。しかし、

[d]　*irt.n.i ihmst*[310]

[e]　*wn.n.i sbꜣwy*[311]

[f]　*pr*(*i*)*.n.i ḥr rwḏ*[312]

[g]　*šsp*[313]*.n.i ʿIṯnw-sw*[314]

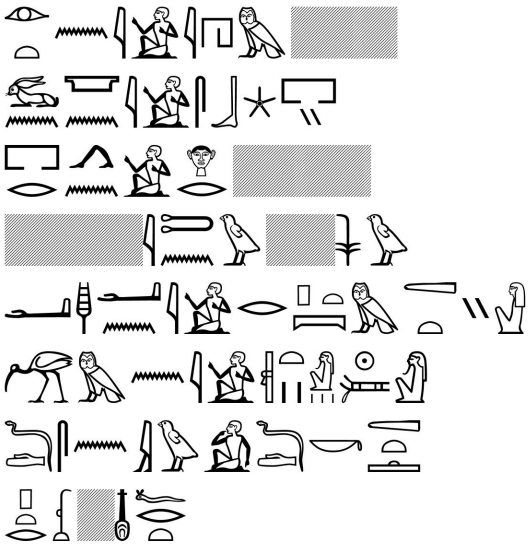
250 [S2C[b]]

[a][315]　*ꜥḥꜥ.n.i r pt m mꜣꜥty*

[b]　*gm*(*i*)*.n.i ist Rꜥ-ʿItm*

[c]　*ḏd.sn ii wi ḏd mꜣꜥt*[316]

[d][317]　*ptr nfrt*



続く *CT* 5, 249d においてイヘメセトの紐と呼ばれる紐が表現されること鑑み、𓋴𓏛を「紡ぐ」とした。その他の呪文に注目すると、*irt.n.i ihmst* と同種の内容を示すと考えられる表現が呪文 432 章(*CT* 5, 280f)に *iw ḥst n. i hmst* という形で見受けられる。両者を比較すると *CT* 5, 280f の *ḥst* は *CT* 5, 249d の *irt*「作ったもの」の代わりに使用されていることがわかる。この点においても、*CT* 5, 249c の *ḥst* は、「紡ぐ」を意味で捉えることが妥当であると考える。

[310] S2C[a]、B2Bo より補足。

[311] フォークナーは「2 つのドアは開かれた」と受動文 *sḏm*(*w*)*.f* 形としている（Faulkner 1976, 66）。

[312] B2Bo、B4Bo、M22C より補足。

[313] B2Bo、B4Bo より補足。

[314] *LGG* では一種の神格として説明されるが、詳細は不明である（*LGG* 1, 203）。また、辞書で記された *ʿIṯnw-sw* の限定符は B2Bo、B4Bo に見られるような𓂝の記号と一致しない。その他の限定符𓂝を持つ語に「（人に関して）不満を言う」という動詞 *iṯnw-sw* という語が挙げられることから、字義通りには「不満を言う者」と訳されるかもしれない。（Hannig 2006a, 451; 2006b, 129）。

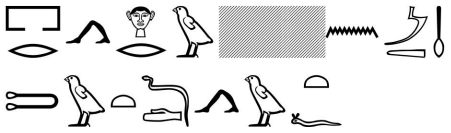
[315] カリエのみ、*ꜥḥꜥ.n.i r pt* を *sḏm.n.f* 形動詞文を名詞化した強調構文としている。Carrier 2004, 1028-1029.

[316] 史料によって表記が異なる。翻訳の底本とした S2C[b]には *ḏd. k mꜣꜥt* と表記されているが、次註の解釈に示す理由から、ここでは B2Bo、B4Bo の表記にしたがい、*ḏd mꜣꜥt* としている。

[317] *CT* 5, 250d-f に解釈の相違が見られる: Faulkner 1977, 66: “you see what is good, so go go up on the Stairway of Vindication, for you are he who said that he would come ”; Barguet 1986, 159: “qui vois le bien, qui sors sur l’escalier de la victoire! Tu es celui qui dit celui qui viendra.”; Carrier 2004, 1028-1029: “Regarde ce qui est beau! Sors sur l’es[calier] de la justification (car) c’est toi qui annonces ‘Celui qui arrivera’!”. しかし、これらのいずれの解釈も決定的ではなく、特に *CT* 5, 250f の意味が曖昧なままとされている。
これらの節の解釈について、筆者はまず *CT* 5, 250e の *pr*(*i*) *ḥr rwḏ* に注目したい。この表現と類似する記述が同呪文中の *CT* 5, 249f に見られ、そこで「私は階段に出た」（*pr*(*i*)*.n.i ḥr rwḏ*）と述べられていることから「私」が既に階段を上っていることが明らかである。したがって、*CT* 5, 250e は命令文ではなく、「階段を登りし者」と完了の能動分詞と解釈されるべきであり、その場合 *CT* 5, 249f の内容との齟齬も生じない。また、*CT* 5, 250d の *ptr nfrt* も同様に「美しいものを見た者」と完了分詞として解釈でき、さらにその前節 *CT* 5, 250c の *ḏd.k mꜣꜥt* に関しても接尾代名詞.*k* を誤記と判断し「マアトを言いし者」（*ḏd*(*w*) *mꜣꜥt*）と解釈ができる。実際に *CT* 5, 250c には、*ḏd.k mꜣꜥt* と *ḏd mꜣꜥt* の 2 種類の表記がそれぞれ 2 例ずつ見られる。このように解釈すれば「ようこそ!」（*ii wi*）に続いて続く「マア

[e] *pr ḥr rwḏ*[318] *n mꜣʿ-ḫrw*

[f] *ṯwt ḏd iwt.f*



埋葬のための呪文。

私は行って、やって来た。私は私が紡いだものを紡ぐ。私が作ったものは、イヘメセトの紐[319]である。私は二つのドアを開けた。私は階段の上を進んでいった。私はイチェヌウ・スウを取った。私は天に向かって *mꜣʿty* とともに（？）立ち上がった。私はラー・アトゥムの船員を見つけた。彼らは言う。「ようこそ！おお、マアトを言いし者、善いものを見つけし者、正当化の階段の上を進んでいった者よ、汝こそは『彼が来んことを』と言われし者である。」

呪文第 416 章は「埋葬の呪文」と題された呪文である。しかしながら、この呪文で描写されているのは埋葬に直接関係する事柄ではなく、埋葬後の死者の来世への旅の様相である。前半部分では、死者は二つのドアを開け、階段を進んでいる。「二つのドア」(*sbꜣwy*)は、おそらく死後の世界へつながる扉を指し、階段（*rwḏ*）は天あるいはラーの船へとつながる階段を示している。

後半部分では、死者はラー・アトゥムの船の船員を発見し、そこで船員から歓迎の言葉を受けている。おそらく死者はここで乗船を迎え入れられているのであろう。この「ラー・アトゥムの船」は太陽神の船を指している。死後、自身の正当性を認められた死者は、この船に乗ることを許された。

ここでの *mꜣʿty* の記述の内容をめぐって、最大の論点となるのが前置詞 *m* の解釈である。*mꜣʿty* に前接する *m* は「～において」、「～の中で」「～から」、「～として」、「～とともに」

トを言いし者」、「善いものを見つけし者」、「声正しき者の階段に出た者」と死者への敬称の羅列が続き、より整合性のある解釈となる。また、*CT* 5, 250f に関しては𓂋を「言う者」のような能動分詞ではなく、「言われし者」（*ḏd*(*w*)）と受動分詞、𓄿𓅱𓄡𓂻を「彼が来んことを」(*iwt.f*) と *sḏm.f* 形の仮定法の名詞化として解釈した。この呪文の中で故人は，ラー・アトゥムの船員を発見し、「ようこそ」（*ii. wi*）と迎え入れられる。この *CT* 5, 250f を船員らによる歓迎の発言として捉えるならば、筆者の示した「汝こそは『彼（死者)が来んことを』と言われし者である」という解釈は、死者が船員たちのもとへ来ることを歓迎される発言として蓋然性が高いといえる。

318 B2Bo、B4Bo、M22C より補足した。

319 「イヘメセトの紐」(*iḥmst*)は、不明瞭な語であり「コフィン・テキスト」上の他の呪文には見受けられない。上述した *CT* 5, 280f もまた縄の限定符を伴うことから、*ihmst* と同様の意味を持つ可能性が考えられる。

等、多様な意味を持つ前置詞として理解される。この前置詞の解釈によって、少なくとも 2 つの *mꜣꜥty* の解釈が以下の通りに想定される。

まず、*m* を「～とともに」と訳した場合、続く *mꜣꜥty* は第 3 節で論じた独立した神格としての「二柱のマアト」の側面として理解することができる。つまり、*CT* 5, 250a の *ꜥḥꜥ.n.i r pt m mꜣꜥty* は「私は二柱のマアトとともに天に向かって立ち上がった」と訳され、「二柱のマアト」が死者に寄り添って「立つ」（*ꜥḥꜥ*）という動作を行う性格が理解される。このように考えた場合、「二柱のマアト」は死者とともに太陽神の船に乗ることが予想され、新王国時代の図像資料で示される太陽神の船の先頭に立つマアト女神との関連が想起される。

一方で、前置詞 *m* を「～の中で」と解釈した場合、この *mꜣꜥty* を二柱の女神ではなく、*mꜣꜥty* の船として理解することも可能である。その場合、*CT* 5, 250a の *ꜥḥꜥ.n.i r pt m mꜣꜥty* は、「私は天に向かって *mꜣꜥty* の船の中で立ち上がった」となり、死者が *mꜣꜥty* の船の中で立ち上がる描写として解釈される。その後に続く「私はラー・アトゥムの船員を見つけた」（*gm*(*i*)*.n.i ist Rꜥ-Ꜣtm*）という表現は、死者がこの *mꜣꜥty* の船内にいる際に船員を見つけたことを指すことから、この *mꜣꜥty* が船として解釈されるのであれば、この船は太陽神の船であることが考えることができる。

これらの二つの解釈案には、いずれも文脈に齟齬が見られないが、それと同時に先述した *mꜣꜥty* の側面との直接的な関係を示す記述ももたないため、両者とも決定的な解釈であるとはいえない。各種のテキストには二柱のマアト女神の限定符や一柱の神格が記される。ただし、これらの限定符は「コフィン・テキスト」においては、いずれの側面を示す事例においても利用されるため、*mꜣꜥty* の意味を特定する有効な情報であるとはいえない[320]。筆者は以前の研究において、限られた史料の情報から、この事例を「二柱のマアト」の側面に位置づけたが[321]、その他の類似した呪文の内容理解や、その他の関連資料の検討を通じて慎重に再検討しなければならない事例であるといえる。したがって、本論文において、筆者はこの事例を「不明瞭な事例」として位置づけた。

なお、*CT* 5, 250c に記された「マアトを言いし者」（*ḏd mꜣꜥt*）のマアトは、明らかに神とは別の抽象概念としてのマアトを指している。ここでは、直後に続く「善いものを見つけし者」（*ptr nfrt*）と同様に、死者への一種の敬称として用いられている。

---

320 「コフィン・テキスト」上の」*mꜣꜥty* の記述に付記された限定符については、本論文の第 4 章で詳細に検討する。

321 肥後 2018, 163-164.

事例 25　Spell 641　*CT* 6, 262　[D1C[322]]

262 [D1C]

[a][323]　[*wnn m wrt m ḫrt-nṯr*]

[b]　*ink Rʿ ḥr-ib irt.f*

[c]　*pr*(*i*) *iw rdi iʿnw m ꜣḫt*

[d]　*rdi iʿnw m ꜣḫt*

[e]　*nḥbḥb ʿꜣwy*[324]　*nṯr*

[f]　*ii nw*[325]　*ḥr Ḥry-ṯrwt*[326]

[g]　*ink Rʿ*[327]　*ḫm*[328]　*mꜣʿty*

---

[322] M2Ny、M5C、D1C と 3 種類のテキストが現存しているものの、いずれのテキストも欠損や欠落部分が多い。ここでは *mꜣʿty* の記述が残る D1C を中心に、欠落部分を補完しながら解釈をおこなった（*CT* 6, 262）。

[323] 文脈上、D1C の *r n* に始まる冒頭部分ではなく、M2Ny 上の記述を読解した。M5C には *m ḫrt-nṯr* が表記されていない。（*CT* 6, 262）。

[324] (M2Ny では)について、研究者によって解釈が大きく分かれている。文字のみで判断すれば、*ššt* として読むことができる。しかしながら、*ššt* という語は確認されず、この解釈をとったフォークナーはその根拠を明示していない（Faulkner, 1977, 219）。一方で、バルゲとカリエは全く異なる解釈を示し、この字を「二つのドア」（*ʿꜣwy*）であると解釈している（Barguet 1986, 558; Carrier 2004, 1466-1467）。*ʿꜣwy* は「ドア」の双数形であり、冥界や天へつながる扉としてしばしば見られる。扉という解釈が文意に当てはまること、と の形が類似していることから、このような解釈をとったと考えられる。筆者もこの解釈にしたがい「二つの扉」と訳した。

[325] M5C にはこの語に続き「汝を理由として」（*ḥr.k*）が書かれているが、誤りであると判断し、補足してない。*ḥr.k* を挿入した場合、「汝」（*.k*）が何を指しているか不明であり、続く *Ḥry-ṯrwt* と併せて考えた場合、文意が通らない。*CT* 6, 262f.

[326] フォークナーは「二つの血の供物」としているが、決定詞 から神格であると判断した（Faulkner 1977, 219）。字義通りには「赤いものの上にいる者」であり、*LGG* によれば、この神は正当化された死者のもとへやってくる神であり、死者のために魔術を使う者を見張り、内臓を抜き出す神である（*LGG* 5, 202）。一種の死者を守護する神と捉えてよいであろう。

[327] D1C では「ラー」（*Rʿ*）が欠落している。文が成り立たないため、M2Ny にしたがって補足した（*CT* 5, 262g）。

[328] (M2Ny では、)（*ḫm mꜣʿty*）については解釈が完全に分かれている。フォークナーは「マアトの社の中で」、バルゲとカリエが分詞として「2 柱のマアトを転覆させる者」、「二柱のマアトを温め直す者」としている。しかしながら、フォークナーはテキストに記載されていない英語の“in”に相当する前置詞 *m* を独自に補っている点、バルゲの解釈ではラーが「二柱のマアトを転覆させる者」と明らかに意味が不自然になる点、カリエに関しては、どの動詞を分詞化して解釈しているのか不明であるが、いずれにせよ意味が不明になる点があり、いずれの解釈にも問題がある。ここで、この *ḫm* の語について考える際に手がかりとなるのは、M2Ny に書かれた壁の決定詞である。おそらくこの決定詞から、フォークナーは類似する決定詞を持つ「社」(*ḫm*)と解釈し、一方でバルゲは倒れた壁の決定詞を持つ「破壊する」(*ḫm*)であると判断したと考えられる。しかしながら、バルゲのとるような「破壊する」(*ḫm*)の決定詞は立てられた壁の決定詞の示す意味とは完全に異なるものであり、文意の点からも、決定詞の点からもこの解釈

[h]　*sw3(w) wrw*

[i][329]　*ḥr w3t ḫpš*

[j][330]　[*ḥms(i).i ḥr s3p.i*[331]]

[k]　*wḏ^ꜥ.i šmsw psḏt*

[l][332]　[*i*][*n*]*k ḥḳ3*[333]*.sn*

[m]　*pr(i).n ḥr.s⋯*

[n][334]　*ink nṯr*

墓地で大いなる者として存在すること。

私こそはラーである、彼の眼の中央で。嘆きは出てゆき、うめきは地平線に置かれる。神の二つのドアは開かれる。これらの者、ヘリィ・チェルウトが来るだろう、なぜなら私こそがラー、*m3ꜥty* の社、力強い腕の道で大いなる者たちを超える者である。[私はサピ(？)に座り]、私は九柱神の従者を裁く。なぜなら私は彼らの支配者だからだ。彼らの顔は出ていった[335]。私こそは神である。

呪文第 641 番は、短い分量ながら内容の正確な解釈が困難な呪文となっている。題目は「墓域で大いなる者になること」と明確であるが、欠損部分が多いこと、資料が 3 種類しか

は適切であるとは言えない。そのためフォークナーのとるような「社」(*ḥm*)とする解釈が最も適切であると判断したが、彼の翻訳のように前置詞を補う点には疑問が残るため、ラーとの同格表現として、「*m3ꜥty* の社」とした。しかしながら、この訳もまた同様に、明確な意味を示したものではないため、この点に関しては改めて検討が必要である（*CT* 6 262g; Faulkner 1977, 219; Barguet 1986, 558; Carrier 2004, 1466-1467）。

329 *CT* 6, 262i は と表記されている。フォークナーにしたがい「前脚の道」(*ḥr w3wt ḫpš*)と解釈したが、バルゲは を「道」とする解釈は難しいと指摘し、「…の上にいる者」と を不明な語と判断している。カリエもこの語の解釈を示していない（Faulkner 1977, 219; Barguet 1986, 558; Carrier 2004, 1466-1467）。

330 M2Ny より補足。

331 (*s3pi*)が何を意味しているのかは不明である。バルゲとカリエは「ロータスの葉」(*spt*) と解釈しているが、*t* が欠落し、決定詞も付加されていないため、断定はできない（Faulkner 1977, 219; Barguet 1986, 558; Carrier 2004, 1466-1467）。

332 M2Ny より補足。続く CT 6 262m も同様に M2Ny より補足した。

333 とあるが、は誤記である。M2Ny では接尾代名詞 *.i* が、ではなくで書かれている。この書き方が人の決定詞の表記にも影響し、本来であるべき箇所がとなったのであろう（*CT* 6, 262l）。

334 M2Ny、M5C には 262m までしか記載されていない（*CT* 6, 262）。

335「彼ら」は九柱神の従者を指しているが、具体的な意味は不明である。神としての死者が彼らを追い払うことを意味しているのかもしれない。

現存していないこと、そして不明な語が数多く見られることから、研究者も様々な見解を示している。この呪文のなかで死者は、九柱神の従者の主であることを示し、その力を以て彼らを裁くと宣言している。また「私こそはラーである」ことを強調し、その説明として *mꜣʿty* の語を用いている。ここでラーと「*mꜣʿty* の社」は、明らかに同格表現で示されており、同一関係にあることがわかる。この「社」はおそらく何らかの比喩表現であるが、その具体的な内容は不明である[336]。呪文全体の内容の翻訳・解釈を通しても、明確な意味を特定することができない事例であるため、他の類似したマアトの事例表現と併せて今後改めて考える必要がある。

(d) 単数形 *mꜣʿt* の異形

最後に検討する「コフィン・テキスト」上の *mꜣʿty* の二例は、文脈の分析とその他のバリエーションの記述から、単数形 *mꜣʿt* の異形であると考えられる事例である。両者はいずれも「二つの道の書」(Book of Two Ways) と呼ばれる「コフィン・テキスト」の特殊な呪文群に属する呪文に記される。「二つの道の書」は、中エジプトのベルシャに出土した木棺資料の底部に記述された呪文第 1029 章から第 1130 章までの呪文群と呪文に付記された図の総称である。多くの底部に下界の道の図が二種類記されることから、「二つの道の書」と呼ばれる。「死者の書」に先行して挿絵を伴い利用された葬祭文学の最初期の事例であると同時に、ベルシャの木棺にのみ記述されることから「コフィン・テキスト」の持つ地域性を最も顕著に示す呪文群として認識されている。そのため、「コフィン・テキスト」の研究においても早くから注目を集めており、レスコは、「二つの道の書」を含むフォークナーの翻訳に先立ってこの呪文群に焦点を当てた研究を発表している[337]。近年においても「二つの道の書」の研究は継続されており[338]、なかでもシェルビーニーの研究は、底部のテキストの内容を木棺の制作年代や呪文の配列、挿絵との関係を踏まえて綿密に分析した研究として、今後の「二つの道の書」の研究の基盤となるものといえる[339]。

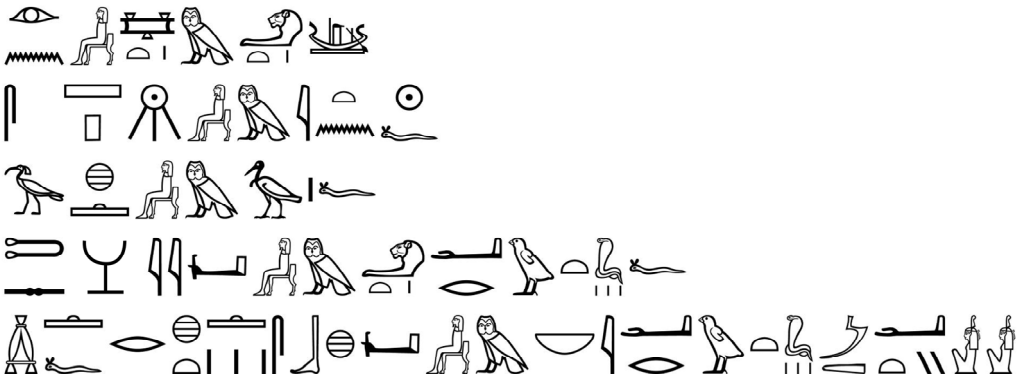
「コフィン・テキスト」のその他の呪文と同様に、「二つの道の書」の内容理解は容易ではないが、レスコによれば、この呪文の難解さは神学的、宗教的なほのめかしによるものよ

---

[336] 本論文序章で論じた王の神的属性としての描写に関連する可能性があるが、王の神的属性を示されたマアトの社の「社」の語は、*ḫm* ではなく *kꜣr* である。
[337] Lesko 1971; Lesko 1972.
[338] たとえば Hermsen 1991; Backes 2005; Fermat 2011。
[339] Sherbiny 2017.

りむしろ、木棺資料上の同種の呪文の内容に相違がある点にある[340]。すなわち、同じ呪文の内容であっても、史料に記述された語や表記法、文法などが木棺資料によって異なるのである。本研究の対象とする二つの *mꜣʿty* の記述もその例に当てはまり、したがって、他の木棺上に記された呪文のバリエーションにも注意を払いつつ考察を進めたい。

事例 26　Spell 1033 *CT* 7, 267a~268a　[B1C]



267 [B1C]

[a][341]　*ir*(*i*) *n.i wꜣt m ḥꜣt*

[b][342]　*sšp m itn.f*

---

[340] Lesko 1972, 3.

[341] 𓂸𓄿について、フォークナーとバルゲが命令形する一方で、カリエは *sḏm.n.f* 形の名詞化としている（Faulkner 1978, 129; Barguet 1986, 624; Carrier 2004, 2196-2197）。文法的にはいずれの解釈が可能であるが、この呪文が「炎の環を通るための呪文」であり、炎の環を通るために道を作ることを望んでいると解釈し、命令形の解釈をとった。カリエの解釈にしたがった場合、死者は既に炎の輪の「道を作った」ことになり、呪文の目的と一致しない。

[342] *CT* 7, 268b から *CT* 7, 267a にかけての解釈は、多様な解釈の示された難解な内容となっている。以下、それぞれの解釈を示し、整理したうえで自身の解釈を試みる。なお、ここで言及されている「彼」（*.f*）は全て太陽神を指している。フォークナーは「輝きは彼の円盤にあり、力は彼の形にある。私は彼のウラエウス（聖なる蛇）の前に上がり、そして彼はマアトの支配者として食事を採るだろう」とし、バルゲは「彼の円盤によって輝く者よ、彼のバーによって有益な者よ、彼がマアトの主として供物の配分に預かるために彼のウラエウスの頭に上がる者よ」さらにカリエは「(私が船の先端への道を作ったのは、)彼の円盤が明るく、（その時）それ（円盤）が彼のバーとともにあるからだ。私は、彼がマアトの主としてつぼの中身を分けるために、彼のウラエウスの前で（～を）立てるだろう」としている。
はじめに、*CT* 7, 267b、*CT* 7, 267c に関しては、*CT* 7, 267b の𓊹𓋴𓊪（*sšp*）と c の𓄿𓄡𓎛（*ꜣḫ*）の解釈が分かれている。すなわちそれぞれの語を「輝き」（*sšp*）や「有効性」（*ꜣḫ*）のように名詞として解釈し、それぞれを副詞文とするか、「輝く者」（*sšpw*）、「有効な者」（*ꜣḫw*）

[c] *ꜣḫ m bꜣ.f*

[d] *ṯsy.i m ḥꜣt iꜥrwt*

のように分詞の名詞化とするかである。カリエはさらに *CT* 7, 267c のを状態形として解釈している。カリエの解釈にしたがえば、*CT* 7, 267b の部分は *CT* 7, 267a に続く強調された副詞相当語句となり、さらに *CT* 7, 267c は状態形として従属的に *CT* 7, 267b を修飾している。しかしながら、ここではまず、前註に示した通り *CT* 7, 267a の解釈は命令形とするのが望ましい。加えて、文の構造の類似した *CT* 7, 267b と *CT* 7, 267c を全く異なる文型で解釈する点には疑問が残る。*CT* 7, 267b と *CT* 7, 267c はおそらく同じ文型の並列表現と理解すべきであろう。フォークナーのとをそれぞれ名詞とする解釈は否定できないが、筆者は次の二つの理由からバルゲのとるような分詞としての解釈がより適当であると考えた。第一に、古代エジプト語では、命令文の後に続く文章は、命令する相手に向けた呼びかけの表現が度々見受けられる点である。同様の表現は、本論文で取り扱った呪文第 479 章（事例 14）にも見受けられる。第二に、B1C と B12C のとの後に見られるに注目すると、ここでのが分詞の決定詞であると考えられる点である。は通常、高貴な人物に使用される 1 人称の接尾代名詞、あるいは人の決定詞である。B1C と B12C を除く 13 点の資料全てにはとの後にの文字は記されていない。一方で、被葬者が一人称で示された資料には、*CT* 7, 267a や *CT* 7, 267d のような接尾代名詞が表記されるべき箇所に必ずが記されている。したがって、多くのバリエーションでやの後ろに記されていない文字は、接尾代名詞ではなく、分詞の決定詞であると考えられる。そのため *CT* 7, 267b、*CT* 7, 267c に関して筆者は分詞であると解釈した。
続く *CT* 7, 267d に関しては、未来時制 *sḏm.f* 形動詞文と解釈することができる。バルゲのみこの節に関しても *CT* 7, 267b、*CT* 7, 267c と同様に分詞としているが、先述した通り、ここでは明らかに接尾代名詞としての(*.i*)が示されているため、分詞とは異なる文章であることは明らかである。*CT* 7, 268a は再び解釈の異なる箇所となっているが、ここでの解釈の相違は主として各研究者が異なる内容を記した資料に注目していることに起因している。*CT* 7, 268a はとりわけ各資料によって内容の相違点が見られる節となっているが、なかでも唯一 *mꜣꜥty* の表記がなされる B1C は、その他の資料と比較して、表記の大きく異なる箇所が 3 点確認できる。まず、*CT* 7, 268a の初めに記された動詞は、B1C 以外の全ての資料が（*smꜣ*）で統一されているのに対して、B1C のみが（*ḏbꜣ*）と表記される。（*ḏbꜣ*）は、「報いる」や「取って代わる」「提供する」など、多様な意味を持つ動詞であるが、いずれも他動詞であるため、*ḏbꜣ.f* に続く前置詞 *r* はおそらく誤記である。一方で他の資料に見られる（*smꜣ*）には、B1L、B2L、B3L、B2P のように前置詞 *r* を伴い自動詞と示された表記と、その他の資料全てに見受けられるような *r* を伴わない他動詞としての表記が見られる。前者は「〜を食べる」となり、後者の場合は「〜を結び付ける」の意味となる。
次に、B1C を含む B1L、B2L、B3L、B2P の 5 つの資料には（*ḫt*）の後に（*sbḫ*）の文字が追記されている。(*ḫt*)は「物」や「事」といった意味を持つ語であるが、ここではその明確な意味の特定は難しい。（*sbḫ*）は一種の容器を指す言葉であり、そこからカリエは *ḫt sbḫ* を「つぼの中身」と訳している。最後に、前置詞 *m* の後に続く名詞が B1C のみ（*nb mꜣꜥt*）ではなく、（*nb iꜥrwt mꜣꜥty*）となっている。この *nb iꜥrwt mꜣꜥty* は、「ウラエウスの主、二柱のマアト」と訳されるが、B1C を除くすべての資料の *nb mꜣꜥt* と同じ意味で用いられていると考えるかどうかの判断は難しい。そのため、ここでの *mꜣꜥty* の表記は *mꜣꜥt* の異形であると判断した。*CT* 7, 248a については様々な解釈や表意の相違点が見られるが、筆者は B1C の表記を基本とし、本文に示したような翻訳を試みた。しかしながら呪文自体に具体的な内容の理解が難しい語や表現を多分に含むため、この解釈が正確とは断言できない。とりわけ *CT* 7, 267c に見られるバー(*bꜣ*)やアク(*ꜣḫ*)といった宗教概念の理解に基づく呪文の正確な解釈は困難となっている（Faulkner 1978, 129; Barguet 1986, 624; Carrier 2004, 2196-2197; *CT* 7, 267-268）。

268 [B1C]

[a]　*ḏbꜣ.f ḫt sbḫ m nb iʿrwt mꜣʿty*

私のために船首への道を作れ！おお、彼(ラー)の円盤で輝く者よ、彼のバーで有効である者よ。私はウラエウスの額へと上がるであろう、彼がマアトの主としてつぼの中身を分け与えんために。

呪文第 1033 章は、太陽の船に関する呪文である。題目は「ラーの船の船室の入り口の炎の輪を毎日通過するための呪文」(*rn n swꜣ ḥr šnwt*[343] *nt ḫt nt r iwꜣ*[344] *n wiʿ Rʿ rʿ nb*[345])となっている。全 14 種の豊富なバリエーションを備えた呪文であり、共通する呪文の題目や内容から、呪文全体の大意を読みとることができる。しかしながら、全ての史料がベルシャ出土のものであるにも関わらず、記述内容や表記の相違がいたるところで見受けられ、詳細な解釈を示すことが難しいものとなっている。

呪文の内容は題目の通り、死者がラーの船の航行を果たすために、船の中にある「炎の輪」（*šnwt ḫt*）を通過するための呪文である。同じ呪文の中でアポピス（*ʿꜣpp*）が登場するように[346]、太陽の船の航行を妨害する存在は太陽の船の旅において見られるが、この呪文では、妨害するものが船の中に出現するように見受けられる。解釈部分でも見られるように、この炎の輪に対して、死者は通過するための道を作るように命じ、最後に神であるホルアクティによって道を通ることが許可されるという内容となっている。

この呪文では、確認できる全 15 点の木棺資料上のテキストのうち 13 点（B3C、B4C、B12C、B13C、B6C、B4L、B1Bo、B2Bo、B4Bo、B9C、B1L、B2L、B2P）が単数形 *mꜣʿt* を伴い *nb mꜣʿt* として記述される一方で、B1C、B3L のみが *mꜣʿty* の記述をもつ。B3L にはその他の同様に *nb* に続く *mꜣʿt* の語に座した女性の限定符𓀀が二つ付記され、*mꜣʿty* として記述されることがわかる。その一方で、B1C では、*nb* と二つの𓀀の限定符を持つ *mꜣʿt* との間に *iʿrwt* が挿入され𓅓𓂋𓏏𓄿𓂋𓂋𓂋𓀀𓀀𓀀 (*nb iʿrwt mꜣʿty*)と表記されている。この *nb iʿrwt mꜣʿty* は、「ウラエウスの主、二柱のマアト」、と訳されるが、この訳にしたがえば、呪文中の彼すなわちラ

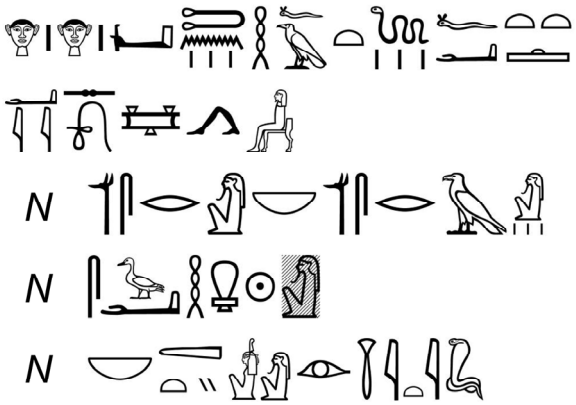
---

[343] 𓉐𓊪𓏏𓏏𓏏(*šnwt*)は「(炎の)輪」を意味する特殊な表現である（van der Molen 2000, 624）。
[344] フォークナーが指摘するように、B2L に見られる決定詞𓉔から「船上のナオス(神像を安置する部屋)」を意味する *iwꜣ* であることがわかる。Faulkner, 1978, 131; *CT* 7, 278b.
[345] B1C のみ *Rʿ* の後に「毎日」（*rʿ nb*）が続く（*CT* 7, 278b）。
[346] *CT* 7, 273a.

ーが「ウラエウスの主」であり、かつ「二柱のマアト」として言及されることとなる。しかし、これら資料の *mꜣʿty* については、単数形の *mꜣʿt* の異形であると判断するのが妥当であろう。ウラエウスは、古代エジプトの神聖な蛇を指すため、ラーを「ウラエウスの主」と表現する点には問題は生じない。しかしながら、太陽神であるラーが、「二柱のマアト」と同一の神格であるとするのは、あまりにも不可解である。「二柱のマアト」はマアトの双数形の神格であるが、そのマアトは通常、ラーの娘として表現され、同一の神にはなり得ない。仮にこの女神の倍加が、ラーとの特殊な関係を示しているとしても、それでもこの二柱の女神を太陽神と同一視されるとは考え難いだろう。このように「二柱のマアト」の記述は B3L と B1C のみに見られる例外的な表現はあるものの、ここにはラーとの関係に整合性が見られない。あるいは、*mꜣʿty* を先にとりあげた事例 23 と同様にニスバ形容詞とし「マアトに属するウラエウスの主」とすることも可能ではあるが、*mꜣʿty* の記述が 14 点の資料のなかでこの B3L と B1C にしか見られないことからも、あくまで単数形 *mꜣʿt* の異形であると判断すべきであろう[347]。ただし、B1C のみが *nb mꜣʿt* や *nb mꜣʿty* ではなく *iʿrwt* の記述を含む別の表現を示している点には、注意が必要である。

その他の全ての棺に記される「マアトの主」（*nb mꜣʿt*）は故人や様々な神々の形容辞としてしばしば見受けられる[348]。ここでのマアトは、形容辞の一部として使用された抽象概念としての側面を示していることは明白である。

事例 27　Spell 1034　*CT* 7, 278c~281a　[B1C]



[347] その場合、女性名詞を修飾するため *mꜣʿty* は *mꜣʿtyt* と記される可能性が高い。
[348] *LGG* 3, 639-642. 「コフィン・テキスト」では、*CT* 1, 53c; *CT*, 6 162q; *CT* 6, 267o などに見受けられる。

278 [B1C]

[a]　[*ḫr* (*?*)][349]　*ḥr ḥr.ṯn ḥfꜣwt ꜥftt*[350]

[b]　*dy*[351]　*swꜣ N*[352]

279 [B1C]

[a][353]　*N wsr nb wsrw nb wsrtyw*

[b]　*N*[354]　*sꜥḥ Rꜥ*

[c]　*N nb mꜣꜥty ir wꜣḏt*

---

[349] 確認できる 13 点の史料のうち、B1C を含む 7 点の史料には𓁹𓁹もしくは𓁹のような二つの顔の記号が記されるのみであるが、この文字のみでは「汝の顔の上に～」となり、文章として成立しない。一方で、B13C、B6C、B4L、B2Bo、B2P のテキストでは、上記の二つの顔の文字に続いて𓂋の記号が付記される。この記号は、通常「倒れる」を意味する動詞 *ḫr* やそれに関連する語の限定符として示され、顔で示される *ḥr* で示される語には使用されない。そのため、𓂋はこの語のみで独立した語であることが推察される。フォークナーは𓂋を「倒れる」*ḫr* とする命令形であると解釈するが、これらの語句を命令形として解釈する場合、動詞が文頭に置かれ、𓂋𓁹と記述される。実際に *CT* 7, 98d には 𓂋𓁹の記述が確認され、この解釈には一定の蓋然性があり、本論文でもこの解釈をとる。シェルビーニーは解釈の文法上の問題点を指摘したうえで"On your face"と訳している（Sherbiny 2017, 135, n. cr.）。しかし、シェルビーニーは𓂋の疑問には触れておらず、依然として議論の余地の残る表現である。

[350] おそらく「社」、もしくは「社に似た外見の箱」を意味する（Sherbiny 2017, 136-150, n. ct）。

[351] 古期エジプト語の *rdi* の命令形の複数形（*AäG* 1, 294-295; van der Molen 2005, 835）。

[352] B3C、B4C、B6C 等いくつかのテキストは指示詞 *pn* もしくは *tn* を含む（*CT* 7, 278d）。

[353] 多くのテキストが死者の名前を主語とする名詞文（B3C、B4C、B6C 等）の記述、もしくは独立代名詞 *ink* を主語とする名詞文（B12C、B4L、B9C 等）で記される。B1Bo のように *pw* を主語とする名詞文や、B2Bo、B4Bo のように主語の欠落したテキストも見受けられる（*CT* 7, 279a）。

[354] B9C、B1L、B2L、B3L、B1C、B2P のテキストには、独立代名詞 *ink* もしくは死者を指す *N* と *sꜥḥ* の間に *sꜣ*𓄿の文字が記される。その他の事例に文字が記されていない点や *sꜣ sꜥḥ Rꜥ* と読む場合に混乱が生じることから、本論文では𓄿の文字に解釈を加えないが、デ・バックが B1C 上の𓄿の文字が後から加えられたと指摘するように、何らかの意図を持つ記号である可能性も否定できない（*CT* 7, 279, n. 2）。

[d] *mkt.i*[355] *pw*

280 [B1C]

[a] *mk*[*t*] *Rˁ*

[b] *m-ˁ.tn*[356] *m phr n.f sht* [*ḥtp*] *nnk*[357]

[c] *N Rˁ ntr ˁ3 r.k*

281 [B1C]

[a] *ip psdwt.f*[358] *m rdit ḥtpt*[359]

汝らの顔の上に倒れよ、アフェテトの蛇よ！N を通過させよ！（なぜなら）N は力強い者であり、力強い者たち[360]の主であり、N はラーの高位の者であり、N は「マアトの主」であり、ウアジェトを作りし者[361]であるからだ。私（=N）がヘテプの野を彼（=ラー）のために動き回る間の、汝らからの私（=N）の保護は、ラーの保護である。

N はラー、汝より偉大な神である。彼は供物を与える時に彼の九柱神に配慮する。

---

355 B1C のテキストでは、死者を指す場合には死者の名前（N）が利用されるが、*CT* 7, 279d と *CT* 7,280b のみ死者が一人称単数の代名詞で示される（*CT* 7, 279d; *CT* 7,280b）。

356 𓂋𓏏に関して、従来の先行研究では不変化詞 *m* と二人称複数形の接尾代名詞 *tn* の組み合わせ *mtn* であると解釈されてきた（Lesko 1973, 20; Faulkner 1978, 131; Barguet 1986, 625; Carrier 2004, 2200-2201）。しかし、この解釈をとった場合、半数以上のテキスト上で𓂋𓏏と *phr* の間に記述される *m* の文法上の説明ができない。近年のシュルビーニーの研究はこの𓂋𓏏に異なる文法解釈を提示している（Sherbiny 2017, 151-152, n. cz）。彼は𓂋𓏏は *mtn* ではなく、*m-ˁ.tn*、つまり「～とともに」や「～から」を意味する複合前置詞 *m-ˁ* と二人称複数形の接尾代名詞 *tn* であり、*CT* 7, 279d に始まる名詞文が続いていると解釈した（Sherbiny 2017, 113）。この解釈にしたがえば、𓂋𓏏と *phr* の間の *m* を前置詞、*phr* 以下を不定詞として理解することができる。また、𓂋𓏏を *m-ˁtn* と読むべき例として彼は *CT* 7, 339a の文章：「N の保護は汝らからのトートの保護である」（*mkt N pw mkt Ḏḥwty m-ˁ.tn*）の例を挙げており、そこから、CT 7, 279d-CT 7, 280b と *CT* 7, 339a の文章を“A[1] pw B A[2]”の名詞文と結論づけている（Sherbiny 2017, 152, n. cz）。ここでの文章を“A[1] pw B A[2]”の文章であると確定づけることは難しいもの、𓂋𓏏を複合前置詞とする解釈はその他の文法上の問題を全て解決する点において蓋然性も高く、本論文でもシェルビーニーの解釈にしたがうこととする。

357 *n*(*i*)-(*i*)*nk*：独立代名詞を用いた所有を示す表現（Allen 2014, 90-91）。ここでは不定詞 *phr* の主語として記述されていると考えられるが、このような事例は稀である（Gardiner 1957, 225-226; Sherbiny 2017, 152, n. cz）。

358 *psdt 3 it.f* や *psdwt.f* など様々な読み方の議論がなされるが、本論文では B1C の表記にしたがい *psdwt.f* と読む（Carrier 2004, 2200-2201; Sherbiny 2017, 152-153, n. dd; *CT* 7, 281a）。

359 B3C、B4C、B12C、B13C、B6C、B4L、B2Bo、B4Bo には呪文の題名が記される：B12C:「墓地の道へと導くこと」（*sšm wꜣwt nt r-stꜣw*）(*CT* 7, 281b)。

360 シェルビーニーは“Those of *wsrt*-poles”と翻訳し、懲罰や裁判の文脈で現れる *wsrt* の棒との関連の可能性を指摘している（Sherbiny 2017,113; 151, n. cw）。

361 フォークナーは関係形 *sdm.f* として解釈している（Faulkner 1978, 138）。

呪文第 1034 章は、呪文の所有者が死後の世界の道を通過するための呪文である。呪文の冒頭部で死者が「（道を）通過させよ」（*dy sw3*）とアフェテトの蛇に対して述べ、その後にその理由、すなわち死者が力強い者や、ラーの高位の者であること、そして自身の保護がラーの保護であることを述べる。そして、呪文の末尾（*CT* 7, 280c）では興味深いことに死者はラーと同一視され、死後の世界の道の通過が要求される。このような死後の世界の「通過」は「二つの道の書」の中心的なテーマの一つであり、後の時代の「死者の書」でも記述されることとなる[362]。

m3ʿty の記述は呪文中で死者の性格を述べる名称の羅列、「力強い者」（*wsrt*）、「力強い者たちの主」（*nb wsrwt*）、「ラーの高位の者」（*sʿḥ*）に続いて *nb* とともに用いられる。先に見た事例 25 と同様に、「主」を意味する *nb* に続いて *m3ʿt* に関する語が利用される場合、通常は *nb m3ʿt*、つまり死者の形容辞で用いられる「マアトの主」として解釈するのが適切である。各テキストの記述に目を向けると、この箇所の記述が残る 13 点の木棺資料のうち、B3C、B4C、B12C、B6C、B4L、B1Bo、B2Bo、B4Bo、B1L、B2L、B2P の 11 点が単数形 *m3ʿt* として記述される。*m3ʿty* の記述を確認できる事例は、B3L と B1C のみである。そのため、この事例における *nb m3ʿty* の記述もまた *nb m3ʿt* の異形として理解されるべきであろう。

この事例が先述の事例 25 に記された *m3ʿty* の記述を持つ木棺と同じ資料のテキストに記述されることは偶然ではないであろう。B3L、B1C はいずれもベルシャの隣接する区域から出土し、中王国時代第 12 王朝のセンウセレト 2 世からセンウセレト 3 世の治世に生きた高官の木棺であるとされる[363]。そのため、ベルシャ出土の木棺資料としては比較的後期に制作された木棺に記されたテキストであり、何らかの影響を受け、より以前のテキストから内容が派生した可能性は高い。「二道の書」の随所に見られるテキストの異形については、オリジナルのテキスト、すなわち「二道の書」の祖型の特定や、呪文の構成、木棺資料上の装飾の内容、制作年代といったその他の諸要素の理解を踏まえつつ、変化の内容とその理由を探求してゆくことが今後の課題となるであろう。

最後に、この事例のなかで B1C の *m3ʿty* の記述に付記された限定符にふれておく必要がある。テキスト部分の図に見られるように、B1C において *m3ʿty* は二つの女性の限定符𓉐でも二柱のマアトの限定符𓉐𓉐でもなく、一柱のマアト女神と一柱の男神の限定符の一組𓉐𓉐で示されている。このように *m3ʿty* の語に男神とマアト女神の限定符を付する事例は「コフィ

[362] Sherbiny 2017, 169-170.
[363] Willems 1988, 69, 75-77.

ン・テキスト」の全体を通しても他に例がなく、「死者の書」のような後期のテキストにもほとんど見受けられない。また、B1C のテキストにおいて、事例 26 では限定符が𓉐𓉐であったにもかかわらず、その記述法が男神と女神の組み合わせと変更されている点も確認される。この事例を含む *mꜣʿty* の限定符については、第 4 章で詳説したい。

本章では、エジプト中王国時代頃の「二柱のマアト」の内容を明らかにするため、「コフィン・テキスト」上に記された 13 例の *mꜣʿty* の記述内容を検討した。個々の事例の分析の結果、古王国時代の史料に刻まれた *mꜣʿti* の語と同様に、「二柱のマアト」を意味する語には、ソカルとの関連を示す側面と独立した神格としての側面、そして太陽神の船としての側面を持つことが明らかになった。、第 2 節における事例の検討からは、*mꜣʿty* がおそらくソカルの位置する船の名称として描写されていることや、このソカルと *mꜣʿty* の語の組み合わせがソカルの一種の形容辞として利用されることが明らかとなった。第 3 節の事例の検討では「コフィン・テキスト」の時代において、*mꜣʿty* は明らかに「二柱の女神」として描写されていることがわかる。このことから、古王国時代の史料からは明確な女神としての姿が確認されなかった「二柱のマアト」が、この時代には既に古代エジプト人に「二柱の女神」として明確に認識された可能性が考えられる。続く第 4 節の事例からは「ピラミッド・テキスト」の事例と同様に、*mꜣʿty* の語が接尾代名詞 *f* を伴い、太陽神の船の名称として記述されることを確認した。

その他の事例には、*mꜣʿty* の持つ三つの側面に明確に該当しない事例や、同様の表記がなされながらも双数形のマアトではなく、ニスバ形容詞として理解されるべき *mꜣʿty* の記述、単数形の *mꜣʿt* の異形として記述された事例も確認された。その一方で、呪文の内容の理解が不十分な点も多く残り、現時点における意味の特定が困難な事例も見受けられた。これらの課題は、この難解な葬祭文学である「コフィン・テキスト」の更なる内容理解を深めたうえで、今後改めて検討しなければならない。

第４章

「二柱のマアト」の変遷

第 2 章、第 3 章では、「二柱のマアト」の内容をエジプト古王国時代の「ピラミッド・テキスト」、「パレルモ・ストーン」、中王国時代の「コフィン・テキスト」に記された *mꜣʿti/mꜣʿty* の語の事例から検討した。本章では、これまでの事例の検討により明らかにした「二柱のマアト」の内容を踏まえつつ、各事例に付記された限定符に注目し、時代の変化に伴う *mꜣʿti* および *mꜣʿty* の変化を考察する。

第１節　古王国時代における再解釈

まず、*mꜣʿti/mꜣʿty* の語に付記された船の限定符に注目したい。限定符は、古代エジプト語の持つ特徴の一つであり、動詞や名詞の語尾に付記されることで、その後の持つ意味を示す役割を持つ。これにより、同音を持つ語であっても語尾の限定符に着目することで、その語の示す大意が想定できる。第２章で既に実例を示したように、この限定符の存在は「二柱のマアト」*mꜣʿti/mꜣʿty* の指し示す内容を検討するうでに大きく役立つものである。例えば、事例 2 や事例 3 の *mꜣʿti* の語に記された𓊪𓏏𓅱や𓊪𓏏𓅱は *mꜣʿti* がテキストにおいて二柱の女神ではなく、二隻の船として描写されていることを示している。したがって、古王国時代に既に複数の側面を示していた *mꜣʿti/mꜣʿti* の語の指す内容を理解するには、この限定符への注目は欠かせない。加えて、異なる時代の *mꜣʿti/mꜣʿty* の事例の限定符を整理・比較し、その差異を見出すことができれば、古代エジプト人が認識した「二柱のマアト」のイメージを辿ることができると考える。本節では、古王国時代、中王国時代の *mꜣʿti/mꜣʿty* の事例に付記された限定符を項目ごとに抽出し、その内容の整理と比較を進める。

まず、船として記された *mꜣʿti/mꜣʿti* の限定符に注目する。一隻または二隻の船の限定符を持つ *mꜣʿti/mꜣʿty* の各事例の限定符を表 4-1 にまとめた。

表 4-1　*mꜣʿti/ mꜣʿty* に付記された船の限定符

事例番号	史料	限定符	関連時期
7	PS r. II 7		第1王朝　ジェル
8	PS r. III 6		第1王朝　デン
9	PS r. IV 6		第2王朝　ニネチェル
10	PS r. IV 12		第2王朝　ニネチェル
6	PS v. V2		第5王朝　ネフェルイルカーラー
3	Pyr, 1315a		第6王朝　ペピ
4	Pyr. 1785b		第6王朝　(ペピ)、ペピ二世
12, 13	CG 1403		第6王朝以降
22	CT 7 210o		不明(Pap. Gard II)
17	Medinet Habu		第20王朝　ラメセス3世

上の 5 例は「パレルモ・ストーン」から、その下の二例は「ピラミッド・テキスト」から、下の三例は上から順にセシェムネフェル/メテティの偽扉、「コフィン・テキスト」、メディネト・ハブ神殿のレリーフにそれぞれ記された事例の限定符である。「パレルモ・ストーン」は史料の制作年代に疑問が残るものの、いずれの事例も初期王朝の王の事績（事例 7-9）と第 5 王朝の王の治世化の事績（事例 6）であるため、「ピラミッド・テキスト」に先立つ *mꜣʿti* の記述であると考えられる。「パレルモ・ストーン」に記された最初期の *mꜣʿti* の限定符は、事例 7 を除く全ての事例で一隻の船上に二羽の隼が載っていることがわかる。この特殊な記号の利用は *mꜣʿti* の船の他には *mʿnḏt* の船、*msktt* の船等の一部の船を指す場合に限定される[363]。この限定符の特筆すべき点は、「パレルモ・ストーン」に刻まれた *mꜣʿti* を意図するこの記号が二隻の船でなく、二羽の隼を載せた一隻の船として記されている点である。すでに

[363] Anthes 1957, 82-83.

第 2 章で議論した通り、この事例 7-10 の記号は *ḥb* の文字とともに「*mꜣʿti* の船の祭（(*ḥb mꜣʿti*)と読まれるべきであり、この限定符が双数形の意味を持つことは疑いがない。つまり、この限定符の持つ双数形の「２つ」の性格は、船の数ではなく、船の上に乗った隼の数に由来することとなる。以上のことから、筆者は最初期 *mꜣʿti* の語が示す「船」は、本来二隻ではなく、一隻の船として理解されていたと考える。

「ピラミッド・テキスト」の時代以降になると、この *mꜣʿti* の限定符に変化が見受けられる。事例 3 では、*mꜣʿt* の語に一般的な聖船（P3）に類似した限定符と双数を示す記号の組み合わせ𓋴𓏏𓅱 で *mꜣʿti* が記される。この記号からは隼を示す要素は見受けられず、双数形の記号によって船の数が「２つ」あるものとして記述されていることは明らかである。その後のセシェムネフェル/メテティの碑文（事例 12、13）、「コフィン・テキスト」の呪文第 995 章（事例 22）章においても *mꜣʿti* の限定符は二隻の船として描かれている。その一方で、船の記号は簡略化され、「パレルモ・ストーン」の事例に記されるような二羽の隼を載せた船の記号は「ピラミッド・テキスト」の事例 4 を除いて見受けられない。

古代エジプト人が *mꜣʿti* の語の双数形語尾を認識し、この語が何らかの「２つ」を指し示すことを理解していたことは疑いがない。しかし、その一方で、最初期の *mꜣʿti* の語の示す「２つ」の内容が本来、船上の隼の数を指していたことは知られていなかった、あるいは正しく伝承されなかった可能性は十分に考えられる。そのため、その後の「ピラミッド・テキスト」の時代において、テキストの編纂者が *mꜣʿti* の双数形の内容を隼ではなく、船の数、つまり二隻の船として再解釈したのかもしれない。筆者は、この *mꜣʿti* の双数形の内容の再解釈をもっとも如実に反映したのが、「ピラミッド・テキスト」の呪文第 627 章の事（事例４：𓅱𓅱）ではないかと考える。この事例において、*mꜣʿti* は二隻の船の限定符とともに示されるが、この二隻の船のいずれも二羽の隼を載せている。つまり、このテキストの編纂者は *mꜣʿti* の双数形の指す内容を「二隻の船」と「二羽の隼」と双方の意味で二重に解釈しているのである。

事例 4 の *mꜣʿti* が明確に太陽神の持つ船を意味することは、第２章で述べた通りである。筆者は、この太陽神の船としての *mꜣʿti* の側面こそが *mꜣʿti* が「二隻の *mꜣʿt* の船」として解釈されることとなった大きな要因の一つであると推察する。古代エジプト人は、一日のサイクルのなかで、太陽神が日中に天を旅するための *mʿnḏt* の船と、日没後に下界を旅する際に乗船する *msktt* の船を持つと信じていた。この信仰は古くから存在し、「ピラミッド・テキス

ト」に留まらず、「パレルモ・ストーン」上にも太陽神の持つ一対の船として描写される[364]。また、*mꜣʿti* と *mʿnḏt・msktt* の船と同時期に単数形で示された *mꜣʿt* の船の存在が確認されることも、この解釈がなされた一つの要因であると考えられる。

mꜣʿti もしくは *mꜣʿty* の船が *mʿnḏt・msktt* の船と同一視されたことを示す直接的な史料は、管見の及ぶ限りでは確認できない。しかし、いずれも太陽神の所有する船である点や、*mꜣʿti* が二隻の船として解釈される一方で、*mʿnḏt・msktt* が一組の太陽神の船として信仰されている点、そして古王国時代の史料のなかでいずれの語にもこれらの語にのみしか利用されない特異な船の限定符が利用される点を踏まえると、少なくともアンテスが太陽神の持つ同一のグループに位置付けるように、二隻の船として理解された *mꜣʿti* の船と *mʿnḏt・msktt* の船は密接した関係にあったと考えるべきであろう。

船の限定符で示される *mꜣʿty* の事例は、管見の及ぶ限りではメディネト・ハブ神殿のレリーフ（事例 17）を最後として、それ以降の史資料には見られない。このレリーフ上では、*mꜣʿt* の語は双数形の語尾を伴い𓅱𓏏と示され、その後に一隻の船の記号𓋴が刻まれる。このレリーフ上で *mꜣʿty* が二隻の船であることが示されるならば、文字枠内の余白に𓋴𓋴と船が並んで刻まれるはずである。実際に同レリーフ上では双数を示すその他の語は、双数形の表音記号に加えて限定符を二つ記している[365]。この点から、このレリーフ上では、*mꜣʿty* はあくまで一隻の船として認識されている可能性が高い。確認できる史料の制約により断言はできないが、「ピラミッド・テキスト」の時代にすでに *mꜣʿti* が二隻の船として再解釈されていた一方で、この語は新王国時代以降にも依然として、本来の意味である一隻の船だと信じられていた可能性を示している。あるいは、太陽神との関係を持つ *mꜣʿti* の側面が二隻の船として再解釈されることとなった一方で、ソカルに関連する *mꜣʿti* は、「パレルモ・ストーン」の時代以降も変わらず一隻の船として信じられ続けたのかもしれない。最初期の *mꜣʿti* の船の数や、その変遷をより詳しく辿るためには、今後の新たな資料の発見が望まれることとなる。

---

[364] 例えば、*Pyr.* 335b-335c; *Pyr.* 336a; *Pyr.* 1479a。*mʿnḏt* と *msktt* の組み合わせ関係は、本論文における事例 3（*Pyr*. 1313a）や事例 6（*PS* v. V.2）にも示される。

[365] *Skr m bikty*（𓊪𓈖𓅱𓏏𓏏）; *Skr m sḥty*（𓊪𓈖𓊃𓏏𓏏）。いずれも地名であると考えられるが双数の限定符が記される（*LGG* 6, 669; *LGG* 6, 673-674 ）。

第２節　中王国時代における再解釈

それでは、マアト女神や神格を示す限定符はどのように表記されているだろうか。第２章および第３章で検討した事例のうち、神的存在として描写された *m3ʿti* の記述と「コフィン・テキスト」に記述された *m3ʿty* の記述を整理した（表 4-2）。本論文においてはじめに検証した「ピラミッド・テキスト」の 2 例の記述（事例 1、2）は、何らかの神的存在であると考えられるものの、一切の限定符を持たない。加えて、その他の古王国時代の史資料の *m3ʿti* の事例もまた、マアト女神、神格、女性のいずれの限定符も記されず、したがって、同時代における *m3ʿti* が後の時代に明確な姿で現れる二柱の女神としての意味を有していたかは定かではない。

表 4-2　「ピラミッド・テキスト」と「コフィン・テキスト」に確認される *m3ʿti/ m3ʿty* の限定符

事例番号	史料	関連する側面	限定符	テキスト	限定符	テキスト	限定符	テキスト	限定符	テキスト	限定符	テキスト
1	Pyr. 317a	神格	—	W								
2	Pyr. 317b	神格	—	W								
11	CT 6, 249b	ソカルの祭		P.Gard. II								
14	CT 6, 42a	ソカルの船		P.Gard. II								
15	CT 6, 282e	二柱のマアト		B1Bo								
16	CT 6, 282f	ソカルの船		B1Bo								
19	CT 2, 250b	二柱のマアト		S1P		S1 Chass		S1Cb		S2Ca		
20	CT 6, 312o	太陽神の船		B1Bo								
21	CT 6, 326p	太陽神の船		B15C								
23	CT 3, 43a	ニスバ形容詞		B2Bo/B4Bo M5C/ B2Be (S2C)		M2Ny Pap. Berl.		B1Bo		B1L		B9C
24	CT 5, 250a	不明瞭		B2Bo B4Bo		S2Cb						
25	CT 6, 262g	不明瞭		D1C								
26	CT 7, 268a	*m3ʿt* の異形		B1C		B3L						
27	CT 7, 279c	*m3ʿt* の異形		B1C		B3L						

古王国時代とは対照的に、中王国時代頃の「コフィン・テキスト」に記された *mꜣʿty* の限定符には、二柱のマアト女神や二柱の神格の限定符が数多くみられる。船の限定符を持つ唯一の事例である呪文第 995 章の事例を除いて、およそ全ての「コフィン・テキスト」上の *mꜣʿty* の語にマアト女神、女性の限定符、あるいは神格の限定符が付記されていることがわかる。これは、この *mꜣʿty* の語がエジプト中王国時代において二柱の神格、またはマアト女神の姿を持つ神格として認識されていたことを示唆する。

ここで注目すべきは、文脈上明らかに「二柱のマアト」のような神格を意味しない *mꜣʿty* の事例にもマアト女神や神格、女性の限定符が記されている点である。例えば、本論文においてソカルの船として描写されることを確認した事例 14 や事例 16 は、それぞれ𓅱𓅱と𓅱の限定符を伴い、一方で太陽神の船として記述された事例 20、21 には、𓅱[366]、𓅱𓅱が付記されている。このことから、「ピラミッド・テキスト」の時代になされた *mꜣʿti* の再解釈に続いて「コフィン・テキスト」の時代に *mꜣʿty* の語の二度目の再解釈が起こった可能性が推察される。この「コフィン・テキスト」が編纂された時代において、テキストの編纂者は、再び *mꜣʿt* に記された双数形語尾の*-ty* の解釈を迫られることとなった。「ピラミッド・テキスト」と「パレルモ・ストーン」に記された事例数が限定されることから、この *mꜣʿti* の語は、当時のエジプト人の宗教においてそれほど大きな役割を果たしていたとは考えがたい。加えて、「ピラミッド・テキスト」の時代に既に *mꜣʿti* の語が再解釈された可能性があることから、古王国時代には、この *mꜣʿti/mꜣʿty* に関する明確な共通認識が存在していたとは考え難い。「コフィン・テキスト」のテキストの多くは、エジプト古王国時代の崩壊後の第一中間期の終末期から中王国時代の木棺資料に記される。古王国時代末期から第一中間期の終末期にかけての約 100 年の間に「コフィン・テキスト」の呪文の編纂者は、本来ソカルの船や太陽神の船の意味で用いられる *mꜣʿty* の語を二隻の船ではなく、二柱の神格の意味で再解釈したのではないだろうか。「コフィン・テキスト」の時代において、マアトが既に真実や正義を

366 デ・バックの記述を確認する限りでは、立てられたミイラの記号（Gardiner A53: 𓅱）にダチョウの羽根を載せた姿で記される（*CT* 6, 312o）。この限定符は数あるマアトの限定符の中でもとりわけ特殊な記号であり、管見の及ぶ限りではその他の史料上には見受けられない。筆者はこの記号の詳細を検討するために 2019 年 8 月にライデン大学オランダ近東研究所所蔵の「コフィン・テキスト」のアーカイブ資料調査を実施した。しかし、所蔵されるアーカイブ資料は B1Bo の記録写真に乏しく、該当箇所を確認することができなかった。より詳細な検証には、木棺資料を所蔵するボストン美術博物館での原資料調査が必要となる。第 21 王朝のニスカパシュティのパピルス（P. Louvre. E 17401）には、この限定符に類似するミイラの姿で記されたマアトの図像が確認される（Piankoff 1957）。

司る女神として広く認識されていたことは、「コフィン・テキスト」に記されたマアト女神の限定符の類例数から明らかである（図 4-1）[367]。ソカルの船や太陽神の船を示す *mꜣʿty* の語の双数形の含意が正確に伝えられていなかったと仮定すれば、後の時代の編纂者が双数形が指す内容を当時既に浸透していたマアト女神の数であると解釈するのは自然である。つまり、文脈上、明らかに船としての意味を持ちながらも、船の限定符を伴わずにマアト女神や神格の限定符が付記された複数の *mꜣʿty* の事例は、このような再解釈の結果だといえるであろう。史料や事例数が限定されていることから、断定することはできないものの、この解釈は「コフィン・テキスト」上の *mꜣʿty* に付記された限定符の特徴と、それ以前の史料に記された限定符からの変化とも矛盾しない。

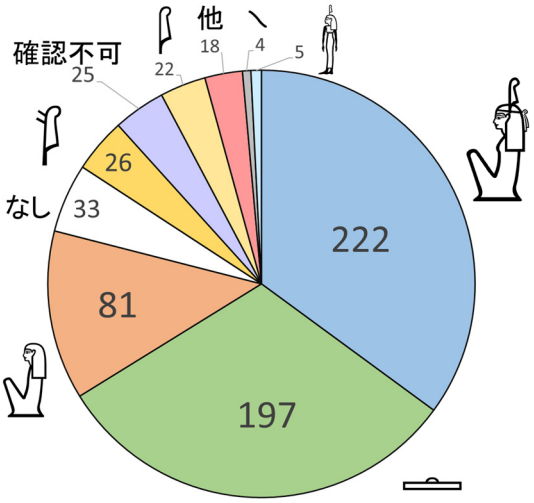


図 4-1 「コフィン・テキスト」に記された *mꜣʿt* の限定符

以上のように、*mꜣʿti*・*mꜣʿty* に付記された限定符から、当時のテキストの編纂者による二度の *mꜣʿti*/*mꜣʿty* の意味の再解釈が起こった可能性が推察された。最初の再解釈は、「ピラミッド・テキスト」の時代におこなわれ、この時、本来 *mꜣʿti* と呼ばれる二羽の隼を載せた一隻の船が、二隻の船として再解釈された。*Pyr.* 1785b（事例 4）に記された𓇋𓇋の事例は、テキストの編纂者が *mꜣʿti* の持つ双数形の意味を隼の数と船の数と重複して解釈した例であるといえる。その他の事例にも記されるように、この二隻の船として再解釈された *mꜣʿty* は、その後の「コフィン・テキスト」時代において、二度目の再解釈を受けることとなる。テキスト上における *mꜣʿty* の語には、この語が明らかに太陽神やソカルの船として言及される場合においても女神や神格、女性の限定符が付記された。古王国時代においてわずかな事例が残る「二隻の船」としての *mꜣʿty* の含意は既に失われ、その後の時代の神官によって「二柱の女神」として理解されたのであろう。この点において、「コフィン・テキスト」は、古代エジプト人の思想のなかで、*mꜣʿty* が明確に二柱のマアト女神として理解されたことを示す最初期の史料であるといえる。

---

[367] *mꜣʿt* が明らかにマアト女神ではなく「正義」や「秩序」の抽象概念として描写される際にもマアト女神の限定符は頻繁に付記されている（e.g. *CT* 4, 90j; *CT* 5, 159f; *CT* 5, 196d; *CT* 6, 165e）。一方で「ピラミッド・テキスト」の *mꜣʿt* に関連するいずれの事例にも女神や男神、女性の限定符は見受けられない。

本章では、第３章、第４章で明らかにした「二柱のマアト」の内容を基に、「二柱のマアト」の意味がどのように変遷したのか、各事例に付記された限定符に着目しその変化の内容を考察した。*mꜣʿti*/*mꜣʿty* に付記された限定符は、各時代におけるテキストの編纂者がマアトの双数形にこめられた意味をどのように理解していたかを示している。

エジプト初期王朝時代の王の治世化の出来事を示した「パレルモ・ストーン」において *mꜣʿti* の語は一隻の船の限定符や省略された記号でその意味を示している。この史料のなかで、船は決して二隻としては刻まれず、その一方で、多くの事例において船の記号の上に二羽の隼が刻まれていた。この点から、最初期における *mꜣʿti* の船は「一隻」であり、語の双数形は船の数ではなく、二羽の隼を指していたことが考えられる。

「ピラミッド・テキスト」の *mꜣʿti* の事例に付記された限定符は、一隻の船として登場した *mꜣʿti* がエジプト古王国時代に再解釈された可能性を示している。この葬祭文学のなかで、*mꜣʿti* の船は二隻の船として刻まれており、同時期に刻まれたセシェムネフェル/メテティの碑文においても *mꜣʿti* は二隻の船の限定符を伴う。本来双数形の示す「二羽の隼」の意味は正確に伝承されず、テキストの編纂者は *mꜣʿti* の持つ双数形の意味を船の数に由来するものであると自然に解釈したのであろう。事例 4 で示されるような二羽の隼を載せた二隻の船の限定符は、この語の示す双数形の二重の解釈を示すものであり、筆者はこの事例が *mꜣʿti* の意味の再解釈の過程を示すものであると推察する。

「コフィン・テキスト」が利用された中王国時代頃になると、*mꜣʿty* は一隻あるいは二隻の船とは認識されず、二柱の女神や二柱の神として解釈されることとなる。*mꜣʿty* が「二柱の女神」だけでなく、文脈上明らかに「太陽神の船」や「ソカルの船」として描写される場合においても、もはや船の限定符は利用されていない。このことから、「二隻の船」として古王国時代に再解釈された *mꜣʿti* の語の意味に、二度目の再解釈がなされたことがうかがえる。「コフィン・テキスト」の編纂者もまた、*mꜣʿty* の語の示す双数形の解釈に迫られることとなり、当時すでに明確な女神として史料に記述されていたマアト女神が「二柱」存在すると自然に考えたのであろう。「ピラミッド・テキスト」では明確な神の姿を持たなかった「二柱のマアト」は、この時代において、その語の示す側面に関わらず「二柱のマアト女神」や「二柱の神」として理解されることとなった。そして、この時代になってはじめて明確に認識された二柱の女神としての「二柱のマアト」が、その後の「死者の書」で図像化されるような明確な「二柱のマアト」の実際のイメージの形成につながったと筆者は考える。

第 5 章

「二柱のマアト」の習合

第 4 章における事例の分析から、本来一隻の船として理解された *mꜣʿti* が二隻の船として再解釈され、さらにその後の中王国時代には、「二柱の女神」として認識されたことが明らかとなった。しかし、「二柱のマアト」が船か女神へと再解釈された際に、個々の女神が何を意味するのか、という疑問がまだ残されている。本節では、二柱の女神としての「二柱のマアト」が史料のなかで明確に登場する「コフィン・テキスト」に焦点を置き、*mꜣʿt* および *mꜣʿty* に関連する習合関係から「二柱のマアト」の具体的な特徴を探究する。

古代エジプトの宗教では、ある一柱の神がその他の神と交わる現象がしばしば見られる。例えば、アトゥム（*Ꜥtm*）とラー（*Rʿ*）は「アトゥム・ラー」（*Ꜥtm-Rʿ*）として、プタハ（*Ptḥ*）とソカル（*Skr*）は「プタハ・ソカル」（*Ptḥ-Skr*）として現れる。このような現象は通常、エジプト学の分野において習合（Syncretism）と呼ばれる[367]。このような習合関係は、神々の名前だけでなく、「A は B である」といった文章からも見受けられることができる[368]。既にみたように、古王国時代と中王国時代の史料には、「*mꜣʿty* は～である」や「～は *mꜣʿty* である」といった明確な習合関係を示す記述は見受けられない。その一方で、単数形で示された *mꜣʿt* の記述に目を向けると、「コフィン・テキスト」のいくつかの呪文の中で *mꜣʿt* がその他の神や神的属性と同一視されることが確認できる。さらに、これらの *mꜣʿt* の事例は *mꜣʿt* ともう一つの神的存在と組み合わされた一組の神的存在として、二種の神的存在からなる別のもう一組と同一関係を形成している。言い換えれば、「*mꜣʿt*・A」=「B・C」のような関係を形成しており、前者の一組が、「二柱のマアト」の内容を示唆する可能性が推察される。アルテンミュラーは「コフィン・テキスト」における習合研究のなかで、これらの「*mꜣʿt*・A」＝「B・C」の描写が「二柱のマアト」がその他の神的存在と習合関係を示し得る事例で

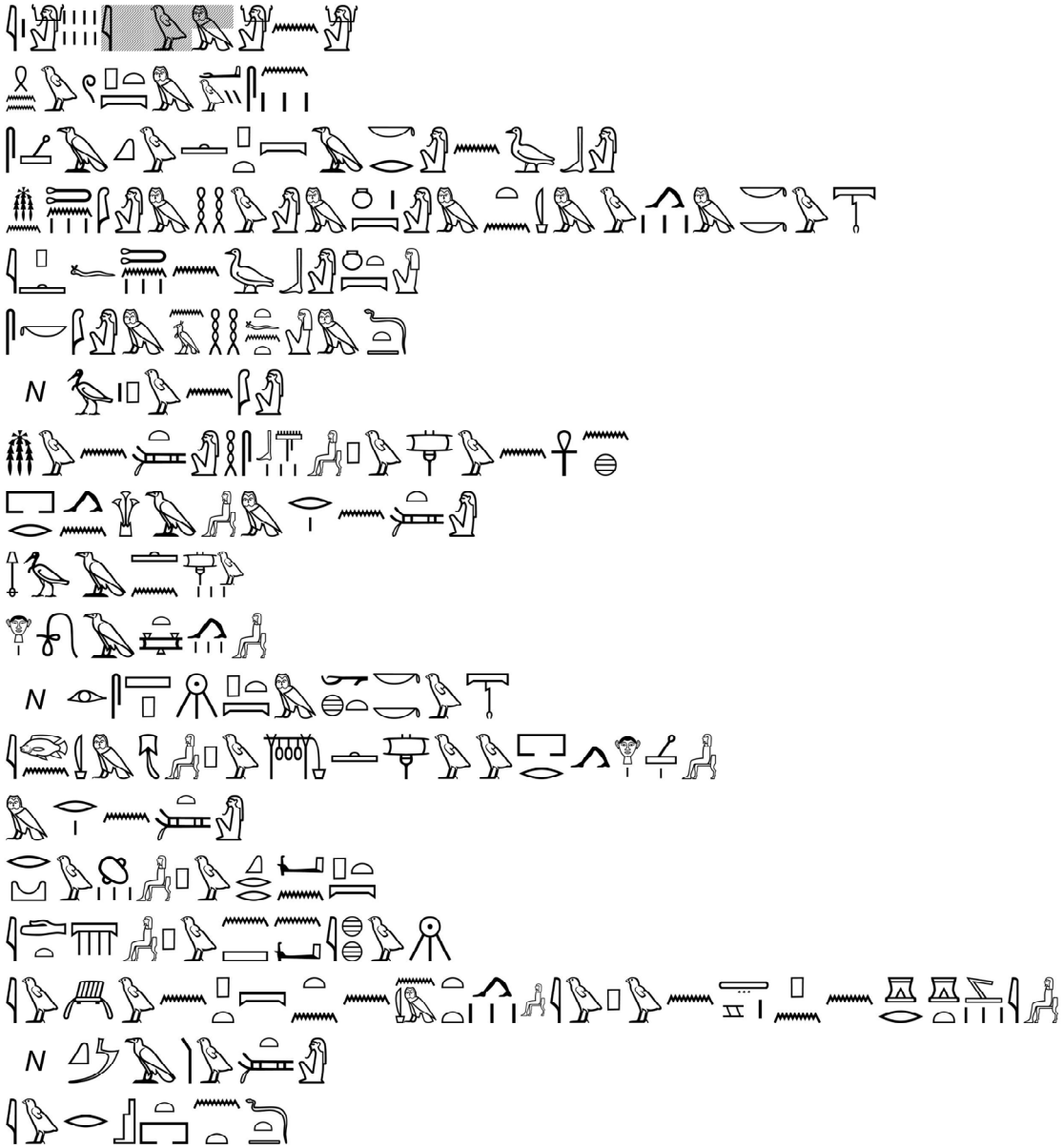
---

[367] シンクレティズムの詳細については Hornung 1996, 91-99 を参照。厳密な定義や理解については研究者により異なるが、本論文ではルフトの示すより広義的な理解にしたがう（Hornung 1996, 91; Luft 2001, 142）。

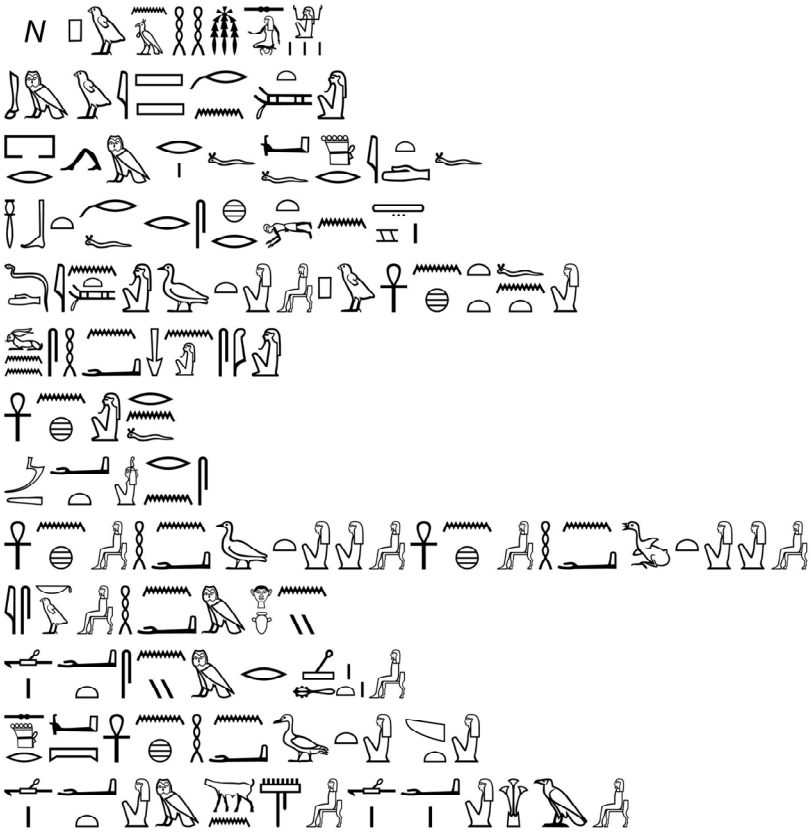
[368] Luft 2001, 142.

あると論じた[369]。この情報を参考としつつ、本稿では、マアト女神や二柱のマアトとその他の神的存在との習合関係を整理していきたい。

[事例 i]　Spell 80 *CT* 2, 32b~32h,　[B1C]



[369] Altenmüller 1975, 71-72.



27 [B1C]

[d] *i ḥḥ 8 i*[*p*]*w*[370] *m ḥḥ n ḥḥ*[371]

[e] *šnnw*[372] *pt m ꜥwy.sn*

28 [B1C]

[a] *sꜣkw pt ꜣkr*[373] *n Gb*

[b] *ms.n ṯn Šw m ḥḥw m Nw m tnmw m kkw*

[c] *ỉp.f ṯn n Gb Nwt*

[d] *sk Šw m nḥḥ Tfnt m ḏt*

[e] *N bꜣ pw n Šw*

---

[370] B2L、B1P、B7C、B1Bo、A1C より補足。
[371] G1T、A1C では双数形 *ḥḥwy* と記述される。
[372] 第三子音弱動詞の *šni* の未完了分詞。
[373] 通常 *ꜣkr* は大地の神アケルを意味するが、ここで「天」（*pt*）とともに動詞「統合する」*sꜣk* の目的語として記述されることから、大地を指すと考えられる（Faulkner 1973 85, n.2）。

29[374] [B1C]

[e] *ms.n ʾItm*

[f] *ḥbsw.i pw ṯꜣw n ꜥnḫ*

[g] *pr.n ḥꜣ.i m r n ʾItm*

[h] *wbꜣ.n ṯꜣww*

30 [B1C]

[a] *ḥr wꜣt.i*

[b] *N ir sšp pt m-ḫt kkw*

[c] *inm.i pw ꜥꜣb ṯꜣww pr ḥr sꜣ.i*

[d] *m r n ʾItm*

[e] *rḏw.i pw ḳrr m pt*

[f] *idt.i pw nšn iḫḫw*

31 [B1C]

[a] *iw ꜣw n pt tn n nmtt.i iw wsḫ n tꜣ pn n grgwt.i*[375]

[b] *N ḳmꜣw ʾItm iw*

[c] *iw* [*.f*][376] *st nt ḏt*

[d] *N pw nḥḥ msw ḥḥw*

[e] *wḥmw išš n ʾItm*

[f] *pr m r. f di.f ḏrit.f*

32 [B1C]

[a] *ꜣbt.f r sḫrt*[377] *n tꜣ*

[b] *ḏd.in ʾItm sꜣt.i pw ꜥnḫt Tfnt*

---

[374] B1C、B2L、B1P 上では *CT* 2, 29a-d は省略される。*CT* 2, 29a-c (B1Bo): *ḫnt mḥt wr*(*t*) *prr r mt r mrr.f hꜣꜣ r tꜣ r šsp ib.f mi m hꜥw m ḫsfw nṯr m N pn*「天の牛の前にいる者、自身の望みに向かって天に昇る者、自身の望みに向かって地に降りる者よ。この *N* としての（？）神の接近において、喜びの内に来い」。*CT* 2, 29b の *mrr.f*、*sšp ib.f* はそれぞれ未完了関係形と解釈した（van der Molen 2005, 1798）。*CT* 2, 29c の前置詞 *m N pn* の意味は不明瞭である。B7C、G1T、A1C にはさらに *CT* 2, 29d: *ink Šw*「私こそはシューである」が記述される。

[375] *iw ꜣw n pt tn n nmtt.i* と *iw wsḫ n tꜣ pn n grgwt.i* はそれぞれ所有を表す文（Gardiner 1957, 88）と解釈した。

[376] B1C、B2L、B1P には不変化詞 *iw* の直後に前置詞 *r* が置かれ、主語が記述されていない。*iw* に後接する接尾代名詞.*f* または.*i* を伴う B7C、B1Bo、G1T、A1C にしたがい接尾代名詞.*f* を補足した。

[377] 使役第 3 子音弱動詞 *sḫri*「転覆させる」の不定詞。ここではモーレンの辞書にしたがい、「大地へと落とされる」の意味で解釈した（van der Molen 2000, 542）。

[c] *wnn.s ḥnˁ sn.s Šw*

[d] *ˁnḫ rn.f*

[e] *mꜣˁt rn.s*

[f] *ˁnḫ.i ḥnˁ sꜣty.i ˁnḫ.i ḥnˁ ṯꜣty.i*

[g] *isk wi ḥr-ib*[378]*.sny*

[h][379] *wˁt.sny r sꜣ.i wˁt.sny r ḫt.i*

[i] *sḏr ˁnḫ ḥnˁ sꜣt* [*.i*][380] *mꜣˁt*

[j] *wˁt m-ḫnw*[381]*.i wˁt hꜣ.i*

おお、真の混沌の神々である[382]これらの８柱の混沌の神々よ！自身らの両腕によって天を取り囲む者、天と地をゲブのために結びつける者よ。シューが混沌の中で、原初の水の中で、闇（*tnmw*）と暗闇（*kkw*）の中で汝らを生み出したのは、シューが *nḥḥ* の永遠であり、テフヌートが *ḏt* の永遠である時に彼（シュー）が汝らにゲブとヌートを割り当てるためなのである。N はアトゥムが生み出したシューのバーである。私（= 彼）[383]の衣服は生命の息吹である。私（= 彼）の呻きが出てきたのは、アトゥムの口からなのである。空気が生じた[384]のは、私（= 彼）の道の上においてなのである。N は、暗闇の後に天の光を作る者である。私（= 彼）にとって望ましい肌（？）[385]は、アトゥムの口から私の（= 彼）後ろに出てくる息である。空の嵐は私（= 彼）の体の流出物であり、

---

[378] B1C では *ḥnˁ m ḥr-ib* と前置詞-前置詞-複合前置詞が並ぶ不可解な内容となる。B2L、B1P の記述にないことから、*hnˁ* は誤記である可能性が高いが、いずれの木棺にも *m* と *ḥr-ib* は共起されている。本論文では意味の重複とし、*m* を読まなかったが、もし *m* と *ḥr-ib* を正しい表記とするならば、*ḥr*(*y*)*-ib* をニスバ形容詞とし、「～の真ん中にいる者である」と解釈することが可能である。

[379] フォークナーは *wꜣty* と双数形として解釈し *wˁty.sny r-sꜣ ḫt.i*「彼らの両方は私の前後にいる」と訳している（Faulkner 1973 84, 86, n. 13）。彼らはここでシュー（生命）とテフヌート（マアト）を指すが、CT 2 32j では、両者は「一方は私の内部に」「（もう）一方は私の周囲に」と個別に描写されている。加えて、B1C の CT 2 32j 上の *sꜣt.i ḫt.i* が並列して記述されていることから、筆者は *wˁt.sny r sꜣ.i wˁt.sny r ḫt.i* と二つの文章の並列であると解釈した。前置詞 *m* と *r* が重ねて表記されているが、B2L の記述から *m* は誤記であると考えられる。

[380] B2L にしたがい、一人称単数接尾代名詞*.i* を補足。

[381] 𓅱は誤記（Faulkner 1973, 86, n. 14）。

[382] 字義通りには、「混沌の神々の（なかの）混沌の神々としての」。

[383] B1C のテキストでは、死者を示す記号は自身の名前（N: *Spi*）で示される場合と、「彼」*.f* ではなく「私」*.i* で表記される場合が混同している。

[384] 字義通りには「風が開いた」。

[385] *inm* は「肌」や「色」を意味するが、ここでの意味は不明瞭である（van der Molen 2000, 40）。

嵐と大嵐の前の薄暗い雲[386]は、私（= 彼）の汗である。天の長さは、私（= 彼）の歩幅に属し、大地の広さは私（= 彼）の敷地に属する。N はアトゥムが創り出した者であり、彼は *ḏt* の永遠の座に向かっている。N は混沌の神々が生み出した *nḥḥ* の永遠であり、彼（アトゥム）の口から、彼（アトゥム）が彼（アトゥム）の手を置いた時にアトゥムの唾液の再び生み出された者である[387]。彼（アトゥム）の唾液（？）[388]は大地へと落とされるであろう。

そしてアトゥムは言った。

「テフヌートは私の生ける娘であり、彼女が存在するのは、彼の兄シューとともになのである。彼の名前は『生命』であり、彼女の名前は『マアト』である。私は私の双子とともに生き、私は私の二人の子らとともに生きる、（なぜなら）私は彼らの中央におり、彼らの一人は私の背に向かい、彼らの一人は腹に向かっているからである。『生命』は（私の）娘『マアト』とともに夜を過ごす、一人は私の内部に、もう一人は私の周囲にいる時に。」

「コフィン・テキスト」呪文第 80 章は、古代エジプトの世界の創造の神話に密接に関わる呪文である。呪文第 75 章から第 80 章に記された世界の創造の描写は、「コフィン・テキスト」の呪文の中でもひときわ特徴的な呪文に位置づけられる[389]。呪文第 80 章は、特に創造神であるアトゥムによるシューとテフヌートの発生の過程を描写した呪文として知られるが、長大な呪文であるため、本論文では呪文の冒頭部分からマアトに関する描写を示す範囲の翻訳の提示に留める[390]。

---

[386] *iḫḫ* は字義通りには「薄明り」を意味する。嵐と並んで記されることからフォークナーの解釈にしたがい、雲行きを意味する語と解釈した（Faulkner 1973, 86, n. 9）。

[387] *di.f ḏrit.f*「彼（アトゥム）の手を置いた」は、創造時におけるアトゥムの自慰行為の隠喩であると考えられる。世界の創造においてシューとテフヌートは、アトゥムの自慰により生まれるという観念と、アトゥムの口から出る唾液により生まれるという観念との混在がうかがえる。あるいは、この文脈における口（*r*）や唾液（*iššꜣ*）が自慰行為によるシューの誕生に関する隠喩表現なのかもしれない（Faulkner 1973, 86, n. 11）。

[388] フォークナーは「不明な語」としているが、モーレンは「コフィン・テキスト」上の事例としてこの節の出典のみを示し、「唾液」としている（Faulkner 1973, 83, 86, n. 12; van der Molen 2010, 2）。この解釈はフォークナーの仮訳に依拠するものと考えられるが、文脈や𓈖の限定符から判断した場合、この仮訳の蓋然性は高いといえる。

[389] ザンデはこれらの一連の呪文の重要性にいち早く注目し、各呪文の内容理解を目指す綿密な史料研究を行っている（e. g. Zandee 1972a; 1972b 1973, 1974）。各呪文の内容の翻訳と解釈については Faulkner 1973, 72-87; Allen 1988, 14-27 を参照。

[390] 呪文の内容は *CT* 2, 43h まで続く。アレンによれば、呪文第 80 章は呪文第 75 章から 79 章までの創造神話を要約し、その内容を更に発展させたものである（Allen 1988, 24）。

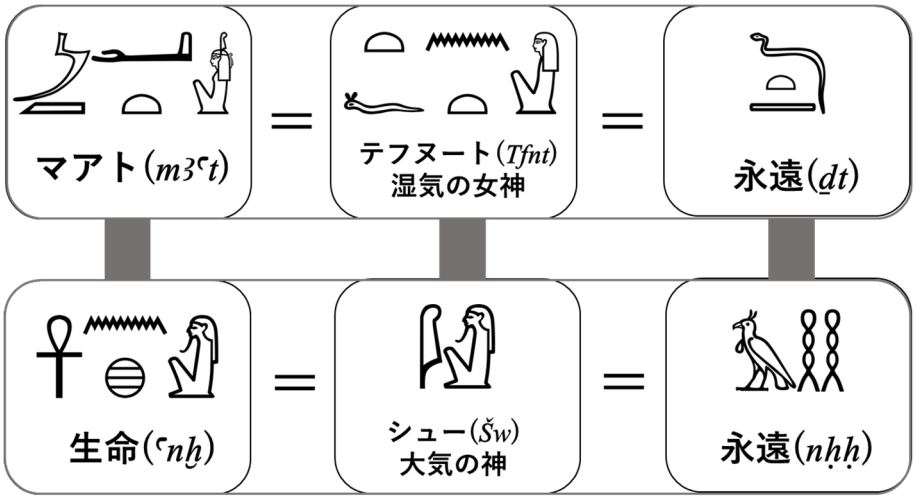
呪文の内容は、混沌の神々への呼びかけにはじまり、呪文の所有者は大気の神シューについて語る。シューは、ゲブとヌート、つまり大地と天を混沌の神々に割り当てるために混沌の神々を創り出した（*CT* 2, 28b-c）。創造神話において、世界はシューが大地（ゲブ）と空（ヌート）を引き離すことによって生まれた。このようなシューの重要性を述べた後、死者は自身を「シューのバー」であると宣言する。自身の体に由来する事物（流出物・汗）を世界の現象と同一視し（*CT* 2, 30 e-f）、死者はシューのバーである自分を「アトゥムが創り出した者」と称し（*CT* 2, 31b）、アトゥムの自慰によって発生した神であると述べる（*CT* 2, 31e-32a）。世界の創造が死者によって語られた後、アトゥムによる発言がなされる。そこでアトゥムは、彼が生み出した二柱の神々、シューとテフヌートについて彼らの本質を語っている。

> テフヌートは私の生ける娘であり、彼女が存在するのは、彼の兄シューとともになのである。彼の名前は「生命」であり、彼女の名前は「マアト」である（*CT* 2, 32b-e）

この文章において、シューはその名を「生命」（*ꜥnḫ*）と呼ばれ、それと対をなすテフヌートは「マアト」の名を持つことが明示されている。つまり、ここでマアトは女神としてテフヌートと同一視されていることがうかがえる。続く文章でも、マアト女神はテフヌート、つまりアトゥムの娘として言及されている（*CT* 2, 32e）。さらにマアトと同一視されるテフヌートとシューの関係に目を向けると、テキストの前半部分においてシューが「*nḥḥ* の永遠」、テフヌートが「*ḏt* の永遠」とあるように、これらの同一関係も確認される。（*CT* 2, 28d）。「永遠」として翻訳されるこの２種の対をなす「永遠」は、いずれも古代エジプト宗教における時間の概念である[391]。*nḥḥ* は通常、繰り返し回帰すると同時に変化し続ける「永遠」であり、日々繰り返される太陽の運行と関連づけられ、現世における時間の感覚として理解される。対して *ḏt* の概念は、恒久的・永続的な意味における「永遠」であり、下界における時間の感覚に一致する。この呪文のなかで、シューは *nḥḥ* とテフヌートが *ḏt* の永遠の観念と同一視されることから、シューが現世、テフヌートが死後の世界との関連を持つことがうかがわれる。テフヌートの名前が「マアト」であることに対して、シューが「生命」の名を持つ点もこの相関関係を強調していると考えられる。この事例の描写を整理すると、マアトに関して、次のような相関関係が見いだされる。

---

[391] *nḥḥ* と *ḏt* の概念については、アスマンがその性質を精確に捉え、明瞭な説明を示している（アスマン 1998, 98-106）。



これらの相関関係、つまり「シュー＝生命＝*nḥḥ*」と「テフヌート＝マアト＝*ḏt*」の関係は、同呪文における別の場面でも再び強調される。創造神であるアトゥムと原初の水との対話のなかで、原初の水はアトゥムに次のように語る：

> *sn s3t.k m3ʿt di n.k s*(*y*) *r fnd.k ʿnḫ ib.k n ḥr.sn r.k s3t.k pw m3ʿt hnʿ s3.k Šw ʿnḫ rn.f wnm.k m s3t.k m3ʿt in s3.k Šw ṯsi.f ṯw*
>
> 汝の娘「マアト」に口づけをせよ。彼女を汝の鼻に対して置け、汝の心が生きるために。彼らは汝から離れていない：それは汝の娘マアトと汝の息子シュー、その名を「生命」とするものである。汝は汝の娘マアトを食物とする。汝を昇らせるのは、汝の子シューである[392]

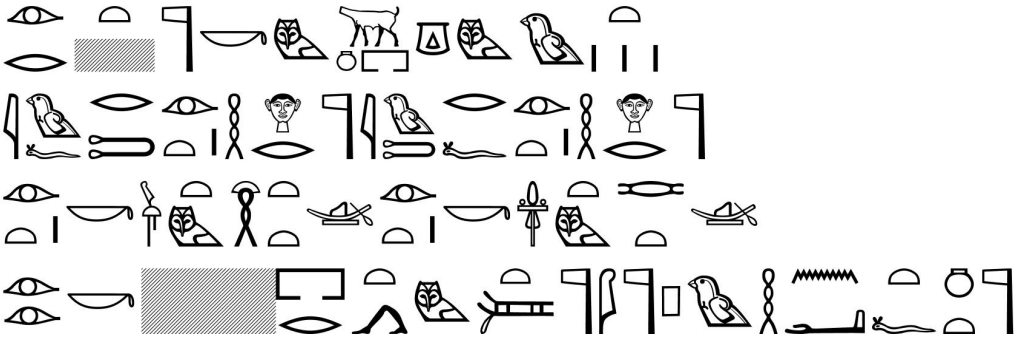
アレンは、この呪文におけるマアトの記述をマアト女神ではなく、抽象概念として解釈している[393]。しかし、マアトがテフヌートと同一視されるだけでなく、度々アトゥムの娘として直接的に描写されることから、筆者はここでのマアトが女神として描写されていたと考える。創造神であるアトゥムの二人の子として現れたシューとテフヌートは、次の事例においてその他の神的存在と同一関係を形成する。

---

[392] *CT* 2, 35c-h (B1C).

[393] Allen 1988, 22-23. フォークナーは、*CT* 2, 32e の *m3ʿt* のみ Righteousness としながら、その他の記述をマアト女神として理解している（Faulkner 1973, 27-28）。

[事例 ii]　Spell 607 *CT* 6, 220o~220r　[L2Li]



220p [L2Li]

[o]　*ir*(*w*) *r* [*it*].*k m-ḫnw gmwt*

[p]　*iw.f r.t irt Ḥr iw.t r.f irt Ḥr*

[q]　*irt.k imnt m msktt irt.k i3bt m mˁndt*

[r]　*irty.k* [*Ḥr*][394]　*prt m ʾItm Šw pw ḥnˁ Tfnwt*

衰弱の中にいる汝の父親に対して（攻撃を？）[395]行う者

彼は汝に敵対するだろう、ホルスの眼よ！汝は彼に敵対するだろう、ホルスの眼よ！

汝の右目は *msktt* の船であり、汝の左目は *mˁndt* の船である。

汝、[ホルス？] のアトゥムより出てきた両目よ！それはシューとテフヌートである。

「ホルスの目」を死者が手にすることを目的とする呪文[396]のなかで、「ホルスの眼」と「シューとテフヌート」の関係が論じられる。文章の内容からホルスの右目は *msktt* の船、左目が *mˁndt* の船と同一視される。第３章で既にみたように、*msktt* は太陽神が下界を航行する

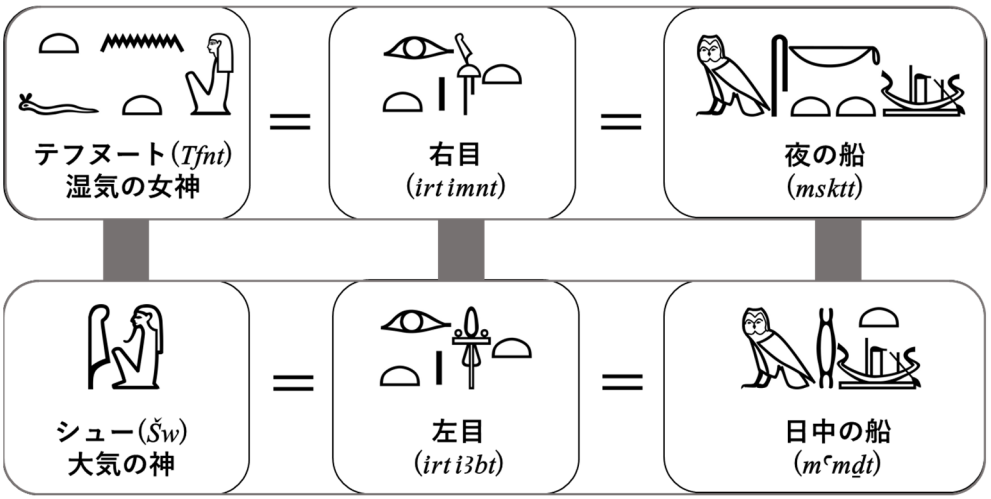
---

[394] 欠落により判読できない箇所であり、いずれの研究者もホルスを挿入している。この補足は断定的ではないが、後接する *prt* を *irty* を修飾する完了分詞と解釈した場合、*.t* と *prt* の間の欠損部分は*.t* もしくは *irty* を修飾する語句や先行研究が示すような挿入句であると考えられる（Faulkner 1977*,* 195; Barguet 1986, 67; Carrier 2004 1402-1403）。

[395] *ir* の目的語は記載されていないが、文脈から汝の父親、すなわちオシリスに対して何らかの攻撃を行う者を指すことが推察される。バルゲやカリエは目的語を記していないが、フォークナーは「危害を加える」と訳している（Barguet 1986, 67; Carrier 2004, 1402-1403; Faulkner 1977, 195）。

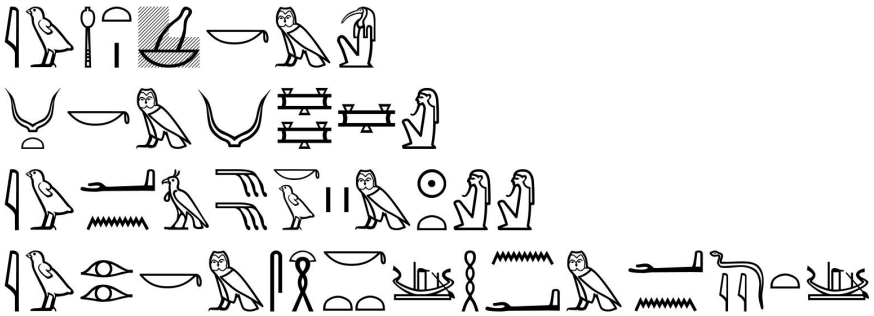
[396] テキストは、リシュト出土の欠損の多い一点の木棺に確認されるのみである。ホルスとセトによる王位を巡る争いの神話的描写が多い点や、文字の記述法が従来のテキストと異なることから、呪文の内容には理解の困難な点も多く残る。

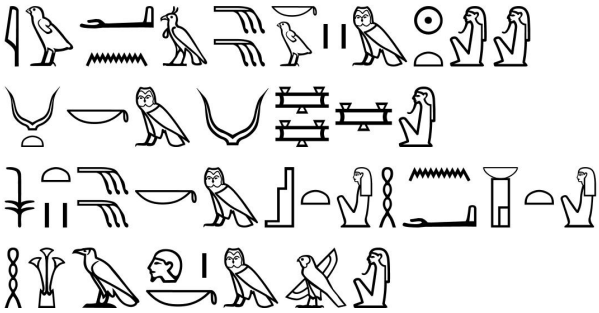
ための船、*mꜥnḏt* は日中に空を航行するための船として登場する。右を意味する *innt* と左を意味する *iꜣb* の本来の意味は、死後の世界と現世を暗示する「西方」と「東方」であるため、その右目が死後の世界、左目が現世との関連を持つことがうかがえる。その後、ホルスの両目はアトゥムから生まれた、シューとテフヌートであることが述べられる。シューとテフヌートが両目のいずれかであるかは明記されていないが、先の事例 i に見たように、シューが現世の側面、テフヌートが死後の世界の側面を有していることから、左目がシュー、右目がテフヌートにそれぞれ対応すると考えられる。この呪文の内容をまとめると、下図のような関係が見いだされる。



シューとテフヌートの一組や *mꜥnḏt* の船と *msktt* の船の一組が、神聖な目と同一視されることは、以下の二例の記述からも確認される。

[事例 iii]　Spell 531 *CT* 6, 123i~124e　[M36C]





123 [M36C]

[i] *iw ḥḏt.k m Ḏhwty*

[j] *wpt.k m Wp-wꜣwt*

[k] *iw ˁnḥwy.k*[397] *m psḏty*

124 [M36C]

[a] *iw irty.k* [*m*][398] *msktt ḥnˁ mˁnḏt*

[b][399] *iw ˁnḥwy.kwy m psḏty*

[c] *wpt.k m Wp-wꜣwt*

[d] *swty.k m ꜣst ḥnˁ Nbt-ḥwt*

[e][400] *mḳḥꜣ*[401] *.k m Dwn-ˁnwy*[402]

汝の白冠はトートである。汝の頭はウプウアトである。汝の両眉毛は二柱の九柱神[403]である。汝の両目は *msktt* の船と *mˁnḏt* の船である。汝の両眉毛は二柱の九柱神である。汝の頭はウプウアトである。汝の髪の両房はイシスとネフティスである。汝の後頭部はドゥンアンウィである。

---

397 M36C 上では接尾代名詞.*k* の後に𓅱が記される。呪文の中において双数形で表記される男性名詞が *nḥ* のみであることから、𓅱は *nḥwy* の音節を示すために付記され、その間に接尾代名詞が挿入されていると推察される。

398 各節で示される同一関係が前置詞 *m* によって示されるため *m msktt* であるとした。文字の重複によりいずれか一方の *m* が省略されていると考えられる。

399 M36 上の *CT* 6, 124b, 124c はそれぞれ *CT* 6, 123k, 123j の重複である。この呪文では、いずれの史料でも同一関係を示す一節の重複が度々見受けられる（*CT* 6, 123-125）。

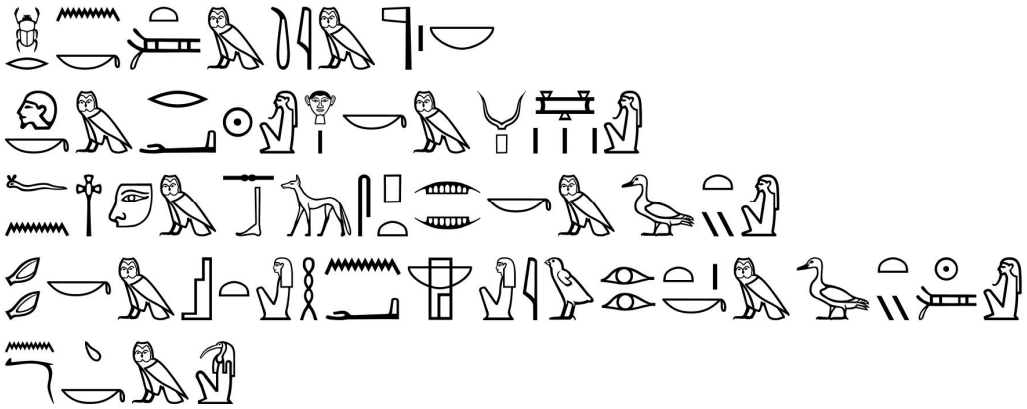
400 M36C を除く 3 種のテキストには *mḳḥꜣ* に前節して不変化詞 *iw* が記述される（*CT* 6 124e）。

401 *mkhꜣ*「後頭部」の異形（van der Molen 2000, 187-188）。

402 字義通りには「両腕を伸ばす者」。神聖な隼の姿を持つ神である（*LGG* 7, 525）。

403 九柱神を意味する *psḏt* が双数形で示されるため、二柱の神として両眉毛に対応することは明らかであるは、具体的にどの神を指しているかは不明である。

[事例 iv]　Spell 761 *CT* 6, 391h~391k　[T1L]



391 [T1L]

[h]　*ḫpr.n.k m nṯr mb*

[i]　*tp.k m Rˁ ḥr.k m Wp-wꜣwt*

[j]　*fnḏ.k m sꜣb spty.k m sꜣty*

[k]　*msḏrwy*[404]*.k m ꜣst ḥnˁ Ḥwt-nbt irty.k m sꜣty Irm*

[l]　*ns.k m Ḏhwty*

汝が生まれたのは、あらゆる神として完成された時なのである。汝の頭はラーである。汝の顔はウプウアトである。汝の鼻はジャッカルである。汝の両唇は「二人の子」[405]である。汝の両耳はイシスとネフティスである。汝の両目は、アトゥムの双子である。汝の舌はトートである。

呪文第 531 章（事例 iii）と呪文第 671 章（事例 iv）では、神的存在と死者もしくは神の肉体との同一視が描写される。第 3 章で見たように、この種の呪文は既に古王国時代の「ピラミッド・テキスト」（事例 3）にも確認でき、その内容が「コフィン・テキスト」にも引き継がれていることがわかる。

---

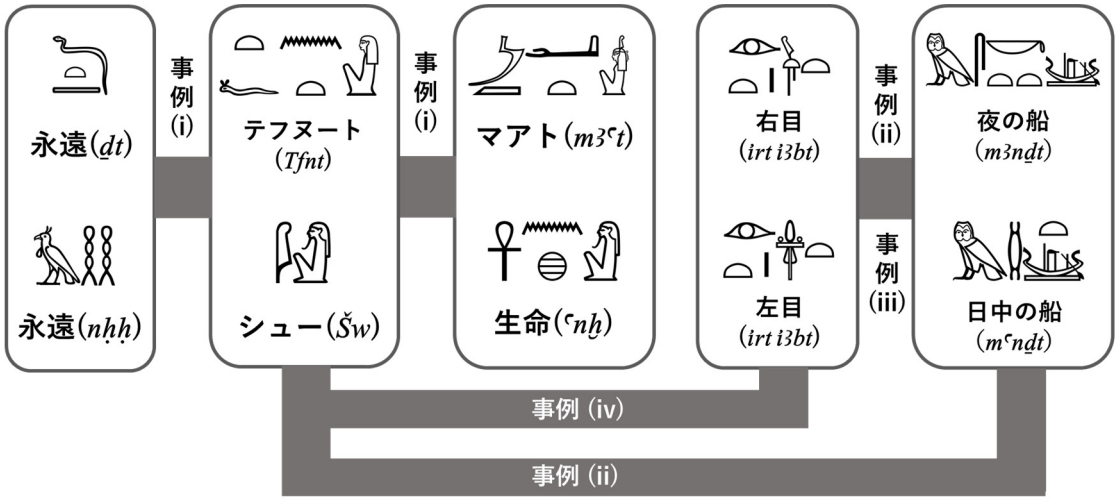
[404] カリエは *idnwy* と読む（Carrier 2004, 1706-1707）。

[405] 類例の少ない抽象的な名詞であり、その詳細は不明である。文脈上、シューとテフヌートを指す「双子」やイシスとネフティスの姉妹とは異なる神々として記されることのみ明らかである。*LGG* では「二人の娘」とされるが、付記される限定符が男神であるため、性別も不明である（*LGG* 6, 113）。

第 531 章では、死者の復活に密接に関係する神[406]について、その偉大さを示すために種々の神的存在との同一関係が語られる[407]。この神の名は呪文中で明示されていないが、おそらくオシリスを指すと考えられる[408]。この神の目は、事例 ii と同様の表現で *mꜥnḏt* の船と *msktt* の船と同一視されている。

呪文第 761 章の題目や冒頭部の内容は、この呪文が死者と同一視されたオシリスに向けられていることを示している[409]。そのため、この事例における「汝の両目」は、死後の復活が望まれたオシリスの両目を意味する。この二つの事例は、「両目」がホルスだけでなくオシリス（あるいはその他の死者の復活に関わる神）の目として、シューとテフヌートの一組や、太陽神の二隻の船と同一視されることを示している。

事例（i）から事例（iv）で見た神々の習合関係を整理し、以下の図にまとめた。事例（i）において、テフヌートとシューはそれぞれマアトと生命と同一視され、同時に前者は *ḏt* の永遠、後者が *nḥḥ* の永遠と同一視される。マアトと同一視されたテフヌート女神とその対をなす男神シューは、事例（ii）のなかでそれぞれ太陽神の船である *mꜥnḏt* と *msktt* の組み合わせ、そして同時にホルスの右目と左目と同一視される。さらにこの聖なる両目は、オ



406 呪文の冒頭部においてこの神は以下のように形容される：*nfr-ḥr nb mꜣꜥwty ts n ʾInpw skꜣ Ptḥ-Skr rdi .n n.f Šw ṯsw nfr ḥr imy nṯrw*「顔つきの善い者、二つの目の主、アヌビスが繋ぎ合わせた者、プタハ・ソカルが昇らせし者、シューが支えを与えし者、神々の中にいる顔つきの善い者」（*CT* 6, 123b-f）。

407 呪文の後半部分で語られる *sꜣḫ.k sw*「汝が彼（死者）をアクにせんことを！」（*CT* 6, 125a）から、死者の復活に関わる神として描写されていることがうかがえる。

408 この神に関して冒頭部で示される「顔つきの善い者」（*nfr ḥr*）は、しばしばオシリスの別名として利用されるが「コフィン・テキスト」の他の事例では、プタハもしくはプタハ・ソカルを指す（*LGG* 4, 214-216; *CT* 6, 267j; *CT* 1, 249g）。

409 *CT* 6, 391a-c. 呪文の題目は「墓場で彼のためにアクの肉体を繋ぎ合わせること」（*dmḏ ꜥwt nt ꜣḫ n.f m ḫrt-nṯr*）であり、オシリスの復活を示している（*CT* 6, 391a）。

シリス、あるいはその他の神の持つ両目として事例（iii）で *msktt* の船と *mꜥnḏt* の船と、事例 iv でアトゥムの双子、すなわちテフヌートとシューとして描写される。

マアトとの同一関係を示す図の上部に目を向けると、マアトがテフヌート、*ḏt* の永遠、*msktt* の船、（ホルス/神の）右目と習合関係にあることが見てとれる。一方でマアトの対として登場した「生命」*ꜥnḫ* はシュー、*nḥḥ* の永遠、*mꜥnḏt* の船、（ホルス/神の）左目に合致する。ここで注目すべき点は、これらの習合関係が、必ず「２つの要素」の組み合わせ関係を基に形成されている点である。ここで見られる習合関係が言及される際には、例えば「テフヌートとシュー」が「マアトと生命」として描写されるように一組単位で習合関係が成立しており、マアトが単体でテフヌートと同一視される記述や、マアトがそれのみで *mꜥnḏt* と同一視される記述は見受けられない。マアトはあくまで生命との組み合わせ関係の中でその他の神的存在と同一視されているのである。

アルテンミュラーは、ここで形成される「マアトと生命」＝「テフヌートとシュー」の関係等から「二柱のマアト」の実体はシューとテフヌート女神であると断定している[410]。しかしながら、マアトがテフヌートであり、生命がシューであることは確かではあるものの、「二柱のマアト」（*mꜣꜥty*）の直接的な言及はこの習合関係には一切現れず、この一組を「二柱のマアト」と断定することは難しい。加えて、アルテンミュラーの考察は、第３章の事例 1, 2 で検証し、実証性に欠けると結論づけられた「*tfn*・*tfnt*」＝「二柱のマアト」という習合関係に基づいている。そのため、*mꜣꜥty* の記述を含む直接的な事例が確認されない限り、ここで示した習合関係のみから、シューとテフヌートが「二柱のマアト」であるとするべきではないであろう。

しかしながら、筆者は「コフィン・テキスト」の時代に古代エジプト人に「二柱のマアト」が男神と女神の一組として認識されていることを示す事例をベルシャ出土のセピの木棺の記述内容から確認することができた。図 5-1 に示される通り、事例 27 で検討した *mꜣꜥty* の語に付記された限定符はその他の *mꜣꜥty* に伴う限定符と異なり、マアト女神の限定符と男神の限定符の一組𓀭𓀭で示されていることが見てとれる。この限定符は、古代エジプト人が「二柱のマアト」を男神と女神の組み合わせと認識していたことを明示するものであり、先に整理した習合関係における「テフヌートとシュー」の一組を「二柱のマアト」とする解釈を支持するものであるといえる。

---

410 Altenmüller 1975, 71.

図 5-1　ベルシャ出土の*Spi* の木棺（B1C）の底部　オランダ近東研究所蔵 De Buck Coffin Text Archive（筆者撮影）© Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten

「コフィン・テキスト」で示された習合関係に再び目を向けると、個々の組み合わせを形成する２つの要素が、それぞれ「死」と「生」の性質を持つことが推定される。*ḏt* と *nḥḥ* はそれぞれ死後の世界と現世における時間の観念に一致し[411]、右目と左目もまた、西方と東方、すなわち死後の世界と現世を指す。*msktt* は太陽神が夜に下界を航行する船であり、*mʿnḏt* は日中に天を航行する船である。大気の神であることから「生」と密接な関係にあるシューに対して、テフヌートが「死」の側面を持つのか[412]、そして「生命」と対をなす「マアト」が死に関する性格を持つかについては定かではない。しかしながら、マアトとテフヌートに結びつく「*ḏt* の永遠・*msktt* の船・右目」が「死」に、生命とシューに結びつく「*nḥḥ* の永遠・*mʿnḏt* の船・左目が「生」の観念にそれぞれ矛盾することなく同一関係を形成する点は、これらの習合関係が複雑でありながら、一貫性を伴い形成されたものであることを示唆する。この習合関係に見出される「生」と「死」の関係においても、「二柱のマアト」をシューとテフヌートの一組であるとする仮説は、先行研究の成果とも一定の整合性を持つと言えるだろう。ブリーカーによれば、「二柱のマアト」の実体は「生のマアト女神」と「死のマア

411 アスマンは *nḥḥ* を「太陽時間」、*ḏt* を「オシリス時間」であると説明している（アスマン 1997, 104-105）。

412 テフヌートは、シューと並ぶ世界の創造に関わる女神であるが、その特徴については語られていない（Tobin 2001）。アレンはシューが現世における空気がシュー、下界における空気がテフヌートであった可能性を提示している（Allen 1984, 9）。

ト女神」であり、シーバーは、二柱のマアトの意味を一つの秩序としてのマアトの概念の「現世の秩序」と「下界の秩序」への分割と理解している[413]。ヨヨッテの提示する「太陽と月」の隠喩と「二柱のマアト」もまた同様に、現世と死後の世界の象徴である[414]。新王国時代の「二柱のマアト」の先行研究により導かれた「二柱のマアト」の内容の推察は、いずれも直接的あるいは間接的に、生と死に関するマアトの組み合わせ関係を形成しているのである。

テフヌートが「二柱のマアト」の一方のマアトと明確に同一視される一方で、シューがもう一方のマアトと同一視される理由は、シューの図像学的な特徴からも推察される。すなわち、シューが図像として登場する場合、多くの場合において彼は頭にダチョウの羽根を載せた男神として描写される[415]。この特徴は、同じく頭にダチョウの羽根を載せたマアト女神の図像と著しく類似する。このような図像的特徴もまた、男神であるシューが「二柱のマアト」のうちの一柱であると考えられた要因の一つであると筆者は考える。

最後に、「シューとテフヌート」をはじめとする神的存在の各種の組み合わせが「*mˁnḏt* の船と *msktt* の船」の一組と同一視されていることもまた、これらの関係が「二柱のマアト」と同一視された可能性を示唆しているといえよう。第２章、第３章ですでに見たように、「ピラミッド・テキスト」や「コフィン・テキスト」における *mꜣˁti/mꜣˁty* の事例のいくつかは明らかに太陽神が所有する「二隻の船」として描写されていた。*mˁnḏt* の船、*msktt* の船も同様に、太陽神の所有する船であり、それぞれが日中の船と夜の船としての側面を持ち、二隻で太陽神の航行に利用されることから、多くの場合二隻の船は「一組」で示される。このような太陽神の船としての性格と「二隻」で描写されるという共通点から、*mꜣˁty* が「二隻の船」として *mˁnḏt* の船と *msktt* の船と同一視された可能性は十分に考えられる。さらに、いずれの船にも共通して特殊な限定符が利用されていた点も、これらの船が極めて密接な関係にあったことを示している[416]。つまり、本節で整理したマアトに関連する習合関係において、これらの関係を形成する各種の組み合わせが「二柱のマアト」に相当する可能性は、「マアト・生命」と「テフヌート・シュー」のような神々の関係だけでなく、太陽神の船としての側面を持つ「*mꜣty* の船」と「*msktt* の船・*mˁnḏt* の船」の関係からも強調されるのである。

---

413 Bleeker 1929, 61; Seeber 1976, 146.

414 Yoyotte 1961, 61.　加えて、太陽と月は太陽神の「両目」であり、この点においても本節で確認した「両目」＝「シュー・テフヌート」＝「二柱のマアト」の可能性が示唆される。

415 この特徴は、ダチョウの羽根𓄡が *mꜣˁt* の記号として記される一方で、この文字で *šw* といいう表音文字として利用されることに由来する。実際にシューの名前が史料上に記述される場合、およそ全ての場合において𓄡の文字が利用される。

416 Anthes 1957, 82-83.

終章

本論文では、古代エジプト文化の根底にある抽象概念であるマアトの概念の更なる理解を目指し、「二柱のマアト」と呼ばれるマアトの特殊な形態に注目し、古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の内容を探究した。

序章では、古代エジプトのマアト研究における「二柱のマアト」の研究意義を明らかにするため、長年にわたり継続されてきたマアトの先行研究の成果を踏まえながら、マアトの概念が併せ持つ「王権との関係」（第 2 節）、「道徳的・倫理的側面」（第 3 節）、「マアト女神」（第 4 節）の側面の内容を概観した。マアトを「王権との関係」から探求すると、この概念はエジプトを統治する王の持つ神的属性であると同時に、王がエジプト社会において果たす義務でもあった。マアトの意味は本来、世界の創造における「宇宙の秩序」のある状態であり、王はこの「宇宙の秩序」ある状態を現実世界において体現する責務を負っていた。新王国時代になると、この観念が「マアトの提示」の図像に反映されたことで、神々にマアトを捧げることで国土を統治する王の正当性のイメージが浸透した。加えて、時代を問わず古代エジプトの数多くの統治者の名に「マアト」の語が組み込まれていることも、この概念が古代エジプトの王権と密接な関係にあったことを示唆している。

序章第 3 節で整理したマアトの「道徳的・倫理的側面」は、この概念が社会の支配者層、被支配者層を問わずエジプト人の思想に浸透していたことを示している。「正義」や「公正」を意味するマアトの語は、各時代に記された自叙伝や教訓文学、葬祭文学など幅広い種類の史資料に見受けられる。特に「死者の書」第 125 章に描かれる「心臓の計量」や「罪の否定告白」の場面は、死後の復活を切望する古代エジプト人にとってマアトが重要な概念であったことや、古代エジプト人の持つべき倫理観や道徳観としてのマアトの具体的な内容を明確に示している。また、「雄弁な農夫の物語」における農夫の発言は、マアトの「道徳的・倫理的側面」がエジプトの被支配者層の人々の思想にも浸透していたことを示している。

序章第 4 節では、マアトの女神としての側面を概観した。この女神は、宇宙の秩序や正義、真実、公正を意味する抽象概念であるマアト（*mꜣʿt*）の神格化であり、頭にダチョウの羽根を載せた女神の図像𓁷で描写される。古い起源を持ちながらも、おそらくは本来の姿を抽象概念とするため、マアト女神はエジプトの主要な神々とは異なる特徴を備えていた。

最後に、序章第 5 節において、女神としてのマアトの女神の特徴のなかでも、特異な「二柱のマアト」の重要性を指摘した。このマアト女神は、特定の史資料のなかで一柱の女神ではなく、「二柱のマアト」（*mꜣʿty*）と呼ばれる二柱の女神の姿で描写される。本来一柱で描かれる女神が二柱の姿となって現れる事例は、神々の姿が多様に変化する古代エジプトの宗教においても稀である。しかし、「死者の書」における最も重要な場面である死者の裁判の場面において、裁判が行われる広間が「『二柱のマアト』の広間」（*wsḫt nt mꜣʿty*）と称されることから、この女神が死者の裁判において重要な役割を担うことは明らかである。このような重要性と特殊性から、「二柱のマアト」（*mꜣʿty*）は様々な研究者の関心を集め、20 世紀の初頭から現在にいたるまで、二柱となって現れたマアト女神の意味を明らかにする研究が継続されている。しかし、「死者の書」に先立つ史料には、「二柱のマアト」は一部の史料にしか確認されておらず、エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の研究は十分になされていない。そのため、本来一つの概念であるマアト女神が二柱の女神として現れた理由は、いまだ解明されていない。このような状況から、「二柱のマアト」の内容をより初期の時代に遡って探求するため、古代エジプトの古王国時代と中王国時代の史料に残されれた「二柱のマアト」の記述を主な対象とする研究の必要性が提示された。そして、この課題を解決するため、各記述の内容を厳密に分析し、異なる時代の史料の「二柱のマアト」の内容を比較・検討することで、時代の変化に伴う「二柱のマアト」の変遷の考察を本論文の目的に定めた。

第 1 章では、エジプト史の前半期における「二柱のマアト」が記述された史料の大部分を占める古代エジプトの葬祭文学について、エジプト学研究における葬祭文学の研究意義と歴史史料として分析する際の留意点を整理した。古代エジプトの葬祭文学は、古代エジプト文化史、とりわけ葬祭文化や宗教を探求する上で最も重要な史料群であると同時に、史料の性格上、その内容理解が容易ではなく、また、記述内容と史料が利用された時代の歴史的背景との関係を考察するうえで注意を必要とするためである。

第 1 章第 1 節では、葬祭文学のテキストの変遷を巡る問題を提示し、葬祭文学を文献史料とする際には十分な注意が必要であることを示した。葬祭文学は、「ピラミッド・テキスト」や「コフィン・テキスト」、「死者の書」など、時代の変化に伴いその内容や形式、テキストの利用者を変えながらも、死者の来世における復活と安寧という共通の目的をもってエジプトの長い歴史のなかで利用された。そのため、各史料に共通する内容のテキストや一部の史料にのみ見受けられる特徴が確認される。この点から、これまでの葬祭文学の研究では、

時代毎のテキストの内容やテキストの利用者との関係の考察や、これらの変化の背景にあるとされる王権史や政治史の変遷の探求が精力的になされてきた。しかしながら、「来世の民主化」を巡る一連の議論を通して示されたように、古代エジプト史における思想の変化は、必ずしも同時期の政治的変化やその他の歴史の要素の変化に対応するわけではない。葬祭文学の変化に見られるエジプト人の思想の変化から当時の社会的背景を考察する際には、その論証を文献史料の検証に留まらず、考古資料の十分な吟味を踏まえたうえで、より多角的かつ厳密に行われなければならない。以上の点から、葬祭文学のテキストの変遷の背景として想定される政治的変化を本論文における考察の対象とせず、「ピラミッド・テキスト」を含む古王国時代の史料から「コフィン・テキスト」が利用された *mꜣʿti/mꜣʿty* の内容の変化自体を考察の対象と定めた。

第 2 節では、葬祭文学の内容理解の難解さについて論じた。史料の性格上、葬祭文学の内容は古代エジプト人の思想や彼らの思い描く神々、死後の世界の描写する語句を多分に含む。これらの語句が示すものの多くは、考古資料上で確認されないことに加えて、その類例の少なさゆえに断片的な情報しか得られないことから、意味を特定できない語句を多く残している。語句の不明瞭さは、前後の文脈による一連のテキストの理解を困難にさせ、それゆえテキストの解釈が定まらないことも多い。本論文の研究対象である「二柱のマアト」が、葬祭文学という難解な史料に中心的に記述される限り、「二柱のマアト」の理解に際して、筆者はその前提となる葬祭文学の内容を可能な限り精確な理解する必要があると考える。したがって、葬祭文学を対象対象とする本論文では、史料上の「二柱のマアト」の事例の分析に際して、葬祭文学のテキスト自体の読解にも注力する必要性を提示した。

第 2 章では、古王国時代の史料に焦点を置き、最初期の「二柱のマアト」の事例の検討をおこなった。第 1 節では、「ピラミッド・テキスト」に刻まれた *mꜣʿti* の記述を 5 例確認し、各事例を含む呪文の全文訳および部分訳とその解釈を踏まえて、個々の事例の内容を検証した。事例 1、事例 2 で示した先行研究で最初期の「二柱のマアト」と認識されてきた呪文第 260 番上の二つの *mꜣʿti* の記述は、「聞く」や「命じる」といった動作の主語を担うことから、神格として描写されていると考えられる。しかしながら、前後の文脈の解釈が多義的にとれることや、*mꜣʿti* に女神や神格であることを示す限定符が記されていないことから、これらの事例が二柱の姿をとるマアト女神の最初期の事例であると断定することはできない。その一方で、同じ *mꜣʿti* と記述された事例が呪文第 260 番の他に三例確認された。事例 3、

事例 4 として検証したこれらの二例では、*mꜣʿti* の語が一隻もしくは二隻の船の限定符を伴い、何らかの神聖な船として利用されていることを明示している。特に事例 4 は 2 隻の船とともに *mꜣʿt* の語が記述され、それに太陽神を指す代名詞が付記されていることから、*mꜣʿti* が太陽神の船として「ピラミッド・テキスト」上で描写されていることがわかる。最後に事例 5 で読解を行ったイビ王の「ピラミッド・テキスト」においても同様に太陽神の船と考察される *mꜣʿti* の事例を確認した。

第 2 節では、「パレルモ・ストーン」の事例を中心に最初期の *mꜣʿti* の記述を考察した。「パレルモ・ストーン」の裏面、ネフェルイルカーラーの治世の事績欄に記された *mꜣʿti* の記述（事例 6）は、二羽の隼を載せた聖船の限定符を伴い、この語が王のもとで行われた儀礼のなかで作られる船を指すことを明らかにした。その一方で、初期王朝時代の王の治世下に催された祭の事例（事例 7-10）に注目すると、祭を意味する語 *ḥb* と船の記号で示される語句が、ソカルに関連した「*mꜣʿti* の船の祭」（*ḥb mꜣʿti*）と読まれるべきであることが強調された。後の時代の「コフィン・テキスト」に記された *mꜣʿti* の祭（*ḥb mꜣʿty*）は、先の時代におけるこの祭の存在を示唆するものである（事例 11）。さらに、ソカルと *mꜣʿty* の関係性は、古王国時代第 6 王朝時代のセシェムネフェル/メテティの偽扉にも刻まれている。この碑文の所有者が持つ「ソカルの『二隻のマアトの船』の神官の監督官」（*imi-r ḥm nṯr*(*w*) *Zkr n mꜣty*）の称号は、この時代においてソカルと『二隻のマアトの船』が相互に関連していると同時に、それらの崇拝に携わる神官の存在を示唆している（事例 12,、13）。

本章で確認された *mꜣʿti* の持つ「太陽神の船」と「ソカルとの関連を示す側面」は、従来認識されてきた二柱の女神としての「二柱のマアト」とは明らかに意味の異なる、*mꜣʿti* の新たな側面であるといえる。つまり、古王国時代の *mꜣʿti* には「独立した神格」と「太陽神の二隻の船」、「ソカルに関連する船」の三つの側面を持つことが、明らかとなった。これらの側面はいずれも「コフィン・テキスト」にも引き続いて見受けられる。

第 3 章では、中王国時代頃の「二柱のマアト」の内容を明らかにするため、「コフィン・テキスト」上に記された 13 例の *mꜣʿty* の記述内容を検討した。個々の事例の分析の結果、古王国時代の史料に刻まれた *mꜣʿti* の語と同様に、「二柱のマアト」を意味する語には、ソカルとの関連を示す側面と独立した神格としての側面、そして太陽神の船としての側面を持つことを確認した。その一方で、上記のいずれの側面にも分類され得ない事例や、史料の内容が難解であるために、内容が明らかにできない *mꜣʿty* の事例を整理し、課題を提示した。

第 2 節における事例の検討からは、*mꜣʿty* がおそらくソカルの位置する船の名称として描写されていることや、このソカルと *mꜣʿty* の語の組み合わせがソカルの一種の形容辞として利用されることが明らかとなった。事例 14、事例 16 では、*Skt n mꜣʿty* という間接属格で表現された *mꜣʿty* とソカルの記述が続き「*mꜣʿty* のソカル」という訳の不明瞭性から、その厳密な意味を特定することは難しい。しかし、メディネト・ハブ神殿に記されたソカルの名称 *Skr m mꜣʿty*（事例 17）は、ここでの *mꜣʿty* が古王国時代の事例に引き続き、ソカルの船として描写されている点に加えて、ソカルの持つ一種の形容辞であることを示している。

第 3 節の事例の検討では、「コフィン・テキスト」の時代において、*mꜣʿty* は明らかに「二柱の女神」として描写されていることが証明された。特に事例 15 の「*mꜣʿty* は彼女らの腕をこの *N* に置いた」（*rdi.n mꜣʿty ʿ.sn r Npn*）は、「二柱のマアト」の死者に力を与える性格を明確に示している。このことから、古王国時代の史料からは明確な女神としての姿が確認されなかった「二柱のマアト」が、この時代において既に古代エジプト人に「二柱の女神」として明確に認識された可能性が考えられる。

続く第 4 節の事例からは「ピラミッド・テキスト」の事例と同様に、*mꜣʿty* の語が接尾代名詞 *f* を伴い、太陽神の船の名称として記述されることを確認した。呪文のなかで死者は「ラーを彼の *mꜣʿty* の船に昇らせる者」（事例 20）であり、死者の復活にはラーによる *mꜣʿty* の船への到達が関係することが明らかとなった（事例 21）。

第 5 節では、*mꜣʿty* の持つ 3 つの側面に明確に該当しない事例を詳細に検討した。これらの事例には、船としての側面を示しながらも、その所有者が明らかでない事例（事例 22）や、*mꜣʿty* と同様の表記がなされながらも双数形のマアトではなく、ニスバ形容詞として理解されるべき *mꜣʿty* の記述（事例 23）が挙げられる。先行研究では、これらの *mꜣʿty* の意味の分析が十分になされておらず、*mꜣʿty* の記述がその文脈に問わず「二柱のマアト」として研究者に曖昧に理解されていたことを示している。また、一部の呪文において「二柱のマアト」が単数形の *mꜣʿt* の異形として記述された事例（事例 26、事例 27）も確認した。文脈上、これらの事例は双数形のマアトとしての意味を示しえない。いずれの事例もベルシャ出土の「二つの道の書」に含まれる呪文に記述されていることから、この記述内容はベルシャに特有の葬祭文化を反映している可能性がある。さらに、事例 24 や事例 25 のように、呪文の内容理解が不十分な点も多いため、現時点における意味の特定が困難な事例も確認された。これらの呪文に記された *mꜣʿty* の意味は、難解な葬祭文学である「コフィン・テキスト」の更なる内容理解を深めたうえで、今後改めて検討をしなければならない。

第２章、第３章でおこなった *mꜣʿty* の記述の意味の分析の成果に基づき、第４章では古王国時代から中王国時代にかけての *mꜣʿti/mꜣʿty* の意味の変遷を各事例に付記された限定符に着目し、考察した。*mꜣʿti/mꜣʿty* に付記された限定符は、各時代におけるテキストの編纂者が「二柱のマアト」語の意味をどのように理解していたかを推定する有力な史料となる。

エジプト初期王朝時代の王の治世化の出来事を示した「パレルモ・ストーン」において *mꜣʿti* の語は一隻の船の限定符や省略された記号でその意味を示している。この史料のなかで船は決して二隻として刻まれず、その一方で、多くの事例において船の記号には二羽の隼が刻まれていた。この点から、最初期における *mꜣʿti* の船は「一隻」であり、語の双数形は船の数ではなく、二羽の隼を指していたことがわかる。

「ピラミッド・テキスト」の *mꜣʿti* の事例に付記された限定符は、一隻の船として登場した *mꜣʿti* がエジプト古王国時代に再解釈された可能性を示している。この葬祭文学のなかで、*mꜣʿti* の船は二隻の船として刻まれており、同時期に刻まれたセシェムネフェル/メテティの碑文においても *mꜣʿti* は二隻の船の限定符を伴う。本来双数形の示す「二羽の隼」の意味は精確に伝承されず、テキストの編纂者は *mꜣʿti* の持つ双数形の意味を船の数に由来するものであると解釈したのであろう。事例 4 に示されるような二羽の隼を載せた二隻の船の限定符は、*mꜣʿt* に付記された双数形語尾*-ti* の二重の解釈を示すものであり、*mꜣʿti* の語の再解釈の過程を示す事例であると筆者は考えている。

「コフィン・テキスト」が利用された中王国時代頃になると、*mꜣʿty* は一隻の船とは認識されず、二柱の女神や二柱の神として解釈されることとなる。*mꜣʿty* が「二柱の女神」だけでなく、文脈上明らかに「太陽神の船」や「ソカルの船」として描写される場合においても、もはや船の限定符は利用されていない。このことから、「二隻の船」として古王国時代に再解釈された *mꜣʿti* の語の意味に二度目の再解釈がなされたことがうかがえる。「コフィン・テキスト」の編纂者もまた、*mꜣʿty* の語の示す双数形の解釈に迫られることとなり、当時すでに明確な女神として史料に記述されていたマアト女神が「二柱」存在すると考えたのであろう。「ピラミッド・テキスト」には明確な神の姿を持たなかった「二柱のマアト」は、中王国時代において、その語の示す側面に関わらず「二柱のマアト女神」や「二柱の神」として理解されることとなった。そして、この時代にはじめて明確に認識された二柱の女神としての「二柱のマアト」がその後の「死者の書」で図像化されるような明確な「二柱のマアト」のイメージや実際の図像を形成につながったと考えられる。

最後に、第 5 章では、「二柱のマアト」の意味の理解をさらに深化させるため、「二柱のマアト」との関係が予想される神々との習合関係に注目した。「コフィン・テキスト」に記された「マアト」と「生命」の 2 つの要素で構成される一組は、世界創造における原初の神々である「テフヌート・シュー」、古代エジプトにおける二種類の「永遠」の概念「*ḏt・nḥḥ*」と同一であることが記される（事例 i）。また、事例 ii の内容からは、「テフヌート・シュー」は、ホルスの「右目・左目」および太陽神の船「*msktt・mˁnḏt*」と同一視された。さらに事例 iii、事例 iv においてこれらの関係は再び確認され、結果として「マアト・生命」の組み合わせは「テフヌート・シュー」、「*ḏt・nḥḥ*」、「右目・左目」そして「*msktt・mˁnḏt*」との同一関係を形成することが確認された。これらの事例はいずれも「二柱のマアト」*mꜣˁty* との直接的な関係を示してはいない。しかし、いずれの関係も二つの要素により構成される一組として描写されること、多くの組み合わせが明確にそれぞれの構成要素のなかに「死」と「生」の性格を持つこと、そして *mskttt・mˁnḏt* の船が *mꜣˁty* の持つ太陽神の船の特徴と一致することを踏まえると、「マアト・生命」の組み合わせが「二柱のマアト」の実体であり、これらの習合関係を形成している可能性は十分に考えられる。B1C の *mꜣˁty* の語に付記された男性とマアト女神の限定符の組み合わせ𓂝𓁷もまた、当時のテキストの編纂者が *mꜣˁty* をテフヌートとシューのような女神と男神の一組として認識していたことを示唆している。

以上の内容から、古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の内容を明らかにした。新王国時代以降の図像で明確に確認されるような二柱の正義の女神「二柱のマアト」は、古王国時代の史料のなかで神としての輪郭を明確に示していない。その一方で、「二柱のマアト」を意味する *mꜣˁti* の語は、下界の神ソカルに関係する船や、太陽神の船の名称として理解されていたことがわかる。特に、最初期の *mꜣˁti* の記述とされる「パレルモ・ストーン」の記述からは、*mꜣˁti* は一隻の船であり、その後の再解釈により、二隻の船を意味することとなったと考えられる。太陽神やソカルの船としての「二柱のマアト」*mꜣˁty* の側面は、中王国時代の「コフィン・テキスト」にも引き続いて確認された。しかし、神々の船としての意味を示す場合においても *mꜣˁty* の語は神や女神の限定符とともに記述されている。また、この史料では、「二柱のマアト」の独立した女神としての姿も確認され、古王国時代以前とは対照的に、*mꜣˁty* の語の二柱の女神としての性格が強く示されていることがわかる。この点から筆者は、本来は船として理解されていた「二柱のマアト」*mꜣˁti/mꜣˁty* は「コフィン・テキスト」の時代においてはじめて、後の時代に図像で示されるような二柱の正義の女神、

「二柱のマアト」の明確な姿を形成したと考える。そして、それと同時に「二柱のマアト」は「マアト・生命」をその内容の基礎として「テフヌート・シュー」や「*msltt・mꜥnḏt*」、「右目・左目」、「*ḏt・nḥḥ*」のような「死」と「生」の性格を持つ一組の神としての性格を持ち、生と死を司る二柱の女神としてその後の「死者の書」の死者の裁判において重要な役割を担うようになったと考察する。

附録

附録１　本論文の事例一覧

事例番号	史料			頁
事例 1	*Pyr.* 316a-*Pyr.* 323d	Utterance 260	第2章 第1節 第3項	34-41
事例 2	*Pyr.* 316a-*Pyr*. 323d	Utterance 260	第2章 第1節 第3項	34-41
事例 3	*Pyr.* 1312c-*Pyr.* 1315d	Utterance 539	第2章 第1節 第4項	42-44
事例 4	*Pyr.* 1785b-*Pyr.* 1785c	Utterance 627	第2章 第1節 第4項	44-45
事例 5	L.626-L.632（Jéquier, 1935）	-	第2章 第1節 第4項	45-48
事例 6	*PS* v. V.2	-	第2章 第2節	53-54
事例 7	*PS* r. II.7	-	第2章 第2節	55-57
事例 8	*PS* r. III. 6	-	第2章 第2節	55-57
事例 9	*PS* r. IV. 6	-	第2章 第2節	55-57
事例 10	*PS* r. IV 12	-	第2章 第2節	55-57
事例 11	*CT* 6, 280a-*CT* 6, 280d	Spell 659	第2章 第2節 / 第3章 第2節	57-59 / 77-78
事例 12	CG 1403	-	第2章 第2節	59-61
事例 13	CG 1403	-	第2章 第2節	59-61
事例 14	*CT* 6, 41r-*CT* 6, 42e	Spell 479	第3章 第2節	69-71
事例 15	*CT* 6 282a-*CT* 6, 282f	Spell 660	第3章 第2節 / 第3章 第3節	72-74 / 79-80
事例 16	*CT* 6 282a-*CT* 6, 282f	Spell 660	第3章 第2節 / 第3章 第3節	72-74 / 79-80
事例 17	*Medinet Habu IV* Pl. 202	-	第3章 第2節	74-75
事例 18	*Pyr.* 1429a-*Pyr.* 1439c	Utterance 566	第3章 第2節	76-77
事例 19	*CT* 2, 250b-*CT* 2, 250c	Spell 149	第3章 第3節	80-81
事例 20	*CT* 6, 312n-*CT* 6, 312q	Spell 682	第3章 第4節	82-83
事例 21	*CT* 6, 326o-*CT* 6, 326p	Spell 693	第3章 第4節	83-84
事例 22	*CT* 7, 210i-*CT* 7, 211a	Spell 995	第3章 第5節	85-87
事例 23	*CT* 3, 41c- *CT* 3, 44b	Spell 171	第3章 第5節	88-90
事例 24	*CT* 5, 249a-*CT* 5, 250f	Spell 416	第3章 第5節	90-93
事例 25	*CT* 6, 262a-*CT* 6, 262n	Spell 641	第3章 第5節	94-96
事例 26	*CT* 7, 267-*CT* 7, 268a	Spell 1033	第3章 第5節	96-100
事例 27	*CT* 7, 278c-*CT* 7, 280a	Spell 1034	第3章 第5節/ 第5章	100-104 / 126-127
事例 i	*CT* 2, 27b-*CT* 2, 32j	Spell 80	第 5 章	114-120
事例 ii	*CT* 6, 220o-*CT* 6, 220r	Spell 607	第 5 章	121-122
事例 iii	*CT* 6, 124i-*CT* 6, 124e	Spell 531	第 5 章	122-125
事例 iv	*CT* 6, 391h-*CT* 6, 391l	Spell 761	第 5 章	122-125

附録２　古代エジプト史年表

（Shaw 2000, 480-489 を基に作成）

時代	王朝	年代
先王朝時代		前5300年頃－前3000年頃
王朝時代		前3000年頃－前332年
初期王朝時代	第1・第2王朝	前3000年頃－前2686年
第1王朝		前3000年頃－前2890年
第2王朝		前3000年頃－前2686年
古王国時代	第3－第8王朝	前2686年－前2160年
第3王朝		前2686年－前2613年
第4王朝		前2613年－前2494年
第5王朝		前2494年－前2345年
第6王朝		前2494年－前2181年
第7・第8王朝		前2181年－前2160年
第一中間期	第9・第10王朝 / 第11王朝	前2160年－前2055年
第9・第10王朝		前2160年－前2025年
第11王朝	（テーベ支配時代）	前2125年－前2055年
中王国時代	第11－第13・14王朝	前2055前－前1650年
第11王朝	（エジプト全土支配時代）	前2055年－前1985年
第12王朝		前1985年－前1773年
第13・第14王朝		前1773年－前1650年
第二中間期	第15王朝/ 第16・17王朝	前1650年－前1550年
第15王朝		前1650年－前1550年
第16王朝		前1650年－前1580年
第17王朝		前1580年－前1550年
新王国時代	第18－第20王朝	前1550年－前1069年
第18王朝		前1550年－前1295年
第19王朝		前1295年－前1186年
第20王朝		前1186年－前1069年
第三中間期	第21－第25王朝	前1069年－前656年
第21王朝		前1069年－前945年
第22王朝		前945年－前715年
第23王朝		前818年－前715年
第24王朝		前727年－前715年
第25王朝		前747年－前656年
後期時代	第26－第30王朝	前664年－前332年
第26王朝		前664年－前525年
第27王朝		前525年－前404年
第28王朝		前404年－前399年
第29王朝		前399年－前380年
第30王朝		前380年－前343年
ギリシャ・ローマ時代		前 332年－後395年
プトレマイオス朝時代		前332年－前30年
ローマ支配時代		前30年－後395年

附録３　「コフィン・テキスト」上の *m3ꜥt* の関連記述一覧
（青字部分は本論文で検討した箇所を指す）

	呪文 (降順)	史料 (de Buck *CT*)	テキストを持つ史料
1	8	*CT* 1, 26b	B3Bo/ B2Bo/ B4Bo/ B1P/ B6C/ B4C/ M.C.105/ S10C/ T9C/ T1L
2	16	*CT* 1, 47d	B4Bo
3	17	*CT* 1, 51b	B3Bo/ B2Bo/ B4Bo/ B1P/ B15C/ B6C/ M.C.105/ S10C/ T2C
4	17	*CT* 1, 53c	B3Bo/ B1P/ B15C/ B6C/ M.C.105/ T2C
5	27	*CT* 1, 79b	B4C/ M.C.105/ S10C/ T9C
6	32	*CT* 1, 106a	B1P/ (T1La)/ (T1Lb)/ S1C/ S2C
7	39	*CT* 1, 166b	B12Cb/ B13Cb/ B16C/ B20C
8	44	*CT* 1, 187b	B10Ca/ B10Cb/ B10Cc/ B12C/ B13C/ B1Y
9	46	*CT* 1, 202b	B10Cb/ B10Cc/ B12C/ B13C/ B1Y/ B17C/ B16C
10	75	*CT* 1, 352d/ 353d	S1C/ S2C/ S14C/ T3C/ B3C/ B1Bo/ B1C/ B2L B1P/ B6C/ M3C/ M20C/ M5C/ M6C/ M23C/ M28C/ M.Ann/ G1T/ A1C/ BH2C
11	79	*CT* 2, 27c	B1C/ B2L/ B1P/ B7C/ B1Bo
12	**80**	***CT* 2, 32e**	B1C/ B2L/ B1P/ B7C
13	**80**	***CT* 2, 32i**	B1C/ B2L/ B1P/ B7C
14	**80**	***CT* 2, 2-35c**	B1C/ B2L/ B1P/ B7C
15	**80**	***CT* 2, 35f**	B1C/ B2L/ B1P/ B7C
16	**80**	***CT* 2, 35g**	B1C/ B2L/ B1P/ B7C
17	80	*CT* 2, 36b	B1C/ B2L/ B1P/ B7C
18	115	*CT* 2, 134d	S1C/ G2T/ S2Ca/ S2Cb
19	116	*CT* 2, 137c	S1C/ G2T/ S2Ca/ S2Cb/ G1T/ A1C
20	117	*CT* 2, 138b	S1C/ G2T/ S2Ca/ S2Cb/ G1T/ A1C
21	117	*CT* 2, 139a	S1C/ G2T/ S2Ca/ S2Cb/ G1T/ A1C
22	117	*CT* 2, 139b	S1C/ G2T/ S2Ca/ S2Cb/ G1T/ A1C
23	121	*CT* 2, 145b	S1C/ G2T/ S2C/ Pap. Gard.2/ Pap. Gard.3
24	126	*CT* 2, 148a	S1C/ G2T/ S2C/ Pap. Gard.2/ Pap. Gard.3
25	126	*CT* 2, 148b	S1C/ G2T/ S2C/ Pap. Gard.2/ Pap. Gard.3
26	128	*CT* 2, 149c	S1C/ G2T/ S2C/ Pap. Gard.2/ Pap. Gard.3

27	149	*CT* 2, 241b	S2P/ S1P/ S1Chass./S1Cb/ S2Cb/ S2Cb/ S2Ce/ S2Ca/ S2Cd/ B9C/ B2Bo/ B4Bo/ Pap.Berl./ S2Cc
28	**149**	***CT* 2, 250b**	S2P/ S1P/ S1Chass./S1Cb/ S2Ce/ S2Ca/ S2Cd/ B9C/ B2Bo/ Pap.Berl./ S2Cc
29	165	*CT* 3, 6a	S2C/ S1C/ B5C/ M22C/ B2Bo/ B4Bo/ B3Bo/ M2C/ Sq10C/ B3C/ B2Lb/ B17C/ B2La/ B1C/ B1Be
30	165	*CT* 3, 6b	S2C/ S1C/ B5C/ M22C/ B2Bo/ B4Bo/ B3Bo/ M2C/ Sq10C/ B3C/ B2Lb/ B17C/ B2La/ B1C/ B1Be
31	**171**	***CT* 3, 43a**	B2Bo/ B4Bo/ M5C/ M2Ny/ S2C/ Pap.Berl/ B1L/ S10C/ B9C/ B1Bo/ B2Be
32	**171**	***CT* 3, 44b**	B2Bo/ B4Bo/ M5C/ M2Ny/ S2C/ Pap.Berl/ B1L/ S10C/ B9C/ B1Bo/ B2Be
33	194	*CT* 3, 112j	B9C/ B1L/ T1C
34	205	*CT* 3, 144a	S2C/ S1C/ B5C/ M22C/ B2Bo/ B4Bo/ B3Bo/ M2C/ Sq10C/ B3C/ B2Lb/ B17C/ B2La/ B1C/ B1Be
35	229	*CT* 3, 297e	G1T/ A1C
36	239	*CT* 3, 321i	T3C/ G1T/ A1C
37	241	*CT* 3, 326g	G1T/ A1C
38	242	*CT* 3, 327b	S1C/ S2C/ S11C/ S5C/ S9C
39	277	*CT* 4, 21c	B1Bo/ B2Be/ BH2C
40	277	*CT* 4, 21e	B1Bo/ B2Be/ BH2C
41	278	*CT* 4, 24b	T1L/ Sq6C/ Sq1Sq
42	306	*CT* 4, 61a	L2Li
43	307	*CT* 4, 62i	L1Li/ BH4C
44	312	*CT* 4, 71b	B6C/ T1C/ D1C/ B2Bo/ B6Bo
45	313	*CT* 4, 87j	B5C
46	313	*CT* 4, 88m	B5C
47	313	*CT* 4, 90j	B5C
48	317	*CT* 4, 122c	S1P/ S2C/ S1C/ B2C
49	328	*CT* 4, 164k	B1C/ B3Bo/ B4Boa/ B4Bob
50	330	*CT* 4, 170a	S1Ca/ S2C/ S1Cb/ B2Bo/ B4Bo
51	330	*CT* 4, 170b	S1Ca/ S2C/ S1Cb/ B2Bo/ B4Bo
52	330	*CT* 4, 170c	S1Ca/ S2C/ S1Cb/ B2Bo/ B4Bo
53	330	*CT* 4, 170d	S1Ca/ S2C/ S1Cb/ B2Bo/ B4Bo
54	330	*CT* 4, 170g	S1Ca/ S2C/ S1Cb/ B2Bo/ B4Bo

55	331	*CT* 4, 173a	G1T/ A1C/ S2Ca/ S2Cb
56	331	*CT* 4, 173b	G1T/ A1C/ S2Ca/ S2Cb
57	335	*CT* 4, 218a	T1Ca/ B9Cb/ B3C/ Sq4Sq/ T1Cb/ B1P/ B5C/ B1Y/ B9Ca/ Sq1C/ Sq7C/ Sq1Sq/ M4C/ M8C/ M7C/ M54C/ M1C/ L1NY/ T1Be/ L3Li/ T2Be/ T3Be/ T3L/ M57C/ M1NY/ BH1Br
58	335	*CT* 4, 254a	T1Ca/ B9Cb/ B3C/ Sq4Sq/ T1Cb/ B1P/ B5C/ B1Y/ B9Ca/ Sq1C/ Sq7C/ M4C/ M8C/ M7C/ M54C/ M1C/ L1NY/ T1Be/ L3Li/ T2Be/ T3Be/ T3L/ M57C/ M1NY/ BH1Br/※Sq8S(4-409)
59	341	*CT* 4, 344d	B1Y/ B3L/ B1L
60	341	*CT* 4, 345b	B1Y/ B3L/ B1L
61	342	*CT* 4, 346k	B1C/ B2L/ B1P
62	345	*CT* 4, 376g	S2C/ B1C/ B2L/ B1P
63	361	*CT* 5, 15c	B4Bo/ B2Bo/ S2C/ B1Y/ M22C/ M6C/ B9C/ B8C/ B2C
64	373	*CT* 5, 35m	B2L/ B2P
65	376	*CT* 5, 39b	B2Bo/ B7Bo/ S2C/ M23C
66	398	*CT* 5, 159f	G1T/ G2T/ A1C/ T3L/ M2NY/ M5C
67	404	*CT* 5, 196d	B5C/ B7C/ B9C/ B10C/ B3L
68	**416**	***CT* 5, 250a**	S2Cb/ S2Ca B2Bo/ B4Bo/ B7Bo/ M22C
69	**416**	***CT* 5, 250c**	S2Cb/ S2Ca B2Bo/ B4Bo/ B7Bo/ M22C
70	425	*CT* 5, 269b	B2Bo/ B4Bo/ S1C/ S2C/ B4C/ M18C
71	452	*CT* 5, 321d	B3Bo/ B1C/ BH4C/ M2NY
72	**479**	***CT* 6, 42a**	Pap.Gard.2
73	488	*CT* 6, 67k	B9C/ B1Y
74	491	*CT* 6, 70d	B3La/ B3Lb/ B9C/ B1Y/ B4Y/ T3Be
75	491	*CT* 6, 71j	B3La/ B3Lb
76	501	*CT* 6, 85m	B9C/ B1Y
77	502	*CT* 6, 88d	B1Bo/ S10Cb/ M22C/ S10Ca/ Y1C
78	513	*CT* 6, 100a	B9C/ B1Bo/ B1Be/ B5C/ B1Pa/ B1Pb/ B2L/ B1L
79	533	*CT* 6, 129b	M6C/ M23C/ M3C/ M4C/ M10C/ M11C/ M12C/ M22C/ M3Ann.
80	534	*CT* 6, 131j	M3C
81	534	*CT* 6, 131k	M3C
82	540	*CT* 6, 135u	M22C

83	540	*CT* 6, 136g	M22C
84	540	*CT* 6, 136i	M22C
85	545	*CT* 6, 139j	M22C
86	545	*CT* 6, 141m	M22C/ Pap.Gard.3/ Pap.Gard.4
87	545	*CT* 6, 141n	M22C/ Pap.Gard.3/ Pap.Gard.4
88	553	*CT* 6, 152c	B1Bo/ B2Bo/ B4C
89	553	*CT* 6, 153f	B1Bo/ B2Bo/ B4C
90	554	*CT* 6, 154f	B1Bo/ B2Bo
91	563	*CT* 6, 162q	G1Be
92	566	*CT* 6, 165e	B1Bo/ BH2C/ BH3Ox
93	575	*CT* 6, 186c	B3Bob/ B3Boa/ S2C/ B4C
94	575	*CT* 6, 187c	B3Bo/ S2C/ S3Chass./ B4C
95	575	*CT* 6, 190b	B3Bo/ S2C/ S2Chass./ B4C
96	624	*CT* 6, 241o	T1Ca
97	624	*CT* 6, 241p	T1Ca
98	627	*CT* 6, 244c	B1B0/ S10C
99	629	*CT* 6, 248i	S10Ca/ S10Cb
100	632	*CT* 6, 255c	Sq6C/ Sq3C
101	634	*CT* 6, 256d	T1L/ Sq6C
102	634	*CT* 6, 256f	T1L/ Sq6C
103	634	*CT* 6, 256g	T1L/ Sq6C
104	634	*CT* 6, 256h	T1L/ Sq6C
105	**641**	***CT* 6, 262g**	**M2NY/ M5C/ D1C**
106	647	*CT* 6, 267b	G1T
107	647	*CT* 6, 267o	G1T
108	647	*CT* 6, 267q	G1T
109	647	*CT* 6, 267v	G1T
110	649	*CT* 6, 271e	G1T
111	649	*CT* 6, 272c	G1T
112	650	*CT* 6, 272l	G1T
113	654	*CT* 6, 275b	G1T
114	656	*CT* 6, 278d	Th.T.319
115	**659**	***CT* 6, 280b**	Pap.Gard.2
116	**660**	***CT* 6, 282e**	B1Bo
117	**660**	***CT* 6, 282f**	B1Bo

118	660	*CT* 6, 285k	B1Bo
119	660	*CT* 6, 285n	B1Bo
120	673	*CT* 6, 300m	B1Bo
121	681	*CT* 6, 308i	B1Bo
122	**682**	***CT* 6, 312o**	B1Bo
123	686	*CT* 6, 317h	B1Bo
124	689	*CT* 6, 319g	B1Bo
125	689	*CT* 6, 319i	B1Bo
126	691	*CT* 6, 322q	L1Li
127	**693**	***CT* 6, 326p**	B15C
128	719	*CT* 6, 347e	B3Bo
129	719	*CT* 6, 347g	B3Bo
130	723	*CT* 6, 351T	B3Bo(Table)
131	743	*CT* 6, 372r	B4C
132	743	*CT* 6, 373d	B4C
133	759	*CT* 6, 389r	B1C
134	764	*CT* 6, 394p	T1L
135	768	*CT* 6, 400s	T1L
136	789	*CT* 6, 2f	L2Li
137	816	*CT* 7, 15k	T3C
138	868	*CT* 7, 74d	T3C
139	899	*CT* 7, 106j	BH4C
140	899	*CT* 7, 107a	BH4C
141	901	*CT* 7, 108o	BH4C
142	914	*CT* 7, 118f	D1C
143	932	*CT* 7, 133p	A1C
144	939	*CT* 7, 150b	P.Gard.4/ Pap.Gard.3
145	941	*CT* 7, 154p	Pap.Gard.3
146	941	*CT* 7, 154p	Pap.Gard.3
147	945	*CT* 7, 159u	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
148	945	*CT* 7, 160r	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
149	957	*CT* 7, 172k	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
150	957	*CT* 7, 173g	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
151	957	*CT* 7, 174i	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
152	957	*CT* 7, 174k	P.Gard.3/ Pap.Gard.4

153	957	*CT* 7, 175b	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
154	958	*CT* 7, 177h	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
155	959	*CT* 7, 178b	P.Gard.3/ Pap.Gard.4
156	971	*CT* 7, 184t	Pap.Gard.3
157	973	*CT* 7, 185j	Pap.Gard.3
158	990	*CT* 7, 201d	P.Gard.2/ Pap.Gard.3
159	992	*CT* 7, 204i	P.Gard.2/ Pap.Gard.3
160	**995**	***CT* 7, 210o**	P.Gard.2/ Pap.Gard.3
161	1000	*CT* 7, 217a	P.Gard.2/ Pap.Gard.3
162	1011	*CT* 7, 226x	P.Gard.2
163	1013	*CT* 7, 230t	P.Gard.2
164	1017	*CT* 7, 238d	P.Gard.2
165	1028	*CT* 7, 251m	P.Gard.2
166	1029	*CT* 7, 254c	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
167	1033	*CT* 7, 264b	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B1Bo/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
168	**1033**	***CT* 7, 268a**	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B1Bo/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
169	1033	*CT* 7, 270b	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B1Bo/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
170	1033	*CT* 7, 271a	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B1Bo/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
171	**1034**	***CT* 7, 279c**	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B6C/ B4L/ B1Bo/ B2BO/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
172	1035	*CT* 7, 283c	B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
173	1061	*CT* 7, 317c	B3C/ B4C/ B13C/ B1Bo/ B2Bo/ B4Bo/ B4L/ B9C/ B1C/ B1L/ B2L/ B3L
174	1069	*CT* 7, 332g	B1C/ B1L/ B2L/ B3L
175	1073	*CT* 7, 342b	B3C/ B4C/ B12C/ B13C/ B1Bo/ B2Bo/ B4Bo/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B1C/ B2P
176	1092	*CT* 7, 371g	B1L/ B2L/ B2P
177	1093	*CT* 7, 371j	B1L/ B2L/ B2P
178	1093	*CT* 7, 372b	B6C/ B12C/ B9C/ B1L/ B2L/ BsP
179	1094	*CT* 7, 375c	B3C/ B4C/ B1Bo/ B2Bo/ B4Bo/ B6C/ B12C/ B9C/ B1L/

			B2L/ B2P
180	1095	*CT* 7, 379c	B4C/ B2Bo/ B6C/ B9C/ B1L/ B2L
181	1099	*CT* 7, 387c	B3C/ B4C/ B1Bo/ B4Bo/ B2Bo/ B1C/ B6C/ B12C/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B2P
182	1099	*CT* 7, 401b	B3C/ B4C/ B1Bo/ B2Bo/ B1C/ B6C/ B12C/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L/ B2P
183	1099	*CT* 7, 404d	B4C/ B1Bo/ B2Bo/ B1C/ B6C/ B12C/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L
184	1099	*CT* 7, 406c	B4C/ B1Bo/ B2Bo/ B1C/ B6C/ B12C/ B9C/ B1L/ B2L/ B3L
185	1105	*CT* 7, 432a	B3C/ B4C/ B2Bo/ B1C/ B6C/ B9C/ B1L/ B3L/ B2P
186	1105	*CT* 7, 433b	B3C/ B4C/ B2Bo/ B1C/ B9C/ B1L/ B3L/ B2P
187	1130	*CT* 7, 468c	B3C/ B4C/ B1C/ B6C/ B9C/ B1L
188	1139	*CT* 7, 485b	B1P/ B1Be/ B5C
189	1142	*CT* 7, 489c	B1P/ B1Be/ B5C
190	1142	*CT* 7, 489d	B1P/ B1Be/ B5C
191	1142	*CT* 7, 489h	B1P/ B1Be/ B5C
192	1172	*CT* 7, 513e	B1P/ B1Bo/ B5C/ B4L

史料・参考文献

略記一覧

AäG Edel, E. 1955-1964, *Altägyptische Grammatik*, 2 volumes, Roma.

CDD Johnson, J. H. 2001, *The Demotic Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Chicago.

CG Catalogue général des antiquités égyptiennes du Musée du Caire.

CT de Buck, A. 1935-1961, *The Egyptian Coffin Texts*, 7 volumes, Chicago.

Komm. Sethe, K. 1935-1962, *Übersetzung und Kommentar zu den Altägyptischen Pyramidentexten*, 6 volumes, Glückstadt.

LÄ Helck, W. and Otto, E. 1976-1992, *Lexikon der Ägyptologie*, 7 volumes, Wiesbaden.

LGG Leitz, C. *Lexikon der ägyptischen Götter und Götterbezeichnungen*, 8 volumes, Leuven.

Medinet Habu IV The Epigraphic Survey of the Oriental Institute, University of Chicago 1940, *Medinet Habu, Volume 4. Festival Scenes of Ramses III*, Chicago.

PS The Palermo Stone (Inv. No: 1028, Palermo Museo archeologico)

Pyr. Sethe, K. 1908-1922, *Die altägyptischen Pyramidentexte nach den Papierabdrucken und Photographien des Berliner Museums*, 4 volumes, Leipzig.

Urk. *Urkunden des Ägyptischen Altertums*.

Wb Erman, A. and Grapow, H. 1926-1963, *Wörterbuch der Ägyptischen Sprache*, 12 volumes, Leipzig and Berlin.

参考文献

Allen, J. P. 1984, *The Inflexion of Verb in the Pyramid Texts*, 2 volumes, Malibu.

Allen, J. P. 1988, *Genesis in Egypt: The Philosophy of Ancient Egyptian Creation Accounts*, New Haven.

Allen, J. P. 2001, "Pyramid Texts," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Oxford, Volume 3, 95-97.

Allen, J. P. 2006, *The Egyptian Coffin Texts, Volume 8: Middle Kingdom Copies of Pyramid Texts*, Chicago.

Allen, J. P. 2013, *A New Concordance of the Pyramid Texts*, 6 volumes, Providence.

Allen, J. P. 2014, *Middle Egyptian: An Introduction to the Language and Culture of Hieroglyphs*, Cambridge.

Allen, J. P. 2015, *Middle Egyptian Literature.: Eight Literary Works of the Middle Kingdom*, Cambridge.

Allen, J. P. 2017, *Grammar of the Ancient Egyptian Pyramid Texts: Unis*, Winona Lake.

Allen, T. G. 1950, *Occurrences of Pyramid Texts with Cross Indexes of These and Other Egyptian Mortuary Texts*, Chicago.

Altenmüller, B. 1975, *Synkretismus in den Sargtexten*, Wiesbaden.

Anthes, R. 1957, "Die Sonnenboote in der Pyramidentexten," *ZÄS* 82, 77-89.

Arnold, D and D. Arnold 2015, "A New Start from the South Thebes during the Eleventh Dynasty," in Oppenheim, A. *et al.* (eds.) *Ancient Egypt Transformed the Middle Kingdom*, New York, 38-53.

Assmann, J. 1984, *Ägytpten: Theologie und Frömmigkeit einer frühen Hochkultur*, Stuttgart.

Assmann, J. 1990, *Ma'at. Gerechtigkeit und Unsterblichkeit im alten Aegypten*, München.

Backes, B. 2005, *Das altägyptische »Zweiwegebuch« . Studien zu den Sargtext-Sprüchen 1029–1130*, Wiesbaden.

Baines, J. and Malek, J. 2000, *Cultural Atlas of Ancient Egypt*, Revised edition, New York.

Barguet, P. 1967, *Le Livre des Morts des anciens Egyptiens*, Paris.

Barguet, P. 1986, *Textes des Sarcophages egyptiens du Moyen Empire*, Paris.

Baumann, G. 2015, "Ancient Egyptian Ma'at or Old Testament Deed-consequence Nexus as Predecessors of ubuntu?," *Verbum et Ecclesia* 36, 1-4.

Bickel, S. and Díaz-Iglesias, L. (eds.) 2017, *Studies in Ancient Egyptian Funerary Literature*, Leuven.

Bidoli, D. 1976, *Die Sprüche der Fangnetze in den altägyptischen Sargtexten*, Glückstadt.

Billing, N. 2018, *The Performative Structure: Ritualizing the Pyramid of Pepy I*, Leiden.

Bleeker, C. J. 1929, *De beteekenis van de egyptische godin Ma-a-t*, Leiden.

Bleeker, C. J. 1967, *Egyptian Festivals: Enactment of Religious Renewal*, Leiden.

Borchardt, L. 1964, *Denkmäler des Alten Reiches (ausser den Statuen) im Museum von Kairo. Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire 97, Teil II*., Cairo.

Borghouts, J. F. 2010, *Egyptian: An Introduction to the Writing and Language of the Middle Kingdom I: Grammar, Syntax, Index*, Leuven.

Breasted, J. H. 1912, *Development of Religion and Thought in Ancient Egypt*, Philadelphia.

Bruyère, B. and Ch. Kuentz 2015, *La Tombe de Nakht-Min et la tombe d'Ari-Nefer (N°291 et 290), Seconde Édition*, Le Caire.

de Buck. A. 1935, *The Egyptian Coffin Texts, Volume 1: Texts of Spells 1-75*, Chicago.

de Buck. A. 1938, *The Egyptian Coffin Texts. Volume II: Texts of Spells 76-163*, Chicago.

de Buck. A. 1947, *The Egyptian Coffin Texts. Volume III: Texts of Spells 164-267*, Chicago.

de Buck. A. 1951, *The Egyptian Coffin Texts*. *Volume IV: Texts of Spells 268-354*, Chicago.

de Buck. A. 1954, *The Egyptian Coffin Texts*. *Volume V: Texts of Spells 355-471*, Chicago.

de Buck. A. 1956, *The Egyptian Coffin Texts. Volume VI: Texts of Spells 472-786*, Chicago.

de Buck. A. 1961, *The Egyptian Coffin Texts. Volume VII: Texts of Spells 787-1185*, Chicago.

Budge, E. A. W. 1912, *The Greenfield Papyrus in the British Museum: The Funerary Papyrus of Princess Nesitanebtashru, Daughter of Painetchem II and Nesi-Khensu, and Priestess of Amen-Ra at Thebes, about B.C. 970*, London.

Bussmann, R 2017, *Complete Middle Egyptian: A New Method for Understanding Hieroglyphs, Reading texts in Context*, London.

Carrier, C. 2004a, *Textes des Sarcophages du moyen Empire egyptien. Tome I: Spells [1] à [354] Volume I*, Monaco.

Carrier, C. 2004b, *Textes des Sarcophages du moyen Empire egyptien. Tome II: Spells [355] à [787] Volume II*, Monaco.

Carrier, C. 2004c, *Textes des Sarcophages du moyen Empire egyptien. Tome III: spells [788] à [«1186»] Volume III*, Monaco.

Carrier, C. 2009, *Textes des Pyramides de l'Egypte ancienne. Tome I: Textes des Pyramides d'Ounas et de Teti Tome 1*, Paris.

Carrier, C. 2010, *Textes des Pyramides de l'Egypte ancienne. Tome IV: Textes des pyramides de Mérenrê, d'Aba, de Neit, d'Ipout et d'Oudjebten*, Paris.

Clagett, M. 1989, *Ancient Egyptian Science: A Source Book. Volume One: Knowledge and Order*, Philadelphia.

Corteggiani, J. P. 2007, *L'Egypte ancienne et ses Dieux: Dictionnaire illustré*, Paris.

Darnell, J. C. and Darnell, C. M. 2018, *The Ancient Egyptian Netherworld Books*, Atlanta.

Dorman, P. F. 2017, “The Origin and Early Development of the Book of the Dead,” in Scalf, R.(ed.) *Book of the Dead. Becoming god in Ancient Egypt*, 29-40, Chicago.

Edel. E. 1955, *Altägyptische Grammatik I*, Roma.

Edel, E. 1964, *Altägyptische Grammatik II*, Roma.

Englund, G. 1993, “Review: Jan ASSMANN, Ma'at. Gerechtigkeit und Unsterblichkeit im Alten Aegypten, ” *BiOr* 50, 130-132.

Enmarch, R. 2005, *The Dialogue of Ipuwer and the Lord of All*, Oxford.

Enmarch, R. 2008, *A World Upturned: Commentary on and Analysis of The Dialogue of Ipuwer and the Lord of All*, Oxford.

Erichsen, W. 1954, *Demotisches Glossar*, Kopenhagen.

Erman, A. and H. Grapow 1926-1963 (Nachdruck: 1971), *Wörterbuch der Aegyptischen Sprache*, Volume 2, 3 and 6, Leipzig and Berlin.

Fermat, A. 2011, *Le Livre des Deux Chemins*, Paris.

Faulkner, R. O. 1962, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford.

Faulkner, R. O. 1969a, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Oxford.

Faulkner, R. O. 1969b, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*. *Supplement of Hieroglyphic Texts,* Oxford.

Faulkner, R. O. 1973, *The Ancient Egyptian Coffin Texts. Volume I: Spell 1-354*, Oxford.

Faulkner, R. O. 1977, *The Ancient Egyptian Coffin Texts. Volume II*: *Spell 355-787,* Oxford.

Faulkner, R. O. 1978, *The Ancient Egyptian Coffin Texts. Volume III: Spell 788-1185 and Indexes*, Oxford.

Frankfort, H. 1948, *Kingship and the Gods: A Study of Ancient Near Eastern Religion as the Integration of Society and Nature*, Chicago.

Frankfort, H. 1961 (first published in 1948), *Ancient Egyptian Religion*, New York.

Gaballa, G. A. and K. A. Kitchen 1969, “The Festival of Sokar,” *Orientalia* 38 1969, 1-76.

Gardiner, A. H. 1909, *The Adomonitions of an Egyptian Sage from a Hieratic Papyrus in Leiden (Pap. Leiden 344 recto)*, Leipzig.

Gardiner, A. H. 1916, “Some Personifications. II Hu, ' Authoritative Utterance.' Sia, 'Understanding',” *Proceedings of the Society of Biblical Archaeology* 38, 43-54, 83-95.

Gardiner, A. H. 1955, *The Ramesseum Papyri*, Oxford.

Gardiner, A. H. 1957, *Egyptian Grammar. Being an Introduction to the Study of Hieroglyphs,* 3rd Edition, Oxford.

Grieshammer, R. 1970, *Das Jenseitsgericht in den Sargtexten,* Wiesbaden.

Guglielmi, W. 1982, “Netz,” in *LÄ* 4, 464-465.

Hays, H. M. 2006, *The Typological Structure of The Pyramid Texts*, Chicago.

Hays, H. M. 2011, “The Death of Democratization of the Afterlife,” in Strudwick, N. and H. Strudwick (eds.), *Old Kingdom, New Perspectives: Egyptian Art and Archaeology 2750-2150 BC*, Oxford, 115-130.

Hays, H. M. 2012, *The Organization of the Pyramid Texts: Typology and Disposition*, Leiden.

Hannig, R. 2003*, Ägyptisches Wörterbuch I: Altes Reich und Erste Zwischenzeit*, Mainz am Rhein.

Hannig, R. 2006a, *Ägyptisches Wörterbuch II: Mittleres Reich und Zweite Zwischenzeit*, Mainz am Rhein.

Hannig, R. 2006b, *Die Sprache der Pharaonen. Großes Handwörterbuch Ägyptisch-Deutsch: (2800 - 950 v. Chr.)*, Marburger Edition, Mainz am Rhein.

Haring, B. 2010, “The Scribe of the Mat: From Agrarian Administration to Local Justice,” in Demarée, R. J. and A. Egberts (eds.) *Deir el-Medina in the Third Millennium AD: A Tribute to Jac. J. Janssen*, Leiden, 129-158.

Helck, W. 1980, “maat,” in *LÄ* 3, 1110-1119.

Herbin, F. R. 2008, *Books of Breathing and Related Texts -Late Egyptian Religious Texts in the British Museum Vol.1*, London.

Hermsen, E. 1991, *Die zwei Wege des Jenseits :Das altägyptische Zweiwegebuch und seine Topographie*, Münster.

Hoffmeier, J. K. 1996, “Are There Regionally-based Theological Differences in the Coffin Texts?” in Willems, H. (ed.) *The World of The Coffin Texts. Proceedings of the Symposium held on the Occasion of the 100th Birthday of Adriaan de Buck, Leiden, 17-19 December 1992*, Leiden, 45-54.

Hornung, E. 1963a, *Das Amduat: Die Schrift des verborgenen Raumes, Herausgegeben nach Texten aus den Gräbern des Neuen Reiches. Teil 1: Text*, Wiesbaden.

Hornung, E. 1963b, *Das Amduat: Die Schrift des verborgenen Raumes, Herausgegeben nach Texten aus den Gräbern des Neuen Reiches. Teil II: Übersetzung und Kommentar*, Wiesbaden.

Hornung, E. 1983, *Conceptions of God in Ancient Egypt: The One and the Many*, translated by Baines, J., London.

Hornung, E. 1999, *The Ancient Egyptian Books of the Afterlife*, translated by Lorton, D., Ithaca and London.

Hornung, E. 2005, *Der Eine und die Vielen. Altägyptische Götterwelt*, 6 Aufrage, Darmstadt.

Jacq, C. 1986, *Le Voyage dans l'Autre monde selon l'Egypte ancienne. Épreuves et Métamorphoses du Mort d'après les Textes des Pyramides et les Textes des Sarcophages*, Monaco.

Jéquier, G. 1935, *La pyramide d'Aba*, Le Caire.

Jones, D. 2000, *An Index of Ancient Egyptian Titles, Epithets and Phrases of the Old Kingdom*, 2 volumes, Oxford.

Junge, F. 2000, "Language," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 2, Oxford, 258-267.

Karenga, M. 2004, *Maat, the Moral Ideal in Ancient Egypt: A Study in Classical African Ethics*, New York.

Lapp, G. 1996, "Die Entwicklung der Särge von der 6. bis 13. Dynastie," in Willems, H. (ed.) *The World of The Coffin Texts. Proceedings of the Symposium held on the Occasion of the 100th Birthday of Adriaan de Buck, Leiden, 17-19 December 1992*, Leiden, 73-100.

Leitz, C. 2002, *Lexikon der ägyptischen Götter und Götterbezeichnungen*, 8 volumes, Lauven.

Leprohon, R. J. 2013, *The Great Name: Ancient Egyptian Royal Titulary,* Atlanta.

Lesko, L. H. 1971, "Some Observations on the Composition of the Book of Two Ways," *JAOS* 91, 31-43.

Lesko, L. H. 1972, *The Ancient Egyptian Book of Two Ways*, Barkley.

Lesko, L. H. 2001, "Funerary Literature," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 1, Oxford, 570-575.

Lichtheim, M. 1973, *Ancient Egyptian Literature. Volume 1: The Old and Middle Kingdom*, Los Angeles.

Lichtheim, M. 1992, *Maat in Egyptian Autobiographies and Related Studies*, Göttingen.

Luft, U. H. 2001, "Religion," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 3, Oxford, 130-145.

Meltzer, E. S. 2001, "Horus" in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 2, Oxford, 119-122.

Mercer, S. A. B. 1952, *The Pyramid Texts, Volime II: Commentary on Utterance 1, line 1a, to Utterance 486, line 1045a-c*, New York.

Nyord, R. 2009, *Breathing Flesh: Conceptions of the Body in the Ancient Egyptian Coffin Texts*, Copenhagen.

Oppenheim, A. 2015, "Introduction: What was the Middle Kingdom?," in Oppenheim, A. *et al.* (eds.) *Ancient Egypt Transformed the Middle Kingdom*, New York, 1-8.

Parkinson, R. B. 1977, *The Tale of Sinuhe and Other Ancient Egyptian Poems 1940-1640 BC*, Oxford.

Piankoff, A. 1957, *Egyptian Religious Texts and Representations, Volume III: Mythological Papyri*, New York.

Piankoff, A.1968, *The Pyramid of Unas: Texts Translated with Commentary*, New York.

Priskin, G. 2019, *The Ancient Egyptian Book of the Moon. Coffin Texts Spells 154-160*, Oxford.

Quirke, S. 1994, "Transalting Ma'at: A Review Discussion of Ma'at. Gerechtigkeit und Unsterblichkeit im alten Aegypten. By JAN ASSMANN," *JEA* 80, 219-231.

Quirke, S. 2013, *Going out in Dayloght prt m hrw. The Ancient Egyptian Book of the Dead: Translation, Sources, Meanings*, London.

Quirke, S. 2015, *Exploring Religion in Ancient Egypt*, Oxford.

Redford, D. B. (ed.) 2001, *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, 3 volumes, Oxford.

Scalf, R. "What is the Book of the Dead," in Scalf, R. (ed.) *Book of the Dead. Becoming god in Ancient Egypt*, Chicago, 21-27.

Serrano, A. J. 2002, *Royal Festivals in the Late Predynastic Period and the First Dynasty*, Oxford.

Sethe, K. 1908, *Die altägyptischen Pyramidentexte nach den Papierabdrücken und Photographien des Berliner Museums*. Volume 1, Leipzig.

Sethe, K. 1910, *Die altägyptischen Pyramidentexte nach den Papierabdrücken und Photographien des Berliner Museums*, Volume 2, Leipzig.

Sethe, K. 1933, *Urkunden des Alten Reichs*, Urkunden des ægyptischen Altertums I, Leipzig.

Sethe, K. 1935. *Übersetzung und Kommentar zu den Altägyptischen Pyramidentexten*, Volume 1, Glückstadt.

Sethe, K. 1962. *Übersetzung und Kommentar zu den Altägyptischen Pyramidentexten*, Volume 5, Glückstadt.

Smith, M. 2009, "Democratization of the Afterlife," in *UCLA Encyclopedia of Egyptology* (https://escholarship.org/uc/item/70g428wj : 2019 年 11 月 24 日閲覧).

Smith, M. 2017, *Following Osiris: Perspectives on the Osirian Afterlife from Four Millennia*, Oxford.

Seeber, C. 1976, *Untersuchungen zur Darstellung des Totengerichts im Alten Ägypten*, München.

Seidlmayer, S. 2000, "The First Intermediate Period (c. 2160-2055 BC), " in Shaw, I. (ed.) *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, 108-136.

Shaw, I. and Nicholson, P. 1995, *The British Museum Dictionary of Ancient Egypt*, London.

Shaw, I. 2000, *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford.

Sherbiny, W. 2017, *Through Hermopolitan Lenses: Studies on the So-called Book of Two Ways in Ancient Egypt*, Leiden.

Strudwick, N. 1985, *The Administration of Egypt in the Old Kingdom*, London.

Teeter, E. 1996, *The Presentation of Maat*, Chicago.

Teeter, E. 2001, "Maat," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 2, Oxford, 319-326.

Totenbuch-Projekt: http://totenbuch.awk.nrw.de/ (2019 年 11 月 24 日閲覧).

Tobin, V. A. 2001, "Tefnut," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 3, Oxford, 362-363.

Valloggia, M. 1986, *Balat I: Le mastaba de MedouNefer*, 2 volumes, Le Caire.

van der Molen, R. 2000, *A Hieroglyphic Dictionary of Egyptian Coffin Texts*, Leiden.

van der Molen, R. 2005, *An Analytical Concordance of the Verb, the Negation and Synax in Egyptian Coffin Texts*, 2 volumes, Leiden.

van der Plas, D. and Borghouts, J. F. 1998, *Coffin Texts Word Index*, Utrecht.

Van Seters, J. 1964, "A Date for the 'Admonitions' in the Second Intermediate Period," *JEA* 50, 13-23.

Van Seters, J. 2013, "Dating the Admonitions of Ipuwer and Biblical Narrative Texts. A Comparative Study," in Ernst, R. *et al*. (eds.) Dating Egyptian Literary Texts, Hamburg, 589-598.

Volten, A. 1945, *Zwei altägyptische politische Schriften*, Kopenhagen.

von Falck, M. 2006, *Das Totenbuch der Qeqa aus der Ptolemäerzeit (pBerlin P. 3003)*, Wiesbaden.

Westendorf, W. 1966, "Ursprung und Wesen der Maat, der altägyptischen Göttin des Rechts. Der Gerechtigkeit und der Weltordnung," in Lauffer, S. (ed.) *Festgabe für Dr. Walter Will, Ehrensenator Der Universität München, Zum 70. Geburtstag Am 12. November 1966*, Köln.

Wiedemann, A. 1887, " Maa, Déese de la Vérite et son Rule dans Pantéon égyptien," *Annales du Musée Guimet* 10, 561-573.

Wilkinson, T. A. H. 1999, *Early Dynastic Egypt*, London.

Wilkinson, T. A. H. 2000, *Royal Annals of Ancient Egypt: The Palermo Stone and its Associated Fragments*, London.

Willems, H. 2014, *Chests of Life. A Study of the Typology and Conceptual Development of Midle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.

Willems, H. 1990, "Crime, Cult and Capital Punishment (Mo'alla Inscription 8)," *JEA* 76, 27-54.

Willems, H. 1996, *The World of The Coffin Texts. Proceedings of the Symposium held on the Occasion of the 100th Birthday of Adriaan de Buck, Leiden, 17-19 December 1992*, Leiden.

Willems, H. 2014, *Historical and Archaeological Aspects of Egyptian Funerary Culture. Religious Ideas and Ritual Practice in Middle Kingdom Elite Cemeteries*, Leiden.

Willems, H. 2017, “The Method of “Sequencing” in Analyzing Egyptian Funerary Texts,” in Bickel, S. and Díaz-Iglesias, L. (eds.) 2017, *Studies in Ancient Egyptian Funerary Literature*, Leuven.

Wilson, J. A. 1951, *The Culture of Ancient Egypt*, Chicago.

Wilson, J. A. 1954, “Authority and Low in Ancient Egypt,” in Wilson, J. A. and Speiser, E. A. (eds.) *Authority and Low in the Ancient Orient. Supplement to the Journal of the American Oriental Society*, Philadelphia, 1-7.

Yoyotte, J. 1961, “Le Jugement des Morts dans l'Égypte ancienne,” in Edition du Seuil (ed.), *Le Jugement des Morts: Égypte ancienne-Assour Babylone-Israel-Iran-Islam-Inde-Chine-Japon*, Paris, 15-80.

Žába, Z. 1956, *Les Maximes de Ptahhotep*, Prague.

Zandee, J. 1972a, “"Sargtexte, Spruch 75. Fortsetzung (Coffin Texts I 348 b-372 c)," Ubersetzung, Kommentar,” *ZÄS* 98, 149-155.

Zandee, J. 1972b, “"Sargtexte, Spruch 75. Schluss (Coffin Texts I 372 d-405 c),” Ubersetzung, Kommentar,” *ZÄS* 99, 48-63.

Zandee, J. 1973, “"Sargtexte, Spruch 77 (Coffin Texts II 18) ," Ubersetzung, Kommentar,” *ZÄS* 100, 71-72.

Zandee, J. 1974, “"Sargtexte, Spruch 80 (Coffin Texts II 27 d-43) ," Ubersetzung, Kommentar,” *ZÄS* 101, 62-79.

J.A. ウィルソン（著）富村伝（訳）1973, 「古代エジプトにおける権威と法」, 古代学協会編『西洋古代史論集 1 』, 東京大学出版会, 137-146.

加藤一朗 1966, 「古代エジプトにおける mAat について」, 『オリエント』第 9 巻, 第 4 号, 115-119.

吹田浩 1991, 「古代エジプトの宗教人間学考－バーを例にして」, 『史泉』第 73 号, 1-11.

吹田浩 1995, 「コフィン・テキスト第 275 章」, 『関西大学文学論集』第 44 巻, 311-327.

吹田浩 1996,「アムドゥアト第五時－新王国宗教思想の一例－」, 富沢霊岸先生古稀記念会編, 『富沢霊岸先生古稀記念　関大西洋史論集』, 図書印刷同朋舎, 77-101.

吹田浩 2009, 『中期エジプト語基礎文典　増補新装版』, ブイツーソリューション.

畑森泰子 1998,「ピラミッドと古王国の王権」,『岩波講座　世界歴史 2：オリエント世界』, 岩波書店, 211-232.

肥後時尚, 青木彩香, 松下亮介, 安室喜弘, 吹田浩 2016, 「イドゥートのマスタバ『第 3 室西壁』における 3 次元計測データを用いた復元と再解釈」, *The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture* 3, 9-22.

肥後時尚 2018, 「『コフィン・テキスト』における『二柱のマアト』(MAaty)」, 『オリエント』第 60 巻, 157-168.

屋形禎亮 1976,「古代エジプトにおけるマアトについて－伝統と変革の問題をめぐって－」, 『史潮』第 1 巻, 135-139.

屋形禎亮 1978a,「雄弁な農夫の物語」, 杉勇他訳『筑摩世界文學体系 1 古代オリエント集』, 筑摩書房, 437-479.

屋形禎亮 1978b, 「イプエルの訓戒」, 杉勇他訳『筑摩世界文學体系 1 古代オリエント集』, 筑摩書房, 450-462.

屋形禎亮 1998, 「僚制国家への道」, 大貫良夫, 前川和也, 渡辺和子, 屋形禎亮著『世界の歴史 1：人類の起源と古代オリエント』, 中央公論社, 418-450.

屋形禎亮 2004, 「マアト」, 日本オリエント学会編『古代オリエント辞典』, 岩波書店, 749.

山崎世理愛 2014, 「オブジェクト・フリーズ(frise d' objets)と出土遺物の比較－装身具およびアミュレットを中心に－」, 『エジプト学研究』第 20 号, 115-129.

ヤン・アスマン（著）吹田浩（訳）1997, 『エジプト　初期高度文明の神学と信仰心』, 関西大学出版部.

吉成薫 2003, 「社会道徳の発見－古王国時代末・第一中間期の思想―」, 屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』, 同成社, 131-144.

図版一覧

図 0-1　王名の一部として刻まれたマアト（中央）の文字…筆者撮影

図 0-2　ラメセス 9 世による「マアトの提示」…筆者撮影

図 0-3　「死者の書」第 125 章の心臓の計量の場面…©Trustees of the British Museum

図 0-4　「死者の書」第 125 章の否定告白の場面…©Trustees of the British Museum

図 0-5　フィレンツェ考古学博物館所蔵マアト女神のレリーフ…© Museo Archeologico Nazionale Firenze

図 0-6　太陽神の船の前に立つ「二柱のマアト」女神…Hornung 1963a Erste Stunde からトレース

図 0-7　多様な姿で描写された「二柱のマアト」… (a) Corteggiani 2007, 305; (b) Seeber 1976. Abb. 23; (c) Seeber 1976. Fig. 54 (d) 筆者撮影 からトレース

図 2-1　イビ王の「ピラミッド・テキスト」…Jéquier 1935, Pl .XII を一部改変

図 2-2　「パレルモ・ストーン」の表面と裏面…Wilkinson 2001, Fig. 1, Fig.3 を一部改変

図 2-3　「パレルモ・ストーン」　裏面 5 段目…Wilkinson 2001, Fig.3 を一部改変

図 2-4　「パレルモ・ストーン」　表面 2 ～ 4 段目…Wilkinson 2001, Fig.1 を一部改変

図 2-5　セシェムネフェル/メテティの偽扉（CG1403）の碑文…筆者作成

図 3-1　中王国時代の木棺資料に記述された「コフィン・テキスト」…Lapp 1996, Pl .7

図 3-2　「コフィン・テキスト」が記された木棺資料の分布…Hoffmeier 1996, Fig. 1

図 3-3　メディネト・ハブ神殿のレリーフに刻まれたソカルの崇拝の場面…*Medinet Habu IV*, Pl. 202 を一部改変

図 4-1　「コフィン・テキスト」に記された *mꜣꜥt* の限定符…筆者作成

図 5-1　ベルシャ出土の*Spi* の木棺（B1C）の底部…De Buck Coffin Text Archive（筆者撮影）© Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten

表題紙　ベルシャ出土の*Spi* の木棺（B1C）の底部に記された *mꜣꜥty* の記述…図 5-1 からトレース

本論文は、これまでに発表した下記の論文を基に加筆・修正したものである。また、本論文第 1 章、第 5 章、終章については新たに書きおろした。

本論文の一部は「文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業」（平成 25 年～平成 29 年度）、日本学術振興会「平成 30 年度　若手研究者海外挑戦プログラム」、「高梨学術奨励基金 2019 年度若手研究助成」および NINO Incoming Mobility Grant（2019）をうけて実施した研究の成果である。また、「コフィン・テキスト」の実史料の調査にあたって、ライデン大学オランダ近東研究所の O.E. Kaper 博士をはじめとするライデン大学の皆様にご配慮賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

初出論文一覧

「古代エジプト古王国時代のマアトの一側面－ピラミッド・テキスト第 260 番から」, *The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture* 2, 215-228、2015 年 3 月（序章, 第 2 章）.

「古代エジプトの『ピラミッド・テキスト』における *mꜣʿti*」, 『史泉』130-131 号（採録内定済）、2020 年 3 月（序章、第 2 章）.

“Transitions of the Egyptian Concept of mꜣʿty” *Bibliotheca Orientalis* (*BiOr*) 76, 443-455, 2020 年 2 月（序章, 第 2 章, 第 4 章）.

「『コフィン・テキスト』における『二柱のマアト』（MAaty）」, 『オリエント』第 60 巻, 157-168, 208 年 4 月（第 3 章）.